

---

# あなた達のくらのやみで

逢沢純

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなた達のくらやみで

### 【Nコード】

N3084F

### 【作者名】

逢沢純

### 【あらすじ】

小学生のフタバは、OLの姉・まどかと共に『千年王国』に異次元トリップしてしまう。二人は白の国の王室護衛団『白の教団』で生活を始めるが、やがて黒の国との戦争が始まる……。戦火の中、生きる術を手探りで探す姉弟と戦士たちの長編ファンタジー。

## プロローグ

突き抜けるような青空が広がっていた。

白い鳥が頭上を旋回している。一鳴きすると、丘の下に広がる街へと翼を広げて飛んでいった。その様子を、青年はじっと見ていた。

白い鳥。ああ、そういえば佐々波さんは鳥を操っていたっけ。でも、その様子は今ではよく思い出せない。数十年前の事だ。忘れてしまった。

青年は丘を下り始めた。美しい丘だ。薄く雪が積もっているがそれがまた幻想的だった。所々に民家が建っている。畑もあり、住人が耕していた。それを横目で見ながら、青年はゆっくりと丘を下りにいく。正装で来たせいか、若干歩きにくい。

「お兄さん、“そんな服”着たお偉いさんがこんな所でどうしたんだい？」

背後からの声に、青年は振り返った。

農婦が果物の籠を手には不思議そうに彼を見ていた。彼は笑った。

「この先に、用事が。」

丘に風が吹くと、青年の柔らかい茶色の髪を揺らした。

ああ、そういえば桜月さんは綺麗な髪をしていたっけ。

また、昔の記憶が少し蘇る。懐かしいけど、悲しかった。

「この先？ この先を行くと古ぼけた教会があるだけだよ。あんな

所に何があるっていうんだい？」

農婦は頬についた泥を腕で拭いた。  
変わらず青年は笑みをたたえながら頷いた。

「お墓があるんです。仲間の。……仲間たちの。」

突き抜けるような青空が広がっていた。

白い鳥が丘に舞い戻って、また青年の頭上を旋回し始める。少し曇りがかった空を眺めていると、昔の思い出が自然と心を満たした。なぜか泣きたくなった。

『みんなが幸せになるために戦ったのに……。どうしてだろうな。  
結局、みんなが苦しんでる。俺達、何が間違っていたんだろうな』

最初から、間違っていたのだ。

この国が戦争を始めた、あの瞬間から。

## 第一話 始

夕方六時。

日課のアニメを見ていた。

姉ちゃんが夕飯を作る音を聞きながら見てみると、アニメは戦闘シーンに突入。

なんだか眠くなって目を閉じると、急に鼻がもげそうな臭いがした。瞼を上げると、目の前に男の首が転がっていた。

<第一話・始<sup>はじめ</sup>>

「うつ、うわあ！」

どて、とフタバは後ろに尻餅をつく。痛む臀部を気にする余裕もなかった。だって目の前には、真新しい死体が転がっているのだ。

「な、なんだよコレ……」

男の死体からは血がドクドクと流れ出てきて、フタバの嗅覚を刺す。ひどい臭いに、うぐ、と呻いて鼻を押さえた。

そしてひどく寒い。五月だったはずなのに、ここはまるで冬のよう。薄いパーカーと半ズボン、という格好のフタバはぶるりと震えた。

（オレさっきまで家でアニメ見てたのに！　なんだよここ！　なんだこれ！）

押し寄せてくる血の臭い。吐き気を飲み込むと、フタバはよろりと立ち上がる。周りは霧だらけだ。何も見えない。フタバの立つ道路の両端に建物が連なっていることくらいはどうか分かった。人の気配はない。

「なんだボウズ？　逃げ遅れたのかあ？」

フタバは背後からの声に勢いよく振り向いた。

軍服を着た強面の男が、死んでいる男を踏みつけて仁王立ちしていた。重そうな剣をかついでいる。剣には滴るほどの血液が付着していたが、霧の中、フタバの視界にとまることは無かった。

（よかった……、人がいた！）

と、フタバが素直に安心したのもつかの間、男はガン！　と音を轟かせてフタバの目の前の地面に剣を突き刺したのだ。

「うおっ！　なっ、なんだよ危ないなー！」

衝撃に慌てふためくと、男は口元をにやりと歪めた。

「子供でも容赦しねえ！　死ね！」

「な、何だよアンター！？」

またも剣を振りかざしてくる男から、フタバは転びそうになりながら逃げる。もつれる足をなんとか叱咤させ、霧の中、当ても無く

逃げた。

辺りは霧に覆われていて、走っても走ってもどこにやって来たのかは分からない。しかしフタバは後ろを振り返ることなく走った。自分が追っているのか追われているのか自分でも分からない位に。

「はあっ……ここまで来れば大丈夫……かなあ……っ」

フタバは肩で息をしながら、地面に座り込んだ。

振り向くと、先ほどの男は追ってきていないようだった。安心して辺りを見回すと、霧の向こうにうつすらと家が立ち並んでいるのが分かった。街灯やベンチも見える。街中のような感覚だった。しかしその外観は現代の日本とは思えない建物ばかりだったのだ。

（どこなんだろう……ここ……ドラ エミテー）

と、最近フタバは呑気にハマっているゲームのことを思い出した。霧が晴れてくると、やはり日本とは違う、レンガ造りの建物が並んでいたのがよく分かった。人の気配は恐ろしいほど皆無だった。

（とりあえず！）

ふんっ、とフタバはまだ小さな拳を握る。

「現地の人を探そう！ 綾乃先生も初めての場所に行った時はそうしろって言ってたもんな！」

ちなみに綾乃先生とはフタバの小学校の担任である。

まだ幼いがゆえ、突然やって来た未知の場所でも動じないのがフタバという少年だった。

そのままフタバは一步を踏み出したが、すぐに足元の“何か”につまづき、大げさに転んでしまう。

「あゝー！ 痛ってえええ！」

地面に擦れた膝を抑える。さつきからツイてない。何につまづいたのだろう。

振り向くと、そこには民間人らしき女性が血だまりに倒れていた。剥き出しになっている眼球、あらぬ方向に向いている手足。さつき男の血だらけの首を見たばかりなのに。

「……………」

いったい、何が起こってるんだ。

そのままフタバはパタリと倒れ、意識を手放したのだった……。

## 2

アンタってとんでもなく抜けてるよね、と会社の同僚によく言われるが、ついに瞬間移動まで出来るようになるなんて！

「私って超能力者だったのね！」

井上まどかはそう言って笑顔を浮かべた。

が、冷静に考えるとやはり“この状況”はおかしい。瞬間移動なんてばかばかしい。さすがのまどかにもそれは分かる。

で、ここはどこかしら？



辺りには霧が立ち込めていた。相まって酷い寒さだ。

まどかは困惑気味の足取りで歩を進める。大通りの真ん中に、自分ひとりしか人影は無かった。

まどかはつい先ほどまでの自らの行動を思い返してみる。

夕飯を作っていた。両親はいないから、家事は彼女の役目。そして、醤油を取ろうと振り返った。そしたら、なぜかこの殺伐とした街中にいたのである。

次にまどかは自分の格好をしてみる。何も変わっていない。お気に入りのアンサンブルカーディガンにシフォンスカート。“OLらしい”という理由でお気に入りのコーディネート。いつものままだった。

「何かが私の身に起こってるんだわ……どうしよう、映画みたいでドキドキしてきちゃった。昔見た『ドラ もん・のび太のアニマル惑星』を思い出すわね……」

そうこう言っているうちに、霧は幾分晴れて街の様子が見えてきた。ヨーロッパの町並みと似ている。日本じゃない、とまどかが思った時、ふと前方に人影が見えた。

目を凝らすと、人影はまどかに向かって真っ直ぐ歩んできていた。ロングコートを着ている。髪が長い。女性だろうか。

「あなたが井上まどかさんですね？」

まどかの目の前にやってきて柔らかく微笑むその人は、目を疑うほどの麗人だった。腰までの黒髪が霧の中、神秘的に艶めいて揺れている。

上品に微笑む姿はさながら大和撫子のよう。

「あの、あなたは？」

戸惑いながらまどかが返すと、麗人はさらに目を細めて笑った。長い髪が揺れる。ロングコートの裾も揺れる。まどかがよく観察すると、麗人の着る白いロングコートは軍服なのだと気付いた。

「私は桜月<sup>さつき</sup>。九十九<sup>つくも</sup>桜月です。貴方をお迎えに参りました。国王様がお呼びです」

眉が山型になるほどまどかは目を丸くして驚いた。

ひとつは、桜月と名乗る麗人が日本名を名乗ったということ。こは日本なのか？　しかし街に並ぶ家はどう見てもヨーロッパのそれだ。

ふたつに、国王という人物が自分をこの見知らぬ場所に呼んだ、ということだ。

「私が、国王様に、呼ばれて、る？」

確かめるように桜月を上目遣いで見る。そこで桜月が意外と背が高いことに気がついた。

そしてまどかはフワフワとカールしている自分の髪をくるくると弄った。分からない事に対面するとそうするのは彼女の癖だ。

桜月がええ、とやはり微笑んで疑問に肯定した。

「質問したいんですけど」

高く、ハッキリとしたまどかの声が霧に紛れて消えていった。まどかは目の前の麗人を怪しむかのように一睨みすると、声を低くした。

「ここはどこなんです？ 国王様って？」

桜月は相変わらずニコニコと笑っている。

「説明しますから、ついてきて下さい。」

二人は霧のなか、連れだって歩いた。まどかはしきりに辺りを見回す事に忙しかった。なぜ誰も街にいないのだろう。気になったが聞けなかった。

真っ直ぐ前を見て静かに歩いていた桜月がふいに立ち止まった。それは教会の前だった。いつの間にか町外れまで来たのだろう。辺りに民家はなく、小さな教会だけが霧の中に浮かびあがっていた。

「ここに入りましょう。街中は“危険です”」  
「危険？」

まどかがきちんと問う前に、桜月は教会の扉に手を掛けた。ギイ、と錆び付いた音。両開きの扉が開き、霧が吸い込まれていった……。

< 第一話 「始」・終 >

## 第二話 遇

フタバが目を覚ました時、そこは霧に覆われた街中では無かった。何度が瞬きをすると、見慣れない天井が目に入った。古い朽ち果てた天井。ここはどこだろう。オレ何してたっけ……。しばらくボンヤリしていると、はっと今の状況を思い出した。

（そうだ、オレ変なところに来ちゃったんだ！）

寝転がっていた体勢から勢いよく上半身を起こした。

そこは教会だった。薄暗く、窓からも光は入ってきていない。フタバは自分が街中で気を失ったことを思い出した。誰かがここまで運んでくれたのだろう。

気絶したせいで痛む頭を抑えながら起き上がった時、教会の扉が開く音がした。

ビクッとフタバの身体が震える。自分を剣で刺そうとしたあの男が追いかけてきていたらどうしよう。フタバはゆっくり開く扉をじっと睨むように凝視した。

扉が開いた時、フタバの目に飛び込んできたのは思いもかけない人物の姿だった。

「……ね、姉ちゃんっ!？」

ポカンと口を開けるフタバの驚きの視線の先には、同じく口をあぐりと開けているまどかの姿があったのだった。

< 第二話：遇<sup>あい</sup> >

お二人は知り合いですか？と場違いなほど穏やかな声で質問したのは桜月<sup>さつき</sup>だった。その言葉に互いに固まっていたフタバとまどかは我に帰る。

「どっ、どうしてフタバ君も“ここ”に？」

「しっ、知らないよ！」

まどかは桜月の脇を抜けて、弟のもとに駆け寄った。泥や血でずいぶん汚れたフタバの姿に驚愕する。対してフタバは家族に会えたことに感動していた。このまま訳の分からない土地で一人だったら、気が狂いそうだ。

「私は街中をさ迷っていたら、その綺麗なお姉さんに拾われたのよ。えーと……さつきさん、でしたっけ？」

桜月は少し驚いた仕草を見せ、苦笑混じりに答えた。

「えっ……？ あ、はい。気を失っていた君をここに運ばせてもらいました。九十九<sup>つくも</sup> 桜月といます。よろしくお願いしますね、フタバ君。」

「さつきさん？」

「ええ。桜に月と書いてさつき、と読むんです」

桜月はまどかとフタバに座るように教会の椅子を勧めた。姉弟が

座るのを確認すると、桜月は二人の前に立った。

「驚きましたよ。井上フタバ君、井上まどかさん。お二人は姉弟きょうだいだったんですね。歳が離れているようですが」

そう言って話を切り出した。まどかが頷く。私はもう二十二歳だけど、フタバ君はまだ十一歳なの、と説明した。それを聞き、桜月が頷き返した。そして続けた。

「あなた方は“この世界”の人間じゃない。大丈夫、混乱していると思いますが、すぐに説明しますから。あなた方はある人、によってこの世界に呼ばれたんです」

大人しく座っていたフタバがすかさず口を挟んだ。

「この世界って？ オレ達を呼んだある人って？」

桜月は穏やかな、それでいて反論を認めないような力強い視線でフタバを見た。フタバは口を噤んだ。それを確認すると桜月は上品な笑みを口元に浮かべて言った。

「ここは“千年王国”。神が支配する、神の大陸です」

開いた窓から小鳥の親子が入ってきた。囀りながら飛び回る。それをフタバは、どこか夢を見ているような気持ちで見つめていた。桜月の言葉は、なぜか胸に自然と馴染み、広がっていった。

立ち上る煙を見つめていた。煙管から絶え間なく立ち上る煙が憎たらしい事この上ない。

「しかめっ面してどうした？ 佐々波君。」

「はあ……。じゃあ言わせてもらいますけど、そろそろ禁煙してくれませんかねー？」

そろそろこつちも迷惑なんですけど。

佐々波<sup>さなみ</sup>乱歩はそう苦笑いして冗談めいて言ったが、内心冗談などではない。他人の迷惑も考える！ そう目の前の椅子にふんぞり返って座る男に怒鳴りたかったが、所詮、己は部下。心の中で罵倒するだけに我慢した。

「禁煙？ 考えたこともねーな……」

じゃあ今すぐ考えて下さい、今すぐ！

そう言いたいのを喉の中だけに留める。どうせ文句を言ってもこの天上天下唯我独尊の上司に己の要望が伝わるのは皆無なのだ。長年、補佐として仕えてきていればそれくらい分かる。

佐々波はハア、と大げさにため息を吐いた。

「煙草も嗜む程度ならいいんですけど……団長は吸いすぎです。一応、軍隊の頭なんですから控えてもらわないと。戦闘時に差し支えますよー？」

男は答えなかった。気にせず佐々波は部屋の中を横切り、端から窓を開けにかかった。煙が充満した部屋内を換気するためだ。

上司は相変わらず、デスクに座り散らばった資料と睨みあいを持

けている。佐々波は二度目のため息を吐いた。

「そーいえば団長」

なんだ、と上司の男が視線だけで佐々波に聞く。佐々波は軽々しい口調のまま続けた。

「今日、国王の命令で桜月が“国王様の呼んだ二人”を迎えに行きましたよね。いつ帰ってくるんすか？　つーか国王サマが呼んだ二人って誰っすか？」

ぶわ、と窓から冷たい空気が部屋に流れ込む。昨晚もすこし雪が降ったからだろうか。

窓の向こう、広がる白の国の街々が見えた。あの中には戦火に巻き込まれた街もあるのだろう……それを思うと佐々波は室内に視線を戻した。

今まで椅子に座っていた男は腰をあげ、室内をうろついていた。

佐々波が聞いた。

「団長？　どーかしたんですか？」

少し間をあげ、まもなく男が低く、掠れ気味の声で答えた。

「佐々波君。君は信じるか？　“異世界から来た人間”を」

「……は？」

「国王のオッサンが呼んだらしい二人ってのは、異世界から来たらしい」

妙な沈黙。

どういう事ですか、と佐々波が問う前に男は椅子の背もたれに掛



けておいた真っ白い団服を羽織ると、足早に部屋を出て行ってしまった。

「何ですってえ？ い、異世界？」

残された佐々波は、僅かに残る煙の臭いの中、どうすればいいか分からず立ちすくんでいたのだった。

<第二話 「遇」・終>

### 第三話 血・1

霧は晴れていた。

フタバとまどかは桜月の先導で再び街中を歩いている。霧は晴れたが、相変わらず人の気配はない。三人の足音だけが聞こえていた。

「ねえフタバ君、どう思う？」

「え？」

「私たち、なんでこの世界に呼ばれたのかしら」

二人はごく普通の姉弟だった。どこにでもいる、歳の離れた仲の良い姉弟。両親はフタバがまだ赤ん坊の頃に事故で亡くなったらしい。だからフタバの親代わりがまどかだった。

天真爛漫なまどかをフタバはよく慕っていた。ちょっとどこかかなりの天然の姉だが、いつでも自分の事を心配してくれる。

なぜ、オレ達が……。

考えても答えなど出るはずも無かった。

「分かんないけど……オレ達を呼んだ国王様って人に聞けばいいんじゃないの？」

前を歩いていた桜月が歩みを止めた。くるりと振り返る。端正な顔がフタバとまどかの顔を行き来して、やがて桜月は言った。

「その通りですよフタバ君。お二人には国王様に謁見していただきます。今日は“私達の本部”で過ごして、明日城に行きましょう」

私達の本部。桜月はそう言った。

その言葉にフタバは一番大事なことを聞き忘れていたと思い出した。

「桜月さんって、どこから来た、なんの人？」

国王の命で自分達を迎えに来た、と言っていた。どこから迎えに来たのだろうか？ そんな単純な疑問だった。

桜月はにこりと目を細めて笑った。

「王室護衛団『白の教団』から、です。」

並べられた言葉を理解することが出来ず、フタバとまどかは揃って首をかしげたのだった。

### < 第三話：血 >

三人は街中を抜け、森の中を歩いていった。いつの間にか夕暮れだ。巣に帰る鳥たちがバサバサと飛び立ち、木々が揺れる。森の中は木が生い茂っているので薄暗く、フタバを不安にさせた。

「白の教団とは、」

桜月がしばらく閉じていた口を開いた。

「白の国の国王様を護る護衛部隊のことです」

「白の国？」

「“ここ”のことです。ここは千年王国の最北端・『白の国』ですよ」

へえ、とまどかが理解したのか分からない曖昧な返事を返した。  
フタバは訳が分からない、といった顔をしている。

それにしても、王様の護衛部隊を“教団”とは宗教的すぎないか。  
そう思ったまどかが軽い気持ちで質問すると、桜月は急に神妙な面持ちになった。

「……“神”についての話は今は出来ません。また後ほどお話し  
すよ。」

そう断言されてしまいまどかは口を噤んだ。そして代わりにとば  
かりに彼女は桜月に千年王国のことを質問した。どんな大陸なのか  
と聞いた。

「六つの国からなる大陸です。ここ、白の国。あとは黒の国、赤の  
国、翠の国、黄の国、青の国の六つです。各国には王様が君臨し、  
それぞれの文化を築いてるんですよ。」

カラフルね。とまどかが呟いた。

そして桜月は、この白の国は戦争中だということも教えてくれた。  
敵国は翠の国ということも。フタバとまどかが最初にいたあの街は  
戦争に巻き込まれたせいで、住民がみんな避難しているとのことだ  
った。これで街中に誰もいなかった謎が解けた。

「それでオレ達はどこに向かっているの？」

足に纏わりつく雑草を除去するのに必死になりながら、フタバが  
言った。早く森を抜きたい。そう思いながら。

「白の教団の本部です。今日はそこで休んで、明日王様のいる城へ

行きましょう」

ガサッ。

前方から葉擦れの音がし、桜月はピタリと動きを止めた。

「さ、桜月さん？」

「……静かに。」

異様な雰囲気、咄嗟にフタバはまどかの背に隠れた。まどかも肩を僅かに寄せて、前方の木々に覆われた暗闇をじっと見ていた。

「……お二人とも、下がっていて下さい」

ふいに言われた言葉に、フタバとまどかは肩を震わせた。なぜ？と問うに問えない。下がることもせず、二人は固まったままだった。それを見かねた桜月が僅かに二人のほうを振り向き、同時に団服の腰に下げていた刀の鞘に手を掛けた。

「……早く下がって！」

ガキーン！ と豪快な刃の交わる音と、桜月が叫んだのは同時だった。桜月が叫ぶと共に前方から男が巨体を揺すって現れたのだ。男の持つ剣と、桜月が鞘から抜いた刀の刃がぶつかりあった。

「ささささ、さつきさん！」

フタバは驚愕の声を隠せない。突然暗闇から姿を現した謎の大男が桜月に剣を振るったのだ。動揺せずにはいられない。

「おうおう、こんな森をどこの野郎が歩いてるかと思えば、白の教

団の奴じゃねえか。しかもその胸元の鷲の印……お前、師団長か？」

男の粘ついた声が言う。相当の巨体だ。鎧まで身に着けている。対して桜月は細い腕、細い刀で男の剣を受け止めている。フタバはハラハラと姉の影からそれを見守っていた。

「……あなたは？ その鎧、この国の者ではありませんね。翠の国の兵か？」

「ははっ、あんな弱小国のモンじゃねえよ。俺は黒の国のモンだよ」「く、黒の国っ！？」

キンツ、と再び刃が交わる音が暗い森に響いた。男がスキンヘッドにした頭を一度叩いて、大げさに笑った。

「そうだ、お前ら白の国の連中なんて蹴散らしてやるよ！」「……。」

桜月は刀を静かに下ろした。鞘に収める。それを見た男が何してんだ？ と眉を顰める。

「この俺と戦うのを避けようってのか？ いいぜえ、そのお綺麗な顔をこの剣で真っ二つにしてやるよ！」

男が剣を振り上げた。

「さっ、桜月さん！」

フタバの叫ぶ声と共に、男の剣が振り下ろされ、風を斬った。思わずフタバとまどかは目を背けて瞼をきつく閉じる。すると、桜月の柔らかな、それでいて殺気を含んだ静かな声が聞こえてきた。

「黒の国の兵なら、容赦はしません。……覚悟はいいですね？」

フタバが瞼を上げると、桜月が今まで握っていた刀を地面に放り出すところだった。虚しい音をたてて雑草の中に消える刀。そして桜月は腰に下げていた、もうひとつの刀に手を掛けた。長い刀だった。

するり、と刀を抜くと、その刀は淡い桃色の光を帯びている。敵の男も、フタバ達も、その神々しい光に目を離せずにした。

「……咲きなさい。長刀『はなよいまち花宵待』」

桜月が刀を振るった。光が舞う。花びらが舞う。

目映い光に、フタバは再び瞼をきつく閉じた。同時に、男の断末魔が響き、鳥たちが一斉に羽ばたいていった。

<第三話 「血（１）」・終>

## 第四話 血・2

「さ、桜月さん……？」

静寂が訪れていた。それを破ったのはフタバの間抜けな声。

桜月が淡い光を帯びた長刀を一太刀、男に振っただけで、巨体の男は倒れたのだ。草むらに埋もれるようにして倒れている男。胴体の斜めに走る刀傷からは絶え間なく血が溢れ出ている。

何が起こったのか分からない。

まるで桜月が魔法を使ったようだった。軽く太刀を浴びせただけで大男を絶滅させるなど。フタバは桜月の後ろ姿をじっと凝視した。

「桜月さん……？」

長い髪が揺れて、桜月はフタバとまどかの方を振り返った。手にしている長刀を鞘に戻すと、今までと同じようににっこりと笑った。

「邪魔が入りましたね。さあ、行きましょう」

今までと同じ柔らかな微笑みなのに、それがフタバにはどこか恐ろしく感じられた。桜月の白い頬に男の返り血が飛んでいる。それを桜月は、何事も無かったかのように拭いて歩き出した。

敵といえども、人を殺してもなお今までと同様に微笑んでいられる。



それが立派な事なのか、フタバには分からなかった。

< 第四話：血（２） >

その後は何事もなく森を抜けることが出来た。森の先に広がっていたのは僅かな雪に彩られている長い長い坂道だった。坂道の果て、見上げる程の高さには城が聳えていた。城の周りは崖になっている。

「わあー！ お城ね！」

歡喜の声をあげるまどかの横で、フタバも興味津々に辺りを見回していた。民家はひとつもなく、ただ坂道の先に城があるだけだ。

「あれが白の国の国王様がいる城です」

桜月はそう言うと、城へ続く坂道のほうへは向かわず、その脇を通って先を進んだ。フタバとまどかも後を追う。

坂道をぐるりと回ったところに巨大な建物が姿を現した。西洋風の外観だった。三階くらいあるだろうか。横に長い建物だった。全体的に白い。庭のようなものも見えた。フタバはぽかんと見ているが、まどかは中世ヨーロッパの貴族が住んでいそうね、という感想を抱いた。

「私達、白の教団の本部です」

桜月は言いながら庭を横切った。護衛部隊の兵たちが生活しているとは思えないほど、綺麗に整備された美しい庭園だった。

やがて大きな両開きの扉が三人の前に立ちはだかり、それを桜月が開けた。重そうな音をたてながら扉が開く。

扉の先に広がった光景に、まどかとフタバは感嘆の声を漏らした。

「きれい。ベルサイユ宮殿みたいねっ、フタバ君！」

「すげー。本当にドラク みたいだー」

そこは玄関ホールのようなだった。広々とした空間に、所々銅像や彫刻が置かれているだけの場所だ。床は綺麗に磨かれていて、三人の姿を映している。

天井までは吹き抜けのようで、階上にはいくつも部屋が連なっていた。天窓からは夕日が注いでいて、ホールを淡いオレンジ色に染めている。

「おっ、桜月じゃねーか。帰ってきたのか。」

玄関ホールの右側にある廊下から青年の声がした。フタバ達は同時にそちらを向く。そこには桜月と同じ団服を着た金髪の青年がひとり、立っていた。金髪をツンツンと立てており、飄々とした雰囲気。その青年は、フタバとまどかに軽々しい印象を与えた。

「ああ、佐々波<sup>ささなみ</sup>さん。」

「そっちの二人が例の“国王の呼び人”か？ へえ、一人はまだチビじゃないの。ふんふん。なるほどね。あんたら、本当に異世界から来たのか？」

馴れ馴れしく尋ねてくる佐々波に、フタバは眉を寄せた。

「異世界から来たっていうか……知らないうちにここにいたんだ。」

「へえ。つーかお前ほんとにちっさいな！。何歳？」  
「……十一歳。」

うそー、と佐々波は大げさに驚いていた。馬鹿にされた気持ちになつたフタバは、ふん、と他所を向く。桜月がクスクスと笑つて言つた。

「佐々波さん、はなだ縹さんは？」

「団長なら部屋だぜ。全く、あいかわらず周囲の迷惑考えずに煙草ばっか！俺もう嫌だぜホントあの上司。何？ さっそく“そいつら”見せにいくのか？」

「うーん……どうしましょうか」

桜月と佐々波は同僚らしかった。団長のところへフタバとまどかを連れていくか相談している。しばらくそれを眺めていたフタバとまどかだったが、突然、まどかが口を挟んだのだ。

「あのう。団長ってこの一番偉い人ですよね？ 私会つてみたいです！」

「ね、姉ちゃん！」

図々しいお願いをする姉を抑えるフタバ。小学生の弟が二十二歳の姉の言動を咎めるのもどうかと思つたが、今は仕方が無い。

まどかの懇願に桜月と佐々波は顔を見合わせ、二人して表情を歪めていた。

「会わせたいのは山々なんですけど……その、団長っていうのが……少し癖のある人でして」

続けて佐々波が言つた。

「そーそー。高慢で自分勝手にやりたい放題の！ 会わないほうがいいと思いますよー？」

まどかは大人しく頷いた。その様子にフタバは少なからず驚いた。まどかが自分の欲求を大人しく諦めるなど珍しいからだ。

「今日は部屋をお貸ししますから、そこで休んで下さい。団長に会うのは 明日、国王様に会ってからにしましょう」

桜月の提案をフタバとまどかは受け入れた。

団長に頼まれた仕事がある、と佐々波は嫌そうに元来た廊下を引き返していく。フタバとまどかは桜月に連れられ、佐々波が向かった反対の、玄関ホールの左側の廊下を進んでいく。

案内されたのは、建物から渡り廊下を通った先にある別館だった。小さい建物で、入るとすぐに廊下になっており、部屋がズラリと並んでいるだけだった。

「ここは寄宿舍です」

桜月が廊下を歩きながら言った。

「きしゆくしゃ？」

「労働者とかが宿泊して起居寝食する施設よ、フタバ君。」

「へー。姉ちゃんよく知ってるね」

「ふふん、まどかお姉さんをナメちゃだめよ」

言っているうちに、三人は一階の最奥にたどり着いていた。扉の前に立つと、桜月が扉を開けて二人を中に入るように促した。

「ここが空き部屋ですから使って下さい。あとの部屋は団員たちがいますので」

「桜月さんは？」

「私の自室は寄宿舎ではなく本部の方ですので。何かあったら本部に来て下さい。ではまた明日の朝、呼びに来ますね」

二人が簡単なお礼を言うと、桜月は微笑みながら扉を閉めて行ってしまった。

桜月が廊下を引き返していく音を聞きながら、まどかが言った。

「素敵な人ねー桜月さん。綺麗だし上品だし。清楚な大人の女性って感じで。私とそっくり」

「……そうだね」

突っ込む気にもなれず、フタバは部屋の中に視線を移した。団員達の生活する部屋にしては大きい部屋だと思った。ベッドやテーブルなど、簡易な家具もある。至って普通の、シンプルな部屋。しかし二人で一晩明かすには若干狭いか。

「なんか色々あって疲れちゃったね」

まどかがベッドに腰掛けて、そのまま横になった。ヒール靴はそのままだ。肩までの、ふわっとしたウェーブの茶髪がシーツに広がる。

「……姉ちゃん、森で男の人に襲われたとき 見た？ 桜月さんの不思議な刀」

「ああ、ピンク色の綺麗な光の？ あれ何かしらね。」

男の血が流れる有様を思い出して、フタバは身震いした。しかしそれよりも、桜月が頬に返り血を浴びてまでも微笑む姿のほうが恐ろしく思い出された。

（王様を護る部隊って言ってたし……やっぱよく人を殺してるのかな）

難しいことを考えたくなって、ベッドに座るまどかの横に腰をおろし、ゴロリと横になった。薄暗い天井が見えた。まもなく夜になるだろうか。

（無事に元の世界に帰れるのかなあ）

神が支配している千年王国。戦争をしている、ここ、白の国。何か大変な事態に巻き込まれそうな不安を、フタバは消すことが出来ないでいた。

<第四話 血（2）・終>

## 第五話 劔

「なんと！ 井上まどかさん、井上フタバ君、はるばるよく来たのお！ まさしく期待通りの可愛らしい姉弟きょうだいじゃ！」

「よく言われます」

「……………」

フタバは落ち着かないのを隠せないでいた。

今日、フタバとまどかは桜月に連れられ城に来ている。国王に謁見するためだ。教団の本部の真上に位置する城まで、長い坂道を登るのに苦労したものだった。

「ワシは白の国の国王じゃ！ よろしく頼むよ！」

「はあ……………」

応接室だろうその部屋は、教団の本部と同じように白を基調とした装飾が施されていた。それに映える真っ赤な椅子に、人の良さそうな老翁の国王は埋もれるように身体を沈めていた。

「九十九くんもご苦労だったね。」

国王はフタバ達に付き添っていた桜月にも微笑みかけた。

「いえ……………」

「ふむ。久しぶりに会ったが相変わらず綺麗だねえ九十九くんは！ “女性だったら” 王室で囲むのだがお」

「王様……………」

国王の言葉にフタバとまどかはひどく驚く事となった。

「あの、王様？」

「なんだねフタバ君」

「桜月さんって、もしかしくなくても、男？」

途端に国王は大口を開けて笑い声をあげた。それを見て桜月が眉を寄せて少しきつい声で王を窘める。

国王の目がいたずらっぽく光った。

「ほほほ！ フタバ君、やはり君も勘違いしとったかね。九十九くんは立派な男性だよ」

「ええー！ そうだったの、私ったら普通に勘違いしちゃってたのね」

まどかが驚きを隠せずに言った。フタバは苦笑している桜月を見上げてみるが、どう見ても見た目麗しい女性にしか見えない。不思議なこともあるものだ、と妙に感心してしまった。

「ところで」

国王が一息ついて言った。

「君たち姉弟をこの千年王国に呼んだ理由だがね、悪いが今は言えないのだよ」

は？ と国王以外の三人が声を合わせた。相変わらず国王は大きな身体を揺らして笑っていた。外では雪がしんと降っているの  
で、応接間の中にその笑い声はよく響くようだった。



「今は言えないとは？」

桜月が言った。髭を擦りながら国王は答えた。

「言うべき時ではないのだよ、九十九くん。今、その姉弟はまだこの世界の事を何も知らない。そんなときに呼んだ理由を言ってもね」

「でも……、いつ言っ下さるのですか？ 出来る限り、お二人を早くもとの世界に帰してあげるべきだと私は思いますが」

それには国王も頷いた。しかし考えを曲げることは無かった。

「九十九くんに言われようとも、今は言うことが出来んだ。必ず、言うべき時は来よう。それまでフタバ君とまどかさんにはこの国に滞在してもらいたい。そこで、団長の<sup>はなだ</sup>縹君にお願いして、白の教団にしばらく置いてもらうことにしたよ、九十九くん」

老翁は満足そうに三人の顔を見渡すと、話は終わったとばかりに口元を結び、より深く椅子に身体を沈めた。

「あの、私とフタバ君 教団ってところで生活するんですか？」

まどかが聞いた。国王はいかにも、と小さく言った。

桜月が何か言おうと口を開けたが、息を飲むだけに終わった。

まもなく謁見は終わった。

三人は帰りの坂道を下っていた。雪が積もって肌寒かった。フタバは昨日と同じくパーカーと半ズボンという服装なので、震えが止まらない。それをまどかがしきりに心配していた。

「大変なことになりましたね」

黙っていた桜月が出し抜けにそう言ったのでフタバは少し驚いて彼を見た。

城の応接間から退室して以来桜月は無言だったので、教団でフタバ達が世話になることに腹を立てているのではないかとフタバは内心、不安だったのだ。

「なんか……ごめんなさい迷惑かけて」

「とんでもないですよ、まどかさん。私心配なのは、お二人のことです」

ふと立ち止まって、桜月がフタバとまどかの方を振り返る。

その声はすこし鋭くなっていて、やはりフタバを少し不安にさせた。

「お二人がこれから生活するのは王室護衛団『白の教団』。それがどういふ事を意味するか分かりますか。非常に危険な場所なんです。……昨日、見たでしょう。本部に来る途中、森で男に襲われたときの私を」

彼はどこか遠くを見ているようだった。  
フタバは思い出していた。森で、桜月が敵国の男を殺した時のことを。

「怖かったでしょう、私」

「そ、そんなこと……」

「ふふ。いいんですよ。分かっていますから」

歩きましよう、と桜月が言っただけで三人は歩を進めた。

坂道は雪のせいで些か滑った。いまだに雪は僅かだが降り続けている。白い団服の背中に流れる桜月の黒髪は何度見ても綺麗だった。この女性よりも綺麗なこの人が、虫も殺さないような顔のこの人が、平然と人を殺すのだ。

「あなたがこれから身を置く教団は“そういう所”ですよ。王室を護るためなら、誰であろうと殺します。それがたとえ民間人でも」

「民間人でも殺すって……？」

桜月は徹底して表情を変えなかった。これまでずっと微笑んでいたその口元は、今ではぎゅっと結ばれている。

「国王を護るのに邪魔になるようなら、国民でも容赦なく斬り捨てる。教団は、あくまで王室を護るために存在するのです。分かりますか。私達は国王のために刀を持ちますが、決して正義の軍隊ではないのです。そんな教団にあなた方が身を置くのが……私は心配なんです」

そう一気に言い切ったとき、三人は教団に到着していた。

フタバとまどかは黙っていた。民間人ではなく、王室“のみ”を護る軍隊。そんなものがあるのか、と他人事のようにボンヤリと思っただけだった。

「お、帰ってきたか」

門番に挨拶をし、門をくぐると佐々波が庭でシャベルを手に立っていた。さざなみ

丁寧に整えられている庭の木々には雪が積もっていた。小さな噴水も雪に隠れている。佐々波はどうやら雪かきに精を出しているようだった。

「どうだった王様は？」

「相変わらずです。フタバ君とまどかさんをこの国に呼んだ理由は教えてくれませんでしたけどね」

「へえ？」

佐々波は横目でフタバとまどかを見た。ツンツンと立っている金髪が雪の白さのなか、やけに眩しい。フタバはじつと佐々波を見つめ返すと、彼は歯を見せて笑った。軽々しいが、妙に爽やかな笑みだった。

「こんにちは。井上フタバ君に、井上まどかさん。俺、佐々波。ゆっくり挨拶したいとこなんだけど、ちょっと桜月と二人で話したいんだ。中に入ってもらえるかな」

飄々とした口調で有無を言わずにそう告げる。

佐々波は戸惑うフタバとまどかを半ば無理やり、本部の中に入れてさせる。庭に残ったのは桜月と佐々波だけになった。

「佐々波さん？ 私になにか？」

そう問う桜月の前で、佐々波は背を向けて雪かきを再開し始める。ザク、という雪の音が断続的に静かな庭に響いた。

「お前、井上姉弟をここに連れてくる途中、なんかしたか？」

「何か」、ですか……」

迷っているように少し押し黙ると、桜月はゆっくりと森で敵国の兵に襲われたことを説明した。するとそれを予想していたのだろう、佐々波にたいして驚いた様子はない。

「それで『花宵待』はなよいまちを抜いちまったのか？ 怒られるぜー団長に。あの人、お前が一人で刀を抜くのに厳しいもんな。」

佐々波が桜月の腰にさげている刀のひとつを指差す。淡い光を帯びたあの不思議な刀だ。

「仕方なかったんです。黒の国の兵でした」

「黒の国が……」

集めた雪の山にグサリとシャベルを刺す。空を仰ぐと、灰色の雲から青白い雪が舞い始めていた。

ここもすぐ、戦場になる。真っ白なこの白の国も、すぐにどす黒い血に染まる。口をきつく噤んでいる二人は、確信に近くそう悟っていた。

< 2 >

一方、本部の中に入るよう促されたフタバとまどかは、大人しく玄関ホールで桜月と佐々波の話が終わるのを待っていた。

「なんか私達って厄介者みたいになっちゃってる気がしない？」

手近の見事な細工の彫像を眺めながらまどかが言った。フタバも否定しなかった。

「勝手に呼んだのは王様なのにな」

「姉ちゃん、ほんとにこの教団つてとこで暮らすの？　これから。」

まどかは黒目の大きな瞳をフタバに向ける。弟は不安そうな顔をしていた。それをほぐしてやるように、まどかはいつもの様に明るく笑った。

「いいじゃない。桜月さんたちもいい人だし」

む、とフタバは口を結んだ。そういうことが言いたいのは無いのだ。

「でも、桜月さん言ってたじゃん。ここって結構、危ない場所なんだって。普通の国民でも殺しちゃうようなとこだよ？」

未だに納得できない節があるらしいフタバは小さな背で精一杯まどかに訴えている。

それがなんだか痛ましく見えて、まどかは悲しく思えた。

「だいじょーぶ、フタバ君！」

淀む空気をかき消すように、努めて明るい声を出した。

「私達、ひとりじゃないもん。フタバ君が危なくなっても、私が守ってあげるから。だって私は頼れるまどかお姉さんだもの！」

そう笑うまどかを、フタバはなぜか淒く頼もしく思えた。

いつもは能天気ニコニコしていて、危険を危険とも気づかず突っ込み、小学生の自分が心配するような姉なのに。

どんな状況でも前向きに笑っていられる。それがまどかの最大の武器なのだろうか。フタバはそう気付き、つられて笑うのだった。

そのときだった。

「誰だ、お前ら？」

玄関ホールに現れたのは、桜月達と同じく白い団服に身を包んだ上背のある男。煙草の臭いがフタバ達の鼻を刺した。

男はフタバ達の近くに近寄ると、蛇のように鋭い目つきで二人を見下ろした。まさに蛇に睨まれた蛙の状態になってしまったフタバは、まどかの背に縋りつく。

そんなフタバとは対称に、まどかは勇ましく男に食いかかった。

「あ、あなたこそ誰です？ 普通は自分から名乗るものですよ！」

「ほお。やけに強気な姉ちゃんじゃねえか」

男はニヤリと笑う。煙管きせつを口元から離すと、低いがよく通る声で言った。

「俺は縹はなだだ。縹 卓之介。白の教団の団長だ」

団長？

ポカンと口を開けたフタバとまどかの顔はそっくりで、思わず男は小さく吹き出したのだった。

< 第五話

「劔」  
つるぎ

・ 終  
>



## 第五話 劔（後書き）

「劔<sup>つるぎ</sup>」とは「劒」と同じ意味です。

## 第六話 蛇

「あつ！？ だつ、団長！？」

音がして、扉が開いた。佐々波と桜月が玄関ホールに入ってきたのだ。

佐々波がひどく驚いた顔をして団長・はなだ縹を凝視している。縹は手に持った煙管を落ち着きなく弄くると、厳しく言った。

「佐々波君。誰だコイツら」

「えっ……。ほら、あれっすよ。例の、国王が異世界から呼んだっつー二人。井上姉弟」

再び縹に鋭い視線を向けられたフタバはすぐに縮こまる。縹は団長と呼ばれるにはまだ若い青年だった。三十代くらいだろうか。

「で、なんで君はコイツらを二人っきりにホールに放置しておくんだ」

「え。」

佐々波が冷や汗を流した様子が明らかに分かった。気まずい空気を破ったのは桜月だった。

「縹さん、ちょうど今あなたの所に行こうと思っていたんですよ。さつき国王様のところにお二人を連れていったんです」

へえ、と縹は曖昧に頷いた。地を這うように低く、莊嚴な声だ。もう一度縹は視線をフタバとまどかに移すと、右手の廊下に向かって歩き始めた。ついて来いという事なのだろうか。フタバとまどかは急いで後を追った。

< 第六話：蛇<sup>へび</sup> >

「改めて言おう。俺は王室護衛団『白の教団』の団長の縹 卓之介だ」

数分後、フタバとまどかは本部のある部屋にいた。団長室だという。やはり白を基調としてあり、少ない家具の中、書類が床を埋め尽くすかの如く散乱している。お世辞にも整理された部屋だとは言えない。

「私は井上まどかです！ 二十二歳の花も恥らう美少女です！」  
「ね、姉ちゃん……」

部屋に佐々波と桜月はいなかった。縹に締め出されたらしい。まどかが元気のいい自己紹介をしたところで、縹は専用の椅子に腰を下ろしていた。

「そっちのチビは？」

びく、とフタバが反応した。だって縹が怖い。睨んでいるのが通常の表情なのか、この人は。

「い、井上フタバ……。十一歳の小学六年生……」

「へえ。で？ お前ら、自分が呼ばれた理由を国王のオッサンから聞いてないのか？」

フタバは頷いた。すると縹が卑しげに表情を歪める。鋭い眼光にフタバは身を縮めた。縹の視線に射抜かれ、呼吸の一つすら支配された気分だった。

「あの髭オヤジも迷惑なことしやがる。なんで教団がこの馬鹿姉弟を置いてやらなきゃなんねえんだ」

それは縹の独り言なのだろう。煙管を口に含み、煙を吐きながら言っていた。

申し訳なさに口を閉ざしたフタバの横で声をあげたのはまどかだった。

「迷惑ってなんですか！ それはこっちのセリフですつ。本音を言えばあなたなんかの所でお世話になんかなりたくないわ！」

縹の刺すような視線がまどかを見た。だがそれに怖じる事なくまどかは地団駄を踏まんばかりの勢いで続ける。

「団長だかなんだか知らないけどさっきから失礼な人ね！ だからモテないのよ！ そんな怖い顔してるから！」

「……てめえ、人が黙ってりゃあ言いたい放題……！」

「あら！ 女の子に手を出すんです？ なんて野蛮な人！」

二人の睨みあいをつたは決死の思いで止めた。姉が暴走すると止まらないとを誰よりも知ってるからだ。

「ね、姉ちゃん！　ちよつと落ち着いてよー！」  
「ふ、フタバくん……」

弟にはめつきり弱いまどかだ。途端に大人しくなる。それを見て  
縹もため息を吐きながら椅子に座りなおす。

「ちつ……。国王からの命だから仕方ねえ、置いとしてやるが、余  
計な事はするなよ」

「むっ！　分かってます！」

「ならいい。もう戻れ」

すぐに二人は団長室を辞した。まどかが団長室の扉を荒々しく閉  
める。

「もおお！　あの人嫌い！　なによあの偉そうな態度！」

「団長なんだから仕方ないよ……」

廊下に出ると、辺りには団員の姿がちらほらと見受けられた。フ  
タバ達はずいぶんと早朝から国王のもとへ行っていた。ちようど今  
ぐらいが起床時間なのだろう。

同じ団服を着た団員たちと擦れ違うたび、物珍しそうに振り向か  
れる。フタバはなんだか居たたまれない気持ちになった。

「みんなこっち見てるね……姉ちゃん」

「そ、そうね。私の美貌に思わず目が離せないのかしら」

まどかの冗談はさておき、フタバとまどかは本部の中で非常に目  
立っていた。皆が皆、団服を着ているなか、二人は私服。しかも異  
世界の服だ。団員たちからすれば珍しい服装なのだろう。

それにフタバは本部にいるには幼すぎる少年だ。目立たないことのほうがおかしい。

どうしたものかと玄関ホールについた二人を、三人の団員が囲んだ。

「お前らが例の“異世界から来た姉弟”かつ？」

浅黒い顔をした一人の男が言った。からかわれている、と分かりフタバは難しい顔をした。

「よく団長が教団で世話すること許可してくれたな！」

「へえー、こんな二人をなんで国王様は呼んだんだろうな」

「見たことない服着てるなあ」

好き勝手に言う団員たちに囲まれ、すっかりフタバとまどかは戸惑ってしまいオロオロとしてしまう。

すると、団員たちの間から端正な顔が覗いた。

「あまり苛めないで下さいね。一応、客人ですから」

それは桜月だった。クスクスと笑っている。

「第二師団長！す、すみません！」

「ほら、鍛錬の時間でしょう？ 行かなくていいんですか？」

「はっ、はい！ 失礼します！」

瞬く間に三人の団員たちは消えた。周りで好奇の視線をフタバ達に送っていた団員たちも、すかさず目をそらしている。

「縹さん怖かったでしょ？ 大丈夫でしたか？」

まどかがすかさず声を荒げた。

「すっごい腹がたちました！ もう！ 人を邪魔者扱いして！」

「ふふ、でもああ見えて結構いい人なんですよ」

行きましよう、と桜月は二人を寄宿舎のほうへ連れていった。すれ違う団員が桜月に挨拶している。それを横目で見ながら、フタバ達は寄宿舎の部屋についた。

桜月が去ると、フタバとまどかは部屋に入った。昨日と同じく、簡単な家具しかない殺風景な白い部屋。これからしばらくここが自室になるのだ。

「……あのさ姉ちゃん」

ソファに倒れるようにして沈むまどかにフタバは声をかけるが、まどかはグツタリとして返事を返さなかった。もう一度呼ぶと、聞いたこともないような低い声でまどかは返事をした。

「どーしたのフタバくん……？」

彼女は機嫌が悪いようだった。おそらく団長の縹卓之介が心底気に食わないからだろう。

「オレたち、ここで何するでもなくボーツと過ごしてろってことなのかな」

フタバは部屋を見渡した。朝の刺すように冷たい空気が窓から流れ込んでいる。空は曇っていた。また雪が降るだろうか。

「そおねー。つまないよね。テレビもないし。あゝあ……」渡る世間は ばかり』見れなくなっちゃう」

そう言ったかと思うと、まどかはソファに身体を埋めたまま寝息を立て始めてしまった。まだ一日が始まったばかりの時間だというのに。早朝から城に行っていたのが堪えたのか。

（なんでオレ、こんなところにいるんだろう……）

ベッドに寝転がり、天井を仰いだ。静かな空間。廊下から団員たちが談笑している声が聞こえてくる。

（家に帰れるのかなあ……）

まどかの寝息はいつの間にかいびきに変わっている。いい歳した大人の女性が……とフタバは苦笑した。そしてフタバも自然と瞼を閉じていき、夢の世界に落ちていった。

瞼を落とす瞬間、この千年王国 白の国へやって来たあのことのことを思い出した。アニメを見ていて、瞼を落としたらこの世界に来ていた、あのときのことを。

< 第六話 「蛇」・終 >





## 第七話 白

「井上フタバくうん。俺様がお呼びですよーっと」

飄々とした、から明るい声でフタバは目を覚ました。

「……はれ？」

ベッドでうたた寝していたら、そのまま深い眠りに落ちてしまっていたようだ。重たい瞼を開けると、寝る前と同じ天井が見える。瞼を擦りながら開け放たれたドアのほうに視線を移すと、白い団服の金髪の男が壁に背を預けて立っていた。逆光のせいもあり金色の髪はいつそう輝いているように見えた。

「おはよーさん。俺の名前、覚えてる？」

フタバは頷いた。金髪のとてがみの様な髪型に、軽々しい口調。よく覚えている。初めて教団に来たときも会った。そして今朝、城から帰ってきたときに桜月と話していた青年だ。

「改めて自己紹介するよ。俺は佐々波乱歩<sup>ささなみ</sup>。器量も頭も良い、二十六歳のお兄さん」

ニコリと笑う佐々波に、フタバもへらりと笑いを返した。

< 第七話：白 >

フタバは佐々波に連れられるまま本部の庭にやって来た。部屋のソファで泥のように眠りこけているまどかはそのまま部屋にいる。本部と寄宿舎を繋ぐ渡り廊下の途中にある扉から庭に出ることが出来た。庭にはいつの間にも雪がたつぷりと積もっていた。今朝はそこまで積もっていなかったのに。そして時刻は昼のようだった。今朝、城から帰ってきてから三、四時間というところだろうか。

「佐々波さん、オレになんの用？」

寒さに悲鳴をあげる身体を摩擦で暖めながらフタバは聞いた。佐々波はというと、庭に植えられている木々の幹あたりに刺さっていたシャベルを取り出している。そしてフタバの方に歩み寄ってくる。歯を見せて笑った。

「お前、どうせ暇なんだろ」

「え……うん。まあ」

「仕事を与えてやろうと思ってな」

ほら、と青年はシャベルをフタバに手渡す。不思議そうにそれを眺めるフタバを彼は笑った。

「雪かきだよ。毎日やらなきゃダメなんだよな」

「毎日、雪かき？」

そう問うと佐々波はため息混じりに苦笑する。困ったような人懐こい笑みが好印象だな、とフタバは感じていた。

「そー。だってこの国、一年中雪が降るからな」

フタバが小さく息を飲み込む。どういうこと？ と質問すると、佐々波は笑ったまま雪かきを促すだけだった。促されるまま、フタバはシャベルを足元の雪に突き刺して雪かきを始める。

「白の国は千年王国の最北端なんだ」

雪かきをするフタバの背で佐々波は言った。軽々しい口調だが、よく聞くと聡明さも持ち合わせていると気付く。フタバは振り返らず、雪かきを続行しながら話を聞いた。

「だから一年中、冬ってわけ。だから毎日のように雪が降るんだよ。」

「へえ……北海道みたいなもの？」

「ほっかいどー？ なんじゃそりや。ま、そういうわけで俺が毎日教団の雪かきしてるってこと。ほんつとよく働くよねー我ながら。」

へえ、とフタバは曖昧に返事をしておいた。実際佐々波の多忙さなど知る由もないので同情の気持ちで返事をしたのだ。それを佐々波は自分の話に興味を抱いたのだと勘違いしたのか、途端に目を輝かせる。雪かきをするフタバのすぐ後ろまで、興奮を隠さず詰め寄ってきたのだ。

「分かってくれるー！？ 分かってくれるよな！ 俺ってば第一師団長なのにさー！ 雪かきなんて！ まるで雑用係じゃない？ これ全部あの自己中な団長から命じられてんの。ほんつとさー、あの、団長補佐の仕事勘違いしてない？ 団長補佐って団長のパシリじゃないでしょー！？」

息継ぎもままならぬまま彼は言った。フタバに掴みかかるかの如

き勢いだ。必死な顔で訴える佐々波にフタバも必死に首を縦に振ることで同意した。捲くし立てられたので詳しくは分らないが、つまりはあの強面こわもての団長に理不尽に扱き使われているらしい。

「良かったよ分かってくれて。ほんと散々なんだから」

「へえ……。佐々波さんの、その、第一師団長とかって何なの？」

一瞬、佐々波は驚いた顔をした。しかしすぐにいつもの様に好青年の表情に戻った。

「そっか、お前、この教団のこと聞いてないのか。」

「え、うん。」

彼は先ほどとは一変、落ち着いて話を始める。

「まあ、階級だよ。団長が教団の一番トップなんだけど、その下に第一師団長から第十師団長まで、十人いる。兵たちをまとめる隊長みたいなもんだ。自分でいうのもアレだけど、ま、俺様は第一師団長だからつまりは師団長のなかではいちばん強い。ちなみに第一師団長は団長補佐も任されるんだ」

佐々波は自慢げに鼻を鳴らした。フタバはもはやただ頷くだけだった。

「桜月さつきさんもその“しだんちょー”ってやつ？」

佐々波は金髪のをグシャグシャと掻きながら答えた。

「そーそ。桜月は第二師団長だ。俺の次。まー剣の腕は俺より断然上手いんだけどな」

言われて、フタバは教団に来る際に桜月が刀を抜いたときの事をふと思い出した。そして何の気もなくそれを佐々波に告げたのだ。本当に、何の気もなしに。

「オレ見たよ。この本部に来るとき。桜月さんが、ぴかーって薄いピンク色に光る刀を抜いて、悪い男を殺してたの！」

とたんに佐々波は表情を凍らせた。無表情中の、無表情。フタバはまずい事を言ったのかと固まった。佐々波は地面とフタバの顔を何度か交互に見やる。しばらく時を稼いでから答えた。

「お前桜月の刀を見たのか。桃色に光るあの刀を」

「えっ。見たけど、だ……ダメだった……？」

佐々波は何も答えなかったが、彼の複雑な表情は“見たらダメなものだった”と明らかに語っていた。沈黙が戻る。フタバは雪かきの手をとくに止めていた。

「ダメつつつか……その、」

言いかけて彼は急にあつと飛び跳ねた。その唐突さに驚いたフタバまでもがびくりと身体を揺らす。

「やべっ！俺、団長に呼ばれてたんだ！」

「へ？」

「つーわけで悪いなフタバ！この話はまた今度！」

シャベルを放り投げると、佐々波はすぐに本部の中に消えていつてしまう。フタバが質問する暇もなく。

（なんか色々ありそうだなあ……この教団）

一人残されたフタバはとりあえず雪かきを再開する。ふと空を仰ぐと曇っていた。この白の国は一年中冬だという。晴れる日はあるのだろうか。

そんなことを、フタバは自室に置いてきたまどかの事をすっかり忘れたまま、考えていたのだった。

< 2 >

その頃まどかは遅い起床を迎えていた。ソファに死んだように眠っていた彼女は、目を覚ますと見慣れぬ部屋な事に一瞬戸惑った。

（そっか……ここうぢじゃないのね……）

のろのろと身体を起こす。欠伸を嚙締めながら辺りを見回したところで彼女は固まった。部屋にフタバがいないではないか。

「フタバ君？ どこ？」

返事が返ってくるわけでもなく。しんと静寂が訪れる。どうやら弟は部屋を出て行ったようだ。まだ不慣れな教団を一人きりで、どこへ？ そう考えるまどかの脳裏をよぎったのは。

「まっ……まさか、誘拐！？」

寝起きのダルさは何処へやら、勢いよく飛び起きるなりまどかは叫んだ。

（そうに違いない！ あんなに可愛いフタバ君だもの！ きつと誘拐されちゃったんだわ！）

こうしちゃいられない、と彼女は皺だらけのスカートや乱れた髪にも構わず、部屋の扉を開けた。もちろん、誘拐された（らしい）フタバを探すためだ。

「こちら井上まどか。至急フタバ君の搜索を開始します！ どうぞ！」

一人きり探偵ごっこを楽しむと、光の速さで寄宿舍の廊下を爆走していく彼女の姿を、辺りの団員は遠い目で見つめていた……。

< 3 >

寄宿舍から渡り廊下を渡り、本部の玄関ホールに来るとそこは閑散としていた。寄宿舍には数人見受けられた団員たちの姿もない。なにかで集まっているのだろうか、とまどかが思っていると、ふと話し声が聞こえた。

「……なぜ……を……私……」

女の声だった。それは玄関ホールの右側の廊下から漏れている。その廊下は団長室へ通じる廊下だ。まどかは声に引き寄せられるように、忍び足で廊下に近づく。Ｌ字形の廊下の角で立ち止まり、聞き耳を立てる。男女の声。どうやら団長室の扉の前で男と女が話しているようだった。

「なぜわたしに言うてくだらないのですか！」



女の声が荒々しく叫んだ。突然の大声にびくりとまどかは肩を震わす。

（誰かしら？）

角から少し顔を出し壁の向こうを伺うと、そこには白い着物を纏った女性と　もうひとり、団服を着た背の高い黒髪の男の姿があった。男のほうはまさしく団長のはなだて縹であつた。後ろ姿しか見えないが、その忌々しい人物の背格好をまどかはよく覚えていた。

（縹卓之介！　なに話してんのかしら、あんな美人と）

女の着ている着物にまどかは目を奪われた。この世界にも着物は存在するのか、と。

（それにしても色っぽい女ひとね……）

女は同姓のまどかでさえ美しいと思える美貌をたたえていた。桜月も綺麗な人だと思つたが（男性であるが）、桜月の儚く上品な美しさとは違う。

その女はまさに“妖艶”な女だつた。白い着物をきちんと着こなし、艶やかな黒髪を後頭部で結っている。後れ毛がうなじに纏わりつく様子が色っぽい。そしてその悩ましげな表情が何よりもまどかを惹きつけた。厚く真つ赤な唇が言葉を発するたびに形を変えるのに目を離せなくなる。縹に何かを必死で訴えているその女は、妖艶な美女、という言葉がぴつたりの女性だつたのだ。

「卓之介さま！　用事ならこのわたしに頼んで下されば！」

女は少し低めの、艶のある声で縹に言った。それに対して縹は面倒極まりない、といった風に答える。縹の口調は常に不遜なものだったが、今はいっそう他人を突き放すようなものであった。

「団長補佐は佐々波君だ。用事は彼に頼むことにしている」

「でも！」

「お前は第三師団長だ。その仕事だけに専念しろ……かげろう 陽炎」

女は口元を結んだ。悲しげな表情をしている。かげろう 陽炎、というのが女の名らしい。

「わたしは貴方のお役に立ちたい！ 卓之介さまのお役に立ちたいのです！ だからどうか、わたしをもつと頼って下さいませ！

あっ！」

陽炎の切実な訴えも虚しく、縹はその言葉を無視してひとり団長室に入っていつてしまう。残された陽炎は団長室の扉をじっと見つめている。その背からは哀愁が漂っていた。

そんな男女の現場を一部始終を見てしまったまどかは、居たたまれない気持ちになりながらもその場を動くことが出来なかった。

<第七話 「白」・終>

## 第七話 白（後書き）

さすがに北海道でも一年中雪は降りません。フタバは小学生なのでその辺を勘違いしている模様（南極は暖かいと思ってます）

## 第八話 恋

「卓之介さま！」

女、陽炎は縹かげろうが入っていった団長室の扉にすがりつくようにすると叫んだ。

しかし部屋の中にいる縹からの返事はなく、静寂が訪れる。

「なぜ……貴方はこのわたしを……」

陽炎がつぶやく。悲しげなその声をまどかは壁に張り付きながらじっと聞いていた。涙を含んだ、湿った声だった。

「わたしは 貴方様に愛していただかなくては ……」

扉の向こうから、返事はなかった。

<第八話：恋こい>

まどかは思わず息を飲んだ。

陽炎という女性の、切実なる懇願の声を聞いてしまったからである。まどかはこれまでのお気楽な人生で、女の内に秘めたような懇願の声を聞いたことなど無かったからだ。

（あの陽炎って人……縹卓之介が好きなのね……）

それにしても、『貴方に愛していただかなくては』とはどういう意味だろう。そう疑問を抱いた瞬間、急にまどかは喉の奥で悲鳴をあげた　というのは、何者かがまどかの口元を後ろから手のひらで覆ったのである。

「むぐつ!？」

「静かに！　陽炎さんにバレるぜ」

背後から顔を覗かせたのは佐々波乱歩だった。

「あ、あなたは……桜月さんと一緒にいた金髪ツンツンヘアー男さん」

「はあ？　俺は第一師団長および団長補佐の佐々波！　よろしくつて言ってる場合じゃねえな……あんた、団長と陽炎さんの会話を盗み聞きするなんて　なんて女だよホント」

そう小声で言う佐々波のほうをまどかはすばやく振り向く。

「なんて女とはどーいう意味ですか！　失礼なっ！」

「ばっ……かつ、声がでかい！」

佐々波が咎めるも遅く、曲がり角の先にいる陽炎が二人の気配に気付き、静かな、それでいて艶のある声で言った。

「そこに誰か？」

顔を見合わせるまどかと佐々波。きょとんとするまどかを呆れ顔で見ると、佐々波は陽炎の前に姿を現した。

「こ、こんにちは……陽炎さん」

「佐々波殿？」

「はは……団長に呼ばれてね……」

へら、と笑う佐々波だったが、その顔には汗が浮いている。陽炎はそれに気付いたのか定かではないが、涼しい顔を崩さない。

「卓之介さまならお部屋に」

「あ、そうみたいですね……はは……」

「わたしはこれで。政務がございますので」

軽く頭をさげると、佐々波の顔を見ることもせず陽炎は着物の裾をあげて急ぎ足で廊下を駆けた。

するとし字の角を曲がったところでまどかにぶつかりそうになる。

「あつ……申し訳ありません」

「えっ　い、いいえ。」

まどかとも目を合わせずに、陽炎は玄関ホールへと消えていった。その後ろ姿を見送るまどかの元に、佐々波が歩み寄って頭を掻いた。

「はあ……。いつになっても陽炎さんとの会話は緊張するぜ」

「あの人はいつたい？」

佐々波はすこし早口と言う。

「第三師団長の陽炎さん。“師団長”ってのは後でフタバから聞いてねー。ま、とにかく女性で第三師団長まで出世したのは教団創立以来、陽炎さんだけらしい。つまり強いんだよ、あの人」

「へえ」

「んで、見ただろ、あの人色っぽいんだよねー。でもあんま人と喋らないからよく分かんない人なんだ。歳は何歳だっけ？俺のひとつ下だから二十五歳かな？　しかもあの人、我らが団長の婚約者」

まどかは目を丸くさせた。その驚きように佐々波が笑っている。

「あああああの縹卓之介に婚約者がっ！？」

「そーそー。まあ団長は結婚する気なんてないけどな。だから陽炎さんが気の毒なんだよ。あの人、本気で団長が好きみたいだから」

まどかは廊下の角から覗き見たときの、陽炎の様子を思い出していた。

縹が去った後の団長室の扉を見つめる悲しげな瞳　縹の名を呼ぶ声　あれはまさしく本当に恋する女のもだった。

「縹卓之介は陽炎さんと結婚する気はないのね。それなのにずっと縹卓之介を好きでいるなんて……なんて一途なのかしら、陽炎さん」  
「へ？　あ、うん、そーね……」

この人のテンポが掴めない。声には出さないが佐々波はそう思っていた。

「あつ！　そうだ！　私、フタバ君の誘拐犯を捜していたんだわ！」

急に声をあげたまどかを佐々波がいぶかしげに見る。

「フタバ？　フタバなら庭で雪かきしてるぜ。俺が頼んだんだ」  
「あなたが誘拐犯だったんですね！？」

「はああ？」

勝手に佐々波を誘拐犯扱いすると、まどかは言うが早く廊下を走り出す。背後で佐々波がなにか呼び止めていたが、気にすることもなくまどかは教団の中庭を目指した。

庭にはすぐたどり着いた。ここに来るまで、陽炎にも会うことはなく、他の団員にも会うことはなかった。

庭では、灰色の空の下、小さな噴水の辺りでフタバが雪かきをしていた。

佐々波から借りたのであろうか、白い上着を着ていた。フタバの半袖、半ズボンの格好ではさすがに雪かきは辛いだろう。

「フタバくん！ モー！ お姉ちゃん心配したんだからあー！」

言いながら駆け寄ると、フタバも驚いた顔をして振り向いた。

「ね、姉ちゃん？」

昨晚以来なのに、なぜか長い間会っていなかったような気がする。そう思いながらフタバは雪かきの手をとめると、雪を踏みしめながらまどかに駆け寄った。

< 2 >

「でねっ、団長室の前で縹卓之介と陽炎さんって女性に会ってね。佐々波さんが言うには二人は婚約者みたいなの。陽炎さんってすごく美人な人でね。なんていうのかなあー、桜月<sup>さつき</sup>さんみたいな綺麗



系じゃなくってー、飲み屋の若いママって感じの美人さん。第三師団長って佐々波さん言ってたわ。ところで第三師団長ってなに？」

一気にそう言いきると、まどかは笑顔でフタバの返答を待っていた。

二人は中庭のベンチに腰を落ち着けている。ベンチに積もった雪を除いたとはいえ、やはり臀部がすこし冷たい。

フタバは“師団長”が団長に次ぐ階級のことだと説明してやった。

「佐々波さんが第一師団長で、桜月さんが第二師団長。そのかげろーさんって人が第三師団長なんだね。第十師団長までいるんだって」

まどかは興味なさげに空を仰ぎながら相槌した。

そしてしばらく何か考えている様子で、フタバは黙っていた。まもなく、まどかが口を開いた。

「あのねフタバくん、私、気付いたことがあるの」

そして彼女にしては珍しく真剣な顔を見せた。

「この千年王国　ううん、白の国だけかもしれないけど、どうも変じゃない？　“私たちの国”と似てる気がしない？」

「オレたちの国と似てるって？」

まどかは辺りを見渡し、誰も人がいないのを確かめると神妙な面持ちで言った。

「“日本と似てる”って思わない？　最初から違和感を感じてたの……だって異世界なのに、みんな名前が漢字で、日本人の名前じゃ

ない。すこし珍しい名前だけど。」

「でも建物はドラクエみたいじゃん」

「そうなの……建物だけは西洋風だよな」

すこし間を置いて、まどかは落ち着きを取り戻すように深呼吸する。

「で、さっき陽炎さんって女性の話をしたでしょ。彼女、驚くことに着物を着てたのよ！ 団服じゃないのは彼女の好みかもしれないけど おかしいよね！ 着物なんて日本の文化よ？ なんて異世界のこの国に“着物”なんて概念があるのかしら？」

実を言うと、フタバはまどかの話の内容より、姉が一年に一度くらいしか見せない真面目な表情のほうに気をとられていた。

それに、この国おかしくない？ と聞かれたところで、フタバには曖昧に肯定しておくことしか出来ないのだ。

「私、思うのよ」

膝のうえで拳を作ると、まどかは声を低くした。

「この千年王国と私たちの暮らしてた現実世界 なにか“繋が”があるって。どこか繋がっているから、同じような文化が生まれてるのよ」

フタバは答えなかった。



## 第九話 幽・1

フタバとまどかのもとに桜月さつきと佐々波さざなみがやって来たのは数分後のことだった。

二人は連れ立って歩き、フタバ達の座るベンチへと近づいてきた。

「こんにちわ。フタバ君、まどかさん。今朝は国王様と縹さんのところ、両方へ行ってきたてお疲れでしょう。大丈夫ですか？」

桜月が柔らかく言う。フタバとまどかは揃って頷いた。  
つづいて佐々波が口を開いた。

「さっき大変だったんだぜ？ 姉ちゃんのほうが、よりによって団長と陽炎さんの会話を盗み聞きしちゃってさー」

「むっ、盗み聞きとは失礼な！」

「本当のことでしょう？」

反論できず口を噤むまどかを、フタバは少し驚いて見る。口でまどかに勝てる佐々波に感心していたのだ。

「お二人はこれからお仕事ですか？」

まどかが聞いた。

すると佐々波と桜月は顔を一度顔を見合わせると、またすぐにまどかの方に振り向いた。

「まーね。これから我らが『白の教団』の“入団試験”なんだ。俺

と桜月は幹部だから、試験官の仕事があんの」  
「……入団試験？」

< 第九話：幽<sup>かすか</sup>・1 >

早急に佐々波と桜月は去って行った。中庭を横切り、本部の影に消えていく。

「入団試験だつて！ 聞いたフタバくん！」

なにやら瞳を輝かせているまどかをフタバは不思議そうに凝視した。

「なんでそんなに嬉しそうな姉ちゃん……」

「私たち、昨日からつまらない事ばかりだったでしょ！ こんな楽しそうな事ないわよ！」

「へ……？」

姉が“楽しい事”というのは、たいてい危ないことだ ということをフタバは痛いほど知っている。額を嫌な汗が伝った。

「なに企んでるの、姉ちゃん……」

小学生に何を企んでるのか、などと聞かれてもまどかは気にしない。

「ふふっ、入団試験を覗きに行くのよ！」

やっぱり。

フタバは頭を抱えなくなった。しかし所詮は自分の姉。逆らえるはずもないのだ。

「覗きに行くって……いつ？ 試験って、一日ずっとやってるんでしょ」

まどかはフフンと鼻を鳴らした。

「これだからフタバくんは嫌なのよ……今から行くわよ！」

やっぱり。

< 2 >

二人は佐々波と桜月の後を追って、本部の裏側に来ていた。そこにも小規模な庭が広がっていた。本部に隣接している寄宿舎の建物も見える。そして少し離れたところに、ドーム型の大きな建物がそびえていた。

「あの建物で試験をするのね」

庭に整然と美しく植えられている木の陰に隠れているまどかが言った。

ドームの前には大勢の人が集まっている。百人はいるだろうか。すると、その様子を見ていたフタバがあつと声を荒げた。

「ね、姉ちゃん！ あの人たち、みんな着物きてるよ！」  
「ええ？」

目を凝らして見ると、確かにドームの前に集まっている男達はみんな着物を纏っているようだった。着流しだろうか 浴衣だろうか フタバ達のところからは判断できないが、たしかに着物を着ているのだ。

「やっぱり私の言った通りじゃない！ この国は和風の文化があるんだわ。国民は着物を日常的に着てるのよ。やっぱり、私たちのいた世界と繋がりがあるんだわ」

どこかしら嬉しそうなまどかは、興奮を抑えられない、といったふうには笑顔を浮かべている。そして木の陰から見つめるだけでは物足りなくなっただのか、彼女は突然、フタバの手をとりドームの方へ歩き出したのだ。

「ね、姉ちゃん？ どこ行くの？ まさか」

嫌な予感をとめられないフタバが聞いた。

「もちろん、近くに行つて覗くのよ。あのドームの中で試験をするんでしょ？ 試験の様子を見ようじゃない！」

「ええええっ。もしバレたらあの怖い団長さんに殺されるよー！？」

まどかは振り向いてニヤリと笑った。

「ふふん、まどかお姉さんをナメないでくれる？ 縹卓之介なんて私がぎゃふんと言わせちゃうわよ」

自信満々に言い放つまどかに、フタバは反対を唱えることが出来なかった。

< 3 >

数分後、二人はドームの裏側に回ってきていた。うまい具合に、試験をうける受験者たちには姿を見つかることは無かった。

ドームの裏は整備させていないようで、雑草が好き放題に根を張っている。フタバの身長だと、雑草が太ももまで伸びていた。

「こんなところから覗き見するの、姉ちゃん……」

まどかはどこからか空き箱を持ってきた。それを壁にある小窓の真下に設置する。作業をしながら言った。

「ここなら誰も来ないでしょ。草ボーボーなのも、人が来ない証拠よ」

「うっっ……足がかぶれそう……」

嫌悪感を抱くフタバとは反対に、まどかは雑草の中を歩くのにも抵抗を示さない。女性だというのにだ。まどかのシフォンスカートは雑草の葉で汚れている。ストッキングは今朝のうちに脱いでいるらしかった。

「フタバくん、ここに上<sup>の</sup>って」

まどかが小窓の下に設置した空き箱を指した。

雑草に埋もれるように置かれている空き箱のうえにフタバが乗れば、ちょうど小窓からドーム内の様子を伺えるのだ。



言われるまま箱のうえに上ると、すこし不安定だがなんとか足場にはなる。まどかはその隣に並び、背伸びして窓を覗いていた。

「見て。桜月さんたちよ。準備してるわ」

声をひそめてまどかは言った。

「忌々しい縹卓之介もいるわね。佐々波さんも。あの白い着物の人は陽炎さんだわ」

二人が覗く窓からは、ちょうど縹たちの背が見える。ドームはかなりの広さで、中心にいる彼らの細かい動作はフタバとまどかには見えなかった。話し声も少ししか聞き取れない。

なにか面白いことが起こらないか そんな単純な好奇心から、姉弟は中の様子を食い入るように観察するのだった。

< 4 >

「団長、何時に終わるんすかあ？ 入団試験」

モップを片手に持ちながら佐々波が文句を漏らす。彼はドーム内の清掃中だ。このドームは団員たちの鍛錬場なのである。

ドームの中には、四人の試験官が集まっていた。

団長の縹。他は、第一師団長の佐々波に、第二師団長の桜月、第三師団長の陽炎である。

「いいから君は掃除を終わらせろ！」

「はあ……なんでいつも俺ばかり……」

縹のぴしゃりとした声が飛んで、佐々波は掃除の手を再開し始める。隣で桜月が笑っていた。

「今日は五年ぶりの入団試験だ」

縹が言った。

「いいかお前ら。間違っても変な奴を入団させないように、受験者の細部まで目を配れ。入団者の予定は三十人だ。今日はその五倍もの受験者が集まってる」

「三十人も新しく入団させるんですか？」

佐々波の掃除を手伝っていた桜月が聞くと、縹は静かに頷いた。

「最近、脱退者が多いからな」

「あー、ソレみんな団長が怖いんすよー。国家護衛職なのに給料低いしねー」

へへ、と笑った佐々波を一喝すると、縹はどかりと椅子に腰を下ろした。試験官の縹たち用に用意した椅子だ。鍛錬場の真ん中に四脚の椅子というのは奇妙な光景だ。

「卓之介さま、時間です」

今まで黙って佇んでいた陽炎かげろうが静かに言った。

「よし、佐々波くん。一人目を呼べ」  
「はいはい」

掃除用具を適当に放り出すと、佐々波が鍛錬場の扉を開けた。重い音をたてて開く扉。その向こうには雪景色が広がっていて、受験者たちがひしめいている。

佐々波が受験者を一人、呼ぶ。入団試験が始まった。  
フタバとまどかは依然とその様子を見ているのだった。

<第九話 「<sup>かすか</sup>幽・1」 終>

## 第十話 幽・2（前書き）

十話目にしてようやく話に進展が。  
ちなみに今回は井上姉弟が空気でず。

## 第十話 幽・2

鍛錬場は緊迫の空気に満ちていた。

そのドームの中央に置かれた少し場違いな椅子には、はなた縹、佐々波、桜月さつきの三人が座っている。三人が黙って見ているのは、目の前で行われている入団試験だ。

「うわあ！」

またひとつ、受験生の悲鳴が響く。受験生はみぞおちに食らった一撃で、鍛錬場特有の柔らかな床に転げ落ちた。

「女として甘く見ぬ事です　出直して下さいませ」

かげろう陽炎の静かな、それでいて烈しい声が言った。

受験生は逃げるようにして鍛錬場から出て行く。陽炎はその背を見送りながら、手にしている鍛錬用の槍を静かに下ろした。

「いやー、やっぱり陽炎さんの太刀は速いっすねー。速さでは教団一じゃないっすか？」

場違いなほどの飄々とした声で佐々波が椅子に座ったまま声をかける。陽炎は控えめに頭を下げた。

入団試験の受験内容は、実技試験である。

試験官のひとりと刀を交え、その様子を他の試験官が観察するという簡単なもの。

今回、受験生の相手を担うのは陽炎だ。女性のほうが受験生を緊張させないだろう　という佐々波の提案だった。

しかしこれまで数十人の受験生が陽炎に立ち向かったが、誰ひとりとして満足に陽炎と戦うことすら出来ていない。

女といえども、陽炎は第三師団長なのだ。動きにくいだろう着物を纏いながらも脅威の速さの槍の太刀を誇る彼女を、仲間ながらに恐ろしいと縹たち三人はひそかに思っていた。

「今回の入団試験は骨なしの奴ばっかですかね、団長」

佐々波の言葉に、縹は重く頷くしかなかった。

「　次の奴を呼べ、佐々波くん」

「はいはい」と

淡々と、入団試験は続いていく。

そして“彼”が鍛錬場に現れたのは、百人もの受験生を相手にした入団試験も終わりに差しかかるうとしていた　夕方のことだった。

< 第十話：幽・かすか 2 >

入団試験の様子を小窓から覗くフタバとまどかは、小声もそこそこに興奮していた。

「凄いわねフタバくんっ！　陽炎さん、着物なのにあんなに早く槍

を振り回して男達を倒しちゃうなんて！」

まどかが爪先立ちをしながら言う。隣でも空き箱のうえに乗ったフタバが、同じように興奮を隠せないでいた。

試験官である佐々波たちの姿は、フタバ達からだと後ろ姿しか見えなない。それを良いことに、二人は小窓から顔を出さんばかりの勢いで身体を乗り出していった。

「あの舞妓さんみたいな格好の女の人すごいね、姉ちゃん！ あ、また男の人が入ってきた」

フタバが言った通り、鍛錬場に新たな受験者が入ってくる。

広い鍛錬場だ。扉と正反対の場所にある小窓にいるフタバたちからは、受験生の顔はよく見えない。

しかしこれまでの受験者たちと同じく、着物を着ている長身の男ということには分かった。

「こちらへどーぞー」

佐々波が間抜けた声で新たな受験者のその青年に声をかける。

青年はゆっくりと鍛錬場の中央に歩み寄る。その動きに、佐々波たちはゾツとした。というのは、青年は長身で細い体をユラリユラりと揺らめかせながら、おぼつかない足元で歩くのだ。そして佐々波たちの側に来た男は、青白い肌に、肩までぞんざいに伸ばした黒髪。常世を眺めているかのような細い目。それらはまるで、幽霊のようだったのだ。

「……桜月」

椅子に座ったまま凝視していた佐々波が、男から目を離さずに囁く。

「何ですか……佐々波さん」

「あの男　名前は？　どこから来た奴だ」

桜月が手元の机に置いておいた受験者の名簿を手にとった。

「名前は『早乙女 炎<sup>えん</sup>』。出身地は不明になっています。年齢は25歳」

炎という名前にしては気味の悪すぎる男だと三人は思った。  
佐々波が、黙ったままの繚に向かって珍しく真剣に言う。

「団長、あいつ様子が変っすよね？」

「黙って見てろ」

「…はいはい」

口を結んだ佐々波の前、早乙女という男が陽炎の前に立った。隈をつくり、薄く開いた細い目が陽炎をじっと見つめる。彼は、言葉の無意味さを語るかのように黙っていた。  
背筋を走る冷たい空気に、陽炎は僅かに肩を寄せる。

（何だこの男……妙な雰囲気だ……しかし卓之介様の前　手を抜くわけにはいかぬ！）

男の纏う霊のような空気に怖じることなく、陽炎はグッと愛用の槍を握る。

佐々波が試験開始の合図を出した。それを横目で確認すると、陽炎はもう一度、きつく槍の柄を握った。



「参ります。お覚悟なさりませ！」

剣を出すわけでもない、立ったままの早乙女に槍を向けると声高々に言う。

すると、今まで意識がないかの如く佇んでいた男が、ユラリと緩慢な動作で着物の懷に手を差し入れた。

（短刀でも出すのか……？）

陽炎は槍の切っ先を早乙女に向けたまま、その様子を凝視する。この入団試験に臨む際の武器は自由である。早乙女は最初、手ぶらだった。武器を懷から取り出すのかと思っていた陽炎だったが。

早乙女はゆっくりと、懷から手を引き抜く。

その手には、一枚の札<sup>ふだ</sup>が。黒い墨で文字が羅列しているお札だ。そんなものを取り出して何をするのか。離れた場所にいる鰐たちも訝しげに早乙女を見ている。

その時だ。

早乙女が動いた。正しくは、早乙女の血色の悪い、紫色の唇が動いたのだ。

経文を唱えるかのように、ブツブツと札に向かい呟いている。気味の悪い光景だ。陽炎は攻撃を仕掛けることも出来ず、その様子を啞然と見ることしか出来ないでいた。

「あ、あれは……っ？」

遠くの桜月がすばやく異変に気が付く。

早乙女が手に持つお札から、黒いモヤのようなものが立ち昇っているのだ。それは早乙女が“何か”をブツブツと呟くたびに増え、陽炎の周りに煙のように立ち込める。

「縹さん、何かおかしいですよ」

そう訴える桜月だったが、縹は依然として陽炎と早乙女の様子を眺めているだけで、何も口にしようとはしなかった。

入団試験中のアクシデントには極力、縹たちは関わってはいけな  
いのだ。陽炎と、受験者だけの問題なのである。

「陽炎さん……」

心配そうに見つめる桜月の視線の先では、陽炎の周りを覆っているモヤが既に陽炎の姿を見えなくするまでに彼女の身体を包んでいた。

黒くなる視界。陽炎は舌打ちをして辺りの様子を慎重に伺う。

（この黒い煙は一体…？ あの男、何をしようとしている？）

このモヤの渦から脱出しなければ。

そう思い身体を動かしたときだった。

「あっ！」

急に立ち込めるモヤが陽炎の身体を襲うかのように迫ってきたのだ。意思をもつかのように、黒いモヤは陽炎の全身を覆い、彼女の動きを止める。

ただのモヤではない　そう分かって遅かった。黒い“それ”に身体を締め付けられる陽炎は、肺が圧迫され、呼吸が薄くなるの

を感じた。

「ぐっ……っ」

やがてそのモヤは顔面にまで及び、陽炎の口と鼻をも塞ぐ。完全に呼吸が絶たれた。

（ま、まずい！ このままでは……！）

身を捻ることも出来ず、瞬きすら満足にいかない。黒いモヤに覆われているため、縹たちから自分の様子は見えないうろ……。

「美しい女性が苦しむ姿は　　たまりませんな。」

モヤの向こうから、低く、ざらついた声がする。早乙女の声だ。あの男には陽炎の様子が見えているのだろうか。

（あの男！　わたしを殺そうとしている……！）

限界が近付いてきていた。呼吸が絶たれて数分もすれば死に至る。入団試験で受験者に殺されるなど、冗談じゃない。しかし陽炎には抗う術はない。

いよいよ意識が遠のいてくる。最期を覚悟した陽炎は、心の奥で想い人の名を呼んだ。

（た、卓之す……け……さ　　ま　　）

その時だった。

「陽炎さん！」

激しく視界が開ける。一瞬、何が起こったのか分からなかった。ようやく虚ろな目の焦点が合ったとき、目の前には桜月がいて、その心配げな瞳には床に伏し荒く呼吸を繰り返す自分の姿が映っていた。

黒いモヤは消えていた。

「陽炎さん、大丈夫ですか？」

「つ、九十九殿……、私は……？」

「黒い煙みたいなものに囲まれてて、私達からは何があつたかは……」

ようやく、陽炎は死に至りかけていた自分を桜月が助けてくれたのだと理解した。しばらく呼吸が止まっていたので、ひどく身体が重く、頭が痛む。それでも視線を辺りに移すと、椅子に座ったままの縹と佐々波。そして何事もなかったかのように佇む早乙女の姿があつた。

「早乙女さんが妙な札から出した煙に陽炎さんが覆われて……。煙の中から陽炎さんが出てこなかったので、まさかと思って……」

だんだんと回復してきた身体を、陽炎はゆっくりと上半身だけ床から起こす。

「かたじけのうございます、九十九殿……」

本来ならば試験中に陽炎以外の試験官は、実技試験に立ち入ってはいけない掟なのを、桜月は掟を破ってまで助けに駆けつけてくれたのだ。しかしもし桜月が助けに来ていなければ、と考えると恐ろしい。

浅く呼吸を繰り返しながら、陽炎は側に佇む早乙女を見上げた。  
相も変わらず、同じ人間を見ているとは思えない瞳をしている。  
入団試験にて、試験官を殺そうとしたその男。

陽炎は身に残る最期を覚悟した瞬間を思い出し、悔しさで拳を握った。

<第十話 「かすか幽」・終>

## 第十一話 議（前書き）

またも井上姉弟（フタバ&まどか）が空気。  
あれ、主人公って誰だっけ？

## 第十一話 議

入団試験が終わった日の夜だった。

「無駄に疲れたわねフタバくん……。結局一日中、試験を覗き見してたし……」

自室に戻り、真っ先にベッドへダイブしたまどかが枕に顔を埋めながら言う。その声には明らかに疲労が混じっていた。  
フタバもソファに身を沈める。

「姉ちゃん見た？ 途中で入ってきた変な男の人。陽炎さんに何か変なことしてた人いたよね」

まどかが視線だけを弟に移し、答えた。

「あのお化けみたいに気味悪い人ね。何も喋らないし、目の下の隈怖いし。まあ、当たり前前に試験は不合格かしら。だって陽炎さん、大変な事になってたものねー」  
「……。」

フタバは不安を感じていた。

あの気色悪い男 早乙女と呼ばれていた、あの男と、また一度会い見えることがある予感がするのだ。嫌な予感だ。早乙女のあの虚ろな灰色の濁った瞳がまだ、フタバの脳裏から離れない。

不思議な、魔法のようなものを使い、陽炎を襲った男。

危険な男なことぐらい、幼いフタバにも分かる。

（もしこの教団の中にも、ああいう人が他にもいたら……。でも本当にいるかもしれない。桜月さん、言ってたもんな。この教団は正義の味方じゃないって……）

入団試験なんて覗き見しなければ良かった。

そうため息を吐いたフタバは、ベッドのまどかの隣にもぐりこんだ。時刻は夜九時を回ったところだった。

<第十一話：議はかり>

「じゃあここまでの合格者はこの二十九人って事で」

佐々波の抑揚のない声が会議室に渡った。

入団試験も終わり、休む間もなくはなだ、佐々波、桜月、陽炎の四人の試験官は会議室にて合否の会議を行っている。

本来ならば大人数が会議する円卓会議のための楕円形のテーブルに、四人で席を占めていた。

「んで、残る一名の枠……問題は“早乙女えん 炎”。奴を合格にするかどーか。」

佐々波の本題の提示に、すかさず桜月が言った。

「私は反対です。彼は、陽炎さんを殺そうとしたんですよ。しかも彼、不思議な札から出した黒い煙を操ってました。あれは……魔術です」



“魔術”という単語が、会議室内に沈黙をもたらした。

桜月以外の三人は忙しなく視線をさ迷わせている。桜月が続けた。

「この白の国では魔術は禁止されています。そんな術を使う早乙女さんを王室護衛団の教団に入団させていいわけありません」

普段の穏健さを微塵も感じさせず、厳しく言う桜月に佐々波も同意を示した。

「んー……俺もそー思っけどー。つーかなんかアイツ問題起こしそっだし。俺の仕事増えそっだよねー」

「佐々波さん……っ、そういう問題じゃないですよ！」

「は、はいはい」

めったに怒らない人物が怒ると怖い。特に桜月はその類に値するのだ。佐々波は大人しく軽い口を閉じ、すぐに話題を戻した。

「陽炎さんは？ もちろん早乙女の入団は反対でしょ？ 実際殺されそうになったのは陽炎さんだし」

桜月の隣に座る陽炎は、能面のような無表情を崩さず答える。

「わたしは……その、卓之介様が言うことならなんでも……」

「あ、そうっすか……」

それ以上意見を仰ぐことはせず、佐々波は苦笑を隠しながら縹に視線を移した。

「団長はどう思います？」

いつもなら自分の意見を真っ先に告げ、さつさと会議を終わらせる縹だったが、今回は険しい顔でじつと椅子に座っているだけだ。佐々波に意見の場を与えられると、眉間の皺を一層増やし、端的にこう告げた。

「早乙女 炎、あいつは入団させる」

はっ？ と三人の小さな声が重なった。  
気にすることなく縹は、いつもの高慢な態度のまま続ける。

「これからは『黒の国』とのぶつかり合いが激しくなる。戦争になるかもしれねえ。魔術を心得ている団員がいると戦闘要員になるだろ」

真っ先に反対意見を唱えたのは桜月だったが、

「でも縹さん、魔術を取得している彼の入団によって教団の規律が乱れる場合も」

「決定事項だ。団長の俺が言っただ。反論は認めても反対は認めねえ」

縹にすぐ言葉を遮られてしまう。桜月は口を噤んだ。

なんとも自分勝手な決定だが、結局三人はそれ以上縹に何も言えないでいた。

三人の沈黙を認めると、縹は大きな音を立てて椅子から立ち上がる。白い団服を翻すとテーブルから離れた。

「いいか佐々波君。奴は合格だ。書類を送っとけ。間違っても不合格手続きなんてするんじゃないぞ」

呆然と縹の背を見送る三人を横目に、ずかずかと会議室から退室していく縹だった。

< 2 >

すっかり夜は更け、時刻は真夜中だった。

縹の勝手な決定により強制的に会議を終了させたあと、佐々波たち三人はすぐに会議室を辞した。

会議室は本部の一階にある。窓を多めに設置してある廊下を三人は歩いていった。窓からは珍しく雪の姿は見えず、月の光が差している。神秘的な夜だった。

「はあ。相変わらず団長の横暴さには疲れるぜ。会議の意味があるんだか」

もはや癖ともいえるため息を吐き、佐々波がそう零す。  
隣を歩く桜月も疲労を隠せないように、沈んだ声で答えた。

「まあ、縹さんも馬鹿ではないですから。一応、先のことも考えて早乙女さんを合格にしたんですよ。……黒の国との衝突が近いのは、事実ですし」

佐々波と陽炎は頷いた。黒の国　その国と戦場で会いまみえる日が近いのは、師団長の彼らは痛いほど分かっている。だから縹の決定にも同意したい気持ちは少なからずあるのだ。

何にしても、早乙女の入団後の言動には気を配るべきだ。

そう気持ちを落ち着けると、三人は本部の上階にある自室を目指し階段を上っていった。

陽炎は途中、窓から見える白いほどの月を仰ぎ、薔薇のように色づく唇からかすかな息を吐いた。

（卓之介様……わたしは貴方様のお考えになら……どこまでも従います　　）

白い着物が月光に照らされ光っているようだった。

雪空ばかり広がるこの白の国にいる間、あとのくらい、月の見えるほど晴れ渡る夜空を眺めることが出来るだろう　　。

陽炎はそう考えると、なぜか胸がひどく締め付けられるような気がした。

<第十一話　「議」<sup>はのひ</sup>・終>

## 第十二話 月

「ちつ……… いつもこいつも秩序ばかり気にしやがって」

会議室から戻り、ドサリ、と縹はなれは自室のベッドに腰を下ろした。  
団服を乱暴に脱ぎ捨てると、遅しく鍛え上げられた筋肉が月の光に浮かび上がる。寝間着の着物を身につけると、ベッドの上に座り窓の外に視線を投げた。

団長室とは別に設けられているこの自室は、本部の最上階にある。  
家具くらいしかない質素なこの部屋からは、白の国がよく見下ろせた。

（早乙女の使う魔術をうまく利用すれば『黒の国』に対抗できる…  
… 奴の入団は必要なんだ）

自分にもそう言い聞かせる。

その時、扉を控えめにノックする音が響いた。

「縹さん、私です」

「……… 桜月さつきか？」

入室を促すと、開いた扉の隙間から神妙な表情をした桜月が顔を出した。彼も着替えを済ましたようで、薄紫色の細身の着流しに身を包んでいる。

後ろ手に扉を閉めた桜月が、意味深な笑顔を浮かべた。

「こんばんは。お話があるんですけど、いいですか？」  
「……………」

縹が眉間に皺を寄せると、桜月はいつも通り、目を細めて微笑んだ。

<第十二話：月>

桜月が縹の部屋を訪問したちょうどその時。

縹の部屋の隣　佐々波の自室にも、訪問者がいたのだった。

目の前のテーブルに置かれたコーヒークップを、フタバは困惑気味に凝視する。香ばしい匂いと温かそうに立ち上る湯気。それに手をつけないフタバに、隣に座る佐々波は笑いかけた。

「あ、そっか。お前まだ十一歳なんだっけ。コーヒーなんか飲めないか」

悪い悪い、というもコーヒーを片付けない佐々波。どうしたものかと困るフタバの横で佐々波が手を伸ばしたかと思うと、フタバの前に置かれたコーヒークップを手にとり、一気に飲み干した。

「俺、けっこうコーヒー淹れるの上手いと思うんだよねー。毎日何回も団長に淹れてやってっからさ」

「……ふーん」

「で、お前、何しに来たの？　普通、団員は師団長の部屋があるこの階に来ちゃいけないんだぜー」

フタバはうつむいて黙り込んだ。まだコーヒーの匂いが残っている。それを心地よく吸い込むと、口を開いた。

「……佐々波さんも、着物きるんだね。この国の人ってみんな着物なの？」

佐々波の纏う濃藍の着流しを指してフタバが言う。

かねてからの疑問を聞いてみた。フタバとまどかのいた世界にも着物はあった。まさかこの千年王国にも着物があるなど、不思議で仕方がない。

「ああ、白の国の国民はみんな着物だぜ。そーいう文化なの。俺たちは団服があるからプライベートでしか着ないけどな」

「オレと姉ちゃんのいた世界にも、着物ってあったんだ」

「へえ？」

さして疑問を抱かず、佐々波はフタバに本来の相談をするように促した。

フタバは重い口を開く。

「えーと　佐々波さん……えっと。オレ、気になってることがあるんだけど」

「へえ？」

「この教団の事なんだけど……」

佐々波はフタバの話を促すように、短く相槌を打って耳を傾ける。軽々しく見えるが、堅実な青年なのだとフタバは改めて認識をした。フタバがゆっくりと話し始める。

「ずっと、気になってたんだ。桜月さんは『白の教団』は正義の軍

隊じゃないって言うてたから。その……オレ達、ここにいて大丈夫なのかなって……」

なるほどね、と佐々波は面白そうに笑った。真剣に気になっていたフタバはからかわれていると勘違いし、少し顔を歪める。

佐々波が言った。

「どーせ桜月のことだから難しく言っただろ。ただ俺たちは王室を守る軍隊ってだけ。結構いい仕事してんのよー？」

「でも　王様を守るためなら、街の人も殺すんでしょ？」

「あー……」

その沈黙に、フタバは確信を抱いて肩をすくめた。

民間人すら殺す機関にすることがフタバの心配だったのだ。何よりも、姉であるまどかの事が大好きなフタバは、この教団で事件に巻き込まれ、まどかと引き離されることだけは避けたいのである。

「でも、民間人を殺すなんて戦争の時とか、反乱のときとかだけだぜ？　本来ならそれもいけないんだろうけど」

努めて明るく言う佐々波に、フタバの気持ちも少し和らぐようだった。

「それにお前たち姉弟はここでしか生活できないだろ？　嫌かもしんないけど、ちょっと我慢してくれよ。国王さまがお前らを呼んだ理由を言ってくれるまで」

「別に嫌ってわけじゃないけど……」

桜月や佐々波をはじめ、団員たちは仲良くしてくれる（縹は別だが）。不満という不満はないのだが、これから先の身の危険を危惧



しての相談なのだ。

「ま、お前ら姉弟のことは俺らが守ってやるから。ちゃんと無傷で元の世界に返してやるよ」

な？ と佐々波はバシバシとフタバの背を叩いた。半ば無理やり納得させられたフタバは戸惑い気味に頷いた。

相談も曖昧ながら解決したところで、フタバは佐々波の部屋を見渡す。

師団長の自室というだけあり、フタバとまどかのいる部屋より広く、家具も充実していた。意外ときちんと整頓してある、居心地のいい部屋だ。

二人が座っているソファの向かい側にある本棚には大量の本が収納されている。そのひとつひとつに目を移すと、それはすべて医学関係の本ばかりだった。

「佐々波さん、お医者さんなの？」

だしぬけな質問に、佐々波は一瞬目を丸くさせた。が、すぐに笑って返した。

「昔の話な。入団する前は医者を目指してたんだ。ほら、給料高し老後も安心でしょ？ こー見えても学院館では主席だったし」

「へえ……？」

“しゅせき”ってなんだろう？ と思いながらもフタバは相槌をうつ。

「入団は桜月と同期だったんだけど、最初はいいつ驚いてたなー俺様の博識さに！ ああ見えても桜月は学院館とかに通ってなかったらしくて、十歳まで字も書けなかったらしいぜ」

「そ、そうなんだ。桜月さん、昔から頭良さそうなのに」

「んー……あいつ入団前、いろいろあったらしいからなあ」

眉をひそめる佐々波に、フタバはそれ以上質問をすることが出来なかった。

時刻は真夜中を回っている。フタバは足早に佐々波の部屋を出て行った。

< 2 >

「綺麗な月ですね」

縹の部屋のソファに座った桜月は、さきほどからベッドに座る縹をちらりとも見ようとしない。ただ窓の外に浮かぶ月を見つめるだけだった。

その様子を縹は訝しげに凝視していた。薄紫色の着流しは、桜月によく似合っていると思った。彼の背に垂れる黒髪はまるで水ではなく風が流れる溪流であるかのようにさらさらだった。

「お前、何しに来たんだ……」

「縹さんとお話するために決まっています」

「それは分かるけどよ……」

縹は普段、もはや特技とも言える自分勝手さと悪利きする口ぶりで周りの部下と接するのだが、桜月だけにはなぜか敵わないのだ。

それは自覚している。桜月はただの穏やかな青年ではない。女性的な外見に隠された内面は、長年の付き合いである縹ですら理解できない部分がある。ゆえになかなか桜月の言動の意図を掴めないのだ。

「懐かしいなあ。昔、色街にいた時　ほら、館の外に出れないでしょ？　だから仕事がない時はよく、物置の格子越しに月を眺めてたんですよ。最近忙しいし雪空ばかりで、こうして月を眺めるなんて久しぶりです」

縹は戸惑いながらも耳を傾けていた。

「この女性用の藤色の着流し　色街を去る前に、館の花魁から貰ったものなんです。なんだか捨てられなくて。ますます女性っぽいなんて言われちゃいますよね」

「……。」

「この、髪も。もう腰まで伸びてて、洗うのが大変なんです」

淡々と話す桜月に、縹はじつと話を聞くだけだった。桜月が己のことを話すことは滅多にない。よく聞いておこうと思った。

「みんなに聞かれるんですよ。髪を切らないのかって。女性に間違われたくないなら切った方がいいって」

「……俺もそう思うが」

「あなたがそれを言うんですか？」

意味深な笑顔を作った桜月は、緩慢な動きでソファから腰を上げた。外の月を軽く見上げると、すぐに振り返って縹の側から離れ、扉のノブに手をかける。

「私が髪を切らない理由、あなたが誰よりも知ってると思っていま

したが」

ぐ、と縹は自分の息が詰まるのを感じた。

「桜月、お前、まだ」

「……おやすみなさい、縹さん。いい夢を」

扉が静かに閉まった。途端に静寂が訪れる。足音にさえ罪悪感を覚えるほど静かだった。

ほんの数分の会話だった。しかしそれでも、桜月が何を言いたいのか、縹には痛いほどに分かってしまった。桜月は“昔”のことを話していた。彼が忌まわしいはずの過去の話をする時は、必ず“なにか”を思ってた。

（あいつ……まだ“あのこと”に執着してやがんのか）

月光が責めるように鋭く縹を射す。桜月があんな事を言うものだから、縹自身も過去の出来事を嫌でも思い出してしまふ。

過去の記憶を消したくて、ベッドにもぐり込んだ。思い出したいくない。

あの頃は、周りの者みんなが苦しんでいた気がする。いや、みんなが苦しんでいるのは、今も同じだろうか……。

<第十二話 「月」・終>

## 第十二話 黒（前書き）

長いです。6000文字あります。

## 第十三話 黒

「もうっ。ようやく出番が来たと思ったら買出しって何ですか！

しかも佐々波さんとなんて！ 縹卓之介もなに考えてんのかしら！」

「……そんなに俺が嫌々？ まどかさーん」

「頼りないからですっ！」

ブンブンと怒りを隠さずにまどかが言い放った。紅いカーペットに彩られたゆるやかな螺旋階段を降り、本部の一階を目指す。佐々波の自室からの帰り、足早に階段を降りていると、朝の冷たい空気が窓から流れ込んで肌を刺した。

入団試験の日から数日後。

まどかとフタバは縹はなだに買出しを命じられたのだ。

買出しと言っても、縹の個人的な生活用品を買って来い、というただの使い走りなのだが。白の国の街へ買い物に行くのはフタバとまどかにとっては初めてだ。そこで佐々波が二人と同行することになったのである。

「ねーねー、佐々波さん。街に買い物に行くんだろ？ オレと姉ちやんが最初にいた街？」

フタバがコート状の上着を着ながら聞いた。半そではさすがに寒いだろうと、佐々波から借りたものだ。

「まさかあ。あの街は戦地だったろ？ これから行くのは違う街さ」

佐々波は買出しに行くというのに団服を着ていた。この国の一般人は着物だというから、目立つのではないか……とフタバは声には出さず思った。しかもフタバとまどかはこの国の洋服ではない。余計目立つことだろう。

「あ、陽炎さんだわ！」

まどかが声を上げた。三人がいる螺旋階段の一番下　つまり玄関ホールに陽炎の姿があつたのだ。一人だけ団服ではなく着物なのだからすぐ分かる。

フタバは陽炎の姿を見下ろしながら顔をあからさまに歪めた。

（かげろうさんって、あの静かで美人な人かあ……なんかちよつとあの人怖いんだよなあ）

そんなフタバの横で、まどかが急に階段を駆け下り始めたのだ。驚くフタバと佐々波。

「ねっ、姉ちゃん!？」

「私、陽炎さんにちよつと話しかけてくるわね！」

「ええー!？」

動揺するフタバに、まどかはピースサインを送るとさっさと階段を降りていく。

慰めるような鳥の鳴き声が外から聞こえる。フタバと佐々波は同時にため息を吐いたのだった。

元氣良く玄関ホールに現れたまどかを、陽炎は表情を変えないまま見つめていた。　　が、まさか自分のもとへ来るとは思わなかったのだろ。　　まどかに話しかけられると驚きに目を丸くしていた。

「おはようございます、陽炎さんっ」

まどかはニツコリと笑った。シフオンスカートの裾を両手で持って、冗談めいたお辞儀までしてみせる。

「あなたは確か……国王様が呼んだ、異世界の？」

「井上まどかです。二十二歳の花も恥らう乙女です！」

「わたしは第三師団長の陽炎と申します。」

丁寧に挨拶する陽炎を、まどかは真正面からじっと見ていた。

自分より年上なのだとすぐに分かった。近くで見ると、本当に美しい人だと思った。特に薔薇色に染まる唇は、見る者にゆっくりと浸透していく、清らかな泉の波紋のように美しかった。　　ただ、常に憂うような表情が、その美しさに陰りを落としている。

「あの、私聞いたんですけど」

まどかがそう言ったとき、ちょうどフタバと佐々波も一階に着いていた。陽炎と何を話すのかと興味深げに耳を傾けるフタバ。するとまどかは遠慮する様子もなく言い放った。

「陽炎さんってあの縹卓之介の婚約者だったんですね！ 私、応援してますね！　縹卓之介は嫌いだけど、陽炎さんは同じ女性ですもの。結婚式には呼んでくださいねっ」



そう豪語する姉に、フタバは穴があつたら入りたい気持ちにさせられた。それは佐々波も同じだった。縹と陽炎の関係があまり良くないのはまどかにも言つたはずなのに。

慌てるフタバと佐々波とは対照的に、陽炎といえは涼しい顔を崩さない。

「卓之介さまは……わたしと番<sup>つが</sup>う気などありません」

「へっ？」

「婚約は、卓之介さまのお父様が決めたものなのです。わたしは……誰にも……愛されることなく、無いのですから」

少し顔を伏せるようにして言つた陽炎に、さすがのまどかも返答を出来なかった。この表情は見たことがある。陽炎と縹の会話を盗み聞きしたときも 陽炎はこんな憂いを含んだ悩ましげな顔をしていた。

「……大丈夫ですよ！」

しかしまどかは笑つた。

「陽炎さん、とっても美人だもの！ もっとアタックすれば縹卓之介だつてすぐ惚れちゃうわ。だから、誰にも愛されないなんて言っちゃだめですよ」

「まどかさん……」

そんな事と言われたのは初めてなのだろうか。陽炎はひどく驚いていたが、その表情には僅かだが嬉しさが見てとれた。そしてまどかにお礼を言つた陽炎の顔は……

「かたじけのうございます、まどかさん……」

笑っていた。彼女は一瞬にして豹変したのだ。悲しげにつついた瞳がふと和み、引き締められていた唇がゆるりと解けた。この時、初めてまどかは彼女が本当の美人だと気がついたのだった。

< 2 >

「いやー、まどかさん凄いつすね！ あの陽炎さんと普通に会話しちゃう上に、笑顔にさせちゃうなんてさ！」

教団の庭を抜けたところで、佐々波が言った。まどかも満足げに笑みを浮かべている。

寒い朝だったが、空は晴れていた。僅かに曇る空に差す光の筋。今日は美しい日になりそうだ。

「なんかワクワクするなー！ ねえねえ佐々波さんっ、市場って楽しいーの！？」

興奮を隠せずフタバが言う。それに佐々波は笑って頷いていた。何事もなく森を抜け、街に着いたのは昼を過ぎてまもなくだった。長い道のりだった。教団は街とはずいぶん離れているのだろう。

市場は活気づいていた。

フタバとまどかがこの世界に来た時に見た、死体が転がる街とは正反対だ。溢れ返るほどの人々で、大通りが埋め尽くされている。

ゆるやかな坂道になっっているその大通りの両端には、所狭しと店が並び商人たちの声が飛び交っていた。

「うわー、すげー！ 人がいっぱいいるー！」

フタバは感激の声をあげた。

千年王国にやってきてから、こんなに大勢の中に来るのは初めてだった。

フタバとまどかは辺りを見回すのに忙しく、何度も行き交う人々とぶつかりそうになる。市場に集まる人々はみんな着物を着ていた。やはりこの国の日常的な服装は着物なのだ。建物は洋風なのに、不思議なコントラストだ。

「ここは王室の連中も利用する市場なんだ。だから戦地にはなっていないわけ」

二人の前を先導する佐々波が言った。フタバとまどかはその背を必死で追っていく。人ごみを縫うように歩きながらまどかが声を絞り出す。

「何を買うんですかー？」

「んーと……団長のインクと羽ペン。」

「そ、それだけを買うために……しかも縹卓之介の私物なんて……」

はは、と佐々波が笑っている。彼にとっては使い走りなど日常茶飯事なのだろう。

雑貨店まで行く最中　フタバは果物を売る滑車を見つけた。そのなかに林檎を見つけ、瞳を輝かせる。

「姉ちゃん、林檎がある！ 林檎！」

その声に前を歩くまどかと佐々波が振り返る      その時だった。

「ボク、林檎が好きなの？ アタシも大好き……ふふ、知ってる？  
林檎ってね、禁断の果実なのよ」

いつの間にだろう。フタバの隣に女性が立っていた。  
行き交う人々にぶつかる様子もなく、女は静かに立っている。いきなり話しかけられてフタバは固まった。それはまどかと佐々波も同じだった。

何よりも三人が驚いたのは、女の服装だ。フタバ達もこの場では目立つ服を着ているが、女の服はもつと異常に見えたのだ。  
なぜなら、女は全身黒ずくめなのである。露出の高い真っ黒な衣装を身にまとっている。胸だけを隠す上着に、短いスカート。そして髪も漆黒で、細かいウェーブの長髪をツインテールにしている。  
年頃はまどかより少し若いくらいだろうか。  
いたずらっぽい目がフタバを見下ろしている。

「お、お姉さん誰……？」

動揺を抑えられず、震える声でフタバが言う。

女は甲高く、耳にいやに残る独特な声色だった。

「アタシ？ リリスっていうの。あんたは“井上フタバ”ね？  
そちの能天気そうな女は“井上まどか”かしら？」

見知らぬ女に名前を呼ばれ、フタバは危険を感じた。が、逃げる

わけにもいかず硬直していると、リリスという女は佐々波のほうを見て言う。

「お兄さん、『白の教団』の団員ね？ 団服なんて着てるとすぐ分かつちゃうわよ。しかもその鷹の刺繍 あんた、師団長格の幹部ね？」

リリスは妖艶に笑った。

「フフ……井上姉弟以外にも師団長をひとり殺したら、“あのお方が褒めてくれるかしらあ……”

ペロ、と舌を出して無邪気に笑うリリスの笑みに、フタバは背筋が冷たくなるのを感じた。

（今この人 “殺す” って言った……？）

殺気を感じた。それは霧をも切り裂けるナイフのように鋭かった。助けを求めるために佐々波のほうを振り向こうとすると、勢いよくリリスに手首を掴まれた。

「痛っ！」

「あんたと姉さんを殺さないとサタン様に怒られちゃうの。だから大人しくしててね？ ちつとも痛いことなんてないわ。アタシ特製の麻薬で殺してあげるから」

ニヤリとリリスが笑うと、佐々波が動いた。掴まれていたフタバの腕を取ると、引き寄せてフタバを背に隠した。同時にまどかの身体も引き寄せると、まどかが声をあげた。

「な、何ですかいきなり！ 私に好意があるなら先に言ってください！ 順序つてものがあるでしょう！ 私の操はまだ渡しませんよ！」

「はああ？」

場違いにもほどがあるまどかの発言を聞かなかったことにして受け流すと、佐々波は目をきつく吊り上げてリリスを睨んだ。

「あんたさつき “サタン様” って言ったか？ まさかあんた、黒の国の……！」

「アハハ！ ご名答よ！ アタシは黒の国の『黒の魔導衆』のひとり。さつすが白の教団の師団長サマね！ サタン様の名を知っているなんてね！」

佐々波が腰に下げる刀に手を掛けるのをフタバは見た。リリスは相変わらず耳を犯すような高飛車な声色で笑い続けている。

「もうおしゃべりは飽きたわ！ ほら、まずはこの弟よ。たつぷりと味わって頂戴！」

「うわあッ！」

フタバは咄嗟に目を瞑る。リリスが手のひらを掲げると、フタバの真上に粉を撒き散らしたのだ。真っ黒い粉だ。しかしそれを腕で防ぐことが出来たフタバは何事も害を受けず、ただ人ごみに紛れて地面に尻餅をつくだけに終わった。

助かった。

が、そう思ったのも束の間だった。辺りを見回すと、市場の人々はリリスの存在に気付いていないのだろうか、ただ尻餅をついたま

まのフタバの姿だけを怪しげに見つめるだけで通り過ぎていく。

（ね、姉ちゃんと佐々波さんはっ！？）

人ごみで尻餅をついてしまったフタバは、姉達の姿を見失ってしまふ。リリスの姿も見えない。痛む臀部を庇いながらヨロリと立ち上がると、すぐにまどかとリリスの姿は見つかった。が、

「ね、姉ちゃん！」

まどかは行き交う人々のなか、キョロキョロと視線を巡らせていた。彼女もフタバと佐々波を捜しているのだろう。その背後で、リリスが至極嬉しそうに笑って手のひらを掲げていた。あの、麻薬だと言った黒い粉をまどかにも浴びせる気なのだ。

「危ない姉ちゃん！」

叫ぶも、市場の活気の声でかき消される。人々の波に阻まれ、まどかに近づく事も出来ない。

（なんでみんなあのリリスって人に気づかないんだよー！　ね、姉ちゃんが……！）

人ごみで揉まれるフタバの視線の先で、ついにリリスが手のひらを広げた。黒い粉がまどかの頭上で開放される。妖しく笑うリリスと目が合った。まどかに麻薬が降り注ぐとした、その瞬間だった。

「あっ！」

驚愕の声を上げたのはフタバとリリス、同時だった。

その声によやく背後のリリスに気がついたのか、まどかが動揺し始める。そして背後の“もうひとり”の人物にも気がついた。

「佐々波さんっ？」

まどかは状況を理解していないようだが、フタバはその光景をしつかりと見てしまった。

まどかにリリスの麻薬が降りかかる瞬間　人の波から突然現れた佐々波が、まどかの背を庇って代わりに黒い粉を大量に浴びてしまったのだ。

「まどかさん、無事か？」

「えっ……あ、はい。」

掠れた声で佐々波がまどかの安否を確認する。佐々波の様子は平常通りに見えるが……。

そして、標的のまどかに麻薬をかけられなかったリリスが怒りの色を示した。

「ちょっと！　邪魔しないでよねー！　アタシが狙ったのは井上まどかなんだからー！　もうムカつく！　やる気なくしたから帰るわ！」

そう乱暴に言い放つと、リリスは煙の如く消えた。それに驚く暇もなく、フタバはどうにか人ごみを分けて、佐々波とまどかの元に近寄る。

「さっ、佐々波さん……大丈夫……？」



口元を押さえ、地面の一点を見つめたまま微動だにしない佐々波。白い団服はリリスに浴びせられた麻薬で黒く粉に覆われている。まどかを庇って、相当の量の麻薬を浴びたはずだ。麻薬というのだから、害があるものだろう。

「俺は、大丈夫だから、早く、帰って……団長……グッ！」  
「きゃあ！」

「佐々波さんっ！」

呻き声と共に、佐々波が口を抑えていた手の隙間から血が溢れるようにして滴った。すると佐々波は意識が途切れたのか、仰のいて倒れていく。開かれた口からは、呪いの言葉の代わりに、毒々しいまでに紅い血が流れている。

「ねねね姉ちゃん！ 佐々波さん死んじゃったの！？」

「おおおお落ち着いてフタバくん！ とととにかく病院に！ きゅ、救急車を！ 911に連絡ををを！」

二人して混乱しながらも病院を目指すために、商店の人に病院の場所を聞く。が、ここは市場が栄える街で病院は隣街とのこと。

「教団に戻ったほうが早いわ！ 二人で佐々波さんを背負っていきましよう！」

「う……うんっ」

姉に言われるがまま、佐々波の身体を起こすフタバ。血を吐いた男性が倒れているというのに、周りの人々はリリスの時と同じく、何も気付いていないようだった。

まどかが佐々波を背負った。女性が年上の男性を背負って歩くのは重労働だ。しかも佐々波は刀を所持しているため、重さもある。

フタバも佐々波の身体を持ち上げ、まどかの援助をする。

（佐々波さん……死んじゃったら嫌だよ……）

佐々波の顔を見ると、顔面蒼白だった。いつも飄々と笑っている青年なものだから、死人のような表情はひどく恐ろしかった。口からの血は止まっている。息もあるようだが、団服の前が真っ赤に染まっている。この血が街の人々には見えないというのか。

姉を庇って傷ついたのだ　　どうにかしてでも、教団に連れて帰ろうと思った。

（あのリリースって人　ただの黒い粉だけで……大の大人をこんなにさせるなんて……何者なんだ？）

すると佐々波の言葉を思い出した。

『まさかあんた、黒の国の……！？』

黒の国。そう言っていた。リリースという女性はこの国の人間じゃないのだ。しかも、白の教団のことを知っていた。そして自分と姉を殺そうとしていた。

（黒の国って、一体……？）

答えが分かるはずもなく。フタバはきつく顔を歪めた。教団までは遠い。必死で佐々波を背負うまどかを助けながら、懸命に先を目指した。

<第十三話 「黒」・終>



## 第十四話 兆

その日、相変わらず団長室は煙草の煙に満ちていた。

「団長は〜ん、入団試験もう三日前に終わってしもうたんやって？  
なんで俺も呼んでくれなかったん？」

その声は聞く者の耳に嫌でも残るような声色だった。

上司にも敬語を使わないその軽がるしい独特の口調。それを発する青年は、団長室の来客用のソファに身体を埋めている。本来は貴賓客が座るためのソファに図々しく身を置いているのだ。

「……………てめえは第四師団長だろ。試験官は第三師団長までって決ま  
ってんだよ」

いつもの団長用のデスクに座っている繚が、これ以上ないほど眉を顰めて青年を睨みつける。世界も縮こまりそうな威圧感を放つその眼光を向けられても、ソファの青年はなんとも思っていないように笑い続ける。

「んなケチ臭い〜。佐々波さんの話やと凄い受験者がいたんやって？  
魔術を使う早乙女なんかかって奴やろ？俺も見なかったわ〜」  
「……………」

ケラケラと高めの声で笑うその青年。

繚は正直言つて彼のことをよく思っていない。唯我独尊な繚にとつて、自分に敬語を使わないのも頭にくるし、常に人をからかつて

いるような言動が気に入らないのだ。

「つーか市川。てめえはなんでこの部屋にいんだよ。自分の政務はどうしたんだ」

青年・市川はニツコリと笑って応えた。しかし純粹な笑みなどではない。見た者の心を一息に握りつぶす、真っ赤な笑顔だった。

「政務は終わったで？」

「……そーかよ」

「団長はんっておもしろいなあ」

糸目の瞳をさらに細めて笑う市川。縦長の輪郭に細い糸目、短い茶髪は、さながら狐のような顔つきだった。そしてその性格も。

「あれ、佐々波はんは？ いつも団長はんにコキ使われてこの部屋におるやん」

ソファの背もたれに掛けていた団服を身につけながら聞く市川。その団服の胸部分には鷹の紋章が刺繍されている。師団長の証だ。市川は第四師団長なのである。

縹は質問に答えるも、その声には明らかに嫌悪さが混じっている。

「佐々波くんは例の……井上姉弟と買出した。」

途端に市川は顔色を輝かせた。

「井上姉弟！ あの国王から呼ばれて異世界から来たって二人やろ！？ ええなー。会ってみたいわー」

縹は答えなかった。答えたくもなかった。市川や、桜月の様なタイプは苦手だ。何を考えているか分からない上に、口が上手い。団長の自分さえ口では勝てないのだ。

早く部屋から出てけ、と視線で市川に訴えると、ようやく市川が動いた。ソファから腰を上げて笑っている。

「国王が動いたつちゅー事は……分かつとるんやろ？ 団長はんも」

「なんの事だ」

「モチロン、黒の国のこと。気を付けんと噛まれるで？ 黒の国の、蛇に。」

縹は思わず煙管キセルを吸う動きを止めた。きつく市川を睨む。彼は笑っていた。嫌な笑顔だ。

「じゃつ。俺は退散しますわ。団長はんは怒られないうちに」

早足で扉に向かい、あつという間に部屋を辞した市川。本当に何をしに来たのだろう。

（ちつ……市川の奴、魔術を使う早乙女に興味を示してやがる……面倒になっちまったな）

煙管の柄で後頭部を搔く。同時に小さくため息を吐いた。

ガタンと音を立ててデスクから立ち上がり、窓辺に近寄る。閉め切ったカーテンを開くと、部屋を瞬時に飽和してしまうほどの朝の光が飛び込んできた。冷たい空気を吸い、煙草の煙と共に吐く。窓の向こう、教団と城を囲う森が広がっていた。その森の向こう、街の市場に今ごろ佐々波とフタバ達がいるはずだ。

<第十四話：兆きざし>

「はあ……っ、も、もう駄目……」

森に差し掛かったところで、まどかが崩れるようにして地面に倒れた。

背負っていた佐々波の身体を隣に横たえると、まどかは荒く呼吸を繰り返す。

「さすがに男の人をおんぶして歩くのはもう限界……」

「ね、姉ちゃん……」

フタバが心配そうにまどかを見つめる。身体が小さく、力も無い自分がないにも力になれないのが悔しい。

まだ森に入ったばかりで、教団に着くためには長い森を抜けなければいけない。仲間に助けを求める手段もない。二人で佐々波を教団に連れて行くしかないのだ。幸い、まだ昼前の時刻だ。時間はたっぷりあるのだが……。

（オレと姉ちゃんだけで佐々波さんを運ぶなんて　　）

せめて自分がもつと上背があり、力もあつたら、女性である姉にこんな重労働を任せることなど無かったのに。小学生のフタバには何も出来ない。

地面に横たわる佐々波の顔を横目で見ると、相変わらず真っ青で死人のような顔をしていた。血を吐いたせいで口元と団服の胸元が汚れている。呼吸もひどく浅い。早くしなければリリスの麻薬が体

中に回ってしまう。

（もう姉ちゃんも限界だ　どうすればいいんだろう……）

俯いて、拳を土と共に握る。

そのとき、視線のしたで佐々波の瞼がピクリと動いた。ハッとフタバは顔を上げる。

「うつ……」

「佐々波さんっ！」

姉弟同時に声を合わせた。まどかに至っては佐々波の肩を激しく揺さぶっている。毒が身体に回る！　とフタバが慌てて止める。

佐々波の瞼がゆつくりと開く。淀んだ瞳が現れた。

「　お前ら……？」

「良かったあ！　私、死んじゃったかと思って！　私を庇って死んじゃったらどうしようかと！」

「……ああ……“あの女”の麻薬で……」

はは、と佐々波は力の無い乾いた笑みを浮かべた。身体も少しは動くようで、額に流れる脂汗を手で拭っている。

ここが朝の森の中だと気付いた佐々波は、ここまで自分を運んできてくれたのが二人だと知る。そして教団までは距離があることも同時に気付く。これ以上、井上姉弟が自分を運ぶのは無理だろう。

佐々波は苦笑を崩さず、腰の刀に手を掛けた。

（二人の前だけど仕方ないか……。後で団長に怒られちゃうけど）



心配そうに見下ろすまどかとフタバに彼は真剣な顔で告げる。

「悪いけど……この刀、抜いてくれない？」

「えっ？」

「こつちの……少し短い……二本の刀、両方……」

息も絶え絶えに言う佐々波の様子に、慌ててまどかが二本の刀を抜く。短めのその刀は案外重く、ずしりと重さが伝わってくる。そしてまどかとフタバはその刀を抜いた途端、驚きに目を丸くした。

「この刀　緑色？」

フタバが溢した言葉通り、その二本の刀は淡い緑色の光に包まれていた。桜月が所持していた、桃色の光を纏う刀と同じだった。

「佐々波さん、これ……」

「い、いいから　」

佐々波はフタバから刀を両手で受け取ると、まどかに手伝ってもらいながら上半身を起こす。そして二本の刀を交差させるように持つと、小さく、言葉を紡ぎ始めたのだ。

「　吹け、対刀・『鳳翼天翔』！」  
ほうよくてんしゅう

瞬間、彼は地面に思いつきり二本の刀を刺した。

困惑するフタバとまどかの前で、刀を包む緑色の光が空へと昇り、煙のように消えていった……。

「ん？」

団長室からの帰り、本部の廊下を暇そうに歩いていた市川がふと立ち止まる。

窓の外で、なにか光ったような気がしたのだ。長い廊下には隙間無く窓が並んでいる。そのひとつに近寄ると、外を白く染める柔らかな朝の光が教団の中庭に注いでいた。薄く積もった雪が幻想的だ。

「なんや〜？」

確かになにか光った気がしたのだが……。

目を凝らしていると、やがて教団の敷地を囲うように広がる森の上に、光の筋が輝いた。

緑色の光の帯が空に瞬くと、一瞬にして消えた。

（あの緑色の光、佐々波はんの“鳳翼天翔”やないか？ あんな所で何してんねんあの人？）

ふと縹の言葉を思い出す。

『佐々波くんは……例の、井上姉弟と買出しだ。』と言っていた。ということは森の中で井上姉弟も一緒のはずだ。

何かおかしいと市川はもともと細い瞳をさらに細めていぶかしんだ。

（森の中で“鳳翼天翔”を抜刀するなんて何かあったんか？）

しばらくその場で考えを巡らす市川だったが、異変を感じてしま

った以上、放っておくわけにもいかない。再び団長室に戻り縹の意  
見を仰ごう、と踵を返したときだった。

「あ、市川さん！」

背後からの声は桜月だった。振り返ると、桜月はどこか急いでい  
る様子で息を切らして走ってきた。いつもは背で綺麗に纏まってい  
る長い黒髪も、今はいささか乱れている。

「あー、桜月はん。どうしたん急いで？」

「佐々波さんの鳳翼天翔の光が森のほうから……。心配になって、  
様子を見に行こうと思っていたところなんです。今朝、フタバくん  
達も一緒に教団を出て行ったので……」

それならちょうど、と市川も自分も行く旨を示した。縹から外出  
の許可は取っていないらしいが、桜月も一緒なので大丈夫だろうと  
自己解決する。

そのまま市川と桜月は連れ立って教団を出て行く。師団長が二人  
して出て行くのを、周りの団員たちは不思議そうに見つめているの  
だった。

<第十四話 「兆」・終>

## 第十五話 神

重体の佐々波が教団の医務室に運ばれたとき、外では吹雪が始まった。

医務室の隣に設けられている談話室に集まった一同の間には重い空気が流れていた。

「……佐々波さんは、私のせいで麻薬を浴びたんです」

そう呟くまどかの様子は、普段の彼女とは遠くかけ離れている。見るも辛いほど心配げだった。深くうつむき、両手を揉み絞っている。

向かい合うように並ぶいくつもの長椅子に、彼らは四人で席を占めていた。

「まどかさんのせいではありませんよ。黒の国の者に襲われたんでしょう?」

桜月が諭すように言った。

「で、でも……私がトロいから……」

「ちっ。こんな時だけ静かになる女だな。てめえがそんなんじや佐々波くんだっていい気分しねえだろーがよ」

縹<sup>はなだ</sup>にはっきりと言われたまどかは途端に眉を吊り上げる。が、何も言うことは無かった。

まどかの隣に座るフタバは、三人の会話に加わることはせず、佐

々波から借りた上着の袖をじつと見ていた。手首の部分に佐々波の返り血が付いている。乾ききっていて黒ずんでいるが、拭いても取れることはなかった。

（“黒の国”ってなんだろう……）

あのリリースという女が黒の国の者だとすれば、あまり良い国ではないのだろうか。フタバは無意識に難しい顔をしていた。

四人に沈黙が訪れたとき、談話室の扉が威勢よく開いた。大きな音にフタバ達が扉のほうを振り向くと、両開きの扉のところに青年が立っていた。

「団長はん、呼んではるで！ 佐々波はんが起きたんや！」

市川は現れるなりそう言くと、椅子に座る縹を無理やり立たせて扉に向かわせる。無言で神妙な表情をした縹が談話室から出て行くそれに桜月も続いた。

まどかとフタバも部屋を出て行こうとしたのだが、扉の前で市川に呼び止められる。

「ちょーっと待った。お二人さん、ずっと話したいと思っとったんや」

「……？」

フタバは背の高い市川を訝しげに見上げた。狐のような顔の若い男だ。佐々波とはまた違う、毒のある軽々しさが見受けられた。

（このお兄さん 森にまで助けに来てくれた人だ……）

戸惑うフタバを見て、市川はニツコリと笑う。

「俺、市川っていうねん。市川 椿<sup>つばな</sup>。第四師団長や。二十五歳。あんたらは井上フタバと井上まどかやろ？」

<第十五話：神>

一瞬、沈黙が続いた。まどかが沈黙を破った。

「どうやって私達を助けに森まで来てくれたんです？ 何も連絡してなかったのに……」

「ん？ ああ、佐々波はんの刀や。“鳳翼天翔”<sup>ほうよくてんしょう</sup>が光ったのが見えたらなあ」

市川は言いながら長椅子に座った。白い団服が椅子に広がる。外見によらず団服をきちんと着ている男だ、とフタバ達は思っていた。外ではゴウゴウと吹雪が轟音を鳴らし、雪が窓に叩きつけられている。そのせいか、室内は異様に静かだった。

「あのお、師団長の人たちって、それぞれ不思議な刀を持ってるんですか？」

まどかが低い声で言う。未だ彼女の気は晴れていない。

「なんで？ 気になるん？」

意地悪そうに市川が口角を上げる。今度はフタバが答えた。

「……桜月さんも、桃色に光る不思議な刀を持っていたから…」

「ああ、はなよいまち“花宵待”やな。うーん、“神”に関わることやから、俺の口から言っ*て*いいいかなあ…」

「“神”？」

ハツと市川の息を飲む音が聞こえた。明らかに失言をしてしまった様子だった。

すかさずフタバが言う。

「市川さん、神って何？ 桜月さんも言っていたんだ 千年王国は、神の支配する大陸だって。でもそれ以上は教えてくれなくって教えてくれよ市川さん」

市川は難しい顔を作り口元に手をやって思考を巡らせている。しきりに指先が動いていた。この狡猾そうな男でも、困った顔をするのか。じっくり考えたあと、市川は言った。

「千年王国には六つの国があるのは聞いたやろ？」

姉弟は頷いた。

「それぞれの国には各国王がいる。この白の国にも髭のオッサンがいるやろ？ 同じようなオッサンが千年王国には六人いるつちゅーわけや。で、六人の国王達よりさらに上の存在がたった一人いる。それが“神”や。千年王国の支配者であり、千年王国のすべて」

フタバは言い知れぬ畏怖の念を抱いて、ささやいた。

「……その神っていう人が、一番偉い人なの？」

「そういう事。国王と違って神は政治をするわけでも無いし、民衆の前に姿を現すこともない。千年王国の“象徴”ってわけ。その神の地位を巡って戦争があちこちで起きてんのや」

一度ニヤリと笑って市川は続ける。

「さっ、ここで問題や！ 神になれるのはたった一人。さあ、誰になる？」

人を喰ったような笑みに、フタバとまどかは確実に嫌悪感を抱いてきていた。こんな風に笑う男は始めてだ。二人が答えないでいると、市川は長椅子から立ち上がった。

「誰が神聖なる神になるか”。重大な問題やね。じゃあ答えを言うで！ たった一人の神は、神権戦争で勝った国から選抜されるってわけや」

まどかが聞きなれない単語を復唱する。

「神権戦争？」  
しんけんせんそう

「神権ってのは神を選抜する権利を与えられるつちゅー意味。物騒な話やけど、神権をどの国が持つかは戦争で決めるんや。戦争で勝った国の国民から神が選ばれるつちゅーわけ。大陸の象徴である神を君臨させることが出来た国は大陸のトップになれるから、どの国も神権を得るために戦争するわけなんや」

市川は一度区切ると、フタバとまどかの顔をゆっくり見回して間を置いた。

「質問は？」



フタバが重い口を開いた。

「いま神は、どの国にいるの？」

「ん？　ここやで？　白の国。本部のすぐ裏にある国王のオッサンがいる城は行ったことがあるやろ？　その最上階に神がいる。俺は見たことないんやけど。ちゅーか国王以外の国民は神の姿を見たことないやろなあ。正直言うと王室と神を守ってる俺ら護衛団くらいには顔を見せてもいいと思うんやけど」

今度はフタバに代わりまどかが口を開いた。

「ということは白の国が神権戦争に勝ったっていう事です？」

勿体ぶるように、市川はまた少し間を置いて言う。

「神権戦争って言っても、それに終戦はないねん。神が存在する限り戦争が終わることはない。毎日どこかしらの国からは攻撃を受けとる。ま、この国は軍事国やから戦争には強いんやで。ここ数年は他国からの攻撃にも負けなしで、ずっと神権を保つとるんや。俺たち王室護衛団『白の教団』が組織されてるのもそのため。王室を護るために戦争に出る。神権を奪われないように組織された軍隊なんや」

市川は一度目を閉じて、爬虫類のような奇妙な笑みを浮かべる。

「俺らは『王室護衛団』なんて大層な名前ついとるけどな。護衛しとるのは王室ちゅーより“神”やな。国民を護るわけでも、王室を護るためでもない。たった一人の神を護るためだけに何百人の兵士で組織されとる護衛団や」

「そ、そうだったのね。桜月さんは“神”って人の事を決して教えてくれないから何かと思ってたけど……。たった一つの地位を奪い合って大陸全体で戦争をし続けていたなんて」

「桜月は正しいで。本来、神は下民がその名を口にするのも汚らしいとまで言われとる神聖な存在らしいからな。無闇に神のことを口にしたらあかんのや。ま、俺はそんな暗黙の了解なんてどーでもええからこうしてアンタらに喋ってるわけやけど。他の奴らの前で神のことは口にしない方が身のためやで」

得意げにそう言う市川に、フタバは言った。

「その神っていうすごい人が、市川さん達に特別な刀をくれたの？」

パチン、と静寂を突き抜けるような音がした。市川が指を鳴らしたのだった。

「正解や弟クン！ チビのくせに勘はええんやな！ 俺たち『白の教団』は神が白の国に君臨してからずっと守り続けて、戦争にも勝ち続けてるからな。神から“ご褒美”を貰えたんや」

先ほどから室内を当てもなく歩き回っていた市川がふと立ち止まった。椅子に座るまどかとフタバは彼に視線を移す。二人に背を向けたいる状態の市川は、腰に差している二本の刀に手を掛けた。そのまま一本を鞘から抜く。

漆黒の刀身が光を反射し、姿を現した。

（真っ黒な刀？）

フタバの疑問を感じ取ったように、市川はニヤリと二人の方を振り向いた。

「白の教団の幹部、つまり団長と師団長にだけ与えられた特別な刀や。神の力を分け与えられた武器――神器しんぎって言うねん。師団長に昇格すると自分だけの神器を貰えるんやで。桜月さんの『長刀・花宵待』も　佐々波はんの『対刀・鳳翼天翔』もそれや。」

そこで彼は身体をくるりとフタバ達のほうへ向けて、手にした黒い刀を掲げた。

「これは俺の神器、『妖刀・黒姫』。この濡羽色の刀身が美人やろ？　自慢の姫さんやねん」

「ようとう……くろひめ……」

光という存在すら忘れてしまうほど、漆黒の刃。市川は“美人”だと言っていたが、フタバはその刀に禍々しさすら感じた。

「特別な刀って事は魔法とか使えるの？」

特に何の意図もなくフタバが聞くと市川は盛大に噴き出した。

「んな最強武器あるかいっ！　残念やけどただの刀や。白の国で魔術は基本的に禁止やからな。普通の刀に、“ちょーっと”属性が付くだけや」

「属性？」

フタバが身体を乗り出したとき、市川は妖刀・黒姫を鞘に収めていた。ふ、と笑うと彼は吹雪が轟く窓の外に視線をやった。

「戦争が始まるで。でっかい戦争が」

市川はそれだけ言うと、無言で扉のほうへ向かって歩いていく。足音はしなかった。彼の言い方がいかにも意味ありげな口調だったので、フタバは彼の後ろ姿を凝視する。市川が退室する瞬間、彼が口元だけで怪しく笑うのをフタバは垣間見た……。

市川 椿。あの男は一体……。

< 2 >

同じ頃、隣の医務室では一つのベッドに三人の人物が集まっていた。医務室には数十のベッドがあり、それぞれカーテンで仕切られている。医務室にいるのは彼ら三人だけだった。

縹は煙管を片手で弄くりながら言った。

「君がこんな失態を晒すなんて珍しいな佐々波くん」

縹の視線の下では、ベッドから上半身を起こした佐々波が青い顔をしてうつむいていた。

「すみません団長……井上姉弟は守れましたけど、俺がやられてちやあ話にならないっすよね……」

佐々波の右側にいた桜月が言う。

「佐々波さんらしくありませんよ。無事なだけで良かったじゃないですか」

「そーだけどよ……まさか黒の国の奴にやられるなんて」

一同に沈黙が訪れた。重い沈黙だった。最初に言葉を発したのは縹だった。

「襲ったのは女だったと言ったな。“サタン様”と口にしただど？」

「あ、はい」

「ちつ。幹部か」

縹はすばやく煙管の灰を落とす。いつもより深く刻まれた眉間の皺が、彼が苛立っていることを物語っていた。自分を見つめてくる佐々波と桜月の視線に気付いたが、二人からの視線から逃れるようにして縹は足元に目線を落とす。眉間に皺を刻んだまま考えを巡らせる。

（黒の国が動き始めたか……。情報があるな。魔術を使う早乙女なら黒の国の情勢を知っているか？ いや、あいつに借りは作れねえ）

癖のようにしつこく煙管を落とす縹に、心情を悟ったかのような口調で桜月が言った。

「とにかく情報がいきます。黒の国へ偵察に行きましょう。私に行かせて下さい」

真っ直ぐな瞳を縹に向ける桜月。強い意志を感じる視線だったが、どこかに焦っているかのような危うさが浮かんでいる。

もう一度、桜月は言った。

「私が行きます」

するとようやく縹が答えた。感情のない声だった。

「偵察はすぐに決行する。だが桜月、お前には行かせねえ。分かっているだろ」

桜月はハツと顔を赤くさせた。明らかに憤りの感情を含んでいる顔だった。何か言いたげにしていたが、数秒おいて諦めたように動いた。何も言わないまま桜月は医務室を辞していく。佐々波のため息が残る。

「団長ー。いい加減かわいそうっすよ。桜月だって第二師団長なんだから」

縹の返事は無かった。やや静かになった吹雪の音が聞こえるだけで、室内はひっそりとしていた。ベッドの背もたれには血で汚れた佐々波の団服が掛かり、じっとしている。縹と佐々波はそれ以上話題も弾まず、二人して沈黙という衣装を全身に着込んだかのようになっていた。

室内を無言のままに辞した桜月も、廊下を早足で歩みながらきつく口元を結んでいたのだった。

<第十五話 「神」・終>

## 第十五話 神（後書き）

こちら辺で今後の参考程度に登場人物の年齢整理でも載せておきます。

以下年齢が低い順で。

11歳・井上フタバ（小6）

22歳・井上まどか（OL）

24歳・九十九 桜月（第二師団長）

25歳・陽炎（第三師団長）

市川 椿（第四師団長）

26歳・佐々波 乱歩（団長補佐、第一師団長）

早乙女 炎（受験者）

31歳・縹 卓之介（団長）

## 第十六話 陰

中庭に寒椿が咲いていた。この白の国は寒気しか訪れないので、鮮やかな紅色の花を眺める機会など滅多にない。城の庭師が、教団の中庭にも植えつけてくれたものだ。

「……………」

一枚、真つ赤な花びらを摘み取って、陽炎はきつく眉を寄せた。赤色は嫌いだ。燃えるような色になぜか自分を見ているようで、目を逸らしたくなる。赤色は嫌いなのに、己の唇は滴るほどの赤色を浮かばせ、心の中もいつだって燃えているのだ。

（卓之介さま……今日もわたしに会っては下さらぬのか……）

中庭から団長室が見える。窓のカーテンは隙間なく閉められてた。吹雪はやんでいる。団長室の方角から目を離すと、寒椿に積もった雪を無意識に落としていた。

「あれ、陽炎はん？」

ハッと背後を振り向くと、市川椿が微笑みながら噴水のところに立っていた。本部の入り口とは反対側なので、寄宿舍のほうからやって来たのだろう。

「い、市川殿……っ」



動揺を隠せず、上ずった声になってしまったのが陽炎自身にも分かった。それに構わず、市川は雪を踏みしめて陽炎の前にまで近寄る。

「昨日すごい吹雪やったからなー。よう積もつとるわ。でも佐々波はんが仕事出来へんから雪かき、どないするんやろ？」

「佐々波殿が、どうかしたのですか？」

少し間を置いて市川が変わらぬ口調で答えた。

「昨日、井上姉弟と街まで買出しに行ったときに襲われたらしいで黒の国の奴に」

「黒の国……っ!？」

市川は肯定を口にする代わりにニヤリと笑った。陽炎の手のなかで寒椿の花びらが握り潰される。それを横目で目にした市川も、寒椿の花に指先で触れた。

「この国に唯一咲く花がこれだっけっちゅーのも嫌やな。俺と同じ名前の花なんて恥ずかしいやん？」

陽炎は答えないでいた。が、うつむいている顔はそのまま、チラチラと瞳だけを動かして市川のほうを見上げて伺っている。その瞳の奥には、隠し切れない感情が燃えているようだった。

「じゃあ俺はこれで。団長はんなら部屋にいます」  
「……はい。」

彼は中庭を横切ると、そのまま門から出て行ってしまった。  
市川の消える背を見つめながら、陽炎はグツと息を飲み込んだ。

自分の中に芽生えている不思議な感情の炎を消すことが出来ないでいた。

駄目だ わたしが愛し、愛されるべき人は卓之介さまなのだから  
婚約者である、あの人にしか愛されることしか出来ないのだから。

きつく瞼を合わせると、手のひらで潰れる椿の花びらを地面に落とした。

(……市川殿……)

<第十六話：陰かげ>

リリスは甲高い声で荒々しく叫んだ。

「もおおーっ！ もうちょっとで井上姉弟を殺せたのに！ せつかくサタン様に褒めてもらえと思ったのにー！」

荒い呼吸を繰り返し、歯をギリリと鳴らす。ツインテールに結んだ細かいウェーブの黒髪を掻き毟った。自室に入った途端、リリスはゴシック調のベッドに勢いよく飛び込んだ。

「あゝあ……ツンツン金髪の師団長に邪魔されちゃった……」

真っ暗な部屋だ。一人で生活するにはあまりにも広い部屋。それがリリスに与えられた部屋だった。黒で統一されている家具は、今は静かな暗闇に溶け込んでいる。ベッドサイドのランプに火を灯す。

泣き出しそうなリリスのまだ幼い表情が暗闇に浮かび上がった。

（サタン様のところに報告しに行かなくちゃ……やだなー……）

そう憂んでいると、扉の向こうから陰湿な空間を裂くように明るい少女の声が飛んできたのだった。

「リリス？ いるのお？ サタン様と呼んでるよお？」

その声が聞こえた途端、リリスは思いっきり表情を歪める。“サタン様と呼んでいる”という内容ではない。部屋に訪れた少女に嫌悪を示したのだ。

（ 何よ！ 何でこんな時に“アイツ”が来んのよ！ ）

リリスは乱れる髪を直すこともせず、ベッドから離れるとすぐに扉を開け放った。

「ローズ！ アタシの部屋に来るなって言ったでしょ！」

「え……そうだったっけ……？」

怒りに震えるリリスを見上げているのは一人の少女だった。

歳はリリスとさして変わらないだろうが、かなり小柄である。

肌の露出の高い、くすんだ白色の衣装を纏っている。少女のセミロングの銀髪の間から二つの獣耳が控えめに動いて、白いショートパンツの臀部からは長い尾が伸びていた。首元や手首、尻尾には鈴がリボンで結ばれている。動かたびに鳴るその鈴の音が、リリスを余計に不快にさせるのだ。

「もうっ。猫のくせに媚の売り方も知らないの!？」

「ローズは猫じゃないもん！ 幻獣だもん！」  
げんじゅう

幼さを残した声でローズは言った。

負けじとリリスも苛立ちを隠せずに叫ぶ。

「うつさい！ サタン様の命令は分かったから！ 早くどこか行きなさいよ！」

ローズを無理やりに押し出して扉を閉める。扉の向こうでローズが何か言っているが聞こえない。リリスは小さくため息を吐いた。これだからローズのような猫と人間の混合幻獣は嫌いなのだ。猫の自分勝手さを残しながらも、人間と同じ振る舞いをする。

（むかつく……むかつく、ローズのやつ！ 当たり前のようにサタン様の側にべったりくっついて……！ サタン様の側近はアタシなのに！）

だから嫌なのだ。自分より近く、“あの人”の側にいるものだから。

< 2 >

フタバが目を覚ましたとき、隣ではまどかが謎の寝言を呟きながら眠りこけていた。毛布もまどかに奪われている。どつりで睡眠中、寒かったわけだ。

（姉ちゃん……昨日“あんな事”があつたのにめっちゃ爆睡してる……）

苦笑を溢しながらベッドから這い出る。今日の服は初日のまま、半袖と半ズボンだ。教団から支給された着物と交互で着回している。

閉め切ったカーテンを開くと、寝ぼけた体を射抜く、輝く金色の矢のような朝の光が飛び込んできた。

（佐々波さん大丈夫かなあ）

昨日、リリスの襲撃で重体となった佐々波はしばらく医務室での生活を強いられることになったらしい。リリスは自分と姉を狙っているようだった。理由は分からないが、それを庇ったせいで佐々波は。

（うつ……もう帰りたいよ……）

自分達のせいで人が傷付くなんて。こんなのもう嫌だ。

フタバは疲れを残したままの表情で真紅色のソファに崩れるように倒れこむ。

その時だった。フタバの座るソファの背後から硬い音がしたのだ。何者かが窓のガラスを叩いているとすぐに気付いた。

「だ、誰？」

フタバとまどかの部屋は寄宿舎の一階の端部屋であるので、他人が窓を叩くのは容易なのである。

振り向いたフタバの視線の先には、雪が舞い散る中庭が見える窓。そこに移る人影があった。曇りがかった窓のせいで、人物の特定は出来ない。

人影が言った。

「君が井上フタバ君か。この窓を開けたまえ」

低く、地を這うような声。それでいて粘ついた独特の声色。この声を一度だけ聞いたことがある気がする。

「早くしたまえ。姉上が起きるぞ」

「はっ、はいい！」

慌てて立ち上がると窓辺に近寄る。すると、くすんだ窓の向こうに浮かび上がった人物は …。

「あ、あんたは……！」

驚いた顔を隠さずにはいられなかった。窓を隔てた向こうに立っているのは、数日前、まどかと覗き見た入団試験に参加していた受験者だったのである。

あの特徴的な男を忘れるはずもない。ぞんざいに肩まで伸ばした黒髪 病的にこけた頬 浮かび上がる目元の隈<sup>くま</sup>。幽霊のような不気味な男。陽炎を謎の術で瀕死の状態にした、あの男だったのだ。

（名前なんて言ってたっけ……）

言われるがまま窓を開けると、不気味な男の風貌がはつきりと現れた。その異様さに思わず身体を凍らせる。俗世離れしている男だ。近くで見るとよく分かる。

間近に対面し、男が紫色の唇を薄く開いた。

「久しいな、フタバ君。私は早乙女 炎<sup>えん</sup>だ。」

「ひ、久しぶりって……。オレ、あんたと喋った事なんか……」  
「私は知っているぞ。君は入団試験の様子を、姉上と共に覗いていただろう?」

ぐ、とフタバが息を飲む。気付かれていたのか。

「君に“いい情報”を教えてやろう。中庭へ来たまえ」

若いのに妙に悟った喋り方をする男だと思った。そんな口調で言われれば、フタバに逆らう事など出来ないのだ。早乙女に言われるがままに、眠るまどかを残したまま自室を去るフタバだった。

< 3 >

「いい情報って?」

雪が積もる中庭に来るなりフタバが言った。

早乙女は紺色の着物のうえに厚手の絹の上着を纏っていた。団服は着ていない。

中庭は見慣れた銀世界だった。佐々波が動けないため、誰も雪かきをしていないのだろうか。歩くたびにフタバの背だと脛まで埋まってしまう。

「第一師団長殿が、他国の襲撃で痛手を負ったらしいな」

早乙女の言葉にフタバは頷いた。

「私は知っているぞ。黒の国……だろう? あの国が動き出した。」

団長殿はそのことで早速、次にすべきことを考えているらしい」

「……次にすべきこと……？」

訝しげに自分を見上げる幼い瞳に、早乙女は加虐的な薄ら笑いを浮かべた。

「どうやら団長殿は、数人の師団長に黒の国を偵察させることにしたようだ。どうだね？ 興味が沸かないかね？」

フタバは首を振った。早乙女は笑う。

「姉上と違い、慎重なのだな君は。よろしい “父上” にそっくりだな」

「……へっ？」

「共に師団長殿たちの偵察に参加させてもらおうと思っていたのだから。興味がなければ結構。また次の機会にしましょう」

言葉が見つからず啞然とするフタバを中庭に残したまま、早乙女は足音も立てずに本部の中へと消えていってしまう。

フタバは地面を見つめながら呼吸すら忘れていた。

（あの人……オレのこと、父さんと似てるって言ってた……）

両親はフタバが幼い頃に事故死したと聞かされている。それゆえ、フタバは両親の顔を写真でしか知らない。

「なんである人、オレの父さんを知って……？」

雪が舞う。明日にはさらに積もるだろう。

小さな噴水の横に咲き乱れている寒椿の花が、じっとフタバを見



ているようだった。白い雪のうえに散っている数枚の真つ赤な寒椿の花びらを見ながら　フタバはその場から動くことが出来なかった。

<第十六話「<sup>かげり</sup>陰」・終>

## 第十七話 糸

フタバが中庭にて早乙女と接触した後 まどかが起き出してくるのに合わせて、フタバは寄宿舎の自室へと戻った。それは朝の八時を回ったところだった。

### <第十七話：糸>

「……フタバくん、今朝どこに行ってたの？ お姉ちゃん知ってるんだからね。私が寝てる間、どこか行っていたんでしょ？」

ベーコンにフォークを突き刺し、まどかが呟いた。

フタバとまどかは本部の食堂に来ていた。団員達が利用する共同食堂である。フタバとまどかも利用させて貰っているのだ。広大な食堂に人影は少ない。団員達の始業時間は既に過ぎているのだろう。

「まどかお姉ちゃんに隠し事なんて無駄よ」

ベーコンが刺さったままのフォークを空中で遊ばせながら、まどかが鋭い声を出す が、もともとゆっくりで呑気な口調のため、迫力は無い。

「別に隠し事なんて……人に呼ばれて、中庭にいたんだよ」

「人に呼ばれてえ！？ 誰によ？」

「さ、早乙女 炎ってひと。ホラ、入団試験にいたお化けみたいな

人」

「なんですって!？」

がたん、と音を立ててまどかが椅子から立ち上がる。

「あの人と一緒にいたの!? あんな怪しい人と!？」

「だ、だって呼ばれたんだもん」

信じられない、とまどかが口をあぐりと開いた。

何を話してたの? 何もされなかったの? と、まどか。フタバが困惑しながらも答える。

「ええつと……なんか、師団長の人が黒の国つてところに偵察しに行くんだつて。その情報を教えてくれたんだ」

「それだけえ〜?」

まどかがいぶかしげな視線を向ける。

「え、え〜と……」

フタバは言葉をのどに詰めた。もうひとつ、早乙女は意味深なことを言っていた。その事を言うべきなのか。

しばらく黙って考えを巡らせた結果、フタバは重い口を開くことにした。

「早乙女さん、オレのことを“父上と似てる”って言ったんだ。あの人、父さんのこと知ってんのかな？」

思い切ってはつきりと言うと、予想に反しまどかの表情に変化は見られなかった。きょんとした顔を崩さないでいる。逆にフタバ

のほうで面食らってしまった。

じっくり間を置いて、まどかがようやく言った。

「あの人が私達のお父さんを知ってる？ そんな馬鹿な話あるんですか。ここは異世界よ？ お父さんがこの世界にいるわけないじゃない。それにお父さんは何年も前に死んだわ。フタバくんからかわれてるのよ。それが早乙女さんの勘違いだわ。気にしちゃ駄目よ！」

言いながらまどかがベーコンを口に放り込む。

姉があまりに淡々と言うので、これ以上この話を続ける気にもなれず、フタバも閉口して食事を再開する。すこし気まずい雰囲気だった。

「……フタバくん」

まどかがもう一度フタバを見た。

「これからはどこに行く時は私に言うのよ。こんな異世界でフタバくんを一人にするの心配なのよ。フタバくんを守るのは私しかないんだから」

「姉ちゃん」

思わずフタバの食事の手が止まる。お気楽天然楽天家の姉からこんな言葉が出るなど夢にも思わなかったからである。なんだか複雑な気持ちにさせられた。

「ありがとう、姉ちゃん」

呟くようにそう言うと、まどかはニツコリと笑みを咲かせた。姉

がいつもの様子を取り戻して、フタバも嬉しかった。そして二人はまたフォークを動かす。

過ぎ去った吹雪によって洗い尽くされた美しい青空が、窓の向こうに広がっていた。今日も誰の役にも立たず、この世界にいる理由も知らず 時間の経過を見守るだけの一日が始まる。そう考えると元の世界に戻るまでの日々が、途方もなく長く感じるフタバだった。

< 2 >

「佐々波さん」

佐々波はあわてて上半身を起こした。彼は医務室のベッドで暇を持て余しているところだったのである。雪に覆われている中庭を窓から眺めながら雪かきの心配をしていたので、自分の名前を呼ばれてはっと我に返ったのだった。

佐々波を呼んだ声は、上品で、静かで、それでいて芯の通った心地の良いアルトだった。振り向いたとき、佐々波は桜月さつきの深刻そうな瞳にぶつかった。

「な、なんだ桜月か……びっくりしたー……」

「具合はどうですか？ 良くなりました？」

「え？ あ、ああ。大丈夫だけど……」

思わず佐々波は顔を逸らしてしまう。 というのも、桜月の深い琥珀色の瞳がひどく不安げに揺れているからだ。

（俺なんかしたっけ……？）

そんな佐々波の様子を知ってか知らずか、桜月はベッドの隣の椅子に腰を下ろした。ふわりと彼の髪が揺れる。桜月はしばらく黙り込んでいて、話そうとする気配すら無かった。口元を結び、うつむいているだけなのだ。

さすがに困り顔を露にした佐々波の隣で、ようやく桜月が口を開いた。

「フタバくんと、まどかさんの事なんです」

漠然とそう言われ、佐々波は一瞬どういう意味が分からなかった。答えずにいると桜月が続ける。視線は真っ直ぐ、佐々波を捉えていた。

「まだ国王様は、フタバくん達を千年王国に呼んだ理由を教えてくださいません。でも私 引かかる事があるんです。……“これ”なんですけど」

これ、と言って桜月が団服の懷から取り出したのは、折りたたまれた一枚の紙だった。少し使い古してあるようだ。それを桜月の白い手が開く。文字の羅列が現れた。

「なんだこれ？ あ、名簿か？」

「ええ。数年前の『白の教団』幹部の名簿です。団長室から盗んできました」

「お前、あの団長室から盗むなんて凄いな……」

その紙には団長の名を筆頭に、第十師団長までの十一人の名前が並んでいた。佐々波と桜月の名もある。桜月が指したのは“第九師団長”と記された項目だった。

「このときの第九師団長は『東條 喜一』さんです。覚えていますか？」

佐々波が緩慢な動きで頷く。

桜月は東條喜一の名をなぞりながら続ける。

「彼、時を操る神器じんぎを与えられていましたよね。確か……『時鉾・邂逅』……。それであの人、亡くなる前にも」

そこで言葉は途切れた。

医務室の扉が荒々しく開かれたのである。遠慮なしに室内に足を踏み入れた人物は団長の縹はなだそのひとであった。一直線に佐々波のベツドに向かつて来る、険しい顔の縹。

桜月がとつさに名簿の紙を隠し、あわてて言った。

「どうしたんです、縹さん？ 珍しく怪我人を気遣って見舞いですか？」

じろりと縹の蛇のような眼が桜月を見下ろす。が、特に毒づいたことは言わず 言うべきことだけをはっきりと口にした。

「今夜、陽炎かげろうと市川を黒の国へ偵察に行かせる。」

「はい。」

「……その際に、井上フタバも連れていかせることにした」

佐々波と桜月は同時に驚愕の声をあげた。しかし縹は心の動きを少しも見せず、じっと二人を見下ろすだけだった。

<第十七話「糸」・終>



## 第十八話 弟

「フタバくんが“黒の国”に行くですって！？ どういう事なのっ！？」

まどかの第一声がそれだった。『白の教団』本部の玄関ホール。団員達が仕事に駆け回るなか、まどかとフタバはこの場に呼ばれたのである。呼んだのは桜月<sup>さつき</sup>だ。それは、吹雪が去った昼下がりのことだった。

「理由なら縹<sup>はなだ</sup>さんに聞いたほうがいいと思います。……その、縹さんの独断でして。フタバくんを偵察に連れて行く、と。」

困り顔で説明する桜月に、まどかは声を荒げて言う。

「なんですかそれー！ なんでフタバくんが！？」

「ええ、なぜでしょう……。私にも分からないんです。なにせあの縹さんの考えですから」

桜月とまどかは同時に押し黙った。まどかはまだ何か言いたそうに口を魚のように開閉していたが、言いたいことが言葉に出ないらしく 沈黙を守っている。

そんな二人の隣で、話題の当事者であるフタバがようやく口を開く。

「あの一……」

まどかと桜月が同時にフタバを見下ろした。

「団長さんの命令ならオレ、行くけど……」

「なんですってえ！ フタバくん、正気なの！」

「う、うん。だって命令だし。」

姉は冗談じゃない！ と声を荒げるばかりだった。そうになると手に負えないまどかだ。その性格を理解しているのだろうか 桜月が穏やかな口調で姉弟の間に割って入る。

「フタバ君、嫌なら断っていいんですよ。縹さんには私から行っておきますから」

しかしフタバは首を振った。その瞳は幼いながらも真っ直ぐな意思を秘めている。フタバは考えていた。脳裏から離れないのは、今朝の早乙女の言葉。“君は父上と似ている”というあの言葉だった。

（もっとこの教団に関われば、父さんの事が分かるかもしれない……）

フタバも幼いなりに考えたのだった。死んだと聞かされた父もし生きているのなら……。

「ごめん姉ちゃん。危ない事しないから、オレ行くよ。」

自分を守ってくれと言った姉には申し訳ないが、早乙女が示唆した父の謎。それを少しでも知りたいのだ。チラリとまどかの方を見上げると、案の定、まどかの顔は憤りと沈痛の混ざった表情になっている。黙ってフタバを見下ろすまどかは、珍しい事にそれ以上何も言わなかった。

<第十八話：弟>

「良かったですか？ フタバ君を行かせてしまつて」

控えめに桜月が聞いた。

玄関ホールに残ったのはまどかと桜月だけになった。二人は最初の位置のまま少しも動かず、フタバが去つた後もその場に立っていた。フタバは団服に着替えるため別室に移動しているのである。

吹き抜けになっている高い天井から、吹雪の後の晴天の光が神秘的に注いでいる。“フタバの任務への連行”という思いがけない決定にも予想外に静かなまどかを、桜月はいぶかしんでいるようだった。

「……私、思つたんです。」

真つ直ぐ前を見て佇むまどかがふと言つた。どこか夢見るような、漠然とした声色だった。

「フタバくんももう十一歳なんだから、自分の意思で行動させた方がいいですよえ。分かつてるつもりなんですけど……」

桜月は黙つて耳を傾けている。

「でも、フタバくんが小さな時に両親が死んじゃつたから、ずっと私が親代わりだつたんです。だから……今でもなんか、常にフタバくんには目の届くところにいて欲しいって思つちゃつて。……もうフタバくんもそんな歳でもないのに。」

そう言うまどかの顔は穏やかだったが、どこか遠くを見ているようだった。桜月はじっくり間を置き、言葉を選んで答えた。

「でも フタバ君は、とても恵まれていると思います」

まどかは視線だけを桜月に移した。桜月が続ける。

「両親がいなくなってもそんなに心配してくれる肉親がいるなんて、フタバくんが羨ましいです。それってとても幸せな事ですょ」

「そうですかあ〜？ お父さんとお母さんがいるのが普通ですもん。」

そこでふと桜月が口を閉ざした。訝しんだまどかが先を促すと、重そうな口を開く桜月。

「団員は肉親がない方が多いんです。特に師団長なんかは。」

「え、なんでですかあ？」

まどかの質問にはすぐに答えず、桜月はたつぷりと時間を置いた。二、三分後経ったあと、まどかの顔を真っ直ぐ見据えた桜月の顔は、いつもの優しいな柔らかない表情とは打って変わって真剣なものになっていた。真剣さのなかにも厳しさが潜んでいる。そんな面持ちだった。

桜月は低めのアルトで言った。

「 “こんなところ” に入団した人達が、普通の生活を送ってきて、と思いますか？」

団服の袖に腕を通しながらフタバが思ったのは、まどかの事だった。玄関ホールにてまどかと別れるとき、怒っているような、悲しんでいるような表情。あんなまどかの顔を見るのは初めてだった。

（姉ちゃん、怒ってんのかな……）

それでも、縹の命令に言われるがまま従い、どうにかして父の事が聞ければ。いつまでも姉にばかり頼ってはられないのだ。

フタバは自室にて団服に着替え終わったところだった。桜月に渡された団服は一番小さいサイズらしいが、それでも小学生のフタバにしてみればぶかぶかである。

ロングコート状の団服は腰周りをベルトで締めるようになっていた。ベルトを締めてもかなり余裕がある。肌の露出がゼロに近い団服は室内では暑い気もしたが、一年中冬の白の国ではこれくらいの防寒がちょうどいいのだろうか。

着替え終わって数分後にフタバとまどかの自室に現れたのは市川椿だった。フタバを呼びに来たらしかった。そのままフタバは市川、陽炎と共に本部を経つことになった。まどかの事が未だに気がかりなフタバの表情は暗い。

「団長はんも何考えてるんやろな？　なあ弟クン。ただでさえコッソリ行わないとあかん偵察の任務に居候を連れて行け、なんてなあ？」

「……うん」

フタバの返事は至極曖昧なものだった。

市川とフタバ、そして陽炎かげろうの三人は黒の国への偵察のため、本部を出発したところだった。まだ昼下がりであったが、黒の国に着く頃には夜らしい。三人は徒歩で街へと向かっている。白の国で一番大きな街からは馬車で黒の国へ向かうのだと市川は説明した。

「市川殿、黒の国へ着いた際にも、井上殿はわたし達の側に？」

フタバと市川の後ろを歩く陽炎が言った。彼女は相変わらず団服ではなく白い牡丹柄の着物を纏っている。

市川は振り向かずに答えた。

「んー、そうやるなあ。黒の国の様子を弟クンに見せるのが団長はんの目的なんやと思うで」

「……心得こころえました。」

三人はそのまま、教団と城の敷地を囲む森に歩みを進める。フタバはこの森に知らず嫌悪感を抱いていた。桜月と一緒にいたとき、他国の兵から襲われた場所でもあるし、リリスに傷を負われた佐々波を抱えて立ち往生してしまった場所でもある。鬱蒼と茂る木々に覆われた薄暗い森中は昼間でも気味が悪い。

無言で歩いていると、フタバはふと陽炎が手に持つ長い棒に視線をとまらせた。陽炎が大事そうに持っているその棒は、先端の部分が布で隠されている不思議なものだった。彼女の背丈の同じほどの長い棒だ。

「陽炎さん、それ、なに？」

陽炎は変わらずの無表情でフタバのほうを見ると、言葉を迷いながら紡いだ。

「これは……その」

その迷う様子に気付いた市川が出し抜けに言った。

「陽炎はん、“神器”<sup>じんぎ</sup>のことなら弟クンも知ってるで。俺が教えてあげたんや。“神”のことも一緒にな。」

陽炎は明らかに戸惑っているようだった。

「市川殿……“神”のことも話してしまわれたのですか？」  
「ええやーん。どうせいつか知るんやろうし」

なっ、と市川に奇妙な微笑みを向けられるフタバだったが何も答えなかった。そうしていると陽炎がゆっくりと話し始める。同時に棒の先端に宛がわれた布を取り払った。豪華に装飾された槍<sup>やり</sup>が現れた。

「これはわたしが“神”により与えられた神器でございます。」

赤を基調とされたその槍の先端部分は烈しい絢爛さを持っていた。一見美しい見た目だが、どこか深い慟哭が垣間見えるようなそんな絢爛さだった。どこか陽炎と似ている。

「この槍は、『朱槍・紅俵<sup>つやべ</sup>び』と申します」  
「紅俵<sup>べ</sup>び？」

「はい。普段は別の槍を使うのですが……。今日は神器のこれを持ってきたのです」

そう言つと陽炎は再び刃の部分に布を戻した。神器だから隠しているのか、とフタバは納得する。三人は再び歩き始めた。森を進むにつれ暗さは増していった。時々さざめく木々の葉の音が薄暗い空間に妙に響く。寒さも増してきて、フタバは身震いをした。

そんなフタバとは対照的に、相変わらず涼しい顔をしている市川が口を開く。

「陽炎はんは教団一の太刀の速さを誇るんやでー。陽炎はんの朱槍相手じゃあ、俺の『妖刀・黒姫』も太刀打ちでけへんのや。なあ、陽炎はん？」

市川に顔を向けられた陽炎は驚いたように肩を震わせた。陽炎はなぜか途端にしどろもどろになり、言葉を必死で選んでいるようだった。それはフタバの目にも明らかだった。

「え　その　そのような　……。い、市川殿には敵いませぬ」  
「何言うてんねん。陽炎はんは第三師団長やん。俺は第四師団長やもん。階級的にも陽炎はんの方が上やわ」

なっ、と市川に笑顔を向けられたフタバは機械的に頷く。

陽炎が少し後ろを歩きながら恥ずかしそうに顔を伏せていた。それがフタバの瞳には不思議に映る。陽炎という女性は厭世的な雰囲気はなだの女性だ。感情を露にしない、妖艶な美女。縹はなだの前くらいでしか感情を露にしないと思っていたのだが、市川の前でも“なにか”に戸惑っているようだ。

「お、街が見えてきたで。あそこからは馬車や」

声を高くして市川が言った。前を見据えると木々の隙間から街が



見えた。この景色を見たのは二度目だ。佐々波とまどかと共に買出しに来たときと同じ街である。街道も見えるが、夕方に差しかかるうとしている時刻のため人はいないようだ。一度目に来たときの市場の活気はない。

三人はそのまま街を目指し歩みを進めていった。

< 3 >

馬車から見る風景というのは、フタバにとって初めてのものだった。車や電車と違い、ガタガタと揺れる馬車は居心地が良いと言えない。

三人は街で馬車と従者を借りた。これで三つ国を越えた先の黒の国に向かうのだという。市川とフタバは教団の団服を着ているので今回は歩いて他国に行くのは避けるらしい。偵察が目的なのでなるべく内密に行うのだ。

白の国の王室護衛団だと気付かれたら面倒が起こるだろうことはフタバにも容易に想像できる。

「馬車は初めてなん？」

出し抜けに市川がフタバに言った。二人は隣に座っていた。その正面に陽炎が座っている。三人はそれなりに立派な馬車の車内で向き合って席を占めていた。

「初めても何も……。オレと姉ちゃんがいた世界に馬車なんてないよ。昔はあったと思うけど……」

「へえ？ 面白そうやな。弟くんたちの世界も」

「この世界よりも機械がいっぱいあるんだ。ここはオレ達にしてみれば昔っぽい。着物とか着てるし、車も電話もないし……」

市川は興味深げに頷きながら聞いていた。

それきり、車内は沈黙に包まれた。陽炎はもともと静かな女性だし、市川もよく喋ると思えば急に黙りこむ青年である。フタバは静寂が苦手だったのでなんとか話題を振ろうとしたが、結局何も話を切り出すことは出来なかった。

仕方なく窓の外の移りゆく景色を眺めることにする。街をしばらく走ると、馬車はやがて殺風景な草原に差し掛かった。白の国の国境に近いのか 寒さは和らいでいるようである。変わらない風景に飽きてしまったフタバを襲ったのは眠気だった。我慢する必要もないと思ったので、フタバは素直に眠気に身を委ね瞳を閉ざした。

< 3 >

フタバの仮眠は数時間に及んだ。目を覚ましたとき、馬車の小窓から見えるのは暗闇だけだった。視線だけを車内に巡らせると、眠る前と変わらない体勢のままの陽炎と市川の姿があった。

「お、弟クン。起きたん」

「市川さん……もう夜？」

「とーつくに日は沈んだで」

言われてもう一度視線を窓の外に戻す。暗くて景色が見えない。かろうじて家々が並んでいるのが分かったが、どの家も明かりひとつ点いていなかった。人の気配は全くない。無人の街なのだろうか

。

「市川さん、ここどこ？ まだ白の国？」

不安げな声で聞くフタバ。

市川は狡猾さを覗かせた笑みを浮かべると、もったいぶる様にしばらく時を稼いでから答えた。

「ここは黒の国やで。」

<第十八話「弟」・終>

## 第十九話 夜

リリスは窓の淵に手を掛けた。屋敷を囲む荒野の向こう、明かり一つ灯されていない黒の国の街が遠くに広がっている。

いつもと同じ殺伐としたこの風景なのだが、今日は何かが違う気がした。耳を澄ます。馬蹄の音が聞こえる。馬車の音だ。“悪魔”は五感が一般人より発達している。遠くの馬の蹄の音を聞き取るくらい容易だ。

（馬車なんて使うのは他の国の連中だわ。まさか……）

リリスは窓辺から離れると、足早に自室を出て行く。誰もいない暗い廊下に出る。迷わず真っ直ぐ進む。やがて現れた螺旋階段を駆け足で上った。屋敷は塔のように階が多くある。最上階まで上るのは毎回大変だ。

階段の踊り場上がったとき、ちょうど上から階段を降りてきた人影とぶつかった。リリスとぶつかった人物は、小柄な少女。銀髪と猫耳を持つ、幻獣の少女だった。

聞く者誰もが“可愛いらしい”と形容するだろう声で、少女は言った。

「わっ、なんだリリスか」。びっくりしたあ。この館の廊下、ランブ少ないから気付かなかったよ。サタン様にランプ増やしてもらうように頼もうかなあ？　ねえリリスもそう思わないっ？」

すぐさまカツとなってリリスが叫ぶ。

「あのね！ アタシはローズなんかと喋ってる暇なんかないのよ！ 話しかけないでくれる！？ いちいちウザいんだから！」

「サタン様のところに行くのお？」

「アンタに関係ないでしょっ！？」

悪気を微塵も見せず無邪気に近寄ってくるローズを追い払うように無視したリリスは、そのままローズが降りてきた階段をあがっていく。

後ろ姿からもリリスの憤慨の様子は分かる。その様子をきよとんとした様子で眺めるローズ。臀部から伸びる銀色の猫の尻尾が頼りなさげに揺れていた。ローズはぽつりと言った。

「リリスってローズのこと嫌いなのかなあ……？」

#### <第十九話：夜>

ローズを追い払った後、屋敷の最上階に到着したリリスは落ち着きを取り戻して、薄暗く、月光が注ぐ廊下を歩いていた。最上階に部屋は一室しかない。我が主の部屋だ。その部屋の扉は荘厳な漆塗りになっていて、重厚さを漂わせている。リリスはその扉を控えめに叩いた。

「入れ」

扉の向こうからの返事はやや低く、穏やかなものだった。安心するその声。リリスはすぐに扉を開けた。

「サタン様、リリスです。」

言いながら扉を後ろ手で閉める。扉が閉まると同時に明かり一つ灯っていなかった室内にランプの光が灯る。椅子に鎮座する人物の姿が浮かび上がった。

人物の背後の巨大な窓からは月明かりが差し、室内には赤いランプが灯り、幻想的な室内を演出している。その美しい光景こそ我が主にふさわしい　　リリスは思いながら言葉を続けた。

「馬車がこの屋敷のほうへ向かっています。馬車を使うという事は

ここより北の国　　青の国が、翠の国が……」

「“白の国”か」

椅子に座る男が言葉を代わる。

「はい、サタン様。白の国の者かと。先日、アタシが師団長に傷を負わせたのが、あいつらを動かしたみたいです」

月光が男の顔を照らし出した。若く、端正で上品そうな青年の顔が浮かび上がる。とても“黒”という言葉などとは無縁に思えるそんな好青年だった。黒檀色の長髪がすっきりとした輪郭の周りを流れ、ヒスイ色の瞳が美しい顔に彩りを添えている。

関わった者すべてが陶醉するのも頷ける。そんな美しい男は、“サタン”という悪魔の名だった。

「あいつらもただ視察に來ただけだろう。放っておけ」

「でもっ、あいつらは師団長のみなたった数人です。絶好のチャンスじゃないですか！　アタシが全員殺してやりますよ！　ねえサタン様！」

サタンはそれをきっぱりと咎める。抑揚のある、歌っているよう

な声色だった。

「駄目だ。そんなことをしたら今夜中に白の国からの総攻撃を受けるぞ。……私の計画を壊す気か？」

鋭い眼光で睨まれて、リリスは口を閉ざした。サタンの瞳は美しい。だが、美しいこそ、怒りを露にしたときに恐ろしいのだ。リリスは深く頭を下げた。

「かしこまりましたご主人様。<sup>ウィ・ムスイ</sup>」

< 2 >

夜は更けていった。

「ノワール 魔導衆<sup>まどうしゅう</sup>？」

市川が頷く。フタバたち三人は未だ馬車に揺られていた。

「ああ。俺たち“白の教団”の黒の国バージョンや。黒の国の『国家護衛団・ノワール魔導衆』。黒の国は宗教文化が根強いからな、魔導衆の奴らは魔術を使うねん。奴らは悪魔なんや。よう分からんけど、“器<sup>うつわ</sup>”とする人間の皮を被つとるらしいで」

「あ、悪魔……？」

控えめに陽炎が口を挟んだ。

「国家護衛のための軍隊はこの国にもあるのです。ただ、強さの面ではわたしども“白の教団”と黒の国の“ノワール魔導衆”が互角の争いをしているのです。先日、佐々波殿を負傷させた『リリス』というおなごも、ノワール魔導衆の幹部なのです」

フタバはその時のことを思い出した。市場に買出しへ出かけたときのこと。黒ずくめの女・リリスは確かに“魔女の麻薬”といった魔術を使っていた。あれが黒の国の国家護衛団の力なのか。

「じゃあ、これから行くのって」

フタバが言いかけた時、馬車が止まった。雇った従者の者が窓から顔を覗かせ、目的地に到着した事を知らせた。フタバは場所を把握するため窓の外を見たが、真っ暗で分からない。そうしているうちに市川と陽炎は馬車から降りていた。慌てて後を追いながらフタバが言う。

「着いたのっ？ 市川さん……ここは？」

ニヤリと狡猾な笑いを浮かべた市川が答えた。

「ノワール魔導衆の屋敷や」

< 3 >

三人は連れ立って歩き、魔導衆の屋敷に近付いていった。屋敷の周りは雑草ひとつ生えていない殺伐とした更地だった。街からはだいぶ離れているようで、森に囲まれた白の教団の本部と少し似てい



るとフタバは思った。

屋敷に近付くと、その外観が鮮明に姿を現す。教団の本部とは違い、ただ塔のように縦長になっているだけの西洋風の屋敷だった。軍隊の施設にしてはこじんまりとしている。そんな印象を受けた。

「黒の国と戦争をしたことは大昔に一度しかないんや」

屋敷までの道のりで市川が言う。フタバは視線だけで返事をした。

「でも、団長はんを始めとした教団全体は黒の国を一番の強敵やと思つとる。俺もそうや。黒の国と戦争をしたことはない。それはお互いに牽制し合い、探り合いを続けとるだけなんや。一度戦争をすると、それこそ大規模な戦争になる。なんてったって千年王国の二大大国の戦争やからな」

市川は一度息をつくと、再び話始めた。

「せやから強敵とは分かつとつても、奴らの使う魔術や魔導衆のメンバーの情報を全然知らんのや。俺らが今回偵察を任されたのはそのためや。黒の国との戦争が近い。せやから、メンバーの数や魔術の詳細などを知っておく必要があるってわけや」

そうなんだ、とフタバは曖昧な返事を返しておく。そんな事よりも、なぜ自分がこの任務に同行させられたかの方が気になるのである。

やがて魔導衆の屋敷の前へとたどり着いた。見張りどころか人影が全く見当たらない。陽炎が呟くように言った。

「市川殿、屋敷の中にも人の気配はわずかしき感じられませぬ。出払っているのでしょうか。」

「ん？ いや……」

中途半端に返事を濁すと、無言のまま市川は屋敷の壁沿いに歩く。足音を立てない歩き方だ。その様子からも偵察のための修練を重ねているのだと伺える。屋敷はだいぶ年季が入ったものらしく、蔦が這い、瓦礫と化しているところもある。フタバが足元に気を払いながら市川の後を追っていると、突然に市川が立ち止まった。

「本当に人の気配ないなあ。もう正面から進入してみたほうがええな」

「えっ！？ 中に入るの！？」

「当たり前やろ。何のために俺ら師団長がこの任務に駆り出されたと思つとるんや？ ただコッソリ偵察するだけなら適当な団員に任せるやろ。俺ら師団長が任されたつちゅーことは無茶で大胆なことをしてでも有益な情報を集めて来いってことやねん」

戸惑うフタバを他所に、市川と陽炎はさも当然といった風に屋敷の正面扉に向かう。巨大な扉が姿を現した。どこか禍々しく感じられる黒い扉。悪魔の装飾がなされている。

市川と陽炎が扉の両脇に待機し、フタバは市川の背に隠れた。市川は『妖刀・黒姫』、陽炎は『朱槍・紅俵<sup>じんぎ</sup>』と、それぞれの神器を構えている。

「開けるで」

市川が小声で言う。陽炎が頷いた。二人の間で錆び付いた音を立て、ゆつくりと扉が開く……。

「……」

屋敷の玄関が三人の前に姿を現した。暗闇のなか、古びたシャンデリアの明かりだけがボンヤリと浮かび上がっている。どこことなく教団の玄関ホールと似ている広く丸い形の部屋。玄関の左右に部屋はなく、ただ正面に螺旋階段が塔高くまで伸びているだけだった。簡素な造り。それゆえに誰もいないのが怪しい。

忍び足で中に入る市川の後ろにフタバが続いた。足音を立てないように、慎重に。こんなに緊張したのは初めてかもしれない。陽炎が低く声を潜めて呟いた。

「市川殿、なぜ誰もいないのでしょうか？　よもやわたくし共の偵察が知られているという事がありますまいな……？」  
「んー、いやー、バレとるかもしれないな。誰もいないのも罠かもしれないへんで」

緊張に身を固くしていたフタバが、背後で閉まった玄関の扉に視線をとまらせる。そこには褐色で光沢のある、羊羹紙が貼り付けられてあった。

「市川さん、この紙は？」

「ん？　なんか見つけたんか弟クン？」

「これ……なんか書いてある」

フタバが差した紙に市川と陽炎が注目する。真新しい羊羹紙には文字が羅列してあった。

【magie du noir】

Satan

Lilith

Lucifer

Belphegor  
Mammon  
Belzebuth  
smoderus  
Monstre  
Rose  
【sept grandes infractions】

「……なんて書いてあるの？」

フタバの質問に市川はじつとして紙を凝視するばかりで答えなかった。

「市川殿、読めるのですか」  
「んー」

じつくりと時間を稼いだのち、市川がようやく口を開いた。

「どーやら魔導衆のメンバーの名前みたいやな。幹部だけの名前かもしれないけど この屋敷の<sup>ひっけ</sup>人気の無さから察するに、この九人だけが魔導衆のメンバーやと思うで」

「国家護衛団の軍隊のメンバーが九人だけとは考えられませぬが……」

二人は同時に黙り込む。フタバは話についていけず、二人の顔を交互に見上げるだけだった。玄関にしんとした静寂が流れる。鉄格子と似ている窓が玄関をグルリと囲むように設置されており、そこから叢雲に隠された薄い月の光が差していた。

さてどうしたものか……。そう三人が貼り紙から目を離そうとしたとき、

「わあ、お客さんだあ！」

三人の背後から場違いな程に明るい声が玄関に響いた。

「　　っ!？」

同時に振り向くと、玄関の中央にそびえる巨大な螺旋階段の手すりに小柄な少女が座っていた。魔導衆のひとりのはずだが、殺気などはまるで感じない。

フタバは市川の背に隠れながら少女を凝視する。歳は高校生くらいだと思うが、喋り方や雰囲気からして幼く感じた。何よりフタバを驚かせたのは少女の容姿だ。珍しい銀髪の手から覗く“猫耳”と、少女の臀部から伸びた長い尻尾である。

（猫耳……あれ本物！？）

市川と陽炎も同じことを思っているのか、じっと少女の方を見ている。

少女・ローズは可愛らしい笑みを満面に浮かべて言った。尻尾にくくり付いている鈴が涼しい音を立てて鳴る。

「あのねえ、お屋敷にお客さんが来るのって久しぶりなんだよお。お兄さんとお姉さんと……小さなボク！みんな白の国の人なんでしょ？　ローズ知ってるよお。サタン様が言ってたもん！」  
「サタン様やて？」

いぶかしげに市川が呟く。ローズが声をあげて笑った。

「そうだよ！　とつても素敵な、ローズのご主人様<sup>ムスィ</sup>なんだあ。羨ましいでしょ？」

三人は答えなideいた。すると少女が軽い身のこなしで手すりから飛び降り、三人に背を向けて螺旋階段に足を掛けた。顔だけ振り向かせ、ニツコリと笑う。

「サタン様言つてたよお。　全部知ってる”　”て。君たちがここに来る事も、小さな男の子を連れてくることも。小さなボクが千年王国にやって来た理由も。だけどサタン様はまだ手を出さないんだって。どうしてだろうね？」

鈴の音が玄関に響いた。ローズはそれだけ言い残し、足早に階段を上がつていつてしまった。もとの静寂が戻る。市川が何事もなかったかのように口を開いた。

「偵察もお見通しやつたつてワケか」

「そのようですね。あの娘……獣の耳と尾を持っておりました。幻<sup>げん</sup>獣<sup>じゅう</sup>という生物だと思われます」

陽炎も言いながらため息を吐く。市川は神器の黒姫を鞘に収めた。

「出鼻くじかれた感じやな。サタンっちゅうボスっぽい奴は俺らの偵察を知つとるみたいやし。これ以上探り入れられんわ。まあ魔導衆が九人しかいないっちゅう事は分かつたし、もうええか」

市川の言葉に陽炎が頷いていた。フタバは先ほどから何をするわけでも無く立ちすくんでいる。三人は屋敷を出て行った。外で待たしておいた馬車に再び乗車する。フタバはやはり市川の隣に座った。

市川も陽炎も一言も言葉を発することなく、来るときよりも更に居心地の悪い車内となった。

馬車が揺れる。すでに夜中だ。屋敷の中にいるときよりも月光が強く感じられる。この黒の国は街にすら明かりひとつ無く 月の満ち欠けを嫌というほど感じる事が出来る。白の国では曇り空が多いため、綺麗な月夜を見るのはフタバ自身久しぶりだった。

（あの猫耳の女の子……サタンって人はオレが千年王国に来た理由を知ってるって言ってた……）

どうして黒の国の、敵である軍隊の主が知っているのだろう。  
答えは出るはずもない。ただただフタバは沈黙の車内のなか、馬車の揺らぎに身を任せていた。

<第十九話「夜」・終>

## 第二十話 想

夜の名残りを射抜くような朝の光が、本部の庭に差し込んでいた。  
早朝 珍しく曇り空ではなく、快晴が広がっている。

寒椿が咲き乱れる中庭には二人の少女がいた。

ベンチに腰をおろし、片方の少女が暗く淀んだ表情で俯いている。眼鏡とおかつ髪が特徴の文学的な少女だ。本来はロングコート状である団服の裾を切りミニスカートに改造している。真面目そうな外見だが、短い裾から伸びるすなりとした白い美脚が朝の光に輝いていた。十代のわりには豊満な胸にも彼女の顔とのギャップを感じさせる。

「姐さん……もう朝なのにまだ帰ってこない。あああ、どうしよう。心配です。姐さんに何かあったらわたし……」

彼女は両手を胸の前で揉みしだきながら、心配げに言った。眼鏡のサイズが若干大きいらしく、ずり落ちてくるのを定期的に直している。

彼女の言葉に、もうひとりの少女が答えた。

「大丈夫だよー！ まったく、草音ちゃんくさねは心配性なんだから。あの陽炎さんかげろうだよ？ 無事に決まってるじゃん。それに椿くんも一緒なんですよ？」

その少女が言うとおり、眼鏡の少女の名は草音といった。草音はささやくような声で答える。



「そうだけど、ひよりちゃん……。姐さんと市川さん……。うっん、何でもない……」

“ひより”と呼ばれたもうひとりの少女は非常に小柄で、本当に幼い少女だった。草音の胸下くらいまでの身長しかなく、纏っている団服が見るからにぶかぶかだ。色素の薄い髪を高い位置でツインテールにしている、明るく笑う様子は満開に咲く大輪の花のようだった。

心配げな顔を崩さない草音に、ひよりは元気付けるように言う。

「椿くんのことと言わない！ 陽炎さんの問題なんだから。ねっ！」

「うん……そうなんですけど……」

「もー！ 草音ちゃんは消極的過ぎい！」

そのときだった。

僅かに雪が残った土擦れの音がしたのだ。草音とひよりは同時に振り向く。二人が座るベンチの後ろ 小さな噴水のところに小さな少年が立っている。中庭に人がいると思わなかったのか、少年は明らかに困惑していた。しばらく三人は見つめあい空白の時間が流れたが、やがてひよりが絞り出すような声で言う。

「きみ、誰？」

少年は答えた。

「えっ、えっ。い、井上フタバ……です。」

<第二十話：想おもい>

朝の寒さは少し和らぎ、心地のよい日差しが中庭に注いでいた。本部の中からは団員たちの声が飛び交っている。

フタバは言われるままベンチに座った。ひよりと草音の真ん中である。出会ったばかりの年上の少女二人に挟まれて座るのはどうも落ち着かない。そんなフタバを他所に、ひよりが満面の笑みで言った。

「あたし、春野ひより！ こう見えても第六師団長なんだ！」

「へ、へえ……？」

フタバは驚きに目を丸くする。たいして自分と身長も変わらない幼い少女が師団長とは。

「きみってアレでしょ？ 少し前から教団に居候することになったっていう男の子。」

「うん。あと姉ちゃんがいるんだ」

その答えにひよりは頷きながら言った。

「知ってるよ！ さっちゃんが言ってたもん」

「さっちゃん」？

「知らない？ 第二師団長の桜月さんの事だよ！」

笑顔で言うひよりに、もはやフタバは頷くだけだった。見えずとも男である桜月を“さっちゃん”と呼ぶとはいかがなものかと思うが、口にはしなかった。

話題に困っているフタバを察したのか、今まで沈黙を守っていた

草音が口を開く。

「わたしは月本草音と申します。その……一応、第八師団長です。あの……君はもしかして、今まで姐さんと共に黒の国へ行ってきたのですか？　そういう話を聞いたので……」

「あねさん」？」

「あ……陽炎さんの事です。ご存知ですか？　あの……第三師団長の。」

フタバは頷いた。それを見て安心したように草音が口元をほころばせる。フタバは草音の質問に素直に答えた。

「うん。えーと、市川さんと陽炎さんとなぜかオレで行ってきたんだ」

とたんに草音が心配げな表情に戻る。

「ああ、そうなんですか……。姐さん、大丈夫でした？　その、市川さんと」

「だーから草音ちゃんっ！　椿くんのことと言わないの！」

ひよりの怒声が飛んで、草音は口を噤む。フタバには二人の話す内容がさっぱり理解出来なかった。

中庭は気持ちのいい陽気に包まれていた。太陽が優しく差し伸べた手のような、小春日和の柔らかな朝の光。最近では雪が降らないので過ごしやすい日が続いている。そこでふと、心地よく時間の流れを感じていたフタバの脳裏に疑問が浮かぶ。

「あのさあ、そっちの、春野さんって……」

「ひより！　春野ひよりだよ！」

「オレと同じくらいの歳なのに師団長って凄いなだねー。強いってことでしょ？」

しばしの沈黙。

ひよりと草音が同時に固まったのだった。何か悪いことを口にしたのかと戸惑うフタバ　笑顔のまま表情を凍らせる。たつぷりと間を置いたひよりが、不機嫌極まりないといった顔でフタバを睨み、言った。

「あたし、君と同じくらい低年齢に見える？」

その声は怒っていても可愛らしい響きがある。  
フタバは戸惑いを隠せないながらもそれに頷くと、途端にひよりが顔を泣きそうに歪めた。

「もー！　みんなであたしをバカにして！　あたし十七歳だもん！」

「ええ！？　十七歳！？　そ、そうなの？」

「“そうなの？”　じゃないよー！　うわーん、草音ちゃん！」

そう言いながら草音に抱きつくひより。本気で悲しんでいるようだった。フタバが慌てて謝るも聞こえていないようだ。まさか自分より六歳も年上だったとは　口元が引きつるばかりである。やがて落ち着いてきたらしいひよりが、少し泣き声が混ざった声色で言った。

「はあ。あたしいつも幼く見られちゃうんだよね。背も全然伸びないしー……髪の毛もツインテールじゃなきゃ似合わないんだもん」  
「ひよりちゃん、そんな事ないですよ……」

控えめな口調で慰める草音にも、ひよりは強く言った。

「いいの草音ちゃんっ！ どうせあたしチビだから！ 年齢相応に見られたことなんて、東條さんにしか …」

はっ、とひよりが思いついたように目を見開く。言葉を途切れさせたひよりに疑問の視線を向けるフタバと草音。するとひよりが厳しい顔になって、フタバの瞳を真正面から見て言う。

「君の名前、井上フタバくんだったよね？」

真剣な眼差しに、フタバはたじろぎながらも機械的に頷いた。ひよりが難しい顔をしてその事実を吟味する。やがて記憶の欠片を手繰るように、思い出すように呟いていった。

「そういえば、東條さんから聞いたことある。うん、確かに言ってた！ 息子さんの名前、『ふたば』だって言ってた。男の子の名前で『ふたば』って珍しい名前だな、って思ったもん！」

再び沈黙が流れた。風が起す草木のざわめきが鮮明に感じられる静けさである。

フタバはひよりの話を怪しげに聞いていた。父親は顔も見ぬうちに死んでいるし、名字も東條などではない。井上だ。それにこの世界に父親がいたら自分の存在はどうなる。とにかくフタバのなかで、ひよりの話は勘違いにしか聞こえなかった。

しかし気にはなるので、フタバは呆れ気味に言った。

「その東條さんって人、オレの父さんなんかじゃないよ。オレの父さんはもう死んでるんだ。“みよじ”も違うしー」

「むっ。あたしの勘は確かだよ！ 東條喜一さんだよ？ ほんと

に知らない?」

「……東條“喜一”っ?」

フタバは眉が山を描くほどに目を丸くさせた。『喜一』 その名前は聞いたことがある。まどかから、両親の話を聞いているときに。

(父さんの名前は喜一だ。やっぱり東條さんっていうのが、オレの父さん?)

混乱を隠せずに、慌てた口調でフタバが言う。

「で、でもオレの父さんはずっと昔に死んだんだ。死んだ人が、この世界で生きてるわけない。普通に生きている東條さんが、オレの父さんのはずないよっ」

それを聞いた草音がすかさず口を開く。訴えるような、必死な声色だった。

「いえ、いえ、違っんです……。東條さんも、東條さんも……。ずっと昔に亡くなっただんです……。!」

三人は顔を見合わせた。フタバ達の世界にいた『井上喜一』、千年王国にいた『東條喜一』。ともに死亡している二人の人物は同一人物なのだろうか?

のどかな中庭に残されたのはひよりと草音だけとなった。先ほどから何人かの団員が中庭を横切っているが、ここに留まり、明るい日差しを浴びられているのは二人だけである。

フタバが去ったあと、一番それを気にしていたのは草音だった。彼女は心配げに両手を揉みしだきながら眉を下げ、苦しい表情をしている。癖とも言える草音の行動だ。

「ああ……東條さんの事を話してしまつて良かったのでしょうか……。団長さんに許可も取らずに……」

「縹はなはさんの許可なんていらないよ。だいじょーぶ！ フタバくんも何か思ふ事があるみたいだし、お姉ちゃんに相談でもするんじゃない？」

ひよりの返事に納得したようで、草音は表情を和らげた。心配性なのが草音の困るところでもあるが、他人の意見を受けるとすぐに心配は収まるのだった。

東條の話も落ち着いたその時 中庭の向こうにそびえる荘厳な門から入ってくる人物に、二人はすぐに視線をとまらせた。

「陽炎さん！」

「姐あねさん！」

二人は同時に叫ぶ。その声に門を入ってきた人物 陽炎がうろんげな瞳を中庭のほうに向けた。彼女の顔は明らかに疲労が混じつていて、暗い影が差している。

草音が真つ先に陽炎のもとに駆け寄った。ミニスカートに改造された団服の裾が翻る。

「姐さん、無事でお帰りくださって良かったです……！ わたし、心配していたんです。昨日の夕方にここを発つて、今朝まで帰って

こない話でしたから……。しかも、黒の国の偵察なんて任務……！」

陽炎は影を帯びながらも色あせない妖艶さで微笑んだ。

「ありがとうございます草音。わたしは大丈夫です。市川殿もありましたから」  
「はい、聞いています……。」

途端に草音が俯き、淀んだ空気が二人の間に訪れた。ひよりは少し離れたところからその様子を見ていた。ひよりは分かっているのだ。“この話”の時には、陽炎と草音の間に関与しないほうがいいという事を。見た目は幼くても冷静な判断力を持つのが春野ひよりという少女なのである。

悲しげに瞳を伏せる草音の心情をすべて悟ったかのように、陽炎は微笑みさえ浮かべて言う。

「草音。市川殿のことは、わたしに気兼ねしなくてもよい。わたしには卓之介さまがおります故<sup>ゆえ</sup>。わたしは卓之介さまだけに愛して頂こうと決めているのです」

「姐さん……！ そんな事……。わたしは市川さんの事は別に……」

陽炎が言葉を遮った。

「よい。そう言わなくとも分かっています。草音は入団した時から市川殿のことを素直に想っておるのでしょうか？ わたしは違う……わたしは卓之介さまにしか、愛される可能性がないのですから」

「姐さん……」

「市川殿はよい人でございます。他の方は市川殿のことを良く思っていないようですが」



草音はそれ以上何も言えなかった。というのも、陽炎が草音の顔を見ながらもその本心はどこか遠くを見つめていたからである。彼女の瞳はただ目の前の景色を写しとるだけの澄んだガラス玉のようだ。憂いを含んだ翳りのあるその瞳は、皮肉にも陽炎の厭世的な美しさを一層深めているのだった。

<第二十話「想<sup>おも</sup>い」・終>

## 第二十一話 徴

市川と陽炎　そしてフタバが黒の国への偵察から帰還したのは早朝のことだった。前日の夕方に旅立ち、帰ってきたのは翌日の朝。長い道のりであった。しかし疲れた様子を微塵も見せない市川が団長室を訪れたのは帰還してすぐであった。

相変わらず煙と埃に包まれている団長室のなか、市川と<sup>はなだ</sup>縹は来客用のソファに向き合って座っている。市川が飄々と言った。

「佐々波はんおらへんと散らかつとるなー、団長はん」

「……余計なお世話だ」

チツ、と舌打ちすると縹は煙管に口を付ける。市川が立ち込める白い煙を眺めていた。

「黒の国は相変わらずえらい殺風景な国やったで。人ひとりおらへんし」

「んなこと分かってんだよ。ノワール　魔導衆<sup>まどうしゅう</sup>の奴らはどうだった」

もったいぶるように市川は笑いを浮かべる。その狡猾な笑みがいちいち縹の癪に障るのだ。それを分かっているかの様に、市川は笑い続ける。

「魔導衆の連中やる？　あー、そうや！　驚くことに魔導衆のメンバーは九人だけだったんや。しかも妙々な猫耳娘に絡まれて退散を余儀なくされてしもった」

縹は無言でそれを聞いていた。

「せめて井上姉弟と佐々波はんを襲ったりリスっちゅー女だけは見たきたかつたんやけどな」

「九人か。一人ひとりが相当の魔術の使い手なのかもしれねえな」

漆黒の闇を目の奥に隠しこんでいる縹の鋭い眼光が、部屋の中をさ迷う。二人は黙り込んだ。市川はこれで報告は終わったとばかりに、早く帰りたげな顔で縹を見ている。それをあえて無視する縹だった。

その時。

バコン、と団長室の扉が乱暴に開け放たれ、天寿をまつとうした。その騒動に振り向く市川と縹の視線の先には、フタバを半ば引きずるようにして連れてきているまどかの姿があったのだった。

「縹 卓之介ー！ 話があるわっ！ 今日こそ全てを話してもらってから！」

<第二十一話：徴しほ>

市川を団長室から辞させた縹は、井上姉弟をソファに座るように促した。フタバと共に団長室に飛び込んできたまどかの形相は凄まじく、ソファに座るやいなや叫ぶように言った。

「フタバくんからみんな聞いたわ！」

「……何の話だ」

「ふんつ。今さら隠そうとしたって無駄なんだからね」

ふんぞり返るまどかの隣で、フタバは落ち着きなく身体を動かしていた。“あの事”を何気なくまどかに話したのだが、まさか縹の元に直接来る事態になるうとは。フタバは縹が苦手だ。心まで見透かされているようなあの鋭い眼光は、思わず逃げたくなる。

「私達のお父さんの話よ。フタバくんが師団長の人から聞いたらしいの。死んだお父さんが、かつてこの教団にいたってというのは本当なの？」

ピタ、と縹の煙管を嗜む手の動きが止まった。まどかが縹の顔をじつと睨んでいる。室内が沈黙に包まれてしばらくすると、縹が煙を吐きながら言った。

「……東條さんのことが」

「！」

「ちつ。誰が漏らしやがった。……お前らが知っちゃったなら仕方ねえな。そうだ。お前らの父親、東條喜一は十年前までこの教団の団員で、第九師団長だった」

言いようのない困惑の影が、縹の眉間に刻まれていった。フタバたちが初めて見る縹の表情だ。

「オレ知りたいんだ。一言も話したことない　父さんの事を」  
「……………」

縹はどこか遠くを見ているようだった。ソファに座っていながら、向かい合っているフタバとまどかの方を見ていない。窓の外の曇り空を眺めていた　遠い昔のことを、思い出しているのだろうか…

…。

「東條さんは俺の恩人だった」

縹はゆつくりと話し始めた。

彼の淫色くろいろの瞳の向こうには、十数年前の光景が浮かび上がっていた。

<第二十一話「徴」・終>

## 第二十一話 徴（後書き）

「徴<sup>しるし</sup>」とは、「何かの兆候・前触れ・兆し」という意味。  
次話から始まる外伝の前触れの話なので。ゆえに文字数も少ないのです。

## 外伝・縹卓之介編 誓（前書き）

### 注意書き

この「外伝・縹卓之介編」は本編の時間枠からはずれ、過去のお話になります。

外伝、とありますがこの話を読んで頂いたほうが今度の展開をより楽しめると思いますので、一読をおススメします。

（今後の展開で外伝の内容に沿ったセリフなどが多数登場しますの  
で）

でも読まなくてもストーリー的に支障はないので、飛ばしてもらっても構いませぬよ。

この外伝は全4話で終了します。  
お付き合い頂けましたら幸いです。

外伝・縹卓之介編 誓

何でもしたいと思った

こんな俺の居場所になつてくれた

あんたのためになら。

何でもしようと誓った

こんな俺でも

あんたの居場所になれるなら。

<外伝・縹卓之介編・誓<sup>ちかい</sup>>

赤の国。

千年王国の中でも南方に位置する小国で、気候は穏やかで温かく、農業が盛んな国である。たとえば聞こえはいいが、簡単に言ってしまうえば田舎の国なのだ。

「こら！ 今度はどこに行く気だヴィクドール！」

「待ちなさいヴィル！ もういい加減にしなさい！」



農地に佇む寂れた家から、今日も今日とて男女の怒声が響いている。それを無視し、家の扉を荒々しく開けて出てきたのは一家の息子だった。彼こそが両親の悩みの種、ツエルター家の次男のヴィクトール・ツエルターである。

「うつせえな！　こんな田舎にいても楽しくねーんだよ！」

ヴィクトールはそう吐き捨てるように言つと畑の中でも気にせず歩を進めて家から去っていく。

両親は二人で揃って重いため息をついた。

「全くあの不良息子が……。兄のアルベルトは医者になって立派に働いているというのに……」

「まだ十九歳とはいえ、そろそろ農業を継いでほしいものだわ」

荒れた態度を表す息子とは正反対に、家の周りは豊かな自然に包まれている。

生い茂る緑の草葉が日差しを吸い込むように全身を伸ばし、微風にゆれている様子は、強い生命力の象徴そのものだ。

離れていく息子の背中を見つめながら、両親は遠い目をするのだった。

< 2 >

「ちつ、農業なんかやってられるか。俺はさっさとこんな田舎の小国から出て行って、剣を学びたいんだよ」

ヴィクトールはこの赤の国で生まれ、十九年間育てられてきた。親譲りの黒髪が彩る顔には鋭い狡猾な瞳が光っている。見るからに目つきの悪い悪ガキだ。

農家を営む家。そして五つ年上の兄は優秀な長男で、医者としては働いている。

ヴィクトールは兄のアルベルトが嫌いだった。両親の期待を裏切ることなく、医者として活躍し、家を離れても送金を欠かさない親孝行な兄。

それに比べて自分はどうか。

頭の良さは兄に劣っているとは思わないが、性格が“これ”だ。家族から疎まれるのは当たり前で、その疎外感からさらにヴィクトールが捻くれる。見事な悪循環だ。

農地が広がる道を歩く。この辺りはずっと畑が続いている。さすが田舎の国だ。感心している場合ではない。

ふてくされ気味に歩いていると、背後から声がかかった。

「おいヴィル！」

ぴた、と止まる足。

その声を聞いた途端、ヴィクトールの眉の皺が更に深くなる。

不機嫌極まりない、といった表情で後ろを振り向くと、こちらに向かつて駆けてくる長身の青年が見えた。

ヴィクトールに近付きながら青年が言う。

「お前、またこんな昼間からフラフラ出歩いているのか。父さん達の畑の手伝いはしているのか？」

「兄貴には関係ねーだろ。俺は家を継ぐ気ねえよ」  
「まだそんな事を言っているのか……」

青年というのはまさしくヴィクトールの兄、アルベルトだった。ヴィクトールとは違い、柔らかな亜麻色の髪を持ち、柔らかく微笑む好青年。ヴィクトールと兄弟とは思えないほどの優しい面持ちだ。医師用の作業衣を翻しながら弟の目の前に歩を進める。

「ヴィル。長男の僕が家の農業を継がないのは悪いと思っている。だが、僕は医者として家の財難を助けたい。だからお前には父さん達の助けになってほしいんだ」

アルベルトが穏やかな口調で促すも、ヴィクトールの厳しい表情は変わらない。

「うつせーな。何言われても俺は家業を継ぐ気はねえよ。そのうちこんな国出て行ってやる。それより兄貴、仕事じゃねえのかよ。こんな所でサボっていいのか？」

作業衣を指しながらそう言うと、アルベルトは穏やかに笑む。この柔らかな笑顔がヴィクトールの癪に障るのだ。

「これからうちの近くの家に検診に行くところだ。……それよりヴィル、農業を継ぐのを頑なに拒むなら “いい話” があるぞ」

「……いい話？」

「ああ。この国から出て行きたいと思っているなら悪い話じゃないと思うんだ」

ヴィクトールは無言のまま兄の話に耳を傾ける。真面目な兄が自分に告げる提案。信憑性も確かだろう。

「ここからかなり遠いが　最北端に、『白の国』があるのは知っているだろう？」

「……知ってるに決まってるんだろ。ついこの間、また神権戦争に勝って“神”を国に君臨させたんだろ」

「こら。神のことを簡単に口にしちゃいけない」

そう咎めるもヴィクトールは知らぬふりを決め込んでいる。アルベルトは呆れながらも話を続ける。

「その白の国に、『白の教団』という王室護衛団があるらしい。戦争なんかで戦っている軍隊だ。その入団試験が不定期に行われているらしい」

「……ふーん。」

相変わらず興味を示さないヴィクトール。

「お前、その教団に入団する気で剣を学んだらどうだ？　白の国に行つてさ。剣を学んで、強くなったら入団試験を受けてみるといい。ヴィルならすぐに強くなれるだろうし、王室護衛団なら給料もたくさん貰えるだろうし、父さん達だって助けてやれる」

兄の言葉に、僅かに表情が揺らぐ。ついにヴィクトールが興味を示したようだった。

『白の国』　黒の国と並ぶ大国だ。もちろん知っている。軍事大国で、和流文化だと聞いた。行ってみたいと思っではいたが、いかんせん、この赤の国は南方の国。最北端の白の国へ行くための資金も時間もない。

「入団つつつてもなー。剣を学べるのはいいけどよ、“教団”って……なんか…宗教っぽくて気持ち悪いよ。それに王室を守るなんてめんどくせーし。」

アルベルトはすかさず反論する。

「そんな事はない。王室護衛団なんて立派な仕事だ。父さん達だって賛成してくれるだろうし、剣まで学べてお前に向いている。こんな田舎の国から出て行けるんだ。ヴィルにとって素晴らしい話だと思うが？」

ヴィクドールは少し俯きながら考えを巡らせていた。

大国で剣が学べる　王室護衛団　軍隊。確かに自分にとって素晴らしい話だ。さほど仲の良いわけではない兄のアルベルトがなぜこんないい話をしてくれるのも少し疑問だが……。

「資金は僕が出すよ。思い切って白の国に行ってきたらどうだ？僕の知り合いも向こうにいるから、白の教団のことに关しては手助けしてくれるだろう」

ヴィクドールはしばらく時間を稼いだ後、兄の顔をまっすぐに見て頷いた。

< 3 >

馬車に揺られて五日。

ヴィクドールは白の国へと到着していた。夕陽に照らされる街の

辺り一面には雪景色が広がっていて、その白さに心が洗われるようだった。雪というものをヴィクトールは文献の挿絵だけでしか見たことがなかった。

そして予想以上の寒さ。着込んできたつもりだが、それでも長時間の寒さは凌げそうにない。

（もう夕方だし、今日は兄貴が用意してくれた宿で泊まるか……。明日になったら『白の教団』とやらの情報でも集めればいいか）

ヴィクトールは兄に教えてもらった宿に向かい、歩き始める。地図を見ただけでもこの国は大国だと分かる。彼が今いるこの街は小さな街だが、赤の国の農村に比べたらそれなりの都市だ。

（……白の国の国民は不思議な服を着ているな。それに建物も変だし）

夕方でもまばらな街を歩きながら思った。  
布一枚で身体を覆い、足首まで裾が伸びている。男も女も同じような形の長着だ。

文献ですら見たことのない服。母国から出たことのないヴィクトールは、“着物”という概念をまだ知らなかったのである。

そして白の国の特徴である和流文化と洋式文化の混合。着物を着ている国民が出入りしている街の建物はどれもみんな洋式だった。ヴィクトールはレンガ造りの建物なら母国でも見たことがあるので、それに疑問は抱かなかったのだが。

（俺が他国民ってことすぐに分かつちまうな）

やがて兄に教えられた宿に到着した。この国は日が暮れるのが早い。もう夕陽は落ちかけている。早く部屋で休みたい、とヴィクトールは建物を見上げたのだが。

「あ？ んだよコレ」

思わず独り言をもらしてしまう。

地図を見ながら来たので場所は確かなはずなのだが、“これ”はどう見ても宿なんかではない。ヴィクトールがたどり着いたのは、街の大通りから少し離れた住宅街。人の気配はない。くたびれた民家が立ち並ぶところを見ると、貧民窟なのだろうか。

そして地図に記された目的地は、その貧民街の一角にある、崩れかけの小さな建物。壁には蔦が這い、外壁のレンガは多くが朽ちてしまっている。

（ここが宿なわけねーだろ……。人もいねーし。兄貴のやつ、地図の印間違えたのか？）

怪しげな建物だがとりあえず入ってみよう。そう思い壊れかけの扉を開けた。錆び付いた音が鳴り、真っ暗な闇が現れる。内部に明かりは無いようだ。常世の闇が広がっている。

眉をひそめながらも、扉のなかへと足を踏み入れる。

その時だった。

「……………っ!？」

後ろから伸びてきた手によって、口元が布で塞がれる。背後から羽交い絞めにされ、ヴィクトールは驚きに身じろぐ事すら出来ない。

（だ、誰だ!？）

後ろから口を塞がれているというこの状況　ヴィクトールが建物に入っていくのを見計らって、何者かが続いて入ってきたということだ。

辺りは暗く、人物の影すら分らない。おまけに強い力で羽交い絞めにされているので後ろを振り向けない。

焦りを見せるヴィクトールの背後で、彼よりも上背のある大男が粘ついた声で言った。

「赤の国のヴィクトール・ツェルターだな？」

男はヴィクトールに答えを促すために、ヴィクトールの口を抑えつけていた布を取り払う。

「……そうだが、お前は誰だ？」

「まさか本当にこのこ来るなんてな。意外と兄貴を信用してるんだな、お前」

「はっ？　兄貴だつて？」

声を荒げたヴィクトールの顎を大男は無理やり掴むと、彼の顔を上げさせて自分と目が合うようにさせる。思い切り顔を上向きにされたため、ヴィクトールが呻き声をあげた。男と視線が交わったヴィクトールは嫌悪感を露にさせる。顔中が古傷だらけの面相の悪い中年男。どう見ても一般人ではない。

男は低く、地を這うような濁声で言う。

「お前の兄貴、アルベルト・ツェルターは“俺たち”の仲間だ。表の顔は立派な医者だがな。本当は恐ろしい鬼畜野郎なんだぜ？」



口を開いたままのヴィクドールを見下ろし、かすかな笑みすら浮かべながら男は続ける。

「お前ら家族の前では好青年を演じていたようだがな。奴は俺たちとつるんで麻薬を売って荒稼ぎしてんだよ。ハッハッ！ 奴が医者なんて仕事やってくれてるおかげで、簡単に麻薬が手に入って助かってるぜ」

「麻薬だって？ 兄貴が……！？」

ヴィクドールはアルベルトの顔を脳裏に浮かべた。優秀で気に喰わない兄。あの穏やかな微笑みが偽りだったというのか。

自分は兄がもとも嫌いだし、正直悪人だったとしてもどうでもいい。だが、両親は悲しむだろう。あの立派な兄がまさか柄の悪い仲間とつるみ、仕事の裏で麻薬を扱っていたなど。

「まさか、兄貴が俺をこの白の国に來させてくれたのも、何か企んでのことか？」

ヴィクドールは努めて落ち着いた素振りを見せる。

「ハハッ。当たり前だろ！ あの鬼畜なアルベルトが良心で弟に資金まで持たせて、他国に行かせてやると思うか？ お前には俺たちのグループに強力してもらおうと思っただけ。クスリ漬けにしてやるよ。それで、よく稼いでもらうぜ」

ようやく全てを理解する。兄はグループの仲間に関心を引き入れようとこの国へ來させたのだ。『白の教団』の入団を目指せ、というのはただの繕い言だったということか……。

なんにしても、ひとまずこの状況を打破しなくては。

兄が牛耳る麻薬のグループに加入させられ、麻薬漬けになる気はない。

（このオッサン、力は強いが、幸いにここは真っ暗だ……何とかして逃げ切れるかもしれねえ）

逃げる方法はないか。

ヴィクドールが必死で考えを働かせているとき、再び大男の手によって口元に布が宛がわれた。何かと思う前に刺激臭が鼻を刺す。布になんらかの薬が塗られていたのだ。それを理解したときにはもう遅く、ヴィクドールの意識は眠るように落ちていった……。

< 4 >

「気が付いたかい？」

優しい男の声で再び瞼を上げたとき、そこは気を失う前の暗闇ではなかった。

ひどく頭が痛い。視線を動かすことすら億劫だ。ヴィクドールは必死の思いで視線を辺りに巡らせると、こじんまりとした室内がランプのオレンジ色に染めあがっていた。

（……あ？ ……どこだこ……。俺たしか変なオッサンに捕まってる……）

身体はベッドに埋もれている。温かい。安心感を感じながら視線

を動かすと、すぐ横に一人の男がランプに照らされていた。

「あつ、あんた……！」

咄嗟に先ほど対峙した大男かと思つて身構える　が、見るからに違う男だった。眼鏡を掛け、柔らかに微笑む博識そうな男だ。歳は二十代半ばくらいだろうか。男は瞳を細めて笑う。

「怯えなくていい。私はさっきの男ではないよ。どこにも怪我はないね？」

「おつ、怯えてなんかねーよ！」

「それだけ元気なら怪我はないようだね。」

勢いで起き上がったヴィクトールを男はそう言つて笑つた。穏やかに微笑み、温かな声で笑うその様子は、どこか兄のアルベルトに似ていると思つた。

そこでヴィクトールは先ほどまでの事を思い出す。

「アンタ誰だ？　俺、さっきまで貧民窟で変な男に捕まつて　」

男は笑顔を崩さずに答えた。

「あの辺りは治安が悪いからね。部下と見回りをしていたら君があの建物に入っていくのが見えたんだ。あの建物は“私たち”がいま追っている麻薬グループのものなんだよ。服装からして君は他国から来たんだらう？　そんな君が建物に入っていくものだから気になつて追いかけたんだ。　そうしたら中で捕まつて気絶している君と、グループのメンバーの一人がいてね。君を助けてここに連れて来たつてわけさ」

ヴィクトールは男から視線をはずして眉をひそめた。彼からすれば“助けられた”というのがカッコ悪いのだ。

「明日、君の国まで送っていつてあげるよ」

「……クソ兄貴のいる国になって帰らねえよ。俺はこのまま白の国にいる。剣を学びたいんだ。兄貴に騙されたのも、そういう理由なんだ」

「へえ、君は剣を学びたいんだね」

男はずり落ちてくる眼鏡を直しながら満足げに頷く。

「それならいい場所がある。この国には『白の教団』っていう王室護衛団があつてね。そこなら身分も出身も関係ない。剣を学んで入団を目指したらどうかかな？」

「……………」

その話ならもう知っている。

最初は兄の知り合いとやらの手を借り、その教団への入団を目指すつもりだったが、今となつてはそんな事も出来ない。独学で剣を学び入団試験に臨めるほど試験は甘くないだろう。

ヴィクトールは相変わらず男のほうを見ずに言った。

「頼りにしていた教団関係の知り合いも虚像だった。俺には剣を学べる宛もねえし、適当に働きながら貧民窟でも暮らしていく。」

迷いを見せずにそう言うと、男はしばらく何か考える素振りを見せた。室内に静寂が訪れる。ランプが優しい光を室内にもたらし、二人の男を包んでいた。

やがて男が口を開いた。

「そういう事情なら……、そうだね。私が面倒を見てあげるよ」  
「……はっ？」

「この部屋の隣は空き部屋だし、そこを使わせてもらえるように頼んでみる。それに私のもとでなら教団への入団も簡単になると思うよ」

そこまで男が言ったとき、ヴィクトールは無理やりその言葉を遮る。

「待て。アンタ何者？ アンタのもとでなら入団しやすくなるってどういう意味だよ？」

男はにつこりと笑う。ヴィクトールが大嫌いな、兄と似ている雰囲気です。

「私は東條喜一。『白の教団』の第九師団長なんだ。ちなみにここは教団の本部だよ。幹部の部屋がある一角だ。」

「……第九師団長！？」

驚きを隠せないままのヴィクトールに向かって、東條は続ける。

「君の名前と年齢を覚えてくれないかな。今日から面倒見てあげるやんちゃな野良犬の名前くらい知っておきたいんだけどね？」

「……ヴィクトール・ツェルター。十九歳。」

「へえ。その名前だと南方の出身だね。うーんどうしようか。この国で生活していくなら名前を変えないとね」

ヴィクトールはハッとして肩を震わせた。

聞いたことがある。他国に住処を移す際には、その国の名前に改名しなければならぬ、と。東條が言ったことに一瞬戸惑ったが、

名前を変えれば赤の国で暮らしていたときの身元は分からなくなる。そして新しい自分になれるのだ。白の国の国民としての、新しい自分に。

ヴィクトールが改名を拒絶する理由はなかった。

「名前なんて別になんでもいいよ。アンタが決めてくれ」  
「うーん、どうしようかな。そうだねえ……」

しばらく時間をかけて考えるのかと思いきや、東條はすぐに言った。

「よし！ ヴィクトール君、きみの名前は今から『卓之介』だ。縹<sup>はなだ</sup>卓之介。どうだ、いい名前じゃないか」

「……“縹 卓之介”？」  
「ああそうだ。今日からその名で生活していくんだ。私が剣術を教えてあげよう。そしていつか入団試験に合格して、一緒に教団で働くんだ」

東條が提示した名前は、驚くほど自然にヴィクトールの頭に染みわたっていった。何の違和感も感じない。生まれながらにしてその名前だったかのような感覚だった。

小さく頷き、新しい名を受け入れたヴィクトールの様子を、東條は笑顔で見ていた。

「今日から私と君は兄弟みたいなものだよ。悪ガキな君を更正していつてあげないとなあ。じゃあとりあえず、世話になるお礼を私に言ってみて」

お礼？ とヴィクトールは表情を固くさせる。お礼なんて、ここ最近言った覚えがない。いつでも我がまま、唯我独尊に生きてきた

から、他人にお礼なんて言ったことがないのだ。

口元をきつく結び、鋭い目つきのまま固まるヴィクトールを見て東條は苦笑を漏らす。

「ほらっ、お礼は？　そういう事が集団社会では大事なんだよ！」  
「……これから世話してくれるそーで……あ、ありがとうござい  
ます……」

ぶつきらぼうに言う。しかしそれでも東條は嬉しそうに笑っていた。初めて口に出した“お礼”も、言うのを強制されることも、不思議と嫌だと思わなかった。

ヴィクトール自身、他人から強制されたことに素直に従っている自分に驚く。こんなこと今まで無かった。しかし。

「よろしくね縹　卓之介くん。これからは私がこの国での君の家族だよ」

東條にならお礼を言ってもいい気がした。従うのも悪くない気がした。兄と似ている優しい笑顔。本当に新しい兄が出来たみたいだった。

ベッドから見える窓の外では雪が降っている。橙色に染まる室内、青白く光る外の雪。こんなに景色を美しいと感じたのも初めてだった。

こうしてヴィクトールは『縹　卓之介』として白の国の住民となったのだった。





外伝・縹卓之介編 誓（後書き）

あとがき

ヴィクトールという名前はドイツ名です。

外伝・縹卓之介編 巻・2（前書き）

遅くなつてすみませんー！

2か月ほど、ネットに繋げない状況でした。

そして外伝全二話のはずが、全三話になりそうです。

赤の国で暮らす十九歳の悪ガキ、ヴィクトール・ツェルターは、かねてから大国に渡り剣を学びたいと思っていた。

ある日、優秀な医師である兄・アルベルトからの提案を受ける。

その提案というのは、白の国の国家護衛団『白の教団』への入団を目指すために白の国へと渡り、剣を学んだらいいという教えだった。

兄の教えの通り、白の国へと旅立つヴィクトール。しかし、

兄の話はすべて嘘だったのだ。白の国に剣を教えてくれる知り合いがいるという話も。入団を応援してくれるという言葉も。

兄のアルベルトは白の国で麻薬を売る裏商売をしていたのだ。その仲間にヴィクトールを加えるために、白の教団の話を使って騙したのである。

麻薬グループの男に襲われたヴィクトールを助けたのは一人の誠実な青年。彼は東條喜一という、偶然にも白の教団の師団長を務める男だった。彼に事情を話すと、教団の一室を借りて生活できることになったヴィクトール。東條から剣を学び、入団試験合格を目指す決意するのであった。

千年王国の掟に従い、白の国の国民となるヴィクトールは名前を改めることとなる。東條が与えてくれた名前は、『縹<sup>はなだ</sup>卓之介』という名だった。

「縹というのは薄青色のことなんだよ」

「あ？」

「君の名字のことだよ、縹卓之介くん。」

眉を寄せる縹に対しても東條は微笑みをかかさない。よくこんな悪人面の糞餓鬼相手に笑っていられるものだ、と縹はつくづく思う。

縹が『ヴィクトール・ツェルター』として白の国にやって来てから五日が経った。

現在は白の教団の本部内にある東條の部屋の隣を借りている。教団に来て、縹は部屋からほとんど出ない。出るといえば東條に剣を習うときだけだ。

教団で生活しているといってもただの居候で団員ではないので、廊下に出るのが気まずいのである。

雪がしんと外を舞う今日、縹は稽古をつけてもらうために東條の部屋を訪れていた。いつもならこのまま鍛錬場に移動するのだが、東條が世間話を始めたので二人で部屋に留まっている。

東條はふてくされ気味にソファに座る縹の正面に立ち、目を細めて笑った。

「僕は新緑の色や、淡い空の色が好きなんだ。この極寒の白の国では滅多に見られる景色じゃないからね。だから君に青色の名字をつけたんだ。そして“卓之介”という名前はね、僕の父親の名前なんだよ。」

縹は馬鹿にするように鼻で笑う。

「ハッ、あんたファザコンかよ？ いい趣味してるな」

「そう捉えてもらっても構わないけどね。父は偉大な兵士だった尊敬しているんだ。父親というものは尊敬するに値する存在だよ。覚えておくといい」

「……俺の親父を見てから言っただけでいいぜ」

縹は赤の国にいる父の事を思い出していた。農業に励む父の背中。兄のアルベルトには滅法甘かったのを覚えている。まともな会話を交わした記憶がない。

「もう俺は家族なんてどーでもいいんだ。新たな名で、新たな生活を送ってやって決めたんだ」

東條は満足げに頷いていた。何でそんなに嬉しそうなんだ。縹は心の中でそう毒づく。

（こいつ、つくづく不思議だ。こんな俺の面倒を見てくれるなんてどんな変人かと思ったがスゲーいい人だし）

自分の性格が捻くれていることは承知している。ゆえに他人から優しくしてもらったことなどない。それなのにこの東條喜一という男は、他国からやって来た縹が早く白の国に慣れるようにと手を尽くしてくれている。

不思議だ。俺に優しくして、何のメリットがあるんだ。同情なら余計なお世話だ。縹はこの五日間、ずっとそう思っていた。その縹の疑問を察したかのように東條は言う。

「君は本当はとってもいい子だよ。」

何がいい子だボケ。

寒さから逃れるように縹は着物の襟元をきつく合わせる。東條から与えられた普段着の紺色の着物。それに厚手の羽織。着るもので世話をしてもらうなんてまるで子供だ。

機嫌悪そうに床を睨みつける縹を、東條は微笑ましく見守っている。

教団の外の雑音はすべて雪に吸い込まれているようで、静寂を保っていた。厳しい表情を崩さなかった縹も、自然と和らいだ顔になって窓の外を眺めていた。

< 2 >

数日後、縹は鍛錬場にいた。

本部と同じ敷地にありながら、少し離れた場所にある鍛錬場。団員ではない縹が使う教団の施設といえばここくらいだ。いつもは縹以外にも数名の団員が鍛錬に励んでいるのだが、今日は珍しく誰もいない。他人と群れるのが嫌いな縹には好都合だ。

いつもなら東條が縹の剣の稽古をしてくれるのだが、今はその東條すらいない。先ほどまでは居てくれたのだが、途中で幹部の会議があると言って出て行ってしまったのである。

鍛錬用の刀を床に放り投げて縹は息をつく。

「ちつ……あの人がいねーと全然駄目だ」

まだまだ未熟な自分では、一人で満足な鍛錬も出来ない。刀という武器は目にする事すら始めてで、一太刀振るうのも一苦労なのだ。休憩しようと思い、柔らかい鍛錬場独特の床に腰を下ろした。

（一人で鍛錬も出来ねえなんて、俺もまだまだっつー事だな）

東條の指導を思い出す。あの人の刀の筋は無駄がなく美しい。どうしたらあんな風になれるのだろう。さすがは師団長を務める男だ。普段は穏やかな好青年なのに、鍛錬のときは苛烈な雰囲気纏っている。

ムスツとしたまま胡坐をかく縹の視線の先には、東條の置いてあった“あるもの”があつた。

（あれは　？）

胡坐を崩し、四つん這いで“あるもの”に近付く。

それは東條がいつも鍛錬の時や任務の時に携えている武器だ。槍のように細長い長柄だ。刀ではないし、槍でもない。先端の部分には布が宛がわれていて、刃が隠されているようだった。

あの人がいつも大切そうに持っている武器。縹に興味が沸いてくる。ゆつくりと布を取り外す。磨かれた刃が現れた。

「……鈍<sup>ほこ</sup>？」

刃が大きめの鈍だった。装飾は一切ない普通の鈍。師団長ともあろう東條が使う武器としては質素なものだ。

（なんであの人だけこんな武器持ってた？）

団員達はみんな刀を持っている。鉾を持つなんて、東條は鉾使いなのだろうか。そう思っていると、鍛錬場の扉が錆び付いた音を立てて開いた。縹は鉾を手に持ったまま振り向く。扉から淡い光が場内に注いでくる。

そこには東條が立っていた。

「縹くん、僕がいなかったらサボりかい？」

そう言つて縹に近付く東條は、縹の手に握られている鉾に目をやった。一瞬驚いた表情を見せるが、すぐに穏やかな顔に戻る。

「その武器が気になるか？」

「……………」

「刀じゃないのが珍しいだろう。これは僕の『神器』じんぎなんだ」  
「神器？」

東條が頷く。彼は縹の隣の床に座った。白い団服が汚れるのではないか。そう危惧した縹だったが口には出さない。

東條はおもむろに鉾の柄を擦りながら話し出す。

「これから話すことは内緒だよ。あまり口に出しちゃいけないって言われていることなんだ」

縹はいぶかしげに東條を見る。

「んだそりゃ？ 誰にも言わねーよ。ここには言つような知り合いもいねえし」

「いい子だ。ならいい。」



すると東條が立ち上がり、縹の手から鉾を受け取った。刃を天に向け掲げる。長身の東條と同じ位の長さの鉾は、気高く、崇高な存在感を放っていた。

「団長と十人の師団長、計十一人の幹部は、“神”から特別な武器を与えられるんだ。一人ひとり違う個性的な武器をね。それは師団長に昇格したときに与えられ、降格すると取り上げられてしまう」

「……神？ 聞いたことあるぜ。千年王国の象徴。その神を君臨させることの出来る国が、千年王国を支配できる、だろ？ その神を巡ってアンタらは神権戦争してんだろ」

東條は驚いたように頷いた。

縹は神権戦争とは無縁の赤の国の出身だ。まさか縹が神聖で禁忌とされる『神』の詳細を知っているとは、東條も思わなかったのだらう。

「フン。俺はこー見えてもいろいろ勉強してんだよ。けど分かんねえぜ。神を自分の国に君臨させたいからって戦争までして。そんなに神ってやつが偉いのかよ」

「……神を君臨させることによって得られる『最高権力国』の称号がほしいんだよ、どの国も。まあ、神権を獲得できた国は戦争の標的になるからデメリットも大きいんだけどね」

へえ、と縹はぶっきらぼうに返事をした。

教団に入団し剣の腕を学びたいとは望んでいるが、国民に姿すら見せない“神”とやらを守るために戦うのは少々めんどくさい。国家護衛団なのだからそれが仕事なのだが。

「それでね、この鉾は僕が師団長になったときに貰ったものなんだ」

東條は続ける。

「時銚ときほしというんだ。『時銚・邂逅かいこう』。」

「……時銚？」

縹が東條の言葉を反復する。

「僕たちが与えられる神器っていうのは、魔法が使えたり特別な能力が宿っているわけじゃない。ただの刀や銚だ。団員達の持つ刀と違うのは、少し属性が付くってこと。」

「んだそりゃあ？」

「属性っていうのはね、“神”から分けてもらえた神聖な力って言われている。例えば僕のこの『時銚・邂逅』の場合は、『地属性』だよ」

地属性とは地味だな、と思わず口に出しそうになった縹は慌てて口を噤む。普通ヒーローなんかは炎属性とか、風属性とか。しかし素朴で優しい東條には地属性は合っている気もした。

「炎属性は太刀筋に火を纏えたり、光属性は光を纏えたりする属性効果があるんだけどね。僕の武器の地属性はだけちよっと特別なんだ。」

「なんだよ？ 地震起こせるとかそんなんかよ？」

「ハハ、そんな凄いことじゃあないよ。」

東條は言いながら時銚を縹の前に掲げる。

「実は地属性の属性効果は誰にも言っていない。縹くんだけに教えるよ。いいかい、内緒だからね。この時銚『邂逅』は、“異世界”に通じている」

紡がれた言葉に、縹はひどく驚かされることとなった。異世界  
異世界とは？ 誠実な男の口から出る言葉とは思えなかった。

「なんだよ異世界って。ずいぶんとファンタジーな話になってきた  
な」

東條は声を出して笑った。珍しい。

「君は知らないだろうけど いや、みんな知らないだろう。この  
千年王国と同じような世界が存在する。それは並行世界と呼ばれる  
もので、千年王国と同時に進行し、似ている文化、似ている世界観  
を持ちながらも違う背中合わせの異世界。」

もはや話についていけない。何を言っているんだこの男は。縹  
はきつく眉を顰めた。それに構わず東條は続ける。

「この時銓『邂逅』の地属性効果は、その背中合わせの世界に行け  
ることが出来るんだ」

「へー、そりやすげー。たいした夢物語だなオイ」

「信じてないね。まあ結構だ。」

縹の半信半疑な様子を、東條は無理やり論い、納得させるような  
事はしなかった。それ以上東條が時銓の持つその不思議な属性効果  
のことを口にすることはなかった。縹も異世界のことなんてちつと  
も信じていないので、別に聞く気もなかった。

「君もそのうち神器を手にするようになって思うよ」

「俺がか？ 師団長にまで出世するってか。まだ入団もしてねーの  
に」

「僕には分かる。君はとってもいい子だ」

その言葉に縹はばつが悪そうに東條からの視線を避ける。自分のことを“いい子”だと何度も形容する東條。なにを根拠にそんな事を言っているのか尋ねたかった。

こんな傍若無人な自分に好意的な言葉をくれる人。兄と違い、偽りのない真摯で優しい言葉。初めてだった、こんなこと。

強がる必要なんて無いのだと教えてくれた人　東條喜一。初めてだった、こんな人。

< 3 >

それは突然訪れた。

縹が居候として白の教団にやって来てから三年が過ぎたときのことである。縹は二十一歳になっていた。日々東條から優しくも厳しい稽古をつけられているため、縹の剣の腕の上達は甚だしい。しかし不定期に行われる入団試験は未だに行われていないため、縹は力を持て余しているのである。

久しぶりに太陽が顔を覗かせ、積もりに積もった雪を溶かす午後のことだった。今日も今日とて、縹は鍛錬場を借りて一人で鍛錬に励む。東條はこの場にいなかったが、周りには数人の団員がいる。

「おい縹！　大変だぞ！」

バン、と鍛錬場の扉が開く。重々しいその扉が大きな音を立てて開くのは、縹をひどく驚かせた。何事かと振り向くと、急ぎのあま

り扉を閉めるのも忘れてこちらに掛けてくる先輩の姿が。

二十代後半のその先輩は第九師団の団員だ。第九師団は、東條が師団長を務める師団である。

「……何すか？」

と、鍛錬を中断されて不機嫌に応える繆。先輩に対しても傍若無人な態度は崩さない。いつもはその態度を咎められるのだが、今回それはない。それほど先輩が切羽詰っているということだ。

先輩は息も絶え絶えに言う。

「ちよつ、大変だ！ お前、入団が決まったらしいぞ！」

「は？ だって入団試験もまだ……」

「試験とか無しでだよ！ 特別だ。東條さんが団長に話つけてくれたんだよ！」

驚きで啞然とする繆。

なんだそれ。次第に怒りが込み上げてくる。入団試験を受けてこそその入団なのに、師団長を通して無試験の入団など違反だろう。自分は望んでいない。

（あの人勝手に何してやがんだ……！）

文句を先輩にぶつけようと口を開きかけたとき、遮るように先輩が言葉を発した。

「いや今は“そんな事”どうでもいい。それより大変なんだ！」

「それよりってアンタ」

「東條さんが解雇された！」

もはや叫ぶように言い放った先輩の言葉に、繆は身体が固まるの

を感じた。

「……なんだよそれ」

喉の奥でさ迷う言葉をどうにか絞り出すことが出来た。その声はひどく掠れている。辺りの団員も鍛錬を中断して縹と先輩のほうを凝視していた。

落ち着きを取り戻した先輩も、やはり絞り出すような声で言う。

「さっきまで軍議にかけられていて、たぶん……処罰も重いものになると思う」

「なんだよ処罰って？ あの人、何したんだよ？」

先輩の声はいつそう厳しくなった。

「お前一番近くにいただろ？ 気付かなかったか！？ 東條さん、自分の神器を私用で使っちゃったんだ。私利私欲で使ってはいけない、神から賜った神器を、自分の都合で使っちゃったんだよ！」

縹は言葉を失った。なにか言いたくても、なにを言いたいのか分からない。私利私欲で神器を使った あの実面目な東條が？

彼の神器を一度だけ見たことがある。それは三年前、縹が教団で居候生活を始めたばかりの頃だ。『時銚・邂逅』。異世界に行くことが出来る武器だと言っていたが、そんな話は信じていない。

そう、本当に信じていなかったのだ。三年前だって、今だって信じていない。

「東條さん、『邂逅』を使って異世界に行っていたらしいんだ。それも一年も前から。それがどうやら王室にバレたらしい。とにかく大変なんだ！ 団員みんなに知れ渡っちまって。団長も処分を

うけるらしい。どうなっちまうんだよこの教団……！」

三年前、東條は言っていた。異世界に行ける神器だと。それは本  
当だったのだ。

(……まじかよ……)

努めて落ち着きを取り戻そうとする縹だったが、東條のあの優し  
げな笑みが、神器のことを話してくれた時の意味深な表情が、余計  
に縹の心を乱していく。

入団が決まったことに喜ぶ暇など縹には微塵もなかった。

<外伝・縹 卓之介編「誓<sup>ちかい</sup>・2」・終>

大きな音を立てて、目の前の鉄格子が閉められた。途端に獄内は真つ暗闇に染められる。神官たちの足音が固い石段を上っていくのを確認すると、東條はそつと伏せていた目を開いた。何も見えなかった。地球上の全ての夜を集めたかのような闇だ。

獄内は土臭い匂いで満ちている。四肢は拘束されているので獄内を歩き回ることもし出来ない。申し訳程度に備え付けられている小窓から、わずかに夕日が注いできた。こんな時でもその明かりを綺麗だと単純に思えることが出来る。そんな自分に東條は嘲笑したい気分だった。

「……フタバ……」

掠れた声は、狭い獄内で響くこともなく消えていった。

<外伝・縹卓之介編：誓<sup>ちかい</sup>・3>

仲間の団員から東條の解雇・引致の旨を聞いた<sup>はなだ</sup>縹だったが、捕らえられている東條のもとへ行くとは思わなかった。

ただの一団員に昇格した自分に東條に会える権限があるわけでもないし、彼に言いたいことも思いつかなかった。今、彼に会ったところで何にもならないと判断したのだ。



第九師団長の突然の解雇と引致に騒然としている教団の本部を、  
縹は昼前には発っていた。

ただの居候だった縹を、東條が団長に掛け合って団員にしてくれたのだという。団員になった者は団長に挨拶しに行けなければいけないのだ。

普段、教団にいるはずの団長は現在街のある店にいるのだという。その店を目指して縹は本部を発ったのだ。

門を出て森に差し加ろうとした時、背後から駆けてくる人物がいた。明らかに自分を追いかけてきていると縹は分かったが、足を止める事はしなかった。妙なほどに必死で、目的以外の概念を振り払うかのように早足で歩みを進めた。

「おい待てて！　おい縹！」

背後からかけられた声は、東條の事件を知らせてくれた第九師団に所属する先輩団員のものであった。その声を聞くと縹は足を止める。東條の事を知らせてくれた先輩を無下に扱うわけにもいかない。

「　なんすか？」

「お前なっ！　東條さんが捕まってるのにどこ行く気だよ！」

「街にいるっつー団長のところですよ。よく分かんねえけど、入団試験パスして団員にもらったから挨拶に行かねーって思って」

「……まったくお前は……。いつも何考えてるか分からないな」

降参の意を示すように先輩は両手をあげた。その表情には諦めが混じっている。話もついたところで歩みを始めようとした縹の背中に、寂寥としながらも苛烈さを含んだ先輩の言葉が掛けられた。

「もし東條さんが“いなくなったら”どうするんだ」

僅かに縹の肩が揺れる。しかし歩みは止めないまま、背後の先輩に向かって縹は言った。

「“いなくなったら”？先輩、そんな事気にしてんすか。あの人は作ったように穏やかだが、心ん中は怖いほど冷静な人だ。処罰なんかで黙って殺されるわけないっすよ。」

自信に溢れて言う縹の背を、先輩は厳しい瞳で見つめていた。縹は森のなかへ去っていく。夕暮れのなかを薄暗く立ち込める叢雲が、辺りにひっそりと影を落としていた。

先輩の団員はつぶやく。

「いなくなるって……“そういう事”じゃねえんだよ、縹……！」

< 2 >

白の国の街へ着いた縹は団長がいるという店を目指し歩いていた。まっすぐ前を見据えて、少しも視線を揺らがせる事はなかった。

東條が今ごろどうなっているか、という考えが頭をよぎったが、すぐに掻き消した。どういうわけだが、あの人に心配は無用な気がした。否、心配などする必要などないから大丈夫と、自身に言い聞かせているようでもあった。

「ちっ……」

苛々するとしてしまう舌打ちの癖だ。幼いころから両親にも指摘され東條にも咎められていたのだが、この癖は直る気配はないし、直す気もない。

邪念を払うように必死で歩みを進めた。東條のことは考えたくない。今はとにかく、団長のもとを目指すのだ。

師団長のひとりから聞いた団長の居場所。地図に記されたその場所は、白の国にいくつもある街の中でも一番果てにある街だった。白の国自体が最北端の地なのだ。その国の中でも最果てにある街そこに団長がいるという。団長が鼻屑にしている店らしく、よく通っているのだそうだ。

（団員達は年中働いてるつつーのに……団長はいい気なもんだな）

と、まだ一見もしたことのない団長に対し毒づく。それにしても最果ての遠い街に着くのはいつごろになるだろう。そう思いながら雲に覆われている空を仰ぎ、縹はふたたび舌打ちをした。

< 3 >

「……う、ここは……」

地図と目の前の光景を見比べる。道に間違いはない。何度も視線をさ迷わせて、目の前の珍妙な光景に目を白黒させた。

団長がいるという街。日が沈みきった頃にたどり着いた縹だったが、その街というのが。

「お兄さん、寄ってかない？ いい娘こいるわよ？」

「や、いいつす……」

いわゆる“花街”<sup>はなまち</sup>と呼ばれる街であった。夜の帳が落ちるころにその街は明かりを灯し、人々が集まる。女が男を相手に売春する場だと聞いた事がある。縹の出身国である赤の国は田舎だったため、こんな場所はなかった。こんな街があるとは、さすが白の国　大  
国。この街が最果ての地に位置するのも理解できる気がした。

（それにしても……）

話には聞いていたが、奇怪な街だ。

色とりどりのぼんぼりがぶら下がる通りには、所狭しと店が並んでいる。この白の国の建物はみんなレンガ造りである。この花街もそれに倣ってレンガ造りの建物なのだが、どれも古い建築物ばかりだった。今にも崩れそうな多くの店の前には着物姿の男女の姿が何人も見え、寂れているようには見えない。きっと昼間は殺伐として  
いる街なのだろう。

やはりというべきか、どの女も派手に着飾って道行く男達を自分の店に誘っている。艶やかで勝気に溢れた女たちだったが、厚化粧のせいか、清らかな美しさとは程遠い。

夜だというのにこの街は明るい火が灯り、声が飛び交う。月の光すら霞んでしまうほどの明るさだった。縹は声を掛けてくる女たちをことごとく無視しながら、団長がいる店を探した。

（団長はこんなとこに何しに来てんだよ……）

またひとつ舌打ちをした時、地図に記された名前と同じ看板を前方に見止める。『華楼園』<sup>からうえん</sup>という、いかにも花街らしい名の店だ。ここか、と縹は店の前で足を止める。しかしいかんせん、自分は女

を買いに来た客ではないのだ。普通に店に入っているものか。第一、花街の店に足を踏み入れるのは気が引ける。

そう悩み始め、店の前で立ちすくむ縹の横を何組もの男女が通り過ぎていく。ひとりで歩く旦那衆たちは次々と店のなかに吸い込まれていった。

どのくらい時間が経ったか　店の解放された扉の中からひとりの女が出てきて、縹に声をかけたのだった。

「……中に入られませんのでございますか」

女というには幼い、まだ少女のような娘だった。しかし着飾って化粧を施しているために年齢が分からない。成人もしていない少女なのだろうが、ひどく大人びて見えた。美しい娘だった。艶やかさがほどよく醸し出され、他の売女たちとは違い、下品な着飾り方をしていない。

一瞬口を開けなかった縹だったが、突かれたようにして言葉を出す。

「あ、その、俺は別に客で来たわけじゃねーし……」

「どなたかに用事でございますか」

「え？　えーと」

縹は慌てて先輩から渡された地図を見る。そこには団長の名が書いてあるのだ。縹は団長の名前を今の今まで知らなかったのである。

「ああ、やぐれ屋隠つてオッサンだ。『白の教団』の団長のオッサンが来てないか？」

少女は表情の動きを微塵も見せずに答える。

「屋隠殿でございますね。はい、確かにおります。あなた様も教団のお方ですか」

「ああ。会いたいつて伝えてくれねーか？」

「心得ました。ではお部屋へ案内いたしますので、そこでお待ちください」

縹は少女に案内されるままに店のなかへ入って行った。裾の長い着物を引きずり歩く少女の背を見ながら、それにしても無表情な少女だ、と思った。美しい顔も無表情のままでは単なる人形のように、気味悪ささえ感じる。

店の中が外観ほど古びてはいないようだった。個室が連なるばかりで、大きく解放された広間などは見当たらない。途中で何人もの女や客の男と擦れ違う。

「この部屋でございます」

機械的な声でそう言った少女は、縹を待合室へ招き入れた。

こじんまりとした部屋に、ソファとテーブルがあるだけの部屋。

四方の壁はすべて木板で覆われていて、格子窓から外の眩い明かりが注いでいる。

縹がソファに腰を下ろしたのを確認すると、少女は扉の近くへ戻り一礼した。

「ではわたしはこれで。屋隠殿の都合を聞いてまいります」

「待て あんたの名は？」

突然に名を尋ねられても少女は視線すら動かさなかった。人形のような顔のまま、年齢相応とは思えない艶やかな声で告げる。

「陽炎かげろふと申します」

「……そうか」

そのまま少女は部屋を辞していった。

< 4 >

それからしばらく縹はひとりきりの部屋で暇を弄んでいた。窓の外から聞こえてくる花街独特の賑わい。甘ったるいような、不思議な匂いが漂ってくる。とつくに夜は更けているだろうに、それを微塵も感じさせない。

やがて部屋の扉が開いた。同時に部屋に入ってきたのは二人の男だった。ひとりの男は教団の団服を着、威圧感のある髭を生やしたいかにも強靱そうな大男。この男が団長の屋隠か。そしてもうひとりの男。青色の着物を着て、中肉中背、至って普通の若干気弱そうな男。彼は。

「あ、あんたは……」

無意識に縹の口から声が漏れる。ソファから立ち上がると二人の顔がより近くなった。

それを嘲笑したのは団長だった。

「やあ、縹卓之介くん。私が『白の教団』の団長・屋隠<sup>やかくれ</sup>だ。東條くんから君のことは聞いているよ。わざわざこんな所までご苦労だったね。おっと、こっちの男が気になるのかね？」

屋隠は地を這うような低い声で言う。語尾には笑いすら含んでいた。縹の鋭い眼光は屋隠のほうなど見てなかった。もうひとりの男をじっと睨んでいる。

屋隠は声を出して笑った。

「はっはっはっ！ 感動の再会だろう。こうして会わせてやった私に感謝したまえ、縹くん。いや 今は ヴイクドールくん、と呼んだ方がいいかね」

「……なんで……」

縹から絞り出すように発せられた声は情けないものだった。驚きと嫌悪が混じった顔をしている。ギリ、と歯を鳴らし前方を睨んだ。下品に笑う団長の隣にいるのは、紛れもない縹の父親だったのである。

「久しぶりだな…… ヴイクドール。もう三年か……」

気弱そうなところは何も変わっていない。いつも兄のアルベルトにばかり期待を寄せ、自分の事なんか分かつともしてくれなかった父。兄の策に嵌められ、赤の国を出て以来の再会だ。両親と兄は未だ赤の国にいるはずではないのか。なぜ着物なんか着ている？なぜ団長と共にここにいる？

「なんでデメエがいるんだよ！ 俺はその団長にだけ用があったんだ！ どうせ観光かなんかで白の国に来てんだろ？ ならとつとと消える！ 俺の前に姿を見せるな！ 俺はもう“ヴィクドール”じゃねえんだ！」

吠えるように言う。しかし団長と父の表情は少しも変わらず、穏やかなものだった。

「せっかくお父様が元気な姿を見せてくれたというのに、冷たいのだな縹くんは。東條くんの苦勞が目に見えるようだよ だからあ



んな事をしてしまったのかもな」

「……あ？ あの人が、何だつて？」

「東條くんの事は聞いただろう。彼は今、教団と城が使つ共同の幽閉牢にいるのだよ」

縹は舌打ちすることでそれに答えた。

「おや、まだ会っていないのかね？ まあ単なる団員である君が牢に入ることは出来ないのだけだね。そうそう、君を団員にしたのも東條くんだよ。彼の熱意にはこの私も折れるしかなくてね」

「なんであの人は突然俺を、規定外の方法で団員にした？ 俺は入団試験を目指して鍛錬していたんだ。裏で工作されて入団するなんてちつとも嬉しくねえよ！ あの人だつてそれは知っているはずだ！」

落ち着きたまえ、と団長は縹の肩に手を置いた。その手を乱暴に振り払う。先ほどからどんなに無礼な行為をしても団長はそれを咎めなかった。それどころかむしろ、自分に噛み付いてくる縹を楽しそうに見降ろしているのだ。

「なぜ君を急ぐように入団させたか？ それは私にも分からないよ。東條くんは昔から何を考えているか分からないからね。直接会って本人に聞いてみればいいじゃないか」

それが出来ないから聞いているんだ、と縹は唇を噛み締める。

「ヴィクトール。東條くんは神器を私利私欲のために使ったんだ。だからもう会えない。神から与えられたものを私事に使うなど重罪だ。……おそらく、処刑されるだろう」

そう言ったのはなぜか父親だった。縹は憎しみを込めた瞳で父を睨みつける。

「……なんでアンタが“神”の事やあの人のことを知ってるんだ。本当に、何しに來たんだデメエ……」

静かに言うが、その言葉の中には憎悪の念が潜んでいた。決して理解し合わない父と子。その様子を愉快そうに眺めていた団長の屋隠は笑っていた。

「縹くんの父、フリードリヒ殿はこの『華楼園』の楼主なのだよ。そう　縹くんが東條くんに連れられて教団にやって來たのと同じ、三年前からね」

「はっ！？　どういう事だよ！」

「君には耳がないのかね。言った通りの意味だよ。君のお父様には三年前からこの妓楼きろうの楼主として働いてもらっているんだ」

縹は表情の選択を誤り、硬直した笑顔で驚いた。

「……はは、冗談だろ？　母さんと兄貴はどうしたんだよ？　農業は？　赤の国から出てきたって事かよ……？」

父・フリードリヒを見上げる。父の瞳は深い闇をたたえた地底湖のようで、底にある感情を読み取ることができない。その瞳にあるのは、見るものを深い闇に捕らえてしまうような虚ろだった。こんな顔をする父親だっただろうか。縹は初めて父に畏縮感を覚えた。

何も言わないフリードリヒの代わりに屋隠が言う。

「フリードリヒ殿をこの白の国で職に就かせてくれたのは、縹くんの兄であるアルベルトだ。私はかねてからこの妓楼がお気に入りだ

ね。ここの女達は花街の中でもひととき美しいのだよ。　そこでアルベルトに相談したところ、自分の父は田舎で農業を営み暇だと言っじゃないか」

アルベルト。その名を聞いたとたん、縹は自分の身体が強張るのを感じた。

「本当はアルベルトにでも楼主を頼みたかったんだけど、彼は医者という仕事があるからね。はるばるフリードリヒ殿を呼び、頼み込んだというわけだ。君のお父様は二つ返事で花街での仕事を引き受けてくれたよ」

再び父の顔を見ると、その顔は無表情に近くひどくやつれて見えた。父の本心が読み取れず、縹は大きく舌打ちをした。

「父さん、アンタは利用されたんだよ。この女狂いの団長と最低な兄貴にな」

「ほう、縹くん。それはどういう意味だい？」

「団長さんよお。テメエ、俺の兄貴とつるんでいやがったんだな。兄貴は赤の国では誠実な医者、白の国では麻薬グループのボスつー最低最悪の人間だ。かの有名な『白の教団』の団長がそんな男と裏で繋がっていやがったとはなあ？　屋隠、テメエ……この妓楼を私物化したいがために兄貴と相談して、父さんと呼んだんだろ」

屋隠はニヤリと笑う。否定しないその姿を見て、縹は怒りで身が裂かれそうだった。まさか教団の団長とあの憎き兄が繋がっていたとは。そして兄の手引きで父まで巻き込まれ、団長は今まさにこの妓楼を私物にしようとしている。どうせ兄のアルベルトは屋隠から大量の金を受け取ったのだろっ。

怒りに顔をきつく歪める縹とは正反対に、フリードリヒはどこまでも落ち着いていた。

「ヴィクトール、私はアルベルトの役に立てるのならいいのだ。そう決めた。」

「……何ふざけたこと言っただよ teme はよ！ まんまと兄貴の策に嵌りやがって！ それになあ……兄貴の役に立つっつーよりもこの見ず知らずの屋隠のオッサンのために利用されたようなものだぞ！」

「いいんだそれでも。アルベルトがそれが正しいと言うのなら」

まさか兄がここまで両親を洗脳していたとは。優秀な兄は自分の親さえ利用する術を知っている。このままでは教団ごと兄に利用される。現に団長はすっかり兄を頼り切っているようだ。このまま兄の思い通りにさせるわけにはいかない。

「おいオッサン。」

屋隠はなんだね、と嬉しそうに返答した。静かだったが、恐ろしいほどに低い声で縹が言葉を紡ぐ。

「女にしか興味のねえ teme に団長でいる資格はねえ。今すぐに辞任するべきだ」

「おや。そんな事を言われたのは初めてだよ。しかし」

「辞任しねえなら、」

いつそう強い口調で屋隠の言葉を遮る。そこでようやく屋隠の顔に困惑の色が浮かんた。縹は蛇のように鋭い眼光で屋隠を睨む。その視線の先には東條の影が浮かぶ。

「俺がいずれ団長の座を奪ってやる」

< 外伝・縹卓之介編「ちかい誓・3」・終 >

外伝・鰐卓之介編 巻・3（後書き）

なんやかんやでもう一話で完結です。

既に完成していた三話目に加筆・修正をしていたらいつの間にか長くなっていました。

もうしばらくお付き合いくださいませ。

外伝・縹卓之介編

誓・4（前書き）

「誓・3」と同時投稿です。

外伝最終話になります。

< 外伝・縹卓之介編：誓<sup>ちかい</sup>・4 >

どのくらい時間が経ったのだろう。日はとうの昔に沈み、今では格子状の窓から月光が注いでいる。東條は捕らえられてから一口も食事を含んでいなかった。四肢を縛られたまま、壁に身を預けているだけ。団服は取り上げられたので今は着物を纏っているが、服装なんてどうでも良かった。自分の事など考えていられない。彼の思考を支配するのは異世界の事だけ。

うなだれていた頭をハツとあげる。時々様子を見に来る神官しか訪れない牢の鉄格子の前には、いつの間にか人影があつたのだ。教団の団服を翻しているその人物の顔は、暗がりと逆光によりよく見えなかった。

牢の前の人物はしゃがみこみ、視線の位置を東條と合わせた。

「よお、ずいぶんと汚ねえ格好だな」

その声に東條は唇を戦慄<sup>わなな</sup>かせた。いくら位の高い人間にも少しの敬意を見せない、不遜な声色。この声をよく知っている。

「……縹くん…？」

「正解だ。ちっ、この幽閉牢まで来るのずいぶんと苦労したぜ。まさか教団の地下に城と共有の牢があつたとはな」



東條は信じられない様子で目の前にしゃがみこむ人物、縹を見つめた。その視線に気がついたのか縹は口角をあげて笑う。彼には二やりとした笑みがよく似合った。

「化けモンでも見たような顔してんな」

「……どうやってここまで来た？ 入り口には神官がいたはずだろう？」

「強行突破に決まってるんだろ。鍛錬場から鍛練用の刀を持ってきたんだ、それでちよつとな」

そんな事をして、団長にでも発覚すれば縹も罰を与えられるだろうに。東條の顔は優れないままだ。縹が何を思ったか、二人の間の鉄格子に顔を近づけると囁くように問う。

「なんで神器を私欲のために使った。アンタが三年前に話していたことを俺は覚えてるぜ。異世界と行き来できる属性能力がある神器なんだろ？」

「……ばれないと思ったんだ。私の使う『時銚・邂逅』<sup>かいこう</sup>の地属性能力の事は、君にしか話していなかったからね」

「本当なのか。私欲のために異世界と行き来していたっつー話は」

東條は沈黙することで肯定した。途端に縹は冷静だったさまを崩し、鉄格子を大きく揺らした。

「何してんだよ！ あんたは私利私欲のために神器を使うタマじゃねえだろ！ このままじゃあのクソ団長に処刑されちまうぞ！」

「処刑は覚悟しているよ。私も師団長だからね、そのくらいの覚悟はできている。ただ、縹くん……君を入団試験まで面倒見てやれなかったことを悔いている。だからせめてもと、団長に頼んで君を団

員に昇格してもらったんだ」

ドン、と縹が床を思い切り殴る。

「んな事してもらってもちつとも嬉しくねえんだよ！ そんなこと悔いる暇あんなら、どうにかしてここから」

「子供がいるんだ」

しんとした静寂が薄暗い牢に落ちる。二人の息をする音だけが木霊していた。縹は詰まりそうになる言葉を、どうにかして絞り出す。

「こ、子供って。異世界に、あんたの子供がいるのか？」

「ああ。一年ほど前に異世界で結婚して、家庭を持っている。だから頻繁にこちらの世界と行き来する必要があったんだ」

「……………」

言葉を失う縹を気の毒そうに東條は見下ろした。

「君にも言えなかった。誰にも言えなかった。それだけはバレないようにしていたんだ。しかし先日、実際に『邂逅』を使っているのを団員に目撃されてしまった。『邂逅』も取り上げられ、もう異世界には戻れない。かといってこの世界に残る意味もない。家族を……“あちらの世界”に残しているから。私は処刑を待つ。神に背く行為はすべて処刑という、団長が決めた掟があるからね」

おとなしく東條の言葉を聞きながら、縹は力なく床に置かれていた拳を握る。悔しかった。東條が自分に秘密を明かしてくれなかった事が悔しい。言ってくれば、自分にも出来ることがあったのかもしれないのに。だが、このまま死なせはしない。あの卑劣な団長の手で東條を処刑させたくなかった。

「駄目だ」

「　　縹くん？」

「そんな簡単に死なせてたまるかよ。あんたは俺が助ける。三年前にあんたが俺を助けてくれた恩を返してやる」

「何を言っているんだ……？」

戸惑う東條をよそに縹はユラリと立ち上がる。そして手にしていた鍛練用の刀を掲げた。月光を反射させて刀身が鋭く光る。

「何をする気だ縹くん！？」

「黙ってる！」

次の瞬間、ガシャンという派手な音が牢内に大きく響いた。あまりの轟音に東條は目を瞑る。音が止むと慌てて視線を動かした。東條の目の前で、厚い鉄格子が真ん中で切り裂かれていたのだ。

縹が大きく息を吐きながら刀を床に落とす。鉄格子を斬ったせいで腕が痺れるのか、その腕は震えていた。

「なんて事を……」

まさか刀で鉄格子を斬るなんて。縹のどこにこんな力があつたのだろうか。

「おら、行くぞ」

グイ、と縹が裂けた鉄格子の間から東條の腕を掴む。縹の表情は何かには憑かれたかのように恐ろしく必死だった。されるがままに立ち上がる東條の四肢に食い込む縄を、縹は素手で断ち切る。何が彼をこんなに動かしているのだろうか。

「待て縹くん、私は逃げるわけにはいかない。私にはもう居場所はない。子供を残してきた今　存命する意味さえないんだ。」

「ハッ。勝手に天寿を全うしようとしてんじゃねえよ。これだから兵士つてのは嫌なんだ。掟に忠実に従い、美しく命を散らすことを美徳としてやがるからな」

縹は足を止めなかった。地下の階段を荒々しく登っていく。東條はそのあとをついていく事しか出来ないでいた。地上に出ると、そこは『白の教団』本部だった。牢獄への入り口となる、狭く湿った部屋。その部屋は地獄へと通ずる関門を連想させた。向けた視線をも吸い込み、差し込む光さえその闇の力で押し包むように暗い、牢獄への入り口。

部屋の中には監視の神官がふたり転がって気を失っている。縹の仕業だ。倒れている神官を横目で見ながら、縹に連れられるまま東條はその小部屋を出た。すると、身に馴染んだ本部の廊下が現れる。

「私を助けたりなんかして、これからどうするつもりなんだ」

「あんたを“俺の部屋”で匿う。」

「……なんだって？」

二人は廊下で立ち止まった。月光が差し込む神秘的な雰囲気なのか、二人の間には恐ろしいほど冷たい空気が流れている。明日も雪が降るだろうか。吸い込む空気は乾燥しているように感じた。

縹の眼光が暗がりのなか、いたずらっぽく光る。

「今、俺が使っている部屋は、幹部専用階にあるあんたの自室の隣だ。しかしそれが、今度は寄宿舎の方に俺の部屋が設けられることになる。このたび、俺は優しい優しい第九師団長サマのおかげで居候から団員に昇格したからな」

ニヤリと笑う縹を東條は訝しげに見下ろす。数年間、側で生活して縹の性格は熟知していた。縹がこんな風に狂気じみた笑みを浮かべる時は大抵、その優れた思考を披露するという時だった。縹は唯我独尊なだけの青年に見えるが、その実、常人とはかけ離れた優秀な頭脳を持っている。

「ま、普通なら今俺が使っている部屋は片づけられるだろうな。隣のあんたの部屋もだ。あんたはもう解雇された人間だからな」

「何を企んでいるんだい？」

「あの糞団長が軽率な考えであんたの懇願を受けてくれたから好都合だ。すべてはあんたのおかげだぜ」

自分のおかげ、と言われて東條は困惑に肩を揺らした。

「まだ分かんねえか？ 入団試験をパスして入団した俺は、規定外いわばルール違反で団員になったんだぜ。誰かさんの口添えのおかげでな。そんなこと、あの団長が公に明かすと思うか？」

「それは……」

「あの胸糞悪い団長を見てりや分かるぜ。あいつは裏で汚いことしてるくせに、プライドだけは高い。俺の不法入団のことは黙っておくに違いねえ。とくに師団長の連中には絶対言わないだろうな。違反行為を団長が公認していたなんてバレたら、奴の辞任は確定だろ。つまりあんたのおかげで、俺達は団長の弱みを握ってんだよ」

もはや東條は頷くしかなかった。

「俺は団長にちょっとワガママ言って、今のまま幹部階の部屋を使わせてもらえるように頼む。ま、クソ団長に拒むことは出来ねえよ。いざとなったら脅せるからな」

脅す、という単語が発せられたことで、縹が本気なのだと東條は悟った。負けず嫌いで虚勢を張って吠えているだけだと、いつもなら思っていたのに。

「だが団長以外の幹部は、俺が幹部階の部屋を使い続けるとは知らない。だから通例どおり、団員になった俺の部屋が寄宿舎にも用意される。本部内に俺の部屋が二つできるって事だ」

「……そのうちの一つを、私が使えと？」

「正解。あんたが使うのは寄宿舎の方がいいだろうな。団員達が家畜同然にすし詰めになれてっから、いちいち幹部が監視もしねえだろ。俺は幹部専用階で、うまい具合にやってみせる」

確かに、団員たちの寄宿舎での行動に幹部が干渉することはない。それは師団長である東條自身がよく知っていた。監視もなく隣室が誰かも分からない寄宿舎なら、身を隠すことは容易だ。

よくそんなところまで考えが及んだものだ。東條は縹に対して感心を通り越し、畏怖の念を感じた。

「君の心づかいには感謝したいが……私はもう本当に、生きている意味なんて」

「ったく、あんたも自分勝手なところがあるな。もう少し他人の事を考えてみるよ」

“自分勝手”という言葉が縹の口から出てきて東條は面食らう。縹にそう言われると妙な気分だ。

「いいか、あんたはもう自分の命に用はないかもしれねえけどな、俺はまだあんたに用があんだよ」

「は？」

「俺にはまだあんたが必要だって言ってるんだ」

縹は東條に背を向けて、暗い廊下を歩き始めた。東條から縹の表情は見えなかったが、おそらくひどく思いつめた顔をしているのだろうと、その苦しい声色から想像出来た。

与えられたばかりの真新しい団服を翻しながら縹は続ける。

「居場所がないなら、俺があんたの居場所になってやる。三年前、あんたが俺の居場所になってくれたように」

縹の背が曲がり角に消える。東條は何も言えなくなってしまった。縹がそんなことを思って、自分を助けてくれたとは。縹はただ不遜なだけの青年ではなかったのだ。彼は東條が思っていた以上の人間だ。

しかし東條は 素直に縹の好意をつけることに、まだためらいを感じているのだった。

< 2 >

それから四年の月日が流れた。

粉雪が舞う穏やかな寒さのなか、縹は『白の国』の城にいた。教団の横にある長い坂道を登っていった先にあるその城。今日縹がその城を訪れた理由は、ある書類に国王の捺印を必要としたからだっ

た。  
「ふむ……こんなものかね」

「ありがとうございます」

髭を擦りながら、国王が捺印し終えた書類を縹に手渡す。縹は無表情のまま書類を受け取った。何年経っても縹の無愛想は変わらない。

城の王室間は、白色の調度品や装飾で統一されていた。そのなかで一層目立つ赤色のソファに、たつぷりとした髭を生やした好々爺は身体を沈めている。国王は笑いながら言った。

「いやあ、しかし驚いたよ！ 白の教団のことは設立された当初から知っておるが 君のような若い青年が団長になるのは初めてだよ！ たいした若者だ！」

「そりやどうも。」

踏ん反りかつて背もたれに凭れ掛かる縹。その団服の胸では団長の証である鷲のエンブレムが荘厳と輝いている。予想以上に不遜な縹の態度。国王は対応に困っているようだった。

「しかしよくもまあ……あの頑固な屋隠<sup>やぐれ</sup>前団長を納得させたものだなあ。まあ、わしも屋隠くんは正直団長に向いていないと思っただのだよ。何せ自分の都合ですべてを采配してしまうからのお……。しかし、どうやって団長の座を譲ってもらったんだい？」

ピクリと縹の眉が動く。怒りを買ってしまったかと、途端に国王は慌て始めた。

「いや、言いたくないならいいのだよ！ いろいろ、事情も、あるだろうからの。」

国王がたかが護衛団の団長に恐縮するのも変な話だが、縹という



青年にはそれだけの威圧感が備わっているのだ。明らかに戸惑い始めた国王を見て、縹がようやく笑みをこぼす。

「屋隠のオッサンとの“約束”だったからな。」

意味深なその笑みと言葉の意味を、国王は努めて考えないようにする。縹はいつまでも笑っていた。蛇のような眼光が光り、口元が狡猾な笑みで歪んでいる。史上最年少団長に就任した青年。油断していると自分すら喰われてしまいそうだ、と国王はこっそり舌を出した。

< 3 >

国王との謁見を終えた縹はすぐに教団の本部へ戻ってきた。本部内の団員たちが自分と擦れ違うたびに会釈をしてくる。これもこれで鬱陶しいな、と思う。しかもまだ団長の就任式を迎えていないので、正式に就任したわけではないのに、縹の扱いはすでに“団長”だった。

縹は静かに廊下を歩いていた。国王の言葉を思い出す。

『どうやって団長の座を譲ってもらったんだい？』

グツと拳を握った。譲ってもらったなんて、そんな生ぬるいものじゃない。そう強く言いたい気分だった。

前団長だった屋隠は先日死んだ。いや、殺されたのだ。

屋隠を殺したのは縹の兄・アルベルトだった。屋隠とアルベルトはかつてより裏で繋がっていたようで、縁は深い。四年前に東條解

雇の事件があつた際も、アルベルトの手引きによつて屋隠はお氣に入りの妓楼を私物化していた。」

しかしアルベルトは屋隠を殺した。白の教団の団長という、地位も権力もあつた屋隠は兄にとつて絶好の金づるであつたはずなのに、それを問うたときに、兄はこう言つて笑つていた。

『ヴィクトール、お前が団長として教団を興すのを僕は見てみたいんだ。あの屋隠からもう十分な金は頂いたし、次はお前に楽しませてもらうよ。団長の椅子に偉そうに座り、屋隠が荒らした秩序と規律を直してみるといい』

屋隠の悪事によつて、教団はすっかり兄の手のなかにあつたのだ。縹はそのまま団長に就任することになった。たとえそれが兄の策の一つでも、縹は団長になることが絶対に必要だつたのだ。

(……俺はまだ何も成していない)

兄の手のひらから教団を解放すること、そして、東條の身を開放すること。それらを成し遂げるには自分が団長になることが不可欠だつたのだ。

東條は四年前に捕まつた際に軍儀にかけられ処刑が決定したが、その時すでに縹によつて東條の身は隠されていた。頭が良く、口の達者な縹だ。団長の屋隠を欺くことは容易で、あれから四年間東條は無事のまま寄宿舎の一室で生活している。

縹の信頼している同僚や後輩の中には東條がまだ教団内にいることを知っている者もいたが、彼らは東條のことを前団長にバラすことはなかった。

（これであの人を教団から出してやれる……。あの方は拒絶し続けているが、異世界にいる家族のもとへ行くべきだ）

東條の様子はここ最近、すっかり静かになってしまった。食事もしっかり摂っているし運動もしているはずなのに。元気がない、といった表現が正しいだろうか。聡い彼だ。己の身を蝕むような生活は送らないだろうに。

やはり“隠れている”という生活ゆえに精神を病んでしまったのか。そうだとしたら原因は自分だ、と縹は眉を寄せた。死にたいと言っていた東條を半ば強引に生きさせ、隠れさせたのだから。しかしあの判断が間違っているとは思わない。屋隠の手で処刑などさせなくなかったし、東條には家族もいるのだから。

東條は四年前に異世界との交流を絶つ際、自分は事故で死んだ、と家族に伝わるよう手配してきたらしい。それなら早く家族のもとへ戻り、生きている姿を見せるべきだと縹は思っている。

縹は歩みを速めた。

いま過去のことを悩んでも仕方が無い。

もう自分は団長になったのだ。教団の最高権力者だ。今すぐに東條を解放してやろう。東條に助けられてから六年　ようやく団長の座を手に入れたと、一刻も早く報告して。次は自分が東條を助けてやる番なのだと誓った四年前の事件の日。あの日の誓いだけを糧に今日まできたのだから。

（あの人、どんな顔すっかな……）

自分に『縹　卓之介』という名と居場所を与えてくれ、兄代わりだと言った東條。団長に就任したことを、我が身のように喜んでくれるに違いない。東條が破顔する様子が目に浮かび、縹はこっそり笑った。

寄宿舎にやって来ると団員の姿はまばらになった。日中なので、本部で仕事や鍛錬をしている団員が多いのである。窓の外では穏やかな雪が舞っていた。それらは一点の曇りもなく庭に銀世界を形成する。

縹は足早に東條の部屋へ向かった。気持ちがつい早まってしまう。自分としたことが。落ち着かなければ。すぐに東條の部屋の前へたどり着いた。一階の一番奥のその部屋。

周りに団員がいないことを確認すると、縹は深呼吸しながらドアノブに手を掛ける。

いつもこの扉を開けるときは少し緊張する。この部屋に閉じ込めているのは自分だ。こうした方が正しいと信じているが、死にたいと願う東條の意思を無視しているのだからやはり心は痛む。それに東條には生きていて欲しい、と願う自分の勝手な思いもあって無理やり閉じ込めているのだ。

この扉を開けて、ソファに腰掛けながら読書をしている東條が微笑みながら自分を迎えてくれるたびに安心するのだ。

「おい……？」

扉を少し開いた瞬間、縹の身体を陰湿な空気が包んだ。部屋の中から湿ったような、息詰まるような空気が流れてくる。日中にも関わらず部屋のなかには真っ暗だった。締め切られたカーテンからかうじて外の光が透けているだけ。その部屋はまるで、外で降り積もっていく雪の音が聞こえてきそうなほどに静かで、とても人がいるようには感じられなかった。

（珍しい……あの人、いないのか？）

扉を半分だけ開けたまま、縹はその場に固まる。いつも自分を迎える微笑みがないことが、ひどく彼を動揺させた。

妙だ。こんな日中に東條が一人で出歩くことはない。団員に見つかる可能性が高いからだ。身体を動かしたい、と散歩に行く時は決まって夜なのである。シャワーやトイレなどは部屋に完備してあるし、部屋から出るときなどないはずだ。

きつと昼寝でもしているのだろう、と縹は扉を遠慮がちに大きく開く。

「……………」

途端に縹は全身を硬直させた。目が見開き、唇がわななく。身体に強い衝撃が走った。

縹の視線の先には、東條が普段使っているベッドがある。暗い室内にボンヤリと浮かぶ白いベッドの足元に、東條が座っていた。正座したまま前に身体を折り、頭を床に伏せている。腹部の辺りに納められている両腕の間から、護身用の刀の柄が伸びている。そこからは血が溢れていた。行き場を見失った生命が零れているかのよう

「……………」

縹は後ろ手で扉を閉めると、フラリと足を進める。東條の前まで来て、その場に膝をつく。東條は身体を折り頭を床に伏せているためにその表情は見えない。ただ、東條の腹部辺りからとめどなく流れてくる真新しい血潮が、つい先ほどまで彼が生きていたことを物語っていた。

誰に謝るわけでもないのに申し訳なさそうに背を丸めている東條

の背中を、縹はボンヤリと見つめていた。その瞳にいつもの鋭い眼光はなく、まるで物を映すのを拒んでいるかのように 虚ろなだけだった。

ああ、そういえばこの人の名前を呼んだこと無かったな。と頭の隅でまったく関係のないことを考える。

（勝手に、死ぬなって、言っ た つ つ の に……）

自分が間違っていたのだろうか。

四年前のあのとき 東條を助け、匿うと決意したのが間違だったのだろうか。

東條の願いどおり、処刑されるのを大人しく見ていれば良かったのだろうか。

そうすれば彼は、自ら命を絶つという決断を下すことはなかったとでもいうのだろうか。

<外伝・縹 卓之介編「誓<sup>ちかい</sup>・4」・終>

同じ言葉ばかり誓い続けた

失くさなければ気付かないから

俺の誓いがなければ

あんたは違う道を選べたのだろうか

穏やかに笑える

もう片方の道を

外伝・縹卓之介編 誓・4（後書き）

サブタイトルの「誓<sup>ちかい</sup>」、言うまでもなく縹の“自分が東條を守る”という誓いのことです。

普通こういうタイトルって前向きな話って雰囲気ありますけど、最終的に縹は自分の誓いが間違っていたのかと絶望してます。なので皮肉気味なサブタイトルとなりました。



## 第二十二話 痕

すべてを話し終えたとき、縹は喋らないのが必然のように黙りこんでしまった。その様子をフタバとまどかは微動だにせず見ている。さすがのまどかも横槍を入れるようなことは言わず、縹の語ることをじっと聞いていた。窓の外の曇り空から雪が落ちている。雪がすべての雑音を吸っていくようだった。それが室内に沈黙を招いている。

「……えーと、つまり」

絞り出すような声を発したのはフタバだった。ソファに身体を沈めながら、遠慮がちにもぞもぞと足を動かしている。

「十年前に死んだって聞かされた父さんは、六年前まで隠れながら生きてたってこと……？」

正面のソファに座る縹が頷く。彼は心の動きを少しも見せなかった。すると今まで大人しく話を聞いていたまどかが強い口調で言う。

「納得いかないわ。どうしてお父さんは自殺したの？ 六年前まで生きていたなんて そんなの、納得いかない。」

まどかの膝で拳がきつく握られる。彼女は悲痛な表情をしていた。それでも縹は無表情を決め込み、淡々と言うのだった。

「東條さんが自殺した本当の理由はもう分かりようがない。あの人

は優しくて包容力があつた。それゆえに、自分の辛さや苦悩を誰にも話したりしなかった……」

どうして自分があの人を助けてやらなかったのだろう。あの時の自分の行動、判断は間違っていたのか。結果、自分があの人を自害にまで追い込んでしまったのか。縋は今でも囚われ続けている。

<第二十二話：痕<sup>あと</sup>>

「あの、縋さん！」

団長室の扉の向こうから、可愛らしく明朗な声が届いた。それは井上<sup>きようたけ</sup> 姉弟が団長室を去つてすぐのことだった。

声の主はすぐに分かる。男だらけの教団のなかでは滅多に聞くことのない、その可憐な声。幼さが滲み出ている声色だったが、その中には冷静さも垣間見える。少し早口の独特な少女の声だ。

「……春野か、入れ。」

促すとすぐに扉が開いた。

遠慮がちに開いた扉の隙間から、ピヨコンと少女の顔が覗く。アッシュのたつぷりとした髪をツインテールにして、小動物を連想させる大きく丸い瞳が特徴ある容姿。外見は幼く、せいぜい十一、一二歳程度にしか見えない少女だ。しかし彼女 春野ひよりは一七歳であり、れっきとした第六師団長なのである。

「あのー、フタバ君たちとの話、終わりました？」

その問いに頷くと、ようやくひよりが室内に入ってきた。相変わらず小動物のような動きである。何もない床でつまづいたりしながら、縹の座るソファのもとまでやって来た。

縹はこの少女を決して侮ってはいない。最年少で師団長になった小柄な少女は、よく周りの団員にからかわれている。しかしその可愛らしい外見からは想像もつかないような頭脳を持っていることを知っている。

「無事に終わったようなら良かったです。東條さんの子供がフタバ君たちについて、ほんとにあたしの勘違いだったらどうしようかと思つて！」

ひよりが笑つて肩を揺らす。すぐに退室するつもりなのだろうか、ソファに座ろうとしなかった。縹は煙管に火をつけながら言う。

「東條さんが息子の名前を喋ったことなんてよく覚えてたな。六年も前のことだろ。つーかあの人、子供の名前をよく口走ったな。」  
「うんつ。東條さんが異世界に残してきた家族のことを話すときは、印象的だからよく覚えてるんです。」

そうか、と縹は小さく呟いた。あの人は本当に気まぐれでしか、異世界の家族の話をしなかった。自分はそれを聞くことはなかった。ひよりが少しだけ羨ましい。

ひよりはちょうど六年前、東條が自殺を図った年に入団してきた。年少ならぬ頭脳と刀の技術で最年少師団長にまで昇格した彼女と縹は、よく関わりがあつた。それゆえにひよりは東條の存在も知っていて、ときどき交流していたのである。

「春野がそれを覚えていなければ、東條さんの子供があいつらだつて事に結びつかなかつただろうからな。お手柄だぜ」

「あと、さっちゃんもね！ さっちゃんが最初に言ったんですよ。東條さんは異世界に子供がいた。フタバ君達は異世界からやって来た。何か関係あるんじゃないかってね！」

にこにこ笑うひより。 “さっちゃん” とは第二師団長の桜月さつきの事である。そうか、と縹は繰り返した。

ひよりの記憶と桜月の発言により、井上姉弟が東條の子供だと縹が確信したのはつい最近のことだ。

「あの姉弟がこの異世界に来たのは おそらく 東條さんの死と関係がある。それを国王のオッサンは隠してやがるが」

煙管の柄を使いガリガリと頭を掻く縹。 ひよりは何も言わなかった。頭のいい彼女だ。何も言うべきではないと分かっている。

「じゃあ、あたし帰りますね！ お仕事溜まってるし！」

「あ？ あ、ああ。 ついでに医務室の佐々波くんの様子を見てきてくれ。 第六師団の師団室と近いだろ？」

「はい！」

努めて明るい声を出し、足早にひよりは団長室を辞していく。

煙の臭いのする部屋を出て新鮮な空気をめいいっぱい吸った。

相変わらず日中でも凍えるような空気だ。 さて、医務室に寄っていかねければ。 そうひよりが足を進めたとき、廊下の角を曲がってこちらに向かつて来る人物に気が付いた。 ややだらしのない印象を受ける歩き方に、鬘たてがみのような髪型と金色に輝く髪色、という特徴を持つ人物はこの教団にただ一人。

「乱歩くん！」

「お、ひよりちゃんじゃないの！。めっずらしー。団長室から出てくるなんて」

やって来た人物、佐々波乱歩はすっかりいつもの調子に戻っていた。つい先日まで絶対安静を余儀なくされていたとは思えない。いつもと同じ団服を纏い、いつもと同じように飄々と笑っている。顔色も良い。先日医務室で見た時の衰弱した面影は消え失せていて、ひよりは安堵のため息をついた。

「うん、ちよつとね。例のフタバ君達と東條さんのことでお話してたの。それより乱歩くん、もう具合はいいの？ 縹さんも心配してたよー！」

「へ？ あの団長が俺のことを心配してたって？ うそーマジで？俺はもう平気だけどき、ずいぶんみんなに迷惑かけちまったみたいだからな」

それにはひよりも苦笑をこぼした。

第一師団長および団長補佐という重要な仕事を担っていた佐々波が動けなかった事で、それなりの痛手を本部は負っていたのだった。特にひより達、師団長は相当の苦勞を強いられた。

たとえば、団長補佐（佐々波本人に言わせるとただの雑用・使い走りなのだそうだ）がいない状況下で、縹の機嫌は極限まで悪かった。普段佐々波に任せてる政務も自分で行わなければならないからである。

“第一師団長”が欠けた影響はさらに大きかった。

教団の階級上、第一師団には武に長けた先鋭たちが多い。彼らを指揮する師団長が欠けたままではいいはずもなく、第二師団長の桜月

を始めとした上位の師団長たちでどうにか第一師団をまとめていたのである。

「なんだかんだで乱歩くんがいないと大変だよ。いつもは雪かきと縹さんの雑用しかしてないイメージだったもんっ」

「ひよりちゃん……サラツと身に痛いこと言うね……」

ごめんごめん、とひよりが笑う。それを横目で見ながら佐々波は呆れ気味に呟いた。

「はー。しっかし東條さんの子供がフタバとまどかさんだったなんて 偶然とは思えないな」

「あれっ？ 乱歩くんもそのこと知ってたの？」

相変わらず微妙な表情のままの佐々波はお手上げ、とても言いたげに両手を上げる。

「いや、ぜーんぜん。東條さんに子供がいた事すら知らなかった。てかあの人とあんま親しくなかったしー。八年前に俺が入団した時はすでに団員じゃなかったからなあ。団長に連れられて一、二回なら会ったことあるけど。今回の事は桜月から聞いてやっと知ったんだ」

そう言いつつも、佐々波は東條のことを良く“知っていた”。佐々波は団長補佐の任に就いてから常に縹の側にいたのだ。こっそり東條に会いに行く縹の姿を何度も見ていたし、縹は東條との出会いも話してくれた。

佐々波自身は東條と接したことは少ないのだが、いつの間にかずいぶんと身近な人物になっていた気がする。

「今の師団長のメンバーだと、東條さんの事を知ってる人すら少ないんだもんね……。」

ひよりが沈んだ様子で言った。少女は続ける。

「あたしは六年前に入団したから、ギリギリ東條さんの生きていた時期だよ。あの頃のあたし、最年少師団長とかって騒がれてたからいろいろ大変でさ、縹さんに東條さんのこと教えてもらったの。しよつちゅう東條さんのところに行って話し相手になってもらってたんだ。」

昔の光景を瞼の裏に描いているのだろうか、ひよりは瞳を伏せて穏やかな顔をしていた。そのまま少女は語るように話し始めた。東條が縹に匿われていた事実を知っていた人物を整理し始める。

「さっちゃんなんかは十二年も前から教団にいるから、東條さんとは凄く仲良かったみたい。陽炎さんも九年前に入団してるけど縹さんとの関係が複雑だったから、東條さんのことは聞かされていないと思うんだ。椿くんは――」

「つ、“椿くん”？」

ぎょつとして佐々波はひよりを見下ろした。そんな名前の団員聞いたことがない。佐々波の胸中を察したのか、ひよりが愛らしくクスクスと笑った。

「アハハッ！ 自分の同僚の名前くらい覚えておきなよ、乱歩くん。第四師団長の市川椿くんだよ。椿くんは陽炎さんと同じくらいの時期に入団したらしいけど……うゝん。縹さんが椿くんのことあんまり良く思っていないからな」。縹さん、椿くん、東條さんのことは絶対話していない気がするんだよね」

「んー、そうだよなー。団長と深く関わりがあつた奴しか東條さんの事は知らないんだよな」

東條が縋に匿かくまわれていたことを知っているのは、六年前以前に入団した者、そして縋からその事実を聞かされるほど彼と親しかった者だけだ。

ひっそりと教団から存在を消した東條。彼が異世界に残した子供たちが、数年の時を経て父の世界へと呼ばれてやって来た。それにはどんな理由があるのだろうか？

二人はそのまま別れた。政務があるため、二人とも慌ただしげな別れとなった。

去り際にひよりは思い出していた。東條が異世界にいる子供の話をする時の穏やかな笑顔。寛容で優しい笑顔を見せる人だった。そんな表情をする人が、なぜ自殺などしてしまったのだろう。ひよりにには未だに分からない。

東條の事件によって教団は“こういう所”だと思い知らされたという事実だけが、ただ虚しく残っている。

< 2 >

団長室を辞してからというもの、フタバとまどかはひどい混乱に陥っていた。自室に戻ってきてても会話を交わさない二人。フタバはベッドの上であぐらをかきながら背を丸めて縮こまり、室内を落ち着きなく歩き回る姉を心配そうに見つめている。まどかはというところ。



「本当にどうかしてるわ、お父さんも、私たちをこの世界に呼んだ王様も！ お父さんが自殺したなんて そんなこと信じられない 縹卓之介を責める気はないわ。あの人はお父さんを助けるために匿ってくれたんだから。でも それでもお父さんは自殺したのよ！？ お父さんが事故で死んだって聞いて、お母さんも自殺したんじゃない！ それなのに父さんは自殺だったなんて、お母さんが可哀想だわ。お父さんの事件の裏には、絶対 絶対 王室含め教団が関わってると思うの。」

早口で言いきったまどかは、どかりとソファに身体を沈めた。いつも能天気な彼女らしくない、切羽詰まった様子だ。フタバはそんな姉がなんだか怖くて沈黙を守っている。

「ねえフタバくんはどう思うっ？ お父さんのこと。今までずっと隠されてたんだよ、自殺してたこと！」

出しぬけに言われて、フタバはハツとして姉の方を見た。まどかはソファから身を乗り出すようにしてフタバに質問を投げかけていた。

「そりゃ……自殺で死んでたっていうのはショックだけど」

発した声は少し怖気づいていて、我ながら情けないと思う。しかしまどかはそれを気にもせず、先を促すように大きく頷いた。

フタバは続ける。

「そ、それよりも、姉ちゃんと俺がこの世界に呼ばれた理由の方が問題だよ。父さんの自殺はただの自殺じゃなかったことだろ？」

「フタバくん」

「今さら怒ったって仕方ないよ！ だ、大事なのは、俺と姉ちゃん

が早くもこの世界に戻るってことだと思う……けど……」

最後の方は尻切れ蜻蛉になってしまった。まどかの様子を気にしながら自信なく言葉を紡いでいったせいだ。

姉の機嫌を伺いながらの態度を示すフタバに対し、まどかは弟の発言に感銘を受けていた。まだ十一歳の弟の言葉はまどかの心に深く刻みつけたのである。過去の事件にばかり捉われていた自分に対し、フタバは“これから”が大事なのだと言った。姉弟二人で無事きょうだいにもとの世界へ帰ることが今、なにより大事だと。

まどかはヒステリックに陥っていた自分を咎める。同時に、十歳近く年下の弟がいつの間にか立派に成長していることに深い感慨を覚えた。

「そうよねフタバくん……。ごめんね、お姉ちゃん、馬鹿だったわ。お父さんの事も大事だけど、私が今一番大事なのはフタバくんだもの。」

まどかは言いながらソファから腰をあげて、ベッドに座るフタバに近づいた。未だにフタバは情けなく眉を下げた顔をしている。その表情はまだまだ幼い。まどかがクスリと笑った。

「なんてったって、フタバくんとは私はふたりっきりの姉弟だもんね！」  
「うわっ」

フタバが声を上げる。ベッドの淵に腰を落ち着けたまどかが、突然フタバに抱き着いたからだ。重い、痛い、と抗議の声をあげたフタバだったが姉が聞くはずもなく、ぎゅっと抱き着かれたままだ。しばらくして諦めたフタバが身体の力を抜くと、ようやくまどかが腕の中からフタバを解放する。

そしてフタバを真正面から見据えて、花が飛ぶような満面の笑みをこぼした。

「私ね、今はフタバくんがいてくれればいいよ。フタバくんはまどかお姉ちゃんを守るからね。無事に元の世界に戻れるように。」

「そうだよ姉ちゃん。今は二人で帰ることが一番大事だよ」

そこで会話は止まってしまふ。まどかは返事を返さず、窓のほうに視線を移していた。窓の外の雪は止む様子はない。儚いようで、しかしポトポトと無邪気な音を奏でて窓ぶちに積もっていく。千年王国に来てから数週間　今では見慣れてしまったこの景観。まどかとフタバは沈黙を保ったまま窓の外を見つめていた。

「よく降るなー。佐々波さん動けないのに、雪かき、どーすんだろ？」

ぼつりとフタバが言う。純真無垢なその声。まどかは眉を寄せ、唇をぎゅっと結んだ。何かに耐えているような険しい表情だった。その様子にフタバは気付かない。まどかは思った。フタバは本当に、淀みを知らない子だ。“こんな”教団にいていいような少年ではない。

（フタバくんは　フタバくんは私が守る。出来ることなら、今すぐにも無事に家へ帰りたい　）

淀みを知らないうちに。汚れを知らないうちに。フタバは絶対に元の世界へ戻らなくてはならない存在だ。まどかは強く思っている。戦争に巻き込んで命を落とさせるわけにはいかない。自分が守っていかなくては、とまどかは胸元で拳を握る。

（必ず、もとの世界へ戻るのよ、フタバくん……）

たとえその時に、自分はついて行けなくとも。

<第二十二話「痕<sup>あと</sup>」・終>

## 第二十二話 痕（後書き）

サブタイトルの「痕」<sup>あと</sup>は、縹が東條の事件を語ったあとのお話なので、「東條の事件が残した傷痕」という意味で。

東條の死の責任に捉われ続けている縹、東條の死がひよりの心に残した“教団の非道さ”の事実。

そして父の自殺が与えた井上姉弟の混乱<sup>あと</sup>。

東條の事件が残したそれらの痕<sup>あと</sup>をサブタイトルに採用。

## 第二十三話 宣

その夜はよく晴れた。雪を降らせていた曇り空は裂け、そこから星が輝いている。儚いようで、しかし、何億年を輝いてきた自信に満ち溢れる星々がそこにはあった。

団長室への来客は今日一日だけでもめまぐるしいものだった。昼前からいた井上 姉弟きょうだい、それに代わるようにやって来た春野ひより、そしてひよりの後に入室してきたのは佐々波乱歩ささなみだった。

彼はリリスによつて麻薬を嗅がされて以来　ここ数日、床に臥せていた。それゆえに主な仕事場である団長室に姿を見せるのは久しぶりである。そんな佐々波は、ひよりが団長室を去った昼過ぎにやって来て、この夜更けまですつと仕事をしていた。彼の団長室での仕事というのははつきりいえば縹はなだかやるべき執務が主だったりするのだが、文句を漏らさず淡々と仕事に励んでいる。いつもの事なのだが、何せ佐々波は病み上がりの身だ。そんな彼に自分の仕事をやらせている縹はいささか申し訳なさにしていた。

「……佐々波君。」

「んー？ なんすかー？」

「ようやく動けるようになったばかりだろう。もう少し休んでいたらどうだ」

縹は窓辺に寄りかかり、煙管を吸いながら言った。普段から雑用ばかり任せてしまっている佐々波に対しての労いの言葉のつもりだったのだが、それを佐々波は笑って飛ばした。

「だーいじょうぶっスよー。いつもの事じゃないですかー」  
「……ま、まあな。」

佐々波は資料に捺印を施しながら言う。その作業は手際よく、彼が万全の調子に戻っていることを知る。

縹が何か言いたげに口を開閉していると、それに気付いた佐々波が捺印を終えた資料を整えながら明るい声を出した。

「あつ！ ひよつとして俺のこと心配してくれてるんですか？ めっずらしー事もあるもんですね。ひよりちゃんの言ってた通りだ」

ケラケラと笑う佐々波。縹はバツが悪そうに口を噤んだ。どうやら心配無用だったらしい。考えてみれば佐々波は第一師団長なのだ。責任感も人一倍あるのだろう。少しのことで休むわけにはいかない、ということか。

捺印を終えた資料を棚に仕舞っている佐々波の背を見ながら、縹は落ち着きなく煙管を弄る。落ちた灰が床のカーペットを汚す。それを漠然とした気持ちで眺めて、縹はようやく口を開いた。

「佐々波君。病み上がりのところ悪いが 頼みがある」

すぐに佐々波が振り向いた。鬘たてがみのように立てた金色の髪が揺れる。それは夜目に眩しかった。

視線だけで言葉の先を促す佐々波。縹は静かな声でゆっくりと告げた。

「第三師団長の陽炎かげろうと、第八師団長の月本を連れて来てくれ。佐々波君、君もだ。その三師団で黒の国へ向かってもらう。目的は『ソ

ワール魔導衆』の誰か一人を生け捕りにしてくることだ　　今すぐだ、今すぐ二人を呼んで来い」

“生け捕り”という言葉が、特別な響きを持って佐々波の耳を打った。

<第二十三話：宣<sup>せん</sup>>

その頃、自室で就寝の準備をしていた陽炎<sup>かげろう</sup>は寝着用の薄手の着物に着替えたところだった。真っ白なその着物は白装束を彷彿させる。夜空に瞬く星が窓から淡い光を差していた。陽炎は眉をひそめてサッとカーテンを閉めた。

雲が裂けて晴れた空は好きじゃなかった。雪が降る曇り雲や、大地に影を落とす暗い空が好きだ。　　しかし本当のことを言うと、晴れた空の下にいる自分が気に入らないのだ。数年前まで空を仰げない生活を送っていた自分が、いまさら光に晒されるのはひどく罰あたりな気がする。

ベッドに身体を横たえたところで、自室の扉をノックされる音が響いた。訝しげにベッドから起き上がると、手近にあったランプに火を灯す。陽炎の艶やかな顔が暗がりにはんやりと浮かび上がる。

「どなたでございますか」

控えめに聞くと、扉の向こうからすぐに返事が返ってきた。

「あ、佐々波つす。こんな夜中にすみません」



「 佐々波 殿？<sup>どの</sup>」

扉を開ける。そこには団服のままの佐々波が苦笑を漏らしながら立っていた。

「もう動いても大丈夫なのですか？」

「ん？ あ、はい。もー平気っすよ。」

「それで、どうなされたのです？ あ の そのう まさか卓之介様に何かあったのですか？」

佐々波は慌てて首を振った。自分が訪ねてきた事と鰐が結びつく辺りはさすがに陽炎だ、と思う。

「団長は別にどうともないっすよ。ただの命令ですよー」

「 命令でございますか？ こんな夜更けに？」

急に真面目な顔になって佐々波が頷いた。それを見た陽炎も重大な命令が下ったのだと知る。陽炎は佐々波が口を開く前に、強く言った。

「すぐに着替えます。そしてすぐに団長室に参ります」

二人はそのまま別れた。扉が閉まったと同時に陽炎は寝着を脱ぎ捨て、そのしなやかな身体を晒すと、いつもの大輪の花が咲く着物に着替えなおした。

ベッドの乱れを直しもせず部屋を飛び出て、一階の団長室を目指して本部の階段を駆け降りる。二階の踊り場に出たところで、廊下を駆けてきた月本 草音<sup>くさね</sup>と遭遇した。

「姐さん<sup>あね</sup>っ！？」

「草音？」

その場に立ち止まるとすぐに草音が駆け寄ってくる。草音の自室は二階にあるのだ。団服を羽織りながらやって来るのを見ると、今しがた部屋を出てきたばかりなのだろう。

草音は陽炎の傍に来ると、息を切らしながら言った。

「あの……あの……もしかして、佐々波さんに呼ばれました？ えっと……団長さんから命令が下ったって……」

「ええ、先ほど佐々波殿が部屋に。草音、お前も？」

「は……、はい。どうやら私と姐さんと佐々波さんが呼ばれたようです」

相変わらず動揺しながら話す草音は、ずり落ちてきた眼鏡を落착きなく直していた。

こんな夜中に師団長を三人も呼ぶ命など始めてのことだった。それほど重要な命令らしい。

「とにかく卓之介様のところへ。佐々波殿ももう団長室に居るでしょう」

草音は力強く頷いた。

< 2 >

陽炎と草音が団長室に辿り着くと、すでに佐々波と縹が待っていた。縹は部屋の中央に置かれたいつものデスクに座り、佐々波は応接用のソファの一角に腰を落ち着けていた。縹の持つ煙管から立ち上る煙で室内はけぶり、白く暈けている。煙の臭いが二人の鼻を鋭

く刺した。

二人が入室すると同時に縹が言う。

「ああ、来たか。こんな夜中に悪いな。適当に座れ」

二人は佐々波の向かい側のソファに腰を下ろした。団長室は異様な空気に包まれていた。妙な緊張感。いつもは縹の傍に立って仕事をしたり補助をしていたりする佐々波が、普通にソファに座っているという光景も珍しかった。

どんな任務を言い渡されるのだろうか。陽炎と草音は何も言わずに縹のほうをじっと見つめていた。

「さっそくだが任務の話だ」

縹の鋭い声が響き、ピンと張った空気がさらに張りつめた。縹は三人の顔を一人ずつ見渡すと、ゆっくりと話し始めた。

「佐々波君が師団長の第一師団、陽炎が師団長の第三師団、月本が師団長の第八師団。この三師団で黒の国へ向かってもらう。『ノワール魔導衆』の屋敷へ侵入し、魔導衆のメンバーを一人捕らえてくるんだ」

とたんに布擦れの音をさせて陽炎が身を乗り出した。他の三人の視線が彼女に集まる。

「卓之介様、捕らえてくるとは？ 教団へ連れてくるという意味でございますか？」

「ああ。殺すんじゃない、生け捕りにしてくるんだ。陽炎なら覚えているだろう。この前、陽炎と市川と井上フタバで魔導衆の偵察へ行ったとき。奴らは、俺らが偵察を企んでいることを始めから知

っていただろう」

言われて陽炎は記憶を探った。あの夜、偵察のために三人で魔導衆の屋敷へ足を踏み入れたとき、ローズという猫耳と尾を持つ幻獣の少女に迎えられた。

そして少女は言った。“サタン様はすべて知っている。教団が偵察に来ることも、井上姉弟が千年王国に呼ばれた理由も”と。あの時、偵察がバレていると知った三人はそのまま退却した。そのとき得た情報は魔導衆のメンバーがたった九人だけという事実だけだった。

「確かに、魔導衆らはわたくし共が偵察に来たことを既に知っていました」

「それがおかしいんだ。俺が命令してすぐに偵察に向かったにも関わらず、奴らには任務内容がバレてたって事だ」

そこで佐々波が口を挟んだ。

「……んで、魔導衆のメンバーを一人捕らえて、吐かせるってわけっすね。どーやって教団の内部情報を得ているのか。どこまで教団の秘密を知っているのか。」

場にそぐわない飄々とした口調に縹は眉をしかめたが、言い分はその通りだったので頷く。

「そうだ。奴らは魔術を使うからな。どんな術を駆使してこっちの情報を得ているのか分かったもんじゃねえ」

「そ、それは確かでございますが、三師団で行動するとなると人数は百人ほどになってしまいます。そんな大人数で任務を遂行するとなると、魔導衆の者共にすぐに動向を察せられてしまうのでは

「ありますまいか？」

そう陽炎は言った。一人を生け捕りにしてくるには、なるべく忍んで任務を行うべきだ。どうせなら一師団のみで向かうか、以前のようには師団長数人だけで向かうかにした方がいいと思ったのだ。

しかしその危惧を縹は否定した。理由は言わなかったが、とにかく三師団で向かってほしいのだと。その答えに陽炎は納得いかないようで、表情を歪めている。だが、そのやりとりを眺めていた佐々波には縹の言わんとすることが分かっていた。伊達に団長補佐を務めているわけではない。

（この任務の行動が向こうにバレるのは想定済みってわけか。別に忍んで行く必要もないってことだ。こりやもう衝突必須かな？ 小戦闘が起きる可能性が高いから、大人数で向かえってことねー。）

と考えると、佐々波はこっそり舌を出した。黒の国とは大昔に戦争をしたのみで、近年、直接衝突した事はなかった。千年王国の二大大国は刃を交えなくとも冷戦状態だったのである。今回の任務で小戦闘が起きることは、実質宣戦布告のようなものだろう。

病み上がり早々に重大任務だな、と呑気に佐々波は考えていた。

「明日の朝、さっそく向かってくれ」

縹のぴしゃりとした声が飛んだ。陽炎はやはり忍んで任務を行った方がいいと思っっているらしく、夜ではなく朝に決行することが不安のようだった。先ほどから膝の上で握った拳をもぞもぞと動かし、縹に意見しようとも出来ず、床と縹との間で視線を行き来させている。その隣では草音が心配そうに陽炎の方を見やっていた。

「話は以上だ。分かっていると思うが 団員には武器を持たせて

行け。もし、お前ら三人の師団長の誰かが“欠ける”ことがあったらすぐに任務中止して戻ってくるんだ。」

そこで話は終わった。縹は質問を受け付けようとしなかった。佐々波は陽炎と草音を自室に帰したあと、おもむろに縹のほうを見た。彼は窓辺に立っていて背中しか見えなかったが、手にした煙管を一向に吸う気配がない事からして考え事をしているようだった。彼が見下ろす窓のしたには中庭が広がっている。夜の帳とほじに包まれた景色を見る縹の姿は見慣れたものだ。

佐々波は何も言わなかった　ただ、縹の命令に随行するのが己の役目なのだ。

<第二十三話「宣<sup>せん</sup>・終>

## 第二十三話 宣（後書き）

サブタイトルの「宣<sup>せん</sup>」はそのまんま、宣する・宣言・宣戦布告の“宣”です。

それにしても主人公姉弟の出番が皆無……。

## 第二十四話 閑

<第二十四話

閑しずか>

黒の国。

千年王国の中央に位置するその国は、軍事大国の白の国と並ぶ大国として知れ渡っていた。国面積は広いのだが、その大半は殺伐とした荒野となっている。

そして魔術の使用を許可している数少ない国のひとつであり、神官や魔導士が集まり修行をする場所としても知られている。兵力や軍機は皆無だったが、魔術を駆使してこれまでの戦争を勝ち残ってきた。ただ、白の国とは未だに冷戦状態が続いている。

魔術が栄えている証として、黒の国を統べる王であるサタンは第一級の魔導師である。国民はサタンの姿を見たことはなく、謎に包まれた王として君臨していた。そのサタンは国王と国家護衛団の団長を兼任しており、彼率いる『ノワール魔導衆』も国民にとっては謎の存在であった。国王を取り囲む魔導衆のメンバーがたった九人しかいないという事も所以の一つである。

「……でっ？ あたしを呼んだ理由っていつのは何なの？」

苛立たしげにリリスが言った。胸元で腕を組み、眉をきつく寄せている。もとからキツめの顔立ちがさらに強面になっていた。

リリスはこの夜更けに呼び出され、いつもメンバーが集まる広間にいたのだった。彼女の前には中年の男がひっそりと佇んでいる。



紺色の燕尾服を纏い、濃い髭を貯えている妖しげな風貌の男だった。  
男は年齢の割には若く紳士的な声で言う。

「ふん。どうせ最近、サタン様にお呼び出しされていないのだろう。  
何のための側近そっきんか分からぬな　リス」

「なつ、何よ！　アンタに関係ないでしょ、ルシファー！　あのお  
人は今、忙しいのよ！」

「ほう、サタン様はお忙しい時に側近を呼ばない珍しい国王という  
事であるか」

その皮肉にリスは悔しそうに唇を噛んだ。ルシファーという男  
は“こういう男”だった。魔導衆の中でも一番の年配者であり、知  
識も教養もある紳士的な男性だ。それゆえに若くして国王の側近を  
務めるリスによく嫌味や皮肉を言うてくる。

はつきり言つて、リスは敬愛するサタンに近づきたいがために  
側近の座を無理やり得たようなものだ。まだ歳若い自分が側近の器  
量があるとは悔しいが思えない。サタンに一番歳が近く、政治や魔  
術全てに長けているルシファーの方が側近に向いている。

「あ……あたしがサタン様に必要とされていないと思ってるんでき  
よ」

プイ、と余所を向いて乱暴に言った。するとすぐに笑い交りの返  
事が返ってくる。

「あの方は何も必要としていない。私も、リスも。」

「　　っ！　あ、あたしは……っ」

「ふん。必要とされたいのならもっとまともな働きをしたらどうだ  
？　この前　白の国の師団長のひとりを負傷させたと聞いたが、  
それくらいでサタン様の役に立ったとぬか喜びしているのではある

まいな？　その時、リリスはその師団長を殺してくるべきだったのだ」

ルシファアの言葉に、もはやリリスは反論出来なくなっていた。

“あのとき”、佐々波に魔女の麻薬を浴びせられたことだけで充分だと思ってしまったのだ。フタバに投げられたリンゴのせいで髪が汚れたと、いうだけで退却してしまった自分の愚かさに今更ながら呆れ返る。

「あ、あたしだってちゃんとサタン様のお為になろうと必死なのよ！　でっ！？　さっさと用件を言ったらどうなのよ！」

甲高く耳に障る声で怒鳴るリリスに、ルシファアは眉をひそめた。泰然として礼儀をわきまえた態度を良しとする彼は、かねてからリリスの高飛車な素行を卑しく思っている。

ルシファアは笑みすら浮かべて、ゆっくりと話し始めた。

「白の教団が動き始めたようだ　今夜中か、明日の早朝。この屋敷にやって来るだろう」

「あつそ！　“あの子”に視<sup>み</sup>てもらったのね。どーせまた偵察か何かでしょ。前だってそうだったじゃない。ローズがちよつとからかったら退却しちゃったみたいだけど」

相変わらずルシファアから視線を外したままリリスが答える。ルシファアは口角を上げて妖しげな笑みを浮かべた。

「いや、今回は違うらしい。詳しい目的は分かんが、大人数を引き連れて来るそうだ」

パツ、とリリスの顔が上を向き、猫に似た金色に光る瞳がルシフ

アーを捉えた。

「大人数？　どういうこと？　まさかアイツら、本格的に戦争始めようっていうの？」

「おそらく。宣戦布告のつもりだろうな。白の国は翠の国と戦争中だと聞いたが　もう勝敗は決まっているだろうし、时期的にもそろそろ大規模な神権戦争を勃発させてもよい時期だ」

言いながらルシファアは立派な髭を摩る。顔には高尚な笑みが浮かんでいた。リリスもツインテールにした細かいウェーブの黒髪を弄りながら、形容しがたく表情を歪めている。

会話が途切れるとルシファアはリリスに背を向けた。一面、黒に塗られた広間の床を靴の音を木霊させ歩く。

「私はこの事を知らせただけだ。サタン様はレヴィアタンから直接聞いて、すでにその事は知っている。『一応側近』のリリスにも伝えておこうと思っとな。」

そのままルシファアは広間を出て行った。黒く大きなアンティーク風の両開きの扉が閉まる。淡い紅色の照明が灯るシャンデリアの明かりに、リリスの悔しそうな顔がぼんやりと浮かび上がった。リリスは赤く熟れた若々しい唇をギリリと噛む。ここにローズがいれば八つ当たりできたものを　こんな時に限って、あの妬ましい程に純真で無邪気な幻獣の少女はいない。

（あたしがサタン様の側近にふさわしくないなんて……そんなの、あたしが一番分かっているわよ！）

分かっているのに、それをあの男　ルシファアに嫌味混じりで言われるのが気に入らないのだ。悔しいがルシファアの年配ゆえの

博識さや有能さは、サタンに信頼を寄せられている。それをルシファー自身も自覚していて、あえてリリスに皮肉を言ってくる。それが悔しくてたまらないのだ。

嫌な気分を早く忘れない。リリスはさつさと自室に戻ろうと広間の中で歩みを進める。ルシファーが出て行った扉に手を掛けたところで、ちょうどその扉が開けられた。突然のことで固まるリリスの前　扉の開いた隙間から顔を覗かせたのはひとりの少女だった。

ローズよりも年上で、リリスよりもやや年下といった容姿の少女だ。思ったよりリリスが至近距離にいたので彼女も驚いたようだ。肩まで伸びた黒髪がセミロングが揺れる。至って普通の大人しそうな少女だが、その右目には黒い眼帯が禍々しい存在感を放っていた。

「あ、ごめん……急に開けて」

少女は頼りなさげに言った。それを聞いてリリスが乱暴に言い放つ。

「な、何しに来たのよ、レヴィー!？」

「リリスがここにいて、ルシファー様から聞いて。その……サタン様に“わたしが視たこと”を報告しに行つて来たの。そのことをリリスにも伝えておいた方がいいって……」

リリスは心底嫌そうに口を尖らせた。

「その事ならついさっきルシファーから聞いたわよ！　ふんっ。良かったわねえ。サタン様のお役に立てて！　あんたはいいわねえ、その“邪眼<sup>じゃがん</sup>”を使えば簡単に敵の動きを探れて、簡単に敵を殺せるんだがら！　レヴィ、あんたはなんの努力をしなかったって、あんたは何も意識しなかったって、ただ敵と目を合わせればいいんだもの！」

「リリス。そんな、わたしは」

レヴィと呼ばれた少女、レヴィアタンは胸の前で手を握って揉みしだいている。何か言いたげに口を動かすが、リリスの様子があまりに苛烈なので何も言えないでいた。

『ノワール魔導衆』のひとりであるレヴィアタンは、相手を見つめれば呪いをかけることの出来る“邪眼”を宿す少女である。通常、魔導衆のメンバーはリリスの麻薬を始めとした魔術を駆使するのだが、レヴィアタンの邪眼は魔術の中でも『無意識に発動される魔術』の類だった。

邪眼を宿す右目で他人の瞳を捉えれば、レヴィの意思に関係なくたちまちその者は死に至る。死に至らなくともさまざまな呪いをかけることが出来るのだ。たとえば味方でもその右目で見つめてしまえば呪いをかけてしまう。それゆえにレヴィは右目に眼帯をして、必要な時にだけその封印を解くのだ。

また、その邪眼は遠くの情景を透視する千里眼の能力も持つ。レヴィが念じれば簡単に透視出来るとあって、白の国の内部情報を知るための価値ある能力だ。レヴィの右目のおかげで彼ら魔導衆は戦況を有利に進めることが出来る。それゆえに彼女の能力はメンバーから一目置かれており、それがリリスのプライドを逆撫でするのだ。

「リリス、どうしよう。その、もうすぐ白の教団の人たちが来るから わたしたちはどうしたらいい？ サタン様はリリスに指示を仰げっておっしゃっていたの。」

レヴィに向けた背をピクリと揺らしてリリスは反応した。サタン様が自分の指示を聞けとレヴィに言った。という事は、少なからず自分は信用されているのだ。荒れていた気持ちが収まっていくのを感じる。

先ほどまでとは打って違って上機嫌にリリスは答える。

「あんたは出なくていいわよ。どうせ邪眼しか能がないんだから、実戦ではなんの役にも立たないし！　そうね、教団の連中は大人数で来るって言うてもただの宣戦布告みたいだし、立派な武装はしてこないと思うから　……、そうねえ、明日にでもベルフェゴールを呼んでおいて。あいつの能力なら一人で充分でしょ。きっとサタン様も姿を現わされると思うから」

レヴィは情けない表情のまま頷くと、足早に広間を出て行く。その後ろ姿を、リリスは唇を噛みながら見送っていたのだった。

< 2 >

「はあ……」

大理石の廊下をとぼとぼと歩くレヴィアタンはため息をこぼす。遠くの情景が透視できる便利な“邪眼”を持ち、サタンから頼られているレヴィ。リリスに嫉妬されることはよくあるのだが、今日の嫉妬は一段とひどいものだった気がする。

（リリスってば言い方キツイんだから……。はあ、疲れた……）

屋敷のらせん階段を上り始める。時刻は真夜中で、窓から月明かりひとつ見えない。屋敷内に照らされたわずかなランプだけがぼんやりと灯っていた。

レヴィは黒の国の幹部とは思えないほどに“普通の”少女だ。邪眼の魔術さえなければ、ノワール魔導衆のメンバーになどなっていない。なかったであろう。それにレヴィが魔導衆に迎えられたのには“ある特別な理由”がある。他言はしないが　レヴィは、自分が魔導

衆のメンバーであることに嫌悪感を抱き続けてきたのだ。

（ベルフェゴールのところに行ってリリスの伝言伝えなきゃ……）

虚ろな眼差しのままレヴィはフラフラと廊下を歩んでいく。その右目の黒い眼帯が、蠟燭の不気味な明かりによって禍々しく浮かびあがっていた。

< 3 >

一晚経った白の教団では、一見いつもと変わらぬ日常のなかにも微妙な緊張感が漂っていた。それは団員たちの中で“ある噂”がささやかれているからである。

（今日は教団中がソワソワしてるなあ……なんかあったのかな）

フタバはどこか上の空でそう考えていた。フタバは早朝から佐々波に雑用仕事を任されている。中庭の雪かきの仕事だ。いつもは佐々波が一人で行うが、フタバが手伝って二人で行うかなのだが

今日の佐々波は他の任務があるらしかった。いつまで経っても途絶える気配のない粉雪を頭からかぶりながら、フタバは雪かきの作業を中断する。中庭に面している本部の廊下の窓から中を伺う。行き交う団員たちはやはりどこかおかしい。声を潜め、真剣な面持ちでコソコソと会話しているのだ。

団員の行き来が激しい廊下を中庭からぼんやりと見つめていると、その中にある人物を見つけた。

「あつ……？ さつ、桜月さんっ！」

窓の向こうの廊下を横切っていくのは第二師団長の九十九つくも 桜月だ。女性がほとんどいないこの教団の中で、桜月の長い黒髪が靡く様子はひどく目立つのですぐに発見できた。

フタバが声をあげてもその声は桜月に届くことはなかった。フタバは窓を隔てた中庭にいるのだから仕方のないことなのだが……。そのまま桜月は廊下を進み、玄関ホールのほうへ行ってしまった。擦れ違う団員たちが慌てて会釈している。

フタバは思わず中庭を駆けていた。中庭と本部内を繋ぐ渡り廊下を通り、本部内へと足を踏み入れる。遙か先に桜月の後ろ姿が見えた。

（そうだ、教団の様子が変なこと、桜月さんに聞いてみよ！他に聞ける人いないしな！）

急いで桜月を追おうとしたとき、近くを往来している団員たちの会話が耳に飛び込んできたのだった。

「ど、どうしたんだろ。九十九第二師団長。な、なんか今日おつかないな……」

「ああ。いつもなら挨拶すれば笑って返事してくれるのによ」

「きつとアレだよな。アレ ほら、聞いただろ？ ついに黒の国に宣戦布告するらしいぜ。今朝、もうすぐにでも黒の国へ武装して向かうらしい。俺ら第四師団には命令されてないけどよ。どうやら第一師団、第三師団、第八師団の連中が命じられてるらしい」

フタバはハッとして足を止めた。

「や、やっぱり本当なんだなその噂。つーか最初の戦闘に向かうのが俺たち第四師団じゃなくてマジ安心したぜ……。な、なんたって俺



たち第四師団は市川師団長だからな。そんな重大な任務失敗したら何言われるか分かったもんじゃないよ……」

「まあな。それにしても教団の雰囲気もヤバくなってきたな。ついに黒の国との冷戦状態が無くなるっつーんだから仕方ないかもしれないねえけどさ」

団員達はそのままフタバから遠ざかっていく。フタバは去っていく彼らの背をじっと見つめていた。口は驚きのせいでポツカリとだらしく開いたままだ。

（黒の国との戦争が始まるってこと？）

その場でむずむずと身動きして、フタバは思い出したように走り出した。桜月の後を追う。どういう事態になっているのか、一刻も早く詳しく聞きたかった。そして姉のまどかに伝えなければ。戦争など始まってしまえば、元の世界に帰れなくなってしまうかもしれない。それに 戦争に巻き込まれてしまったら、最悪の場合……。

そこまで考えを巡らせたとき、フタバの視界には、玄関ホールを横切り団長室の方面へ歩いていく桜月が見えた。はなだ縹に会いに行くのか。フタバは気付かれないように後をついて行く。こういうところはフタバとまどかの姉弟で似ているものである。

団長室の荘厳な扉がそびえる廊下を曲がったところで、ピタリと桜月がその歩みを止めた。

「お久しぶりですね、フタバ君。」

「……………ッ！」

バレてる。フタバに背を向けたままの桜月だが、確かにフタバの存在に気付いている。フタバは申し訳なさに廊下の陰から姿を現

した。同時に桜月もこちらを振り向く。いつもの微笑みとは違う、真剣な眼差しの桜月の表情とぶつかった。

「あ、あの、えーっと、桜月さん、その、オレ……」

「そんな顔しなくて大丈夫ですよ。何か私に用事があったのでしょ  
う?」

「あー……、うん。まあ。」

正直にそう答えると桜月がようやくニツコリと笑った。それに安心したフタバは自ら話を始める。団員たちが噂していたことだ  
黒の国への宣戦布告が行われ戦争に突入する、と　その詳細を聞  
きたいのだと、素直に打ち明けた。

すると案外あっさりと桜月はそのことについて答える。

「もうフタバ君の耳に入ってたんですね。ええ、黒の国との冷戦状態  
は、ついに直接戦争へと発展してしまうわけです。つい先ほど、佐  
々波さんと陽炎さんと草音ちゃんが率いる師団が本部を発ちました  
よ」

「そ、そうなんだ……」

フタバはその話を、どこか夢うつつに聞いていた。

「安心して下さい。フタバ君とまどかさんは私たちが守りますから。  
本部が狙われる可能性もいずれ出てくるでしょう。そのときはお二  
人にきちんと避難先を用意します」

「そ、それはいいんだけどさ……その、桜月さんとか、佐々波さん  
とか、みんなは……戦争に行くんでしょう?　その　やっぱり  
死んじやったりする危険とか、あるの?」

フタバは恐る恐るそう尋ねる。その質問に桜月は目を見張ったが、

すぐに穏やかな表情に戻った。しかし穏やかの中にも深刻さを隠しているような、複雑な顔だった。

「死ぬ危険ですか。そうですね、私達は国家護衛職に携わる者ですから、王室を守るために常に死とは隣り合わせですよ。王室と“神”を守って死ねるなら立派な殉死です。」

淡々と、説明的な口調でそう告げられる。

「そ、そーなんだ。で、でも、なんか……桜月さんはあんまり任務に行かないから安心だね。ほっ、ほら、いつも任務に行かされてるのって佐々波さんや陽炎さん達じゃん？」  
「えっ？」

緊張感の漂う空気を打開したくて、どもりながらフタバが放った言葉は桜月をひどく驚かせた。フタバの言葉に目を見開いた桜月の顔を見て、言った本人のフタバが逆に面食らう。“何かオレ変なこと言った？”と慌てるフタバの前で、桜月は微笑んでいた。その笑みは顔に張り付いているかのような違和感があり、恐怖すら感じるものだった。まるで笑顔を演出しているようだった。

無理やり作っているかのような桜月の微笑みを前に狼狽するフタバ。ふいに桜月が口を開いた。

「そうですね。　　はなだ縹さんは、私を任務に出すことが嫌なようですから」

やはり彼は微笑んでいる。フタバは自分の発言が桜月にとっては禁句だったことをようやく悟った。

「ど、どーいうこと？」

すると、今まで曇っていた桜月の表情がパツと明朗さを増してフタバの瞳に映った。どこか晴れ晴れとしたような　どこか開き直ったような、そんな面持ちだった。そんな桜月の顔をじつと見てみると、桜月はすばやく答える。

「私は縹さんに必要とされていないという事なのでしょう」

フタバは目を見張った。なぜ桜月がそんなにも清々しい顔でそう言うのか　幼いフタバには理解しがたいものだった。

二人の間には妙な空気が流れていた。肌を感じない風の音が聞こえるほど静かで、フタバは喉が乾いていくのを感じた。　雪が降っている。任務に赴いた佐々波の代わりに雪かきをしてやらねば。そう考えるのだが、恐いほど静かに微笑んでいる桜月を前にして、フタバは身じろぐことすら出来ないでいるのだった。

<第二十四話「閑<sup>しずか</sup>」・終>

## 第二十五話 綾

団長室へと消えた桜月に取り残されたフタバは、茫然と廊下に立ちすくんでいた。肌を刺すような寒さを感じるものの、動くことが出来ずにいる。フタバの脳裏には桜月の言葉が消えることなく浮かんでいた。『私は縹はなださんに必要とされていないという事なのですよ』  
『そう彼は言っていた。あれはどういう意味だったのだろう？』

混乱したまま踵を返したフタバは、振り向いた途端にある人物の視線とぶつかった。

「久しいな、井上フタバ君。」

「あっ！」

驚きのあまり声を上げたフタバの視線の先には、いつから背後にいたのだろう、早乙女 炎えんが佇んでいたのだった。早乙女炎 井上姉弟が覗き見た入団試験において謎の術を、使い縹や佐々波たち試験官を当惑させた人物である。

<第二十五話：綾あや>

隈に縁取られた不健康そうな瞳がじっとフタバを見下ろしている。整えもせず伸ばされている黒髪が、こけていて病的に白い早乙女の輪郭を縁取っていた。以前の紺色の着流しは身につけておらず、支

給されたのだろう団服を着込んでいる。ボンヤリとその場に佇む長身のその姿は気味悪いことこの上ない。

この人苦手なんだよな……と内心思いながらフタバは重い口を開いた。

「久しぶりだね……いや、久しぶりデスネ……早乙女さん……」

「ようやく私の顔を覚えたかね」

「はあ、まあ。」

悪い意味で特徴的な早乙女の容姿は、嫌でも記憶から消されないだけなのだ。

フタバはこの青年に恐怖感を覚えていた。入団試験で見せた、白の国では禁止されている魔術を使ったときから始まり、フタバとまどかの父親 東條喜一のこともなぜか彼は知っていたのだ。つい先日入団してきたばかりだというのに。その上、フタバは父の東條と似ていると言っていた。今は亡き東條の生前まで知っている口ぶりだったのだ。

早乙女というこの男は、どこまで父や自分のことを知っているのだろうか？ そう考えただけでもフタバは心臓が畏縮する思いだった。早乙女の、虚ろで冥府を見ているかのような黒い瞳に捉えられると、自分の全てが暴かれてしまっている気がする。

「君はもう聞いたかね。黒の国との戦争が始まることを」

地を這うような不気味な声で早乙女が言った。フタバは頷く。

「ふむ、それならば話は早い。早速私に着いてきたまえ。もうすでに第一師団長殿たちは教団を発っている。いささか急いで行かねばならない」

「……は？」

「君と私で黒の国へ赴こうと言っているのだ。もちろん 任務に  
発った師団長殿たちや、団長殿には内密でな」

「……はー！？」

フタバは信じられないような思いで目を見張り、早乙女の顔を凝  
視した。あの団長の許可も得ずこの男と黒の国へ行くなど、バレた  
時のことしか想像できず恐ろしい。これから戦争が始まるという危  
険極まりない敵国に、こんな妖しげな男と行くなんて。

「ぜつ、絶対嫌だからな！ オレは！ あ、あんと黒の国に行く  
なんて……っ、もし団長にバレたら……っ」

「この計画は君のためなのだよ」

フタバの言葉を遮るように、早乙女がすばやく言った。

「オレのため？」

「さよう。私は思うのだ。君は戦争の第一線にいるべきだと。戦闘  
能力はまだ無いにしても 今後の君のために、出来るだけ第一線  
の苛烈な戦いをその瞳に焼き付けておくべきだ」

啞然とするフタバを見降ろし、早乙女は続ける。

「君はいずれ、嫌でも戦争に駆り出される事となるだろう。これは  
あの団長殿ですら予想はしていない、私にしか分からない事だがな」

「……  
「なんであんなにそんなこと分かるんだよ？」

「私の能力ゆえ……それだけ言っておこう。それはともかくだ。い  
ずれ刀を持つ君のために、今から戦争の様子を見ておいた方が良く  
と私は言っているのだ。君が刀を持つ運命は避けられないだろう」

君が　あの東條喜一殿の息子である限り。」

東條喜一。それは亡き父の名だ。その名前が再び早乙女の口から発せられたことに、フタバはひどく衝撃を受けて狼狽させられることとなった。父のことなど知らないはずの早乙女が、父のことを知っている。

フタバは以前から思っていたのだ　早乙女は団長のはなだ標や姉のまどか以上に父のことを知っているのではないかと。それゆえに父の話題を早乙女に出されるとフタバは弱い。もっと父の事を知りたいと思う気持ちが強く滲み出てくるのだった。

「オレが、父さんの息子である限り、刀を持つ運命だって事……？」  
「さよう。さあ、往ゆくぞ井上フタバ君。時間がない。」

言いながら早乙女は左手に持っていた“あるもの”をフタバの前に掲げた。それはフタバの背ほどもある大きなもので、白い布に隠されていた。訝しげにそれを見るフタバの前で早乙女は布を取り払う。現れたのは巨大な鉾ほこだった。両刃の剣には、『白の教団』の団章である翼を広げた鷹が彫られている。柄の部分の模様や装飾品は豪華なもので、立派な鉾だった。教団のものだとは分かったが、一体これは。

表情に疑問を浮かべたフタバをちらりと見て、早乙女はかすかに嗤いながら言った。

「これは君の父上である東條喜一殿が十年前に使用していた神器じんぎ  
『時鉾・邂逅』だ」



ようやく太陽が暖かい日差しを照らし出してきた。まもなく昼にさしかかるだろう。白の国から離れていくにつれて寒さは和らいできていた。

『白の教団』の第一師団、第三師団、第八師団は団長の標からの命令を受け、黒の国を目指して早朝に本部を発った。千年王国の最北端に位置する白の国から大陸の中央の黒の国まで向かうには、途中で「翠の国」と「黄の国」を通らなければならない。

一行はいま翠の国を横断しているところだった。翠の国は白の国が持つ神権を奪うためについ最近まで戦争を起こしていたのだが、白の教団によって鎮圧されたばかりである。それゆえに教団の一行である彼らが街中を横断すると、翠の国の国民たちは家の中に飛び込むようにして逃げていく。

「な……なんかわたし達……翠の国のみなさんに怖がられているようですね……」

第八師団長である月本 草音くすねが呟くように言った。

馬の蹄の音が住民が退けて静かになった街に響いている。彼らは馬を使って移動しているのだ。師団長のみ少数人数なら馬車を使うのだが、今回は三師団での任務なので移動人数は約百人。時間が掛かるリスクを背負い、全員が馬での移動となった。

三師団のそれぞれの師団長を筆頭に数百人が馬で行軍する様子は、まさに宣戦布告といったただならぬ雰囲気漂わせている。

草音の呟きに、隣を馬で移動していた第三師団長の陽炎かげろうが答える。

「つい先日まで翠の国はわたくし共と戦争をしていた。焼け野

原となった街もある……恨まれていて当然だ、草音。戦争とはそういうものだ。それに教団が“そういった事”で怖がられるのは今に始まったことではない。白の国の国民にすら恐れられておる。」

草音は陽炎のほうを見た。いつもと同じく、大輪の花が描かれた白い着物を纏っている陽炎。馬に乗っているため裾が乱れているが、その見た目の美しさは損なわれてはいない。対照的に陽炎の表情は厳しくなっていた。真つ赤な艶やかな唇をきつく結び、前を見据える瞳のうえでは眉が寄せられている。

（姐さん……緊張しているのかしら……）

声に出さず草音は思った。ずり落ちてきた眼鏡を直す。

草音と陽炎の前を馬で先導しているのは第一師団長の佐々波 乱歩だ。今回の任務の総指揮者である。病み上がりの彼だが、いつもと同じ調子で飄々としながら言う。

「いやー、それにしてもいい天気い！ 白の国じゃあずつと雪だもんなー、他国に來ただけでずいぶん暖かいし。ね、草音ちゃん」  
「えっ、あ、そ、そうですね……佐々波さん……。」

草音の曖昧な返答に思わず佐々波は苦笑する。彼の言う通り、翠の国は快晴だった。まもなく昼になる時刻、街を白く染める柔らかな朝の光は清々しい。白の国では感じられない穏やかな風が吹いている。

翠の国は自然の豊かな国なので、街の中にいても至るところに木々が植えられ、花が咲き乱れている。白の国との一番の大きな違いは様々な花が咲いているということだろう。白の国は寒気しか訪れないので、咲く花といえば寒椿くらいである。自然に咲く彩り豊かな花々など皆無なので、久しぶりに見る花は佐々波たちの目を楽し

ませた。

「こういう花って、任務で他国に行くときにしか見られないもんな。しかもその任務も戦争とか鎮圧とか血生臭いものばっかだし。なんかそういう機会にしか花を見られないって、俺たち悲しい身の上だよなー」

佐々波の言葉に、陽炎は本部の庭に植えられている寒椿のことを思い出していた。紅く色づき花びらを落とす寒椿の花。

白の国に唯一咲くその花と同じ名の人物を一人だけ知っている

市川椿 第四師団長であり、狡猾な狐のような、陽炎と同年齢の男。冗談を言う明るい部分もあるが、あの人を食ったような言動は周りの団員から密かに忌み嫌われていることを陽炎は知っていた。しかし陽炎の記憶のなかの市川は違うのだ。数年前の彼はもっと

……。

陽炎は頂垂れていた頭をハツとして上げた。

（わたしは今……何を？）

何を思い出そうとしていた？ 数年前の市川のことなど、もう思い出す必要はないのに。陽炎が眉根を寄せた。胸が締め付けられるようだった。もう思い出したくない 未来だけ見ていたい 婚約者である縹はなだの事だけ考えていたい いや、縹のことしか考えなくて。他の男などこの先必要ないのだから すぐに裏切る他の男などいない。

（卓之介様がわたしを愛してくだされば……それだけで……）

悲痛の表情を浮かべる陽炎の横顔を、草音は何も言わず見守って

いた。

< 3 >

「これはこれは、第四師団長殿」

本部の中庭に佇んでいた早乙女は、突然の訪問者に親しげな声を上げた。雪を踏みしめながら早乙女に近づいてきたのは第四師団長の市川椿だった。糸目の瞳をさらに細めて笑っている。爬虫類のような笑みだった。

「初めましてやな、早乙女炎クン。入団試験で陽炎はんを虐めてえつらい騒ぎになったんやて？　へえ、見たところアンタ俺より年上やな。どーでもええけど」

「铮々（そうそう）たる師団長殿がただの一団員である私に何かご用件でも？」

「ふーん。この期に及んで知らん顔かい。どうせ“気付いて”たんやろ、俺が来る事」

ニヤリと笑う市川。瞳の奥に冥い闇くらをたたえたその笑みは普段見せない表情だった。市川の思惑を察し、早乙女も不気味に口角を上げた。やや猫背な早乙女の癖のせいで、ぞんざいに伸ばされた髪が頬と口元を隠している。それが余計に得体のしれない気味悪さを演出していた。

「やはり“私と一緒に”なのですな……市川師団長殿」

「アンタと一緒にせえへんというや。俺はアンタほど性根腐ってへ

んで？」

ニツコリと笑う市川だが、その目元はちつとも笑っていない。

「俺が今日この場でアンタに会おうって決めたんは井上フタバの事や。アンタ、あの弟クン連れてこれから黒の国に行くんやってな？ 弟クンは今どこにいるん？」

「井上フタバ君なら自室ですよ。どうやら彼の姉上に事情を説明しているようですね」

「へー。でも団長はんには内緒なんやろ？ バレたら怒られるでー」  
「そこは上手くやるつもりですよ。どうとでも出来る。」

早乙女は市川から視線を外して、中庭に植えられた寒椿に目をやった。雪の白の中にいつそう映える真つ赤な寒椿。銀世界に包まれている中庭で、その花だけが浮いている存在にも思えた。

市川はなおも早乙女の方をじつと見つめていた。

「ほんと性格悪いんやなアンタ」

「それは市川師団長殿では？ まだ教団に隠しているのでしょうか。私とあなたの“共通の秘密”を」

「アンタはえらく大胆やったなあ。入団試験でいきなり魔術をお披露目するなんて俺には考え付かんわ。俺は別に隠してるつもりやないけど。どうせそのうちバレるやろ。黒の国との戦争が始まるつちゅー話やからな」

己の“秘密”を知った瞬間の縹の様子を想像して、市川はクツクツと笑った。あの無愛想な団長が驚き狼狽する様子を見てみたいと思っなのは悪趣味だろうか。

楽観的な市川の調子を見て、早乙女もつられるようにして妖しげな笑みを浮かべている。そしてその青紫色の薄い唇が言った。

「黒の国　魔術が栄え、千年王国中心部に位置する大国　謎に包まれた国王サタン　そして国家護衛団『ノワール魔導衆』  
“懐かしい”ですね、市川師団長殿。あなたがまだ魔術の使い方を覚えているかは存じませんが」

市川は楽しげに笑ってそれに応えた。

<第二十五話「綾<sup>あや</sup>」・終>

## 第二十五話 綾（後書き）

「綾<sup>あや</sup>」とは物の表面に現れたさままな形や模様のこと、転じて「表面的には見えないが、たどると見えてくる社会や世の中の入り組んだ仕組み」の事をいいます。

表面上では隠してるけど何やら妖しげな市川（+早乙女）のこと。それにしても市川の登場が久しぶりする。

## 第二十六話 黎

「お姉ちゃんそんなのぜつたい許さないからね、フタバくん！」  
「でも……」

言いかけた言葉は、まどかの強い声に遮られた。

「だめって言ったらだめなの！ 前だって縹卓之介に命じられて黒の国へ行かされたっていうのに、今度は“あの”不気味で超怪しい早乙女さんとこっそり黒の国へ行くなんて！ 危険すぎるじゃない！ ぜつたい許さないんだから！」

これから黒の国へ行く と、フタバは姉のまどかに告げた途端に反対された。まどかはフタバ以上に早乙女に対して嫌悪感を抱いている。幽霊を連想させるあの風貌が生理的に受け付けないのだそうだ。まどかが憤慨するのも無理はない。

しかしフタバは、姉のまどかが怒ることもある程度予想していたのだった。たいしてうるたえもせずフタバは答える。

「オ、オレだってあんな不気味な人と一緒に黒の国に行くなんて嫌だよ。でも、だって……早乙女さん、“この世界”で生きていた頃の父さんを知っているみたいなんだ。もっと早乙女さんから話を聞きたいんだよ！」

「話を聞きたいだけなら教団でも出来るわ。黒の国へ行くなんて

「あの人、オレが黒の国へ行って戦争の様子を見ることに意味があるって言うってたんだ……」



最後の方は心もとなく、消えるような声になってしまった。フタバはおそろおそろ姉の顔色を窺<sup>うかが</sup>う。まどかの顔を見上げるとその顔は今にも泣きだしそうだった。

<第二十六話：黎<sup>れい</sup>>

“姉ちゃん、”と声をかける前にまどかが口を開いた。その声は泣きそうに震えていたが、まどかは泣いていない。怒りのあまり声が震えているのだろうか……。

「フタバくん、そんなにお父さんの事が知りたいの？ そんなにお父さんが大事ななの？ もうお父さんは死んじやった人なのに、何をそんなに知りたがる必要があるのよ？」

「姉ちゃ」

「私はフタバくんが一番大事。フタバくんが危険な場所に行くなんて耐えられないわ。たとえお父さんの生前が知りたいっていう目的があつたとしても……私には“そんなこと”たいして大事だとは思えない。はっきり言つて、お父さんよりフタバくんの方が大事なの！ 分かつてちょうだい、フタバくん……」

フタバは何も言えずまどかを見つめていた。まどかは相変わらず悲痛な表情で、泣きだす前とも、怒りだす前ともとれる顔だった。いつもは穏やかな口調でゆっくりと話すまどかが、今回ばかりは棘のある声色だった。

（姉ちゃん、そんなにオレのこと心配してるんだ……）

フタバは俯いて紅色のシックなカーペットに視線を落とした。まどかがもとも自分の事をよく心配してくれているのには気が付いていたが、父よりも大事に思ってくれていたとは。

突然異世界にやって来て、姉弟が離れ離れになる不安はフタバ自身にもある。しかし、フタバはどうしても父である東條喜一と自分の関係を知りたい。それは早乙女が言っていた“東條喜一の息子なら、必ず戦争に駆り出される”という言葉の意味を知りたいということでもあった。

フタバは幼いながらも感じていたのだ。自分達が千年王国に呼ばれた理由は父親に関係があるのだと。それならば、すでに亡き父親に関しての謎を全て知らなければ元の世界に戻れない。戦争に首を突っ込むのは危険だと分かっているが 早乙女の言う通り戦争に関われば、父親の事と、自分達が呼ばれた理由を知ることが出来るはずだ。

「オレだって姉ちゃんの事は大事だけど、父さんの自殺の謎を解かないと元の世界に戻れないと思うんだ！」

「そんなの そんなの嘘よ。お父さんが死んじゃった事と私達が関係あるわけじゃない！ お願いだから黒の国へ行くなんて辞めて！ フタバくんが戦争に巻き込まれて死んじゃったら……私……私……私……！」

もはやまどかのそれは叫び声だった。必死でフタバを止めようとしている。まどかの思いはフタバにも痛いほど伝わってきたのだが、フタバも幼いとはいえもう十二歳 立派な意思がある。姉の懇願にただ従うというわけにもいかない。

「それでもオレ」

フタバは俯いたまま、まどかの顔を見ることなくしばらく黙っていたかと思うと、急にまどかに背を向けて駆けだしたのだ。二人の部屋の扉まで駆け寄ると、扉の横に立て掛けてあった“あるもの”を手に取る。フタバの身長ほどもある細長いそれは白い布に隠されていた。それ今朝、早乙女に渡された『時銚・邂逅』である。白の教団の師団長のみが持つことを許される、“神”から与えられた特別な神器。この『邂逅』はフタバ達の父、東條喜一が生前愛用していた銚型の神器なのだ。それを握りしめるとフタバは再びまどかの方を向いた。

「ごめん姉ちゃん！ オレ、父さんの謎を残したまま元の世界へは戻れないんだ！」

はつきりと言い放つと、フタバは姉の顔色を伺うこともなく部屋を飛び出していった。

「フタバくん！ 待ちなさい！」

まどかが叫んだ時には、すでに部屋の扉は閉ざされていた。フタバが寄宿舍の廊下を駆けていく音が聞こえてくる。その音を茫然と聞きながら、まどかは佇んだまま動けないでいた。

昔から姉の自分によく懐いていて、豪快な自分とは反対にやや臆病なフタバ。自分の背に隠れていた幼い少年が、親の謎を知ろうと自ら行動しようとしている。いつまでも自分を頼ってくれていれば良いのに、どんどん成長していくフタバ。いつの間にか一人歩き出来るようになってしまった弟を、複雑な気持ちで想うまどかであった。

（フタバくん……やっぱり君は、東條喜一の息子なのね……）

窓の外には曇り空が広がり、白の国に影を落としている。眉を寄せて口元を結んだ情けない表情の己の顔が窓ガラスに映っていた。

< 2 >

「ようやく来たか。あまり時間が無いのだ。待たせないでくれたまえ」

「う、ごめんなさい……」

中庭へ出たフタバはすぐに早乙女と合流した。一面銀世界に佇む早乙女。真っ白い雪に溶け込むような青白い顔色と、奇妙なほどの長身。そして常世を見つめている様にくすんだ瞳が、雪景色の中、不気味に浮かび上がっていた。

早乙女に近づいていいのか分からず、中庭に繋がる連絡通路で立ち止まっているフタバ。すると早乙女の方からフタバに近づいてきた。雪を踏みしめる音が静かに木霊する。彼は血色が悪い紫色の唇を開いた。

「姉上とは無事に話がついたかね」

「う、うん」

「……その様子だと和解しないまま飛び出してきたのだろう」

見事に言い当てられたフタバはバツが悪そうに唇を噛む。

フタバの脳裏にはまだかの憤慨した表情が未だにこびり付いていた。これまで姉弟喧嘩きょうたいなどしたことが無かった。それだから、今回のまどかとの行き違いはひどくフタバを悩ませていたのだった。まどかに嫌われてしまったかもしれない。そう考えると心臓を鷲掴みにされたような気分になったが、今更後戻りなど出来ない。

そんなフタバの様子を察したのか、早乙女がフタバの肩に団服を

羽織わせた。

「悩んでいるなら戻りたまえ井上フタバくん。黒の国へ向かった師団達の戦闘を見てしまえば後戻りが出来なくなる。戦争とはそういうものだ。戦争の惨劇を目にしまえば己も戦争に巻き込まれたも同然。それは一生己に付き纏う」

肩に掛けられた団服はフタバの身体を温めた。白いその団服は戦争に関わる国のものではないかのように神聖だった。

早乙女が地を這うような低い声で続ける。

「君はまだ十一歳だ。本来なら姉上と安全な場所にいるのが正しいのだろう。団長殿もそういう処置を考えている。“この計画”は私個人の考えたものだ。それでも君は共に来るかね？」

フタバは早乙女に渡されていた神器『邂逅』を握り締めた。

「オ、オレ行くよ。だってそうしなきゃ父さんの謎が分からないままだもん！」

口角を上げて早乙女が笑う。しかし、“笑う”と形容するには生易すぎるような、ゾツとする笑みだった。しかしフタバはそんな事を気にすることはなくただ真っ直ぐ早乙女の瞳を凝視していた。

「それでは早速、黒の国へ向かうとしよう。既に向かっている師団達は間もなく到着する頃だろうから急ぎたまえ」

< 3 >

一方その頃、数時間前に白の国を発った第一師団、第三師団、第

八師団は黒の国に到着していた。百人ほどにもなる団員たちが隊伍を組んで歩む姿は、まさしく戦争に向かう軍隊であった。

黒の国は相変わらず殺伐としている。大国であるにも関わらず市場や大きな建物は見当たらない。怪しげな洋館や廃屋が山奥に佇んでいるだけである。ノワール魔導衆の魔導師で長たる“サタン”という男が国王を兼任しているらしい。ノワール魔導衆の洋館の周りには更地が広がっていた。国王が座す屋敷とは思えない。白の国の城とは大違いだ。

軍馬にて先頭を率いる佐々波乱歩はため息を零しながら呟く。その瞳は延々と続く荒野の先を見つめていた。

「ついに黒の国に宣戦布告かー。このまま冷戦が続いて自然消滅してなわけにはいかなかったなー」

「そ、そうですね、佐々波さん。私も、もしかしたらこのまま黒の国とは戦争なんてしないんじゃないかと思っていました……」

そう沈んだ声で答えたのは第八師団長の月本草音だった。軍馬に乗ったまま俯いて佐々波の後ろにつき従っている。草音が頼りなげな口調で呟くのはいつものことだったが、それに対して陽炎がかけろぴしゃりと言った。

「草音。黒の国との関係は年々悪化していたのを承知していたでしょう。よもやあの冷戦のまま終わるはずがない。それに卓之介様とて、冷戦状態の関係のままでいこうなどといつまでも甘んじておられるわけがない」

「は、はい……そうですよね姐あねさん。すみません……」

「謝らずともよい」

陽炎の声は鋭く、草音はいつにも増して肩を畏縮させることとな

つた。眼鏡の内からおそろおそろ陽炎のほうを窺<sup>うかが</sup>うと、陽炎は視線を地面に落としていた。服装はいつもと変わらず、白地に牡丹柄の着物だ。さすがに軍馬に跨ることは出来ないらしく、脚を揃えて横乗りになっている。

どんな任務の時でも戦地に赴く時でも、陽炎は団服を着ようとはしない。着物など、槍使いである陽炎にとっては動きにくいであろうに。なぜ団服を着ないのだろう。草音はいつもそう疑問を抱いていた。それでも陽炎は太刀筋に関しては教団一の速さを誇るので尊敬するばかりだ。

「何？ 陽炎さん何か機嫌悪いの？ なんか今日怖いくらい静かだよね？」

前に行く佐々波が草音にこっそり話しかける。草音は肯定も否定も出来ず曖昧に頷いておいた。

「まーた団長と何かあったのかねー？」

草音は答えなかった。

一行はノワール魔導衆の館を目指して荒れ果てた更地を進軍し続ける。その間にも黒の国の街をいくつか通り過ぎて来たが、気味悪いほど人影が無い。はたして本当に国民が暮らしているのだろうか。そんな疑問すら浮かばせる。佐々波たち師団長は何度が黒の国へ着たことがあるのだが、団員でここまで来た者はいない。今日引き連れてきた団員たちも初めて見る黒の国の光景に戸惑いを隠せないようだった。

やがて更地の地域を抜け、彼ら一行の進軍を邪魔するかのよう巨大な岩肌が立ち上がった。この崖道を進んでいけばノワール魔導衆の館に辿り着くのである。佐々波たち三人の師団長は軍馬から降りた。崖道は整備されていないので馬が歩くには危険なのだ。団

員に注意を促しながら身長に崖道を進んでいく。昼間なのに太陽は照っていない。余計に歩きにくかった。

しばらく進むと岩肌で狭まっていた視界が開け、代わりに真っ黒な塔が姿を現した。

「佐々波第一師団長。あ、あの塔が……？」

「ああ」

背後の団員に返答すると佐々波は後ろを振り向いた。彼に続き崖道を歩いていった団員たちが歩を止める。佐々波の背後に聳える不気味な塔。それが放つ威圧感に動けないで居るようだった。佐々波はそんな団員たちに渴を入れるかのように力強く言い放つ。

「みんなよおっく見とけよ。あの黒い塔、あれがノワール魔導衆の館だ。ここから先は奴らの敷地だ。どんな魔術が仕掛けられてくるか分からないぞ！」

長きに渡って冷戦状態だった白の国と黒の国。千年王国の二大国である二つの国で今まさに最大規模の神権戦争が始まるうとしている。ついに宣戦布告のときが訪れたのだった。

<第二十六話 「黎<sup>れい</sup>」：終>



## 第二十六話 黎（後書き）

サブタイトルの「黎<sup>れい</sup>」は「黎明<sup>れいめい</sup>」から。  
夜明けや物事の始まりという意味。  
戦争が始まる直前を表すサブタイトルにしてみました。

## 第二十七話 誘

「よつし……。じゃあ、行くか」  
「はい」

やや抑え気味に言った佐々波の言葉に、後ろに控えていた陽炎と草音が揃って返事をした。三人は視線を上げて高く聳える黒い塔を見上げる。その洋館には大きな赤錆に包まれた鉄製の門があった。入り口の扉までに伸びる道には名前の分からない雑草が膝の辺りまでに伸びている。扉までも漆黒に塗られており、荘厳なその様子は威圧感を放っている。扉から放たれる禍々しい空気がこの場を満たしていた。その扉の様子はまるで、地獄の門番が口を開けて佐々波たちを誘っているようだった。

「目的は魔導衆のメンバーを一人生け捕りにすることだ。そのためなら多少の犠牲は構わない。……が、ヤバい状況になってきたらすぐに退避する。まだ多くの団員を失うわけにはいかないからな。その都度、俺が指示を出すから、第三師団と第八師団の団員たちは頼んだ！」

「心得ております、佐々波殿」  
「がっ、頑張ります！」

淡々と言う佐々波に、陽炎と草音は勢いよく頷く。三人の後ろに控える約百名の団員たちも固唾を飲んで待った。緊張感が漂っている。良いことだ。佐々波は満足げに部下達を眺める。緊張感が無いこの任務は達成できない。

程よい緊張感を携えたまま、一行が入り口に向かい進軍する。雲

が出てきて黒の国全体に影を落とす。まだ昼だというのに辺りは薄暗く不気味な雰囲気<sup>いざない</sup>が漂っていた。吹く風も嵐の予兆の如きもので、風に舞う枯葉がガサガサとさざめく音すら耳障りとなる。入り口の扉まで数十メートルの距離になったとき、佐々波の後ろを歩く陽炎が声を発した。

「佐々波殿。あちらに人の姿が見えまする」  
「え？」

<第二十七話：誘いざない>

陽炎の声は囁く程度のもので佐々波以外の団員には聞こえていないようだった。陽炎が指したのは館の周りに広がる荒れ果てた庭の一角だった。入り口の扉とは反対の方角。手入れの様子が微塵も見られない朽ち果てた庭にある、蔦に覆われた聖母の像。その像の上に小柄な人物が腰掛けている。やや距離が離れているので人物の詳細は把握出来ないが、銀色もしくは白色の服を着ている小柄な少女だという事は分かる。佐々波たち一行に気付いていることは確かだろう。

「誰だあいつは？　ここにいて事は魔導衆のメンバーか？」  
「佐々波殿。あのおなごは魔導衆のメンバーの一人で、猫の耳と尾を持つ幻獣の少女でございます。以前、市川殿とここへ偵察に来た際に会いました」

そう言つと陽炎は一行の隊列から抜ける。草音や他の団員たちが訝しむ視線を陽炎に送った。

「佐々波殿、そちらはお任せ致します。草音、わたしの代わりに第三師団の指揮も頼む」

「あ、姐さんあねつ？」

困惑の声を上げる草音。陽炎は無表情のまま横目で草音を見つめた。

「わたしはあそこに居る幻獣の少女のもとへ行く。あの少女はおそらく魔術を心得ていない。容易に捕まえる事が出来る　魔導衆の他のメンバーの情報を聞けるでしょう」

「でも姐さん一人で……？　いくら魔術を使えない女の子だからって……仮にも魔導衆の一人なのに……！」

「案ずる必要は無い。あの少女は魔導衆で“飼われている”だけだ。では　佐々波殿、後で必ず追いかけます」

そう告げるが早く陽炎は風のような速さで一行の隊列から離れていく。まだ何か言いたげにした草音だったが既に遅く、陽炎の姿はもう遠かった。戦闘時には教団一の速さを誇る彼女だ。慌てて追いかけようとした草音が間に合っはずも無い。

「姐さん……だ、大丈夫でしょうか……」

眉を寄せて苦しげに呟く草音。ずり落ちてきた眼鏡を直す余裕も無いようだった。そんな彼女とは対照的に佐々波は先ほどから表情を変えずにいる。

「陽炎さんならダイジョーブだって草音ちゃん！　あの陽炎さんだぜ、幻獣の女の子に負けるわけないって。それに神器の『朱槍・紅べに偲しのび』も持ってるんだし」

佐々波に諭されるまま、草音はどうにか納得したようだった。彼女は人一倍心配性な上、敬愛する陽炎のことだとその不安の種は大きい。草音は陽炎が離れていく様子を何度も振り向いて確認しながら佐々波の後をついていった。列を離れた陽炎をそのままに一行は館の入り口を目指す。あと数十メートル。あの禍々しく荘厳な扉の向こうには何が待っているのだろうか。

< 2 >

隊列から離れた陽炎は荒野と成れ果てた庭に侵入し、少女が腰を下ろす聖母の像のもとへあつという間に辿り着いた。着物という動きづらい格好をしているにも関わらず風の如き速さで移動してきた陽炎。その様子を見下ろす幻獣の少女　ローズ。

「すごい！　話に聞いたとおり、お姉さん凄く速いんだね！」

ローズびつくりしちゃった！」

「“ローズ”……それがお前の名か？」

「わっ、そんなに怖い顔しないでよ。せつかくの美人さんなのにねえ、お姉さんはなんていう名前？」

この少女は一体　？　陽炎は眉を寄せていぶかしんだ。以前会ったときにも妙な少女だと感じたが、こうして間近で見て言葉を交わすとローズへの不信感は余計に募る。黒の国のノワール魔導衆とえば魔術を自在に操る魔術師たちの集団。良い噂は聞かない。それは白の教団も同じ事だったが。そんな魔導衆の一員であるこの少女は敵である自分にすら、まるで友人に話しかけるようにして接する。畏か？　畏ではないとしても、こんな無垢な少女が魔導衆のメンバーなのは、なぜ……？　陽炎は表情には表さないものの、内心はひどく動揺していた。ローズへの接し方が分からないのだ。

そんな陽炎の心中を知ってか知らずか、ローズは聖母の像から飛び降りる。さすが獣と人間の両方を兼ね揃えた幻獣　像から飛び降りる身軽さは猫そのものだった。陽炎の目の前に降り立ったローズを陽炎は改めて観察する。十五歳前後といったところか。それにしてもとても小柄だ。珍しい銀色のセミロングが肩の辺りで揺れている。猫の耳と尾も白猫のものだった。肌の露出が多いショートパントの衣装すらも白色。

「な〜んて！　えへへ、実はローズね、お姉さんの名前もう知ってるんだあ。サタン様が教えてくれたから！」

「……何？」

いたずらっぽく満面の笑みを浮かべるローズ。陽炎は記憶を巡らせて思い出していた。偵察に訪れこの少女と会った時も、ローズは『サタン様が言っていた』と陽炎たちに告げたのだった。そして今も。サタンとはノール魔導衆のトップであり、黒の国の国王でもある男だ。そのサタンから逐一情報を得ているローズ。やはりただ者ではないのか？　と陽炎は愛用の朱槍に手を掛けた。それにしてもサタンの言葉を敵にまで伝える彼女の行動は無意識なのか、意図的なのか。

「そのサタン様とやらは、わたしの事をなんと？」

「え〜っとねえ、う〜んとねえ。お姉さん、陽炎さんって名前ですよ。合ってるよね？　団員の中でたった一人だけ、任務の時にも着物を着てるんでしょう？　だからすぐに分かったよ！　サタン様が言っていたのは、槍使いで教団一すばやいて事と、あとはあ〜……」

ローズの言葉が中途半端に途切れた。陽炎が続きを促そうとした

瞬間、風を切る音が聞こえたかと思うと ……。

「そうそう！ お姉さん、教団の団長さんが好きなんでしょう！  
でもなかなか振り向いてもらえないんだよね？」

「な、何っ！？」

一瞬にしてローズは陽炎の耳元に詰め寄った。陽炎はそれ避免る事が出来なかった。教団一の速さを誇る自分がまさかこんな少女の速さに負けるとは。そしてローズの告げた言葉。サタンは自分と縹はなだの関係のことすら見抜いているというのか。陽炎は唇を噛んでローズを睨みつける。魔導衆には白の国の情勢どころか団員のプライベートまで知られている。その事実を認めるしかない陽炎はきつく拳を握って怒りを抑えていた。

（この娘、思った以上に情報を持っている。いつその事、この場でこの娘を生け捕りにすれば ）

そこまで考えたとき、目の前のローズがニツコリと顔を綻ばせた。そして誰もが“可愛らしい”と形容するだろうその愛らしい声色でこう言ったのだった。

「そろそろお喋りを終わりにしてもいいかなあ？ ねえお姉さん、いいよね！ ここまで出来たらローズ、サタン様に褒めてもらえると思うよねえ？」

「……何が言いたい？」

「お姉さんって教団一の速さを持つうえに、洞察力も優れてるんでしょう？ だからなるべく本隊から引き離れた方がいいってサタン様が言ってたんだあ。だからね、ローズがそのお仕事を引き受けたんだよ」

陽炎が呟くようにして復唱する。

「わたしを……なるべく本隊から引き離すだ……？」

満面の笑みを浮かべて肯定するローズ。少女の発した言葉の意味がすぐには理解出来ず、陽炎は言葉の内容を慎重に吟味する。魔導衆側にこちらの情報は筒抜けだ。自分が駿足を誇ることも洞察力が優れていることも知られている。そんな自分を“本隊から引き離す”とは。

ハッとして陽炎は目を見開いた。

「ッ！　しまった！」

それだけ叫ぶと陽炎は駆け出す。去っていく陽炎の背中をローズは至極楽しそうに眺めていた。命じられた計画通りに事が運んだ。これで愛する主から褒めてもらえるだろう、とその事だけを考えてローズはこの上なくご機嫌だった。

陽炎は庭を横切り駆けて行く。奥歯を噛み眉を寄せ己の愚かさを呪った。なぜ気付かなかったのだろう。ローズがこの庭に一人で居たのは少女の気まぐれなんかでは無い。そう、ローズは囧だったのだ。自分を本隊から引き離すための囧。

（ただ“飼われている”だけだと思い油断した……！　あのローズという娘は私を誘き寄せ<sup>おび</sup>るための策だったという事か！）

こちらの性格までもが魔導衆のメンバーに知られているということは、自分が佐々波と草音に比べて好戦的だという情報も伝わっているのだろう。魔術を持たず油断しきっているローズがたった一人で現れれば、少女を捕らえようと真っ先に行動するのは佐々波や草音では無く、好戦的な自分。そこまでサタンは予測しローズを



配置したのだ。まんまとサタンの策に乗り本隊を離れてしまった自分を陽炎は責める。自分がローズなど放置しておいて本隊と共に行動していれば、師団長が一人欠けて戦力が削がれることも無かったというのに。

（狙われているのは佐々波殿たちだったか……！）

< 3 >

陽炎がローズを捕らえるために列から離脱した後、佐々波と草音は館の入り口に辿り着いていた。ところどころ剥がれ落ちているレンガや、埃のたまった窓。高く伸びる塔は不気味に佐々波たちを見下ろしていた。扉へと手をかけるべく一歩足を踏み出せば、長年刈られていないであろう雑草が纏わりつく。その伸び具合からも整備が施されていないという事実が分かった。

「草音ちゃん、俺は魔導衆のメンバーを一人生け捕りにする事に専念する。だがおそらく向こうも攻撃を仕掛けてくると思うから、草音ちゃんは団員達と一緒に俺が生け捕りに成功出来るよう、攻撃を防いでくれ」

「わっ、分かりました……！」

「よし、頼んだぞ！　じゃあ俺が扉を開けて様子を見る。合図をしたら団員達にも伝えてくれ」

草音が無言で頷く。ついに突入するのだ。団員達も静まり返ってその瞬間を固唾を飲んで待っている。佐々波が扉に手を掛ける。両開きの巨大な扉。漆黒の重そうな扉には龍の彫刻が施されており立派な造りだが、整備されていないため煤汚れて朽ち果てた雰囲気醸し出しているだけである。

佐々波がゆつくりと扉を開ける。成人男性の彼ですら両手に最大限の力を入れないと開かないほど重い。彼らの侵入を拒んでいるかのような。人一人分だけ隙間を作ると、佐々波は上半身を滑り込ませて中をうかがう。中は真つ暗の闇に包まれていた。開けた扉の隙間から外の光が差し込んでいるだけ。仮にも国家護衛団の屋敷だ。明かりの一つも灯されていないとは妙である。

（誰もいないなんて事はないはずだが……？）

草音たちは扉の向こうで今か今かと佐々波の指示を待っている。後ろ手で扉の隙間を保ったまま佐々波は両足を館内に踏み入れた。するとその瞬間、扉の閉まる音と共に佐々波の視界は真の闇に包まれた。

「……しまった！」

慌てて扉に手を掛けるがそれが開くことは無かった。罷か。ようやく悟った時には既に遅く、佐々波は背後に人の気配を感じて硬直した。

「はは……狙いは俺一人ってワケ？　なあ、魔導師さんよ」

気丈を装いそう言ってみせるが、佐々波の背筋を冷たい風が抜けていく。非常にまずい状況だ。何か仕掛けてくるとは思っていたが、侵入早々狙いを定められるとは。これでは草音たちに退避の指示も出せない。ここはなんとかして館内から逃げ出すしかないな……と佐々波は覚悟を決める。

「こーんな真つ暗にしちゃって。魔導衆の皆さんはずいぶんとシャイなんだなオイ？」

その言葉が届いたのか、暗闇に光が差す。蠟燭の光が一斉に灯ったのだ。ようやく佐々波の視界に館内の様子が広がる。塔になっている館だけあり、入り口の玄関ホールは狭い。螺旋階段が遙か天井まで伸びるだけで、部屋の扉などは見当たらなかった。照明器具は無く大量の蠟燭が壁に設置されている。赤々と燃える蠟燭は風も無いのに揺れている。

佐々波が視線を巡らせると螺旋階段の踊り場に人影を見つけた。黒いローブに包まれた人物。その長身から男性だという事は分かったが……。

「あんたは」

男がローブのフードを取り払う。距離が離れていたもので、佐々波は目を凝らして男を見る。フードの中から現れたのは、床にまで達しそうな黒い長髪。そして佐々波は男の視線とぶつかる。端正な顔立ちの男だった。年齢は縹と同じくらいだろうか。あの世を眺めているかのような、冷たい眼光。ヒスイ色に光る瞳がその顔に彩りを添えていた。そして余裕があるのか、笑みさえ浮かべている口元。美しいその姿は魅了させられるが、その男の持つ加虐的な雰囲気、佐々波の動きを止めさせていた。

< 4 >

「草音！」

「あ……、姐さん……！」

陽炎が扉に辿り着いたとき、佐々波の姿は既になかった。遅かったか。陽炎は唇を噛む。

「姐さん、私達の行動は全て読まれていました……。おそらく最初から佐々波さんが狙いだっただと思います……。今、佐々波さんだけが館内に閉じ込められて……。！と、扉も開かないし……。」「分かつている。あの幻獣の娘は困だった。わたしを本隊から引き離して、佐々波殿だけを狙うための」

駆けて来たため陽炎の息は荒かった。しかしそんな事に構っていない場合ではない。困惑する団員達に向けて、陽炎は荒れた声色のまま叫んだ。

「任務変更だ、佐々波殿を救い出す！ 総員協力し、この扉以外の侵入口を見つける！ それでも活路が開けなかった場合は退避の指示を出す！」

陽炎の声が荒野に響いて消えていった。団員たちは陽炎の指示に従い、塔の周囲に散り散りになっていく。扉の前に残されたのは陽炎と草音だけとなった。任務早々、こんな事態になってしまふとは……。縹になんと言って報告すればいいのか。改めて己の失態を責める陽炎。陽炎の隣では草音が相も変わらずオロオロと動揺するばかり。

（佐々波殿は……この中に……！）

塔を見上げる。こちらの情報や行動を何でも知っている魔導衆。これが魔術師の集団たる強さか。魔法も何も持たない自分達のひ弱さを思い知らされる。この国と戦争どころか、宣戦布告すること事態が無謀なのではないか、と陽炎は畏怖の念を抱いたのだった。

<第二十七話「誘<sup>いざない</sup>・終

## 第二十八話 巡（前書き）

1万文字近くあります、実にすみません。  
佐々波とリリス、陽炎と草音、早乙女とフタバ、三つの場面が出てきます。

## 第二十八話 巡

言いようのない困惑の影が佐々波の眉間に刻まれていった。彼は心の動揺を抑えようと必死だった。

（ちくしょ……あの男、ヤバイ雰囲気がある。上手く逃げられるか……？）

玄関ホールに佇む佐々波を、螺旋階段の踊り場から見下ろしてくる男。佐々波の視線はロープを纏った男に捉えられたままで逸らせないでいる。以前対峙した魔導衆のメンバーであるリスとは比べ物にならないほど、禍々しい空気が男から放たれていた。虫けらを見つめるように佐々波を見下ろしてくる冷酷な瞳。床にまで達しそうな長い黒髪が蠟燭の火と共に揺れている。

男は一言も言葉を発しない。佐々波も唇を戦慄かせるだけで言葉にならなかった。そんな二人の奇妙な空気を断ち切ったのは高飛車な女の声。

「サタン様あ！ そいつ！ ツンツン金髪の師団長！ アタシが殺し損ねた奴です！」

「っ！？」

螺旋階段を駆け下りてくる足音。その女の声に佐々波は聞き覚えがあった。甲高く耳障りなその声をどこかで。螺旋階段を下つてきて男の隣に現れたのはリスだった。黒髪のウェーブの髪をツインテールにした少女。黒尽くめの衣装は胸元と腰周りしか隠していない大胆なものだ。白肌が蠟燭の明かりにボンヤリと浮かび上が

っている。その姿を目に捉えた瞬間、佐々波は彼女との出会いを思い出した。井上姉弟と共に市場へ赴いた際、フタバを殺すために現れた少女がリリスと名乗っていた。そしてリリスの“魔女の麻薬”浴びて重体に陥ってしまった己の不覚さも思い出してしまい、佐々波は奥歯を噛んだ。

「アタシに任せてください！」

リリスの顔は憎しみに歪んでいた。只でさえ釣り目気味のその瞳がさらに釣りあがっている。少女らしい可憐さは微塵も感じられなかった。

<第二十八話：巡<sup>めぐる</sup>>

リリスは螺旋階段から飛び降りると同時に懷から短剣を取り出す。短剣片手に迫ってくるリリスを前にして、佐々波も慌てて腰の刀を抜く。抜いた刀は幸い短いものだったので、迫り来るリリスの刃をギリギリで受け止めることが出来た。交わった二人の刀が金属音を響かせる。視線だけで相手を射殺さんばかりの憎悪を剥き出しにするリリス。彼女は佐々波を見上げて言い放った。

「アンタがあの時邪魔しなければっ！ 井上姉弟を殺せてサタン様に褒めてもらえたのよっ！ 今度こそぜったいにアタシが殺す！」

とても十代の少女とは思えないほどの剣幕。リリスの金色の目が憎しみに光っている。

「まあ落ち着けて！ この状況で魔導士のおんと剣士の俺じゃ、



あんたが不利なこと分かってんだろー!?            ってオイ!」

「うるっさい!」

佐々波の言葉を遮る様にしてリリスが短刀を翻す。佐々波の団服の肩に切れ目が走った。話して分かる女じゃないな……佐々波はリリスから距離を取るように後ずさりながら冷静に考える。今はこの場から逃げることを優先しなければならない。リリスと戦っている場合ではないのだが。

「かかって来なさい! 絶対殺す!」

「おっかねー。黙ってれば美人なのに台無しだぜ?」

「だ、黙んなさい!」

佐々波の軽口が逆鱗に触れたのか、リリスは声を荒げる。リリスは右手に短刀を持ったまま左手を佐々波に見せ付けるように掲げた。するとその手の平から靄もやが立ち上ったかと思うと、黒い粉末がブワリと舞い上がる。蝶が燐粉を撒き散らすかのように、リリスが左手を動かすたびに粉末が宙を舞い、床に落ちていく。

(ちっ……“魔女の麻薬”か……!)

ますますマズイ事になってきた、と佐々波は小さく舌打ちをする。リリスは人体に悪影響を及ぼす麻薬を自在に操ることが出来る。その麻薬の危険さは佐々波自身が身を以て知っていた。刀同士の戦いならどうにか切り抜けられると思ったが、リリスが魔術を使う気ならはこちらも甘んじてはいられない。

佐々波はまだ腰に残したままのもう一つの短刀をすばやく抜いた。短い二つの刀。この二つが佐々波が神から与えられた武器。佐々波が二つの刀を手にしたのを見て、リリスがいたずらっぽく笑った。

「それがアンタの神器じんぎね。ふうん、アンタ、二刀使いなんだ。でも相手が悪かったわね！ その刀の切っ先がアタシに触れる前にアンタは麻薬を吸い込むのよ！」

苛烈な笑顔を浮かべるリリスに、佐々波も口角を上げて余裕を見せた。

「……へっ！ どんなに効き目のある麻薬だって所詮は只の粉だろ？ 風が吹けば粉は舞う。風を起せばアンタの麻薬だってどっか飛んでちまうぜ！」  
「え？」

きょとんと目を見開くりリス。そういう隙を見せるところはまだまだ少女だ。そんなリリスを横目で見ながら、佐々波は手に持つ二つの短刀を交差させるようにして床に突き立てる。佐々波の行動が理解出来ず佇むリリス。螺旋階段の踊り場にいるローブを纏った長髪の男も、ヒスイ色の瞳を光らせその様子を見下ろしている。

「吹け 対刀・鳳翼天翔ついでう ほうよくてんしょう」！

佐々波の声が塔の中に響く。その瞬間、天高く伸びる塔の中、なにかを貫こうとする勢いで風が吹いたのだ。それは佐々波が持つ二つの短刀が淡い緑色に光り、刀身が風を巻き起こしたものだ。佐々波が着ているロングコート状の団服の裾が舞い上がり、壁に掛けられた大量の蠟燭の光が一斉に揺れる。リリスが思わず風から身を守るようにして腕で顔を覆う。重い空気の波がリリスを襲い、彼女の左手の麻薬が一瞬にして風に吹かれて吹き飛んでいった。

「あ！ アタシの麻薬が！」

「変な女の子に捕まってヤバイと思ってたけど……逆にアンタが麻

薬使いで良かったかもな？ 俺の刀との相性が良いみたいだ」

佐々波がよいしょ、と呟きながら立ち上がる。両手に持つ短刀は風を纏い、刀身を美しい緑色に染めていた。

「俺の『対刀・鳳翼天翔』は風属性なんだね。相手が悪かったな。今回は前のようにはいかねーぜ？ あんたの麻薬が俺の元へ届く前に 風が麻薬を吹き飛ばす」

飄々と笑う佐々波。その余裕を露にした彼を前にして、リリースはこれまでにないほど眉間に皺を寄せて彼を睨み付けた。リリースは何も言いはしなかったが、その無言の殺気こそが彼女の憎悪の全てを表しているようでもあった。苛烈な瞳は燃え盛る火の様な力を持ち佐々波を刺す。それでも佐々波は余裕を装い笑んでいた。

「時間外労働は団長の雑用で充分だ。早く終わらせようぜ」

風が吼える。その咆哮は天地をも震わせる程であった。

< 2 >

一方、館の外では百人余りの団員達が塔に侵入するための入り口を探し回っていた。たった一人で中に捕らえた佐々波を救い出すためである。しかしこの魔導衆の館は塔になっているため、侵入口は固く閉ざされた正面の扉しか見当たらない。それ以外は煤汚れたレンガに覆われているだけで、窓は高い位置にか設置させていない。辺りには荒れ果てた庭が広がるばかり。もはや彼らは途方に暮れていた。

「姐さん……<sup>あね</sup> やっぱり駄目です。他に侵入出来そうな場所は見当た

りません……」

草音が沈んだ声で告げる。対して陽炎は目の前の閉ざされた扉をじつと見つめていた。押しても引いてもびくともしない、汚れきった扉。侵入者を拒む『意思』の存在を感じ取れるくらいに固く閉ざされている。

陽炎は何も口にしないまま、手に持っていた槍をおもむろに見下ろす。何か思うことがあるようだった。そんな陽炎を不安げに見つめる草音。しばらくの沈黙の後に、陽炎が行動を起こした。手に持つ槍の切っ先を閉ざされた扉に向けたのだった。驚きに声を上げる草音。

「あ、姐さん？ まさか槍で扉を突き破る気ですか？……？ さすがにそれは……」

「まさか。そんな無謀な事をするわけでは無い」

制するその声に草音は口を結び、大人しく陽炎の動向を見守る。陽炎は槍の切っ先を包んでいた白い布を取り払う。鋭い槍先が現れた。槍先には赤色や燈色、金色の装飾が成されていて豪華な造りになっており、ただの槍ではないことを物語っている。切っ先を真っ直ぐ扉に向ける。もう一度槍の柄を握り直すと、陽炎は低く静かに呟いた。

「……燃え<sup>お</sup>熾<sup>し</sup>れ。『朱<sup>しゅ</sup>槍<sup>やじ</sup>・紅<sup>べ</sup>俤<sup>し</sup>び』」

その声を合図とし、槍の切っ先に炎が現れる。赤々と燃える炎は陽炎と草音の胸元までの大きさになり、二人の顔を照らし出した。意を持つかのように蠢く炎が行き場を探してうねっている。草音はその炎をじつと見下ろした。

「姐さん？ 神器まで使って、いったい何を？」

「扉を焼く。わたしの『紅俤び』の炎属性は魔術ほどの威力はないが、こんな朽ちかけた扉一つくらい焼き払う事が出来るでしょう」

陽炎は炎を纏わせた槍を扉に近付け、引火を試みる。しかし炎が扉に触れた瞬間 槍の切っ先に黒い閃光が瞬いた。ボウツと炎が一度大きく燃え上がったかと思うと、勢いを失ったかのように鎮火してしまう。まるで扉が意思を形に表して炎を拒んだようだった。

「何！？」

瞬いた黒い閃光。陽炎が慌てて槍を引き戻すと、槍の切っ先が僅かに溶けていた。焦げた臭いが鼻を刺す。顔を見合わせる陽炎と草音 二人の疑問を含んだ視線が交わった、その時だった。

「おっ、ラッキー。女の子二人じゃん」

「っ！」

いつの間に。陽炎が槍を構えて振り向くと背後に男の姿。陽炎と草音の視界にまず飛び込んできたのは男の深紅色の髪だった。赤色に闇の漆黒を混ぜた様な、くすんだ紅色。男は緩いウェーブの長髪で、髪の占める面積が広いためどうしても奇抜な色に目を惹かれる。こんな髪色の者は白の国にはいない。男はまだ若く、シニカルな笑みを浮かべる顔は整っている。さらに彼は上品な雰囲気醸し出す黒いスーツを纏っているのだ。端正な顔と整えられた洋服。ただの紳士的な若い男にも見える。しかし奇抜な深紅色の長髪と人を喰ったような笑みが陽炎達に油断を許さない。

「お前は……！？ 魔導衆のメンバーか？」

槍の切っ先を男に向ける陽炎は苦虫を噛み潰したような顔だ。背後に現れた男の気配を感じることが出来なかった己を責める。刃を向けられた男は何が楽しいのか、笑みを絶やさない。その姿から殺気は感じられなかった。

「そんな怖い顔しなくても大丈夫だって。別にここであんたらを殺そうとしてるわけじゃないし」

「名を名乗れ！ この扉に何の魔術を仕組んだ？」

「おっ、よく気付いたねー。そうそう、ちょっと扉に魔術をかけさせてもらったよ。え、俺の名前？」

目を細めて笑う男。怪しげな光が宿るその瞳は髪色と同じ、濁った紅色だった。男が磨かれた革靴に包まれた足を踏み出す。咄嗟に武器を構えた陽炎と草音だったが男は二人のもとには近寄らず、地面を蹴り上げて空高く跳び上がった。陽炎と草音の頭上を数十メートルは軽く飛び越え、塔の窓に足を掛けて二人を見下ろし笑っている。人間では無いことを物語るその跳躍力。この男もやはり魔導士で“悪魔”なのだ。

陽炎と草音を見下ろす男が口を開いた。距離が離れているので大声を放つ男。世間の女性が好むだろう甘いテノールで。

「逆ナンはありがたいんだけどー、名前は教えられないんだ。あの人に怒られるのやだし。あっ、そうそう。あんたらこの館に侵入しようとして入り口を探してるみたいだけど無理だぜ？ この館は周囲とは別の空間になってるからね」

「別の空間だと？」

陽炎がいぶかしむ。生温かい風が吹き、男の赤色の長髪を揺らしていた。男はスーツの胸ポケットから金色の鍵を取り出すと、陽炎たちに見せ付けるように言う。

「そ。二人共美人だから教えてあげる。俺の魔術は時空や空間を操ることが出来る。あんた達の侵入を防ぐために、この館全体に魔術をかけて空間の繋がりを切断させたんだ。今俺らがいるこの庭と館は別の空間に在る。物理的なダメージを与えても扉が壊れる事は無いぜ？」

鍵を振り回して口角を上げる男。陽炎が塔を見上げると、塔全体が黒い霧のようなもので包まれていた。これが男の言う“周囲との空間の繋がりを切断した”という事なのか。

陽炎は小さく舌打ちをした。部下の団員達が持ったただの刀では魔術に太刀打ち出来ない。それに対し、師団長が持つ神器しんぎは神の力を分け与えられたものなので魔術の力に対抗できる。しかし この男の魔術は時空と空間を操るものだという。神器はほとんど物理的な攻撃しか出来ない。空間を操作されたという事は、陽炎達には成す術も残されていないという事を示していた。

（わたしの『朱槍・紅偲び』では炎属性の僅かな炎しか扱えない……神の力といえどもこの男の魔術を解くことは出来ない……）

陽炎は草音に視線を送る。情けなく眉を下げた表情の草音。眼鏡の奥では不安げに瞳が揺れていた。

（草音の神器、『薙刀・雫の宿り』も同じこと……。この絶たれた空間を突破するにはとてもじゃないが無理がある）

もはや自分達に佐々波を助け出す手だては残されていない事を悟る。悔しげに唇を噛む陽炎を草音が遠慮がちに見つめていた。陽炎は閉ざされた扉をきつく睨み付ける。魔導衆の魔術は想像以上のものだ。魔導衆のメンバーは悪魔だと言われている。所詮、ただの人

間である自分達が敵う相手では無かったのか。館の中に一人で残された佐々波のことを思ってたきつく拳を握った。

そして陽炎と草音がもう一度顔を上げたとき、数メートル頭上の窓に居たはずの赤毛の男の姿は消えていた。

< 3 >

「君がこの黒の國に来るのは二度目かね」

早乙女の呟かれた言葉を聞き、フタバはゆっくりと早乙女を見上げる。そして無言のままに呟いた。

なぜ自分は再びこの黒の國に訪れているのだろうか？ 一度目は団長の繚はなだの命令だった。言われるがまま、第三師団長の陽炎と第四師団長の市川と共に『偵察』という目的でこの國に初めて訪れた。あれからひと月も経っていない。街は遙か遠くにしか見えず、荒野に佇むノワール魔導衆の屋敷。曇天の空の下、侵入者を拒んでいるかのような殺伐とした國。もう二度と訪れない土地だと思っていた。それなのに今回は自らの意思でこの地に足を踏み入れている。ふいに姉のまどかの顔が脳裏に浮かんた。姉の制止を振り切ってここまで来てしまった。以前の自分とは変わってしまった。もう昔のように、ただ後ろを付いて行けばいいだけの弟ではいられないと思う。

二人は先に本部を経った佐々波たち一行の後を追ひ、黒の國へと足を踏み入れていた。フタバの両手には時銚ときはし「邂逅かいこう」が握られていた。背丈よりも大きな銚を抱えるようにして持っている姿は少し滑稽だ。在りし日の父の神器であるこの時銚をどのようにして早乙女が持ち出してきたのかは知らない尋ねても答えてはくれないだろう。

「早乙女さん、あれ！ 団員の皆が」



フタバが前方に聳<sup>そび</sup>える塔を指差す。ノワール魔導衆の屋敷だ。塔を囲むように団員たちが散らばり、慌ただしく走り回っている。魔導衆の姿は見当たらないので戦っているわけでは無さそうだ。彼らから見つからないように、早乙女とフタバは屋敷を囲む塀の影に隠れる。そして早乙女が顎を片手で摩りながらボンヤリと呟いた。

「ふむ……。どうやら屋敷に魔術を施されているようだな。中に侵入出来ず困っているのだろう。魔導衆のメンバーの一人に、空間を操る魔術を扱う者がいるからな」

その言葉にフタバは顔を上げた。なぜ早乙女が魔導衆のメンバーが扱う魔術のことまで知っているのだろう。フタバの中で増す早乙女への疑心。しかしそれを口に出来ない自分の弱さにフタバは唇を噛んだ。

早乙女は続ける。

「心配することはない。このような時のために、君の持つ神器があるのだ。」

「え？　神器って……これ……？」

「さよう。君の父上である東條喜一がかつて所有していた神器の時銚『邂逅』。それが持つ属性は地属性なのだ」

「地属性？」

その問いに早乙女は答えなかった。無言のままフタバの手を引いて屋敷の裏側へと足を進める。フタバは引きずられるようにして早乙女について行った。屋敷の裏に団員の姿はなく、二人きりだった。風が冷たく感じる。白の国のほうが断然寒い気候のはずなのに、ここはひどく肌が冷える。

屋敷を構成している古いレンガをなぞる早乙女。その奇妙な行動

をいぶかしんで見上げるフタバ。しばらくして早乙女が口を開いた。相も変わらず地を這うような不気味な声である。

「地属性の属性効果を知っている者は少ない。なぜなら最も特殊で世界の理すら覆<sup>ことわり</sup>してしまえる効果を持つのだ」

「……とりあえず凄<sup>こわ</sup>い“ぞくせーこうか”があるってこと？」

早乙女が蒼紫色の唇をニヤリと歪めた。

「さよう。しかし今は説明する間も惜しい。百問は一見にしかず。実際に属性効果を発動させれば分かることだ」

「はいっ!？」

早乙女がフタバの持つ神器を指して「しっかりと握りたまえ」と指示する。背の高さほどあるその時銚を胸元で強く抱えるフタバを一瞥すると、早乙女はフタバの肩に手を置いた。その手が凍て付くほど冷たかったものだから、まるで死人に触れたような気がしてフタバは震える。そんなフタバの様子を気にする素振りも見せず早乙女は淡々と告げた。

「良いか井上フタバ君。今から私の教える言葉を繰り返して言うのだ。“巡れ 時銚・邂逅”、と」

「え……ど、どういうこと」

「言葉の意味が分からなくても良い。君がこの言葉を発すること自体に意味があるのだから」

さあ早く、と促されるフタバ。神器を胸元に握ったまま、恥らうて小さく呟いた。

「えーと、め、“巡れ 時銚『邂逅』”」

ぶわ、と足元の雑草が大きく揺れて地面から風が吹いた。激しい風が渦を巻くようにフタバと早乙女を包み、竜巻のようだった。何が起こったか分からないフタバ。舞い上げられた草や土埃を避けるために強く目を瞑ったフタバに、早乙女が強く言った。

「さあ！ 思い描くのだ。この壁を越えて行く我々の姿を。この厚い壁の向こうに行くイメージを描くのだ」

それはもはや命令だった。そして言われるがままのフタバは脳裏にそのイメージを浮かべる。壁の向こうの暗闇に手を伸ばす。何も見えないがイメージする。分厚い壁を通り抜けて新しい場所へ。そこまで思い描いたとき、竜巻の如く吹き荒れていた風が止んだ。同時にパチツと瞼を開けるとそこには見たこともない光景が広がっていた。

薄暗い室内。塔のようになっていて、中心には最上階まで伸びる螺旋階段。各階には塔の壁に沿ってぐるりと部屋がひしめき並んでいる。照明はところどころに灯る蠟燭の火だけで心もとない。今自分がいるのは塔の一階らしく、ちょうど螺旋階段の影になっている所だった。階段に遮られた先には広いホールがあるようで人の気配も感じられた。一度見たことある場所のような気がするが……ここは一体どこだろう？

「成功したようだね」

その低い囁き声に思わず叫び声を上げそうになった。見上げると早乙女が幽霊のように佇んでいた。毎度思うことだがこの男は存在全てが不気味だった。彼はフタバの動揺が手に取るように分かるのだろう。フタバが問わずとも話し始めた。

「どうかね。ここは今まで魔術によって閉鎖されていた塔の中だ。我々はあの分厚い壁を“通り抜けて”室内に侵入出来たというわけだ」

「ええつ、ま、魔法じゃん。俺ついに魔法が使えるよーになったんだ！」

「静かにしたまえ。今は説明する時間がないと言っただろう」

そう咎められるとフタバは仕方なく口を噤んだ。塔の中ということとは、ノワール魔導衆の屋敷内ということである。通りで見たことある場所だと思ったわけだ。フタバはここを偵察任務の際に一度訪れていたのである。

そして思い出したように手元の神器に視線を下ろすと、それは何事も無かったかのようにフタバの両手に収まっている。先ほどの瞬間移動（？）はどう考えてもこの神器の力なのだが、その肝心な部分を今は知ることが出来ないのでフタバは複雑な気持ちだった。

見たまえ、と早乙女が前を指した。螺旋階段の影から少し顔を出してみる。どちらにしろこの塔の中は蠟燭の明かりしか灯っていないかったので二人の姿はうまく紛れていた。

「あつ、佐々波さん！」

見覚えのある広い玄関ホールには、闇に一層映える白い団服を纏った佐々波の後ろ姿があった。塔の入り口は魔術で閉ざされていたはずなのに、なぜ佐々波一人がここにいるのだろうか。

目を凝らすと佐々波と対峙しているのは年若い女だった。いや、少女か。そしてその少女もフタバの記憶に深く刻まれていた人物だった。

（あの黒づくめの服と、黒髪のスィンテール……。麻薬を使ってた

ノワール魔導衆の人だ！)

リリスの姿を捉えたフタバは、佐々波が再びリリスと対峙し戦っていることを知る。離れたこの場所からも二人の殺気が伝わってくる。それは足元から首筋まで針で突き刺されたように鋭かった。このままあの二人は戦い続けるのか。屋敷に侵入出来たのは良いが、この場に隠れたままで自分はどうすればいいのだろう。答えを求めて早乙女を見上げたが、彼は相変わらず青紫色の唇を歪に曲げて冷笑しているだけだった。

(さ、佐々波さんを助けなきゃ……！)

無性にそう思った。普段のフタバだったらこのまま物陰に隠れて戦いが終わるのを見つめていただろう。しかし今、フタバの手には鉾が握られている。立派な武器だ。これを使えば佐々波を助けることが出来るかもしれない。内密に本部を抜け出した身なので佐々波に姿を見られたら困る、という事実はずっかり忘れていた。

(オレが行かなきゃ！)

胸の内に生まれた「何か」。その衝動を勇気に変え、無意識に震える足で大地を蹴った。時鉾を胸元に抱えたまま、らせん階段の影から飛び出す。途端に蠟燭の明かりがフタバの顔を照らし出した。佐々波とリリスの視線が同時にフタバを捉える。恐ろしかった。リリスの猫目がフタバの姿を映し出すと、彼女は驚きもせずニンマリと笑った。

「また会えて嬉しいわ、井上フタバ。アンタなら来ると思ってた。東條喜一の息子のアンタなら」

その瞬間、フタバの脳裏に早乙女が発した言葉が蘇える。『黒の国へ向かった師団達の戦闘を見てしまえば後戻りが出来なくなる。戦争とはそういうものだ』と。もう後戻りは出来ない。父の遺した神器を抱え、仲間を助けるために敵の前にこうして飛び出してきてしまった自分はただの傍観者ではいられなくなったのだ。

「ねえ、サタン様。お会い出来て嬉しいでしょう？」

リスが見上げた螺旋階段の踊り場に佇む黒いローブ姿の男。まさか階段の上にもう一人いたなんて。男の存在にようやく気が付いたフタバは彼を見て凍りついたように動けなかった。ヒスイ色の冷酷な瞳が家畜を見る眼差しでフタバを見下ろしていた。睨みつけられているわけではないのに、澄んだ翠色からは想像出来ないくらいどす黒い感情が垣間見える。足首までの長い黒髪が風に揺れていて、薄い唇がゆつくりと弧を描く。優雅ともいえるその様子にフタバは瞬きすら出来なかった。

「アンシャンテ、ようやく会えたね、井上フタバ君」

男から発せられたのは柔らかいテノールだったが、言葉の奥にひどく残酷な響きをもってフタバの耳を打った。

<第二十八話「巡」・終>



## 第二十九話 醒

『対刀・鳳翼天翔』の刃の切っ先がリリスの喉元を掠る。リリスは佐々波が繰り出す太刀を軽い身のこなしで避けていた。ツインテールに結ったリリスの黒髪が動きに合わせて揺れる。軽やかなその動きはまるで彼女が無数の刃と舞っているようだった。

佐々波の刃を避けながら、リリスも負けじと『魔女の麻薬』を撒き散らす。その粉末をすかさず『鳳翼天翔』の風属性により吹き飛ばす佐々波。二人の戦いには終わりが見えなかった。薄暗い広間には二人の足音と荒い息が木霊するばかりである。

二本の刀を両手に握り、佐々波は数メートル先のリリスを睨みつけた。傷一つ負わず余裕の笑みを浮かべるリリスを横目で見ながら小さく舌打ちする。麻薬を使ってくるリリスに対し接近戦は危険なのだが、佐々波の持つ『鳳翼天翔』は短刀だ。リリスに接近しないと仕留める事は出来ない。

（時間がかっちまうな……逃げるにしても扉は閉まってやがるし、マジで面倒かも……）

視線だけ動かし、螺旋階段の踊り場に佇む黒いローブの男を見遣る。リリスはあの長髪の男を“サタン様”と呼んでいた。サタンとは、黒の国の国王を務めながらもこのノワール魔導衆も率いている権力者だと団長の繚はなだから聞いたことがある。先ほどから微塵も動かず、こちらの戦いをじっと見下ろすだけの男。ただ佇むだけのその様子にどんな意図があるのか、翡翠色の加虐的な瞳からは汲み取れない。



「ちょっとお！ サタン様を気安く見つめないでよ！ この金髪トゲ頭！」

すかさずリリスの麻薬が舞い散ったので避ける。

「だ、誰も見つめてないっつーの！ どうせあんただってまともに相手されていないんだろ！？（知らないけど！）」

「なっ……なんですって！？」

何気なく口に出した佐々波の言葉に反応するリリス。今まで余裕の笑みを浮かべていた顔を真っ赤にして怒りをあらわにしている。麻薬の命中率も曖昧になっているようで適当に撒き散らすだけだった。魔導衆のメンバーは年齢という概念のない悪魔の魂が人間の器を借りているものらしいが、リリスの気性の激しさ、危うさは人間臭いところがある。その見た目のまま、十代の少女のような怒り方だ。どうやらリリスは短気のうえ、感情に左右されやすいらしい。それを知った佐々波はニヤリと笑ってリリスから飛び退き間合いを取った。

「あっ、やっぱり凶星か」

「うるさいうるさい！ アタシを何だと思ってるのよ、アタシはサタン様の側近なんだから！」

佐々波が距離を取ったことでリリスも一步後ろに下がる。二人の乱れた息遣いがホールに響いていた。佐々波は続ける。感心したような声色をわざと出した。

「へえー、側近か。そりゃ昔からの付き合いなんだろうな」

「フンッ。当たり前じゃない。レヴィアタンやローズよりも昔からここにいるのよ。そうよ、ベルフェゴールよりも、あのルシファー

よりも前からサタン様にお仕えしてるんだから……！ それなのに  
アタシがレヴィよりも役立たずだなんてルシファーが言うから……  
！」

もはやリリスは佐々波のほうを見ておらず、黒く塗られた床をじ  
っと睨みつけていた。それをにやにやと見つめる佐々波。さらに彼  
はリリスに会話を促す。

「レヴィって奴よりも役立たず？ レヴィっていうのはそんなに凄  
い魔術師なんだな」

「ちつとも凄い魔術師なんかじゃないわよ！ あの子の邪眼は努力  
や鍛錬で培われたものじゃない。アタシの方が何倍も努力してこの  
麻薬を作ってるのに……！」

そこまで言ったとき、リリスはハツとして顔を持ちあげた。真正  
面にいる佐々波は人懐っこい笑みで歯を見せて笑っていた。じわり  
と嫌な汗がリリスの背を伝う。そんなリリスの様子を一瞥すると佐  
々波が言った。

「へえ、そっちには邪眼を持つ魔術師がいるのか。なるほど、俺ら  
の内部情報が黒の国に筒抜けだったのはその“レヴィ”って奴の邪  
眼が原因だったんだな」

なるほどな！ ともう一度明るく笑う佐々波。リリスは「しまっ  
た」と青ざめた。感情に任せて愚痴を零した結果、こちらの情報を  
与えることになってしまった。佐々波が戦闘を中断して話を振って  
きたのもそれが目的だったのかとようやく気付かされる。

しかもレヴィアタンの邪眼が持つ千里眼の力は、魔導衆の行動の  
主軸になっている。知られたら一番危険なものだった。なんという  
失態。敬愛する主になんと謝罪すればいいのだろう。絶望的な気持

ちでリリスは階段の踊り場に佇むサタンを仰ぎ見る。エメラルドの瞳と視線が交わった。いつもと同じ、美しい輝きの中にも酷薄な光を宿す眼差し。しかし今は普段より一層闇を纏い、見えない刃を突き付けられているような気がした。その瞳に見下ろされて、リリスは足元から首筋まで針で突き刺されているように動けなかった。

佐々波も動かない。誰もが微塵も身動きをしない、そんな時間がしばらく流れた。やがてその空気を破るように響いた足音。

螺旋階段の影からフタバが飛び出してきたのはこの時だった。

<第二十九話：醒めざめ>

水を打ったように静まり返る玄関ホールに男の柔らかいテノールが響く。歌うような響きを持った声だった。

「アンシャンテ  
Enchan te、ようやく会えたね、井上フタバ君」

リリスと佐々波の攻防をただ眺めていただけのサタンが初めて口を開いたのだ。初めて耳にするサタンの声に佐々波は戸惑いを覚えた。あんなに残忍な瞳で人を見下ろすのに、その声はひどく嫺たおやかで紳士的だった。

サタンに声を掛けられたフタバは石のように固まっている。どうしてここにいるんだ。本部にいたはずだろう。この屋敷は魔術が施されており侵入出来ないはずなのになぜ入ってこれた。その手に抱える武器は何なんだ。いろいろ問いただしたい事があったが、正面のリリスが攻撃を再開してきたので佐々波はふたたび神器で攻撃をかわす。

「　　っ、とにかく逃げる！　フタバ！」

両手に持つ短刀『鳳翼天翔』ほうよくてんしょうを振りかざしながら佐々波が叫ぶ。その声にびくりとフタバの肩が震え、ようやくサタンから目を逸らすことが出来た。

「さ、佐々波さん……」

「こんなところで何やってんだよ！　お前っ、っ、まどかさんが心配すんだろ！」

「佐々波さん………！」

本当に何をしているのだろう。必殺技があるわけでもないのに、武器ひとつでこんな所に飛び出してきて。勇気を出していざ飛び出してみても震えているだけではないか。もうどうすればいいのかわからなくなっただけでフタバは瞳を潤ませる。さらに佐々波から発せられた“まどかさん”という言葉に反応してしまい、余計に泣きたくなっただけ。

（助けて姉ちゃん、やっぱりオレじゃ佐々波さんの助けになれないよ）

喧嘩したまま別れてきてしまった。まだ怒っているだろうか。心配なんてしてくれているだろうか。分からない。離れていては何も分からない。ここへきてようやくフタバは、自分が一人ぼっちで無力という名の闇に囚われていることを知った。悔しくて涙が込み上げてくるが唇を噛んでそれを耐えた。足は相変わらず震えたまま動かない。進むことも逃げることも出来なかった。

「クソ……っ、フタバあ！　逃げろ、……っ、言っただろ……がっ！」

佐々波は疾風を纏う『鳳翼天翔』でリリースの麻薬を吹き飛ばしながら応戦している。彼女の攻撃を避けながらもフタバの方を何度も見遣っていた。こんな状態では隙だらけだ。そう察した佐々波はリリースから繰り出される麻薬と剣の攻撃の合間を見計らって、フタバの元へと走りだす。リリースも後を追う。

背丈ほどもある鉾をしつかりと抱えて動けないでいるフタバの元に駆け寄った佐々波は息を切らしていて、切羽詰まった表情だった。怒りとも焦りともとれる彼の顔をフタバは初めて見た。

「さざなみさぁん……！ ごめ、ごめんなさあい。おれ、おれええええ……」

「馬鹿、男が泣くなよ」

ごめんなさい、オレ、佐々波さんの邪魔になっただけだった。そう言いたかったが言葉にならず消えていった。ついに頬を伝ったフタバの涙を見て、佐々波が表情を崩して笑った。フタバの目線に合わせて佐々波がしゃがみ込み、いつもの飾り気のない笑顔に安心したフタバの涙も止まる。佐々波の白い手袋をした手が伸びて、フタバのぼさぼさの頭をくしゃりと撫でた。その大きな手のひらの感触にフタバが顔を上げた。佐々波が困ったように、でも優しく笑っている。

しかしフタバは気付いてしまった。佐々波のすぐ背後にリリースが立っていることを。彼女の手には短い剣が握られていて、フタバの目の前でその剣が高く掲げられた。切っ先が佐々波の背を狙っている。

一か月ほど前、白の国の市場で佐々波がリリースから姉を庇い負傷したときの記憶が脳裏を巡った。また自分のせいで彼が傷付くのか。今までと変わらず教団の本部で守られながら生活し、戦地に赴く団員を見送りながら何も得られない日々をこのまま過ごしていくのか。

恐怖と緊張であいかわらず震えは止まらない。耳が熱く脈を打つてるのがわかる。

（た、助けるんだ、オレが……！）

もう見ているだけは嫌だ。そう考えたとき、フタバは無我夢中で佐々波の腕にしがみ付いて叫んでいた。

「巡れ 時鉾『邂逅』！」

腕の中の鉾が震えて竜巻のような風がフタバと佐々波を包んだ。身体が圧迫され、地面がうねりを上げている。リリスが二人の周辺から飛び退いたと同時にそれらはなりを潜めた。屋敷内に静寂が戻った時、フタバと佐々波の姿はもうどこにも無かった。

< 2 >

この屋敷内では珍しいことに、階段を降りて来る性急な足音。ランプに灯された明かりが揺らいだ。革靴の音を響かせ階段を駆け降りてきたのは二人の男だった。髭を蓄えた中年の男と赤い長髪の優男。二人とも年齢こそかけ離れているが似たような燕尾服を纏っていた。

その二人の男が玄関ホールに降りてくる途中で、階段の踊り場にいたサタンが動き出す。降りて来る二人と擦れ違って螺旋階段を静か登って行ったのだった。二人の男はそれに構わず玄関ホールに降りて来ると茫然と立ったままのリリスに近づく。

「ローズから聞いたぞ、リリスよ。説明しろ。なぜ井上フタバが屋

敷に侵入し、また消えたのか」

威圧感を放つ低い声で淡々と言ったのは髭の男だ。名をルシファ  
ーという。魔導衆のメンバーでも最年長の男だ。最年長といっても  
彼ら悪魔の魂は歳を取らない。器である人間の身体を“借りている  
”ので外見だけが歳を取るのだ。借りている器の年齢 『外見年  
齢』での最年長がルシファーなのである。実際に生きているのはリ  
リスの方が長いくらいだ。

ルシファーの質問にリリスは答えない。悔しそうに唇を噛んで眉  
を寄せている。

「本当にということー？ 俺がせっかく時間かけて屋敷全体に魔  
術かけて侵入不可にしたっていうのにさ。どうやって侵入したわけ  
？」

赤毛の男がわざとらしくため息を吐いた。

「まさかお前が描いた魔法陣に欠陥があつたのではあるまいな？」  
「うわっひでー！ ルシファーだって知ってるだろ？ レヴィちゃ  
んが“視た”報告受けてからすぐに描いたんだぜ。そりやもう半日  
がかりでさ……。組んだワードだって絶対間違つてない」

俺を見くびつちゃ困るよ、とくすんだ赤髪を揺らして笑う。彼に  
続いてようやくリリスが口を開いた。心底落ち込んでいるような、  
沈んだ声色だった。

「ええ、癪だけどアンタの魔法陣は正常に作動していたわよ、ベル  
フェゴール。実際に井上フタバ以外は屋敷に侵入出来なかったんだ  
から」

視線を合わせずに言うリリス。ベルフェゴールというのが赤毛の青年の名前だ。彼の一番の特徴は腰まで届くすんだ赤い髪である。濡れ羽色の燕尾服と見事な色の対比を成していた。年齢の割に大人っぽく見える落ち着いた端正な目鼻立ちで、口は開けずに口角だけを持ちあげる笑い方をする青年だった。

「魔術を破って侵入するなんて、魔術の対である神の力を使わなきゃ無理だぜ？ まさかあの小さい少年がそんなこと出来るわけ」

「それが出来たってことよ。アタシ目の前で見たもの」

「……はあ？」

「だから井上フタバが神器を使っただけで言ってるのよ！ 何度も言わせないでよね赤毛淫魔！」

感情の高ぶりをあらわにするリリスを咎めるように、ルシファーがぴしゃりと言う。

「リリス、貴様は理路整然とした説明が出来ぬのか。詳しく説明しろと言っているのだ」

そう正論を言われてリリスは小さく舌打ちした。悪魔としてはリリスの方が長く生きているものの、ルシファーの方が知識や教養もある。器としている人間が高齢のせいか。そのことがリリスの癪に障るのだ。厭味ったらしいルシファーの態度に腹が立つものの言い返せないことが事実であった。

「井上フタバが持っていた神器、見覚えがあったわ。井上フタバの身長ほどの大きさがある鉾。で、アイツは言ってたわけ。『巡れ、時鉾・邂逅』ってね」

苛立ちを隠さず告げられたリリスの言葉にルシファーが反応を示



した。きつく眉根を寄せていた顔つきが驚愕のものへと変わる。

「時銚“邂逅”だと？ それを井上フタバが使っていたというのか」  
「だからそうだって言ってるでしょ。実際に発動呪文を唱えて、神器が発動したわ。でもアイツら教団の連中が持つ神器つてのは、持ち主が呪文を詠唱することでやっと発動するんでしょ？ まさかあのチビの井上フタバが自分の神器を持ってるってこと？ こんなことレヴィだって透視してなかったし……」

リリスの言葉をルシファアは止めた。その闇色を宿す瞳が興味深げに揺らいでいるのをリリスは見た。

「井上フタバが使用していた神器、時銚『邂逅』はかつて東條喜一が所持していた神器だ」

「通りで見た事あると思っただわ」

「へえー、東條喜一が死んだあと神器は処分してなかったのか」

ベルフェゴールが他人事のように頷いている。一方ルシファアはひとり、顎鬚を摩りながら考え込んでいた。その視線は大理石の床に落ち、常に物憂げな眼差しは爛々と光っていた。

「持ち主の息子が発動させることが出来たというのか。こんな前例聞いたことがない。いやしかし 井上フタバが神器を使用出来たというのなら ……」

「出来たというのなら？」

リリスが先を促す。するとルシファアが顔を持ち上げてリリスのほうを見遣った。口角を僅かに上げるだけの小さな笑みを溢す。

「サタン様はさぞお喜びになるだろうと思っただわ」

ノワール魔導衆の屋敷は塔の造りになっている。長く続くらせん階段が行き着く先である最上階には、たった一つの部屋しかない。

その部屋に家具はほぼ皆無といってもよく、広い机と天蓋に包まれたベッドがあるだけだ。常に薄暗いその部屋の明かりは壁の赤いランプのみである。古い木で作られたテーブルの前に腰掛ける男がいた。背後の巨大な窓にカーテンは無い。月光を背に受けて微笑む男こそ、ノワール魔導衆を率いる一級魔導士のサタンである。

黒いローブを脱ぎ捨てた彼は、やはり同じ黒色の燕尾服を着ている。肌の色は驚くほど白いのに床まで到達している長髪は光を反射する濡れ羽色。黒一色に彩られた彼の容姿で唯一、その瞳だけがエメラルドを思わせる美しい緑色だった。

黒の皮手袋に包まれた右手が分厚い本のページを捲くっている。その表情は穏やかで、何も知らぬ者が見れば若くして上品な振る舞いをする紳士である。

「ねえサタン様あゝ。フタバくんだったけ？　びっくりしたねえ、いつの間に屋敷のなかに侵入してたんだろ？　ベルベルの魔術を破ってきたなんて凄い男の子だねえ」

そんな彼の椅子に寄りかかってしきりに話しかけている小柄な少女がいた。黒い服を着ている魔導衆一同のなかで唯一明るい乳白色の衣装を着ている。胸元だけを隠す上半身の服とホットパンツ、太ももまで覆うロングブーツという露出の多い服だ。セミロングの髪色も珍しい銀髪で、月明かりに照らされ輝いている。なにより特徴的なのは少女の髪からは大きな猫耳が飛び出しており、ホットパンツの臀部からは同じく白色の猫の尾が垂れていることだ。少女は人

間の獣が混じった幻獣リョウジュという生き物なのである。

少女の首には明るい珊瑚色のリボンが巻かれ、鈴が付いている。少女がよく動いたため、その鈴も忙しく鳴り続けていた。その鈴の音に掻き消されてしまうほどの落ち着いた小さな声でサタンが答える。

「ああ、本当に凄い男の子だ」

「そうだねえ。あんなに小さいのに敵の前に飛び出てくるなんて感動しちゃった！」

幻獣の少女はまさしく猫のように喉を鳴らしながら、サタンの後頭部に愛しげに頬を擦り合わせた。

「ねえサタン様あ。ローズのこと褒めてくれるっ？ 言われた通り、陽炎っていうキモノの師団長さんを足止めさせたんだよ。サタン様の言うことちゃんとできたんだよ！」

「ああ、良い子だねローズ」

そう褒めてやるとローズがとろける様な笑顔で喜びをあらわにする。まるで幼い子供のようだがローズはリリースと外見年齢はそう変わらないのである。

「サタン様あ、あの男の子消えたまま逃がしちゃって良かったの？」

「ああ、収穫はあったのだからね」

サタンは相変わらず本のページを捲り続ける。読んでいるのでは無い。目的のページが現れるまでひたすら捲り続けるのだった。そのページを捲る繊細な指先の動きにもウツトリして見入っているローズ。

「しゅーかく？ ああでも、サタン様なんだかとっても嬉しそう！」

その言葉にサタンは手元の本に落としていた視線を上げた。すると無意識のうちに口元が緩み、目尻も優しく垂れていたことを自覚したのだ。そうか、私は喜んでいいのか。何に喜んでいいのかなど問うまでも無かった。井上フタバが父の遺した神器を持って現れ、あまつさえその神器を発動させたという事実にはサタンは喜びを感じていたのだった。

「そうだ、私は嬉しい……。再びあの男に会えたような気分になせられる」

彼は笑った。美しさを際立たせている、上品で、息をのむほどの残忍な光をその瞳に秘めた笑み。それはこの暗いだけの部屋で神々しくローズの瞳に映った。変わらず後頭部に擦り寄ってくるリリスの頬をそつと撫でてやる。それこそ猫の毛並みを整えてやるように。

「ローズ、今はひとりになりたい気分なんだ。自分の部屋に戻ってくれ」

「はあいご主人様」  
ウィ・ムスイ

ニッコリと可愛らしい笑顔を残してローズはサタンから離れる。常に飛び跳ねるようにして軽快に移動するのは彼女の癖らしい。長い尾が左右に揺れていた。元氣よく手を振りながら扉から出て行く。沈黙が部屋に戻った。サタンは椅子を回転させ、巨大な窓から外を眺める。カーテンが無い窓からは月光が惜しみなく注がれていた。屋敷の最上階にあるこの部屋からは黒の国の街がよく見下ろせた。が、街には明かりひとつ灯っていなかった。街があるのかどうかすら分からない。光はおるか音や匂いすらない。感覚という感覚が飲み込まれていくような深淵の闇が広がるばかりだった。

サタンは再び机に向き直り、ページを捲っていた本に視線を落とす。古く黄ばんだ本。ちょうど開いていたページの右端に手書きで書き込まれた跡がある。ページの内容に補足をする言葉だった。それを愛しげに指先でなぞるサタンはヒスイ色の両目を細めてもう一度微笑む。それは天使とも悪魔ともいえる笑みだった。

<第二十九話「醒<sup>めざめ</sup>」・終>

## 第二十九話 醒（後書き）

サブタイトルの「醒」<sup>めざめ</sup>はフタバのことです。勇気を奮って行動できたことや、神器を自ら発動できたことを指しています。

全体的にはノワール魔導衆の描写が多いのですが、29話で一番の山場がフタバの描写なのでこのサブタイトルに。

佐々波さんは完全にフタバの兄ちゃんポジションです。

サタンが言う『<sup>アンシャンテ</sup>Enchante』はフランス語で「出会えて嬉しい」。

以前からリリスやローズが口に使っていた『ウィ・ムスイ』もフランス語。

ベルフェゴールの魔術の『<sup>ロルロージュ</sup>魔法陣』もフランス語で「時計」。  
フランス語を黒の国の言語として扱っています。

ついでに言うと赤の国（縹の出身地）はドイツ語圏として扱っています。

赤の国にいるときの縹の名前「ヴィクトール」や兄の「アルベルト」はドイツ人の名前から選んでみました。

言うまでもなく白の国は日本をイメージ。

## 第三十話

嘘

「……その東條さんの神器のことや、なんでお前がここまで来たのかってこと、色々問い詰めたいけど詳しくは聞かない。お前だって分かっていないと思うからな」

佐々波はそう言いながらフタバの頭をぼんつと撫でた。その手の暖かな温度にどうしようもなく安心して、フタバはまた涙を堪えるのに苦労することになってしまったのだった。

フタバはノワール魔導衆の屋敷内で、佐々波の腕を掴んだまま時銕『邂逅』<sup>かいこう</sup>の地属性を発動させた。フタバには地属性の効果が未だ分かっていなかったのだがどうやら空間移動を可能とするらしい。その結果閉ざされた屋敷内からフタバと佐々波は脱出出来たのである。二人が唐突に現れたものだから、屋敷の外にいた陽炎<sup>かげろう</sup>や草音、そして団員達はひどく動揺しているようだった。説明を求める彼らをやんわりと抑えて冒頭の台詞を言ったのが佐々波である。

屋敷の外はすっかり陽が落ちており辺りは暗かった。本部にいるはずのフタバがなぜここにいるのか、なぜ佐々波が屋敷内から脱出できたのか　団員達は同じ疑問を持ちながら帰路に着くこととなった。

「フタバ君……。一つだけ聞いていい？　……そ、その、お姉さんは本部にいるの？　君がここに来ていること知ってるのかしら？」

弱弱しく言うのは第八師団長の月本草音だ。一行の先頭に行く佐々波の後ろを陽炎と隣になって歩いている。フタバはその草音と陽

炎に挟まれるようにして歩いていった。

眼鏡ごしに見える草音の瞳が不安げに揺れていた。彼女の気弱な態度はいつもの事なのだが、フタバは未だ晴れない気持ちのまま答える。

「一応姉ちゃんには言ってきたけど反対されたから　そのまま飛び出してきちゃったんだ。だから姉ちゃん、怒ってると思う」

「……そ、そうなの。でも君はどうして」

そこまで言って草音は止めた。先ほど佐々波から告げられた『詳しくは聞かない』という言葉を思い出したのだった。気まずそうに俯く草音の横では陽炎も何か言いたげにフタバの方を見下ろしていたが、結局何も口にすることは無かった。それがフタバにとっては有難いことでもあったのだが、それと同時に申し訳ない気持ちでいっぱいではなかなか顔を上げることが出来なかった。

### <第三十話：嘘>

彼ら一行が白の国に帰還したのは夜もすっかり更けた頃だった。おそらく日付も変わっているだろう。夜風が冷たく黒の国とは比べ物にならないくらい寒い寒さだ。フタバは白い息を吐きながら空を仰ぐ。音無き暗黒の世界のなかで、歌声を響かせるかのようにまばゆく光を放つ星々があった。そこでようやく無事に本部へ帰還できたことを実感する。佐々波が百人余りの団員達に各々部屋に戻りきちんと休息するよう指示していた。解散指示を受けた団員達はフタバの方を気にしながらも寄宿舎のほうへと戻っていく。

呆然と指示を待っていたフタバのもとへ佐々波が近寄ってくる。その後ろには陽炎と草音も居た。



「フタバ、とりあえず団長のところへ行つて来い。俺も行くから」

「え……」

「お前が黒の国へ行つていたこと、団長はもう知ってる。既に団長室には早乙女がいて一部始終を話してくれているらしい」

「早乙女さんが!?」

そういえば早乙女の事をすっかり忘れていた。ノワール魔導衆の屋敷内へ共に侵入して以来、姿を見ていなかったのだ。内密な計画だと言っていたのに自ら団長のもとに行っているとはどういうことだろう。そもそもどうやって一人である屋敷から脱出してきたのだろう。謎な部分ばかりだったが今はそんな事を考えている場合ではない。

これからあの末恐ろしい団長のもとへ行かなくてはならないのだと知ったフタバは顔を青くさせる。勝手に神器を持ち出し黒の国へ行っていたなど、怒鳴られるだけでは済まないだろう。教団で世話になっているだけの自分がひどく自分勝手な行動をしてしまい（早乙女の誘いがそもそもの発端なのだが）、これは本格的に追い出されるのではとも思う。

今にも卒倒しそうなフタバの様子を察したのか、佐々波が無邪気に笑った。

「ダイジョーブだつて！ いざとなれば俺がフォローしてやるから。まあお前の行動は決して褒められるものじゃないけど俺も助けられたわけだしな」

その言葉に幾分が安心を得てフタバの口元が緩んだとき、佐々波の笑顔がいたずらっぽいに変わった。

「でも覚悟はしとけよな！ 早乙女との話し合いでちょっとは落ち着いてると思うけど、団長がブチ切れたらマジ手の付けようがない

くらい大暴れするかな。ちびんなよ」

「……………はい。」

それこそ男だ！ とフタバの背をばしばしと叩く佐々波。やけに明るい佐々波がフタバには理解出来なかった。背を押されるままに玄関ホールへ入り右の廊下を曲がる。この廊下は団長室にのみ続いているし字廊下だ。フタバはここを恐怖の廊下として認識している。重い足取りで廊下を歩くフタバの後ろを佐々波、陽炎、草音が付いて来る。やがて驚の装飾が成された団長室の扉が現れた。室内から声は聞こえない。その静けさが余計に恐ろしかった。

いざ入室しようとフタバが扉に手を掛けたとき、佐々波が陽炎と草音に廊下で待つよう指示をしていた。結局団長室に入るのはフタバと佐々波の二人だけとなる。僅かに開けた扉から室内を覗こうとするとその前に中から「入るなら早く入れ」と縹の鋭い声が飛んできたので、涙目になりながらも思いつきり扉を開けて身体を滑り込ませた。

部屋のなかにはいつもの執務机にどかりと座った縹と、応接用のソファに腰を下ろした早乙女の姿があった。縹が早乙女に詰め寄って怒鳴り散らしているのではないかと予想していたフタバにとって、その落ち着いた室内は意外な光景だった。後ろで佐々波が扉を閉める音がした。喉を鳴らして唾液を飲み込み、もう一度縹の顔を窺うと、奇妙なほど落ち着いて椅子に座っている。

「……………全て早乙女から聞いた。」

縹が瞳を伏せつつ静かに言う。それはフタバが想像していた怒声とは程遠いものだったが、煮え返るほどの怒りをどうにか理性で抑えているかのような、喉からどうにか絞り出している声である。つまりは縹が内心とんでもなく憤慨しているということがフタバにも

分かった。あまりの怒りに怒鳴り散らす事すら通り越し、むしろ落ち着いてしまった。そんな感じである。

「まず、なぜ東條さんの神器を勝手に持ち出した？　おい早乙女、お前がどうやって『邂逅』の在り処を知ったのかまでは問わねえ。問題はなぜ井上フタバに使わせた？　お前の目的は何だ」

それはフタバも疑問に思っていたことだった。縹が執務机から離れ、ソファに座る早乙女に近づく。革靴の足音が静かに響く。フタバにとってこの静寂が今は恐ろしかった。

「私の目的……？　簡単なことです、団長殿。東條喜一の息子たる井上フタバ君を氏の“後継ぎ”に仕立てたいのですよ」  
「はっ！？」

そう声を上げたのはフタバと佐々波だった。縹はというと、ソファに座る早乙女をじっと見下ろしているだけだった。彼は言葉の無意味さを語るかのように黙っていた。

早乙女は血色の悪い唇をいびつに曲げながら続ける。

「神から与えられた神器というものは、所有者本人にしか扱えない。たとえ血を分けた親兄弟といえども同じ神器を二人の人間が使用出来ない。……そうでしょう？　私は神器を持っていないので詳しくは存じませんがね。しかし私は確信していた。井上フタバ君ならば父の遺した神器を発動させることが出来るとね」

「……その確信はどこから出てきたんだ」  
「私がそう確信した根拠はひとつだけ。井上フタバ君が氏の息子であるという事実。それだけです」

縹は獲物を狙う豹の如き鋭い金色の眼光で早乙女を射る。その視

線に隠ることなく笑みを浮かべる早乙女。早乙女は縹を恐れるどころかむしろ嘲笑っていた。それに気付いた佐々波は慌てて口を挟んだ。

「ちよつ、ちよつと待て早乙女！ フタバが東條さんの息子っていうだけで神器が使えるんなら、まどかさんはどうなるんだよ？ あの人も東條さんの娘じゃねーか！」

それに早乙女は声を上げて嗤った。それに佐々波たちは驚きを隠せず動揺する。何しろ早乙女が声を発して笑うなど初めてだったからである。一同が啞然と早乙女を見つめていると、いや失敬、と詫びて早乙女はもとの顔つきに戻った。

「井上まどか……かね？ 彼女では話にならん。この井上フタバ君ではなければ東條さんの後継ぎにはなれぬのだよ」

「それじゃあさっきのお前が言った根拠と矛盾してねーか？ 東條さんの子供である事実が、神器を発動出来るたったひとつの根拠なんだろ？」

「とにかく井上フタバ君ただ一人にしか出来ない事だ」

そう断言されては返す言葉もなく、佐々波は力無く肩を落とした。フタバと佐々波は早乙女と向かい合ってソファに腰を下ろしている。静かな革靴の音が彼らの座るソファを一周した。縹である。普段は滅多に執務机から移動しない縹が足を止めることなく歩き回っていた。その様子から、冷静を装う縹が必死で怒りを抑えているのだと佐々波は悟った。

ピタリと縹の足音がとまる。彼は蛇のような目つきで早乙女を睨みつけた。

「井上フタバを東條さんの後継ぎにするだ……？ お前、それは

このチビに東條さんの神器を与えて戦争に駆り出そうっていうのか？ ああ？」

そう言う縹はまだ冷静さを繕っている。いつもは自分勝手に怒鳴ったり機嫌悪くしたりする人間が、ここまで落ち着きを装えたのかと佐々波は感心してしまう。

早乙女が笑った。

「まあ、最初はそういうことになるでしょうな。しかし私の言う後継ぎとは――」

「ふざけんのもいい加減にしろ！」

雷鳴の如く低い怒声が団長室に響き渡った。室内の静寂を破り、重力が空に跳ね返るようなその怒鳴り声を耳にするなり佐々波は「あーあ……」と苦笑する。煮え返る怒りをどうにか隠していた冷静という名の皮がついに剥がれてしまったらしい。フタバといえば、過去最高ともいえる縹の怒鳴り声を直に聞いてしまい、卒倒しそうなほど青ざめていた。

激昂して顔を真っ赤にする縹が、早乙女の着物の襟割りを鷲掴みにして彼を無理やり立たせる。縹の金色の瞳が殺人鬼のようにギラギラと光っていた。

「もう勘弁ならねえ！ てめえは即退団だ！ 井上フタバに武器を持たせて戦争に出させるだど！？ 東條さんはそんなこと望んでねえ……東條さんは子供に迷惑かけねえように自殺したんだ！ それをてめえは……！」

「東條喜一が死んだ理由が子供に迷惑をかけたため？ はて本当にそうなのでしょうか、団長殿」

「ごちゃごちゃうるせえんだよ！ 今すぐ出て行け！」

今にも殴り掛かりそんな縹の様子を見て、さすがにマズイと察した佐々波が縹と早乙女を無理やり引き離す。

「はいはい団長！ 落ち着きましょうね！ 気持ちは分かりますけど早乙女をすぐに退団させるわけにはいきらないですって。団員の入退団は師団長との会議で決めなきゃっすよ！」

縹はいつもの堂々とした態度とは打って変わりひどく興奮していた。それに対し早乙女は相変わらず涼やかで、縹に掴まれて乱れた着物を直している。側近から制止されようやく落ち着いたとみえる縹はたった一言、絞り出すように呟いた。

「……早乙女はしばらく外出禁止だ。俺が許可するまで地下牢で過ごしてもらっ」

そう言われても早乙女は目元の筋肉すら動かさず、亡霊の如き眼差しで縹をじっと見ていただけだった。佐々波が事態の収束に安堵のため息をこぼしている。その横でフタバは、自分にはどんな罰が下されるのだろうかと怯えていたが、縹は早乙女の軟禁だけ指示するとそれっきり口を開かなかった。それはフタバに安心を与えたのと同時に早乙女に対する罪悪感も与えた。内密に黒の国へ向かうことを提案したのは早乙女だが、最終的にそれに頷き黒の国へ行く意思を決めたのはフタバ自身だったからだ。それなのに罰を受けるのが早乙女だけだというのは、フタバにとって心苦しい。しかし例によってフタバは縹に意見することなど出来るはずもなく、佐々波に連れられるまま団長室を辞したのだった。

明日は雪かきも雑用も頼まないから部屋で休んどけな、と言われつつ佐々波と別れ、フタバは寄宿舎の部屋に戻る事となった。彼の気配りの良さはさすが団長補佐を務めてあるだけある。フタバは彼の気遣いに感謝しつつ、すっかり夜の帳が下りた時刻、自室の扉を開けたのだ。と、扉を開けて部屋の様子を確かめようとした。たつてフタバは大事なことを思い出した。

（姉ちゃん……）

フタバは姉のまどかの反対を押し切り本部を飛び出していったのだ。つまり二人は喧嘩中である。そのことをすっかり失念していたフタバは、心の準備のないまま自室の扉を開けてしまったのだ。

日付も変わった真夜中だというのにフタバとまどかの部屋にはランプに明かりが灯り、煌々と光を放っている。そんななか、ベッドにまどかが腰かけていた。パジャマ代わりにしている着物（桜月が提供してくれたものだ）を纏っている姉はフタバが姿を現わすと頭垂れていた頭をバツと持ち上げた。

「フタバくん！」

今にも泣きそうな表情の姉が駆け寄って来る。扉を開けたまま立ちすくんでいたフタバはようやく我に帰り、後ろ手で扉を締めた。それと同時にまどかの腕が伸びてきてフタバの小さな身体を覆うように抱きしめる。開口一番で怒鳴られるかと思っていたフタバは驚いて身体を強張らせた。それにも構わずまどかはしゃがみ込み、フタバの肩に頬を押しつけてぎゅうぎゅうにフタバを抱きしめている。言葉は何も発されない。あまりに強く抱きこまれているため、フタバが「姉ちゃん苦しいよ」と訴えるとゆっくりとまどかは弟から身体を離れた。

まどかがしゃがんで膝立ちになっているため、ちょうどフタバの

視線はまどかと交わった。真正面から見た姉の顔は怒っているというよりひどく悲しげで目元は赤く、ウェーブの髪もボサボサで、まるで子供が大泣きした後のようなありさまだった。

「フタバくん、ほんとにフタバくんだよね……？」

存在を確かめるように、まどかの手のひらがフタバの頬をなぞる。

「姉ちゃんごめん、俺」

パンツと小気味よい音が部屋に木霊した。フタバは己の左頬を手で押さえる。じんじんとした痛みが頬に広がっていった。まどかに撫でられていた左頬は次の瞬間、彼女に叩かれたのだった。

慌てて姉を見ると、まどかは未だ泣きそうに顔を歪めていた。それがフタバには悲しくて胸を締め付けられた。どうせなら怒鳴られるほうが良かった。姉のこんな悲しげな表情、見たくなかった。

「ねえ、どれだけ心配させれば気が済むの？ フタバくん、自分が何してるか分かってる？ あなた戦争に巻き込まれてるのよ。ゲームやアニメの話じゃないわ。本当に死んじゃうのよ！ ひ、一人残されたお姉ちゃんの気持ちも考えて……フタバくん……わ、私死にそうなくらい心配したわ。ねえ、フタバくん……二人きりの家族でしょお……」

ついにまどかは子供の様に声を上げて泣き始めた。フタバも泣きなくなつてふにやりと口元を緩めたが、どうしてだろう、涙は出てこなかった。ただごめんなさい、と謝ることしか出来なかった。

「お父さんの自殺の謎が知りたいフタバくんの気持ちも分かったわ。だから これからは私も一緒に行くから。フタバくんが危ない場



所に行きたいっていうのも止めないけど、私も一緒に行くからね。  
だってフタバくんを守れるのは私だけだもん。」

「姉ちゃん」

その言葉にフタバは頷けなかった。なぜならフタバは父の秘密を知るための行動に姉を巻き込まないことを決めていたからだ。早乙女が言うように、これから自分が戦争の渦中に巻き込まれていくのは幼いフタバにだって分かっていて。しかし姉のまどかまでそれに巻き込みたくなかった。いつまでも天真爛漫で明るい姉でいてほしいのである。だからフタバはまどかの言葉に頷くわけにはいかなかった。まどかまで戦争に巻き込ませたくない。二人一緒にもこの世界で帰るのだ。それがフタバの一番の望みなのだから。

そのためにはこの場を切り抜けなければならない。フタバは唾を飲み込んで、はつきりと言った。

「分かった姉ちゃん。もう勝手なことはいらないよ。どこかへ行く時は姉ちゃんに言うから」

そう告げた途端、まどかは喜びの声を上げてふたたびフタバに抱き着いた。

フタバは心の中で何度もまどかに謝った。はじめて姉に嘘をついてしまったからである。今回のように黒の国絡みで行動することになっても、自分は決してまどかには言わないだろう。まどかはフタバを守ると言っていたけど、フタバだってまどかを守りたいのだから。

（ごめん姉ちゃん……もうオレは、前のように姉ちゃんについて行くだけの可愛い弟じゃいられないんだ）

窓からのぞく月が嫌味なほど清廉な光を放ちフタバ達を見下ろし

ている。嘲り嗤<sup>あざわら</sup>うような月に嘘を責められている気分になった。しかし先ほどまどかに告げた言葉ははじめて口にした嘘とは思えないほど自然にフタバの唇から出ていき、また、ごく自然にフタバの胸中に収まったのだった。

<第三十話「嘘」・完>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3084f/>

---

あなた達のくらやみで

2010年10月22日10時09分発行